
ネムリヒメ。の日々是好日

takao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネムリヒメ。の日々是好日

【Zコード】

N5017F

【作者名】

takao

【あらすじ】

30歳の美人自堕落O~しと、無愛想だけどしつかり者の20歳男子大学生の年の差カップル。身寄りのない彼を彼女は親代わりに育てていたが、彼が成人を迎えてたく婚約者という関係に。そんな2人の甘甘らぶらぶな日々の性…ならぬ生活をお送りします。（このお話は「ネムリヒメ。」の続編となります。本編を読んでない方にも楽しめる内容を目指していますが、本編も併せて読んでいただけると、より一人の関係がお分かりいただけるかと思います。）

序～朝の風景～（前書き）

このお話は「ネムリヒメ。」およびムーンライトノベルズの「ネムリヒメ。の恋」の更に続編にあたるお話です。本編を読まれていない方には唐突に感じる箇所もあるかもしれませんので、よろしければ本編の「ネムリヒメ。」等も併せてお楽しみいただけましたら幸いです。

同棲している大人カップルの恋愛話になりますので15禁以下の性描写や、赤裸々で甘甘で読んでいるほうが恥ずかしくなるような恋愛描写ばかりです。苦手な方にはきつい内容になると思いますので、大丈夫そうな方のみこの先をお読みください…。

長編ですので、個人サイト内にキャラ紹介のコーナーを設置しました。必要な方はご利用ください。

序～朝の風景～

さて、想いを重ねてから一年と少々。目覚めるまで待っていたひとりの人物と、現実の世界を生きることとなつたネムリヒメの、その後の日常はと言いますと。

春眠暁を覚えず。失礼ながら最早「姫」と呼ぶのもおこがましい年齢の女性だが、オヒメサマのように朝食の匂いに包まれ、長い黒髪を絡ませながら布団にくるまり、それでもしぶとく眠りを継続しようとしていた。その耳に響くのは。

「こつつまで寝てんだよ！」

一体何年之間、繰り返してきたのだろうか、それでも繰り返される光景と台詞。そう思うとこの「彼」は、実は非常に氣の長い男ではないだろうか……などと寝ぼけた頭で考えている女、一夜の布団は、その声の主である青年、源一によつてはぎ取られた。

羽毛布団から現れた女の姿は、温かい地方の春といつともあり、キャミソールにショーツといつた下着姿の出で立ちである。

「朝からこつつさいなあ……」

と起こしてもらつたくせに面倒臭そうに言いながら、折り畳まれた白い四肢がしなやかに伸びていく。次の誕生日で三十路を迎えるといつても、周りからは美人と噂されるその女性の肌は意外と染みも少なく、何より年齢の割には擦れていな純情な内面が彼女を若く見せているのだろうと思われる。

そしてその艶かしい女の肢体を目の前にしても、二十歳になつたばかりのこの青年が眉一つ動かさないのは、彼女が彼の保護者代わ

りであり、長年こうして朝の死闘を繰り広げてきたから、だけではなく、昨晩彼女とこの自分のベッドの上でまぐわっていたから、というのが最たる理由であろう。

そう。天涯孤独であった二人は、年は幾分離れており、口約束だけのものとも言えるが、いわゆる「婚約者」という関係にあった。このような口喧嘩は日常茶飯事だが、れつきとした恋仲にあるのだ。

説明すると、そもそも身寄りのない小学生の源一を遠縁の一夜が引き取つたことによつて、この二人の関係は始まつた。孤独な二人は出会つた時から「家族」となり、彼女が彼を成人まで後見人として庇護してきた。

実際のところ、美人だが面倒臭がりで浮世離れしたところのある一夜を、しつかり者の少年である源一が世話を焼いていた部分が大きいが、彼は孤独の闇から彼女に救われた。二人は運命共同体のように生きていたが、やがて少年が青年へと成長し、気が付けば自然な流れで男女の関係となつてしまつていた。互いでなければ嫌だと、他の誰にも一人の関係を壊して欲しくないと二人共にある時気付いたのであつた。

保護者でも婚約者でも同じ「家族」であるが、意味がまるで異なる。ただ同居人と体の関係だけ結んでいたいとは思わなかつた。この相手以外と暮らす気はない、他の誰にもそれをさせない、この相手と家庭を築きたい。それを確約する為に、彼はまだ若かつたものの婚姻と言う手段を選んだのであつた。いわば、相手を大切に思うゆえの社会的なけじめであつた。

何より二人は再び一人きりになることを恐れていた。そういうた關係を結ぶことで、今度は自分たちが新しい家族を作り出せる。子を為し、喜びが増え、真に孤独から解放されるかもしれない。

家族を失い「寂しい」と思い続けてきた気持ちから不安も大きか

つたが、二人は人以上にその願望を強く持っているのかもしかなかつた。

「……だるい、ねむい、仕事行きたくないー」

「二人の関係の説明はその辺りにしておき、女……一夜はかつたるそうにそう言うと、未だベッドの上で寝返りを打つてゐる。

「ああそう。そんつなに行きたくねえなら仕事もやめちまえ」

源一はいつもの文句に付き合つ氣にもなれず、そう乱暴に吐き捨てて部屋を出て行こうとしたが、それを聞いた一夜がむくりと熊の子のように起き上がる。

「じゃあ、源一くん養つてくれるのー？」

「君」づけをする時はろくなことを考えていらないな、ということは長年の付き合いで彼にも分かっている。自堕落で仕事を張り切つているとは到底見えないこの三十路女が、このまま本気で自分を働かせ悠々自適な生活に逃げかねないと思つた源一は、彼女をぎりりと睨みつけた。

「……それで俺たちが食つていけると思つならな」

彼も悔しいところであるが、まだ未成年のうちに婚約をしている。すぐに社会人となるわけでもなく、安定した生活を手に入れるため四年制の大学を卒業して大企業または公務員あたりに就職したいと言つビジョンを持ち、今の大学に通つてゐる。

高校に入学した頃からそんなことを考えていたといつ源一。成人を迎へ、大学も一年目を迎えた今は流石に惚れた女の金で学校へ行かせてもらつつもりもなく、毎日アルバイトに明け暮れ学費や生活費を稼いでいる次第である。

一夜もまた大企業のキャリアウーマンといつわけではなく、この不況に困窮している財団法人勤めであるため、どうにか微々たる貯蓄をしながら生活している状況だ。

一人で将来、本気で家庭を築くつもりならば、少なくとも源一が社会に出るまでは一夜も貯金のひとつでもしておかねばならない。

「人の現状は、婚約者同士の甘い同棲生活といえども、非常にシビアなものであった。

ということを十も年下の学生に指摘され、「……はあ——」と一夜は今日も渋々返事をしながらベッドから立ち上がる。

「分かつたら早くメシ食え」

そう言って源一は自身の部屋から出て行った。一夜はその広い背中をぼうっと見送る。

中学生の時から運動部に所属し、未だに同好会の仲間と身体を動かし、アルバイトも肉体労働などこなす源一は背の高いことも相まって体格がよく、彼に言い寄っていた女の子の数も思えば顔もそれなりに整っている部類に入るだろう。

そのうえ、若いくせにこれだけ気が利いて面倒見もよい男だ。昔から一夜にはぶつきら棒で容赦がない態度の源一ではあるが、婚約者と言う関係からか年齢によるものなのか、最近は角も若干取れて視野も広がったように感じる。

いつたい、何者だよ……。

そのうえ当人は自身の評価には無頓着で、自覚も無いらしい。余りのいい奴ぶりに、一夜は改めて空恐ろしさまで感じてしまう。

それだけの男が、どうして十も年上の自分などにここまで優しくするのか、「惚れた」と言って見捨てないでいてくれるのか、一夜には何年経つても不思議に思えるのであった。

自分が方が早く年を取るのに、もう大台に乗るというのに。

一夜はそんなことを考えながら、彼女もまた部屋を出て行き様、眠っていたベッドの上を思わず振り返る。そして、昨夜此処で起きた甘い出来事を思い出す。

……あれほどひんけんした態度を取っている彼であるが、夜の嘗みの際は驚くほど優しく一夜に接していく。甘い言葉を囁くタイプでもなく、照れからか冷たい命令口調を使うが、触れる長い手指の

ひとつひとつ動きや仕草が、一夜を心から慈しんでいたと彼女にも伝わってくる。もう、若い娘でもないのに、まるで壊れ物を扱うよ。

何かを恐れているのだろうか。それともそういう性分であろうか。一夜にも分からぬが、彼は自信のある体力のままに彼女の要求に丹念に時間を掛けて応え続ける。無論、彼自身も時に要求を突きつけてくることもあり、彼女もそれに応えているが。

どうして己などにこんなに優しいのかと一夜の抱く不思議は気がないが、婚姻を前提とした関係となつた以上疑つても仕方が無く、今はそれに甘んじている毎日であった。

だが彼とのそうした日々も夜の時間も、決して嫌なものではなかつた。寧ろひとつひとつが尊くて、毎日が驚くほど幸せであった。それを通り越していく、不安になるほどだ。

変な、ヤツだな……。

一夜は源一の癖を真似て頭をがりがりと搔くと、昨夜の情事の現場から自室で着替えるべく立ち去つていった。

彼のベッドの方が一夜のものよりも若干大きいといつもあるが、「狭い」と言われながらもそのぬくもりが心地よくて、終わつた後のけだるさに包まれて眠つてしまつところもよくあつた。源一もぶつぶつと言つもの、一夜を邪険に追い出すことも無く、そのまま腕に抱えて眠つてくれる。

勿論、完璧と見られる彼への不満も一夜にはある。もう少し恋人らしい言葉のひとつでもあつてよいのではないかとか、彼は身体を良く動かすから、行為の後、情緒無くあつといつ間に眠つてしまつ上に眠りが深いとか（それで一夜は朝が弱いのだが）。

しかし結局、こうした寄り添つ時の安心感に、むず痒いような心地良いような妙な気分にさせられてしまつのだ。

全ては「婚約者」であるのだから、そういうものだと割り切つて幸せに胡坐をかいてしまえばよいのだが、源一以外の男性と関係を結んだことのない一夜は、恥ずかしながらこれが初めての恋愛というものもあり、生まれて初めて手にした「幸福」に、一年経つた今も色々と困惑してしまうのであった。

そして自分の部屋でキャミソールを脱ぎ捨てれば、外気に晒された乳房が揺れる。その間にぽつりぽつりと見える赤い痣。いつもではないが、昨日は刻まれた。これも彼の「嗜好」のひとつなのだろうか。一夜には知る由もないが、時々彼に遊ばれている。

唇を押し当たられ、生暖かい感触が切ない痛みに変わる。その相反する感触は、甘い痺れを伴い、それをきわどい場所に何度も繰り返されれば、高く鼻にかかった悲鳴も自然に上がってしまうものである。

そのうえ「これ」は、このように跡として残るもの。彼に所有され、愛された証のような、紅い花びら。肌を重ねていた己の淫らな様子を、冷静になつた朝にこうして証拠として突きつけられてしまう。これを隠して仕事に行くのだ。

何度経験してもやはりむず痒い。おかしな罪悪感と羞恥を味わいながら、一夜は下着を身につけると出勤用のカットソーを着た。

早めに起こしてもらった甲斐があり、一夜が部屋を出ればまだ朝の七時十五分。八時に出勤すれば間に合ひの場所に住んでいる彼女は、化粧や身支度には時間を掛けないので、朝食を食べる時間も十分にある。

家から大学に通う源一は、一限目に入っている日はもう家に居ないはずなのだが、本日は一限目から始まるのか、まだリビングで新聞などを読んでいた。

その1 未だに恋をしています。

「……はよ……」

「 ん、」

引き続き、朝の光景。着替え終わった一夜はリビングでがさりと新聞を開く源一に声を掛けた。振り向かれないが声だけは返つてくる。

何年も一緒に暮らしていればわざわざ朝の挨拶をし合つ必要もないかもしれないが、この辺りは普通のカップルとも少々違い、彼女が彼の保護者であった頃の名残だろう。

引き取った当時、源一は小学生であったので、不良行動に走らないかと彼の心の闇を心配し、こんな一夜でも声だけは細やかにかけ続けたのであった。

彼女は嘘のつけない性格だった。引き取ったものの、子供の彼に対し何をしてやればよいかも分からぬ。だからただ「対等」に源一と暮らそうとしていた。自然体でいることが互いにとつて一番よいと思つていたし、演技をしていても何もよいことなどないだろう、と。

心を閉ざしていた少年にもその考えは伝わり、また居心地も悪くなかつたらしい。

それに源一が器用で、一夜が少々不器用であることも幸いした。女手ひとつで金もない、腹が減れば死んでしまう、自分が居候だと思つているということから、いつの間にか源一がてきぱきと家事をこなすようになつたのだ。

いつしかだらしない一夜としつかり者の彼の立場は逆転し、それでも彼女に養われているという負い目も残り、二人の関係はこの状態で均衡を取り始めた。しかし結果としてそれは少年の居場所をこの家に作ることとなり、一人が良好な関係で生活し、彼もまつとう

に成長できたといえる。

だからと書いて、一夜も源一を虐待のようになき使つていたわけでもない。「ありがとう」の言葉やそれこそ今のような朝の挨拶ひとつとっても、これは彼女の育つてきた環境によるものだが、彼の存在を対等に扱い尊重してきた。それは姉弟とも親子ともまた違う関係だった。

このような関係に発展した今、源一に尋ねてみれば、彼はおそらく最初から、一夜に好意を抱いていたのだと言つ。

それには驚かされたものの、最初から男と女の関係であったと言われば、妙に納得できるところもある。一夜もひとりきりになることを怖れて、年下の子供の彼に心中では依存していたのだから。唯一自分の孤独を分かつてくれる相手だと妄想していた。ずっと傍に居て欲しいと思つていた。

その念願は、今、叶つている。

昔から続いていた、空氣を吸うよう当たり前の関係。一夜はいつもどおり、源一の作った朝食をもぐもぐと頬張る。

朝食をしつかり食べないと体が動かないと言つ、早起きも得意で健康的な少しばかり、じじむさいのではないかと思われる源一は、魚だの卵だの朝から品数を用意してくれる。

本当に、嫁にするなら最高のやつだよな……。

無愛想な青年を照れ隠しに「嫁」とたとえたものの、結婚相手として実に申し分ない。自分のようなどうしようもない女よりも、ずっと気は利くし手際もよい。一夜はふつくらとした卵焼きを箸で摘みながら、そう思つ。

こんな風に男女の関係になる前 成長した彼への想いに気付く前は傍若無人としていた一夜だが、一人の女として彼に陥落してからは本当にこんな自分でよいのかと、少しばかり彼への劣等感も抱くようになつっていた。

元々一夜は恋愛を苦手とし、そういうことに心を碎かないようにしてきた。父親と母親が離婚したからという理由は大きい。しかし一人きりは寂しく、本来彼女には感情豊かな一面があつたのだろうか。あれだけ奥手であつたにも関わらず源一を奪われることを恐れ、自身の気持ちを急激に花開いていった。

それはセックスにおいても同じであった。未経験であった割には彼を受け入れようと決めてからは、驚くほどそれにのめり込んだ。恥ずかしさや抵抗はあつた。しかしこんな甘く痺れる感覚が世の中にあるのかと思い、その本能を拒絶しなかつた自分には彼女も驚きを覚えた。

しかし身構えていた彼女をこれだけ上手く誘導できたのは、自然の流れだけでなく、源一が一夜がそうしたことが苦手だと知つており、彼女を徹底的に大切にしたからであろう。

寧ろ彼には年下と言う負い目があつたため、彼女に頼りないと嫌われることを恐れ、慎重に爆発しそうな衝動を血の滲むような努力で堪え、砦を崩してきた。その賜物だろう。

そうした関係になつてから一年経つた今なら一夜にもそれが分かり、やはり彼への感謝しか思いつかない。

それはさておき、結局セックスをしてしまうのは、干物と言われる一夜でも一応は持つていて三大欲求からもあるが、やはり女性よりも強い青年の欲求を満たしてやりたいといつ気持ちの方が大きかつた。

そうして彼を繋ぎとめようとしているのかもしれないなかつた。十も年上である不安は、彼女もまた、きっと一生続く。恋愛感情を持てば、こうして失うことが恐くなるのだ。父親や母親のように、子供を産んだ後にすれ違うこともある。それでも彼女は彼を選んだ。

しかし既に夫婦になつている家族の話を聞けば、こんな切ない感情もいつかは消えていくものらしい。だが一夜たちの場合は、先に

「家族」であつたものが後から「恋人」になつてしまつたため、今の関係が未だに新鮮に感じているようだつた。

逆に既に家族であつたからこそ、一緒に暮らす相手と生活習慣が合わず衝突することも経験済みだ。しかもその問題は、恋人になる前に解決している。普通に恋をして同棲や結婚をする恋人達とは順番が逆なのだ。

それでも今までの関係と明らかに違う点は 。

一夜は食後のお茶を飲み込む。彼女の視線に気付いたのか、源一がふと新聞を閉じながら一夜を振り向いた。

昨夜の情交から、ここにきて改めて静かに視線が重なつた。

あの唇が、昨夜自分に触れていた。
熱い手のひらを、思い出す。

昔も今も、「家族」であることには変わりない。
ただひとつ違うのは、性的な関係を結ぶか、結ばないか。端的に言えばそれだけのことである。

勿論、それにより精神的な意味も変わつてくるが、六年間の生活を経て婚約を期にしてから物理的に変化したことと言えば他に何もなかつた。

「ごちそーさま……」

一夜は手を合わせてそう言つと、茶碗を持って流し台へと向かつた。また「ん、」と頷いた源一も空になつた「一ヒー カップを持つて流し台へとやつてきた。狭い場所なので、大人二人の腕と身体がぶつかり合つ。

一夜が食器を洗おうとすると、不意に大きな手にスポンジを取られた。彼女が横を見上げると、「やつてるとまた遅刻するぞ」

と言われ、洗おうとした茶碗が見る間に水に濡れていつた。

ああ。もう。

一夜は頭を搔きむしりたい気持ちになつた。

短い髪の襟足から、首筋が伸びて広い肩幅に続く。それを隣からただ見上げるばかり。

昨日この裸に抱き締められて、貫かれた。それが今朝はこんなにもつづけんどんと、あの興奮が信じられないくらい冷静で飄々としている。そして驚くほど、一夜に優しい。

もしかしたら、慣れていなのは源二も同じなのだろうか。
一夜はぼうっと佇んでいた。

こうした関係になつて二年経つのだから、普通はもう優しくなくなるのではないか。これはただ彼の角がとれただけなのか、逆に未だ一夜を失うことを怖れているのか、妙にあたたかい態度がやはりむず痒い。それでも一度このぬくもりを覚えると心地良く、冷たくされればきっと不安でたまらなくなつてしまつだらう。

言いようのない恥ずかしさと悔しさと不安に覆われた一夜は、この胡散臭いほどいいヤツ、な青年の脛を思わず蹴つた。

「んだよ」

茶碗を洗つてやつたうえに蹴られれば彼も割に合わないと思つらしい。不機嫌そうに皺を寄せて睨まれた。

週に数回抱かれているうちに、嫌でも気付く。二年前と源二の身体も変化している。元々成長は早いようでその頃から大人と変わらない体つきではあったが、内面から滲み出るものか、身体そのものの変化か、おそらく両方の理由で、彼の身体は確実に男らしく頼りがいのあるものに成長している。

精神的なものも相まって、胸も背中も広く感じられ、太つてもいらないのに重量感　　言い換えれば貫禄が備わってきた。きっと社会に出ればこれがもつと、大きくなつていくのだろう。

彼に包まれている、という安心感。

それが今の彼女を、未だに甘く疼かせる感情の源。

洗面所へと移動した一夜は軽くため息をつく。

早く化粧をして、「外」用の自分に切り替えなくてはいけない。女として生まれた以上、身だしなみには最低限気を遣い、社会を渡り歩いていかなくてはいけない。まだ学生である彼との生活を守るために。昨夜の甘い出来事に浸つてばかりもいられないのだ。一夜はぱちんと頬を叩くと、気合を入れ直した。

なんで交わった後の朝は、いつもこんな面倒臭い気持ちになつてしまふんだろう。

いつ、この「恋」は終わるんだろう。いつ、普通のカップルや夫婦みたいに慣れてくるんだろう……。

一夜は気合を入れたものの、もう一度ため息をつく。

言い換えれば、彼女は未だ成長を続ける彼に、「ことある」と「惚れ直して」といるのであった。何度もこの気持ちに気付いてしまう。それは狂おしく、情けなく、恥ずかしく、切ないもの。

もう一年も経つのに。もう、三十路だというのに。

それもまた情けないと嘆く一因。ただ若い男に溺れているだけのようだ。

洗面所を出れば源一はまだ家に居たが、一夜はもう顔も見ずに出勤することにした。

「おい、忘れてる」

しかし玄関先で呼び止められ、ずいっと忘れ物の弁当箱を差し出される。

「 っ！ お、おやじくそつー」

よく出来た男であるにも関わらず、余りに優しくされれば氣恥ずかしくなり、意味不明の言葉を投げつける。それはやはり父親の居なかつた一夜だからこそ父性的な優しさに余計に惹かれてしまうのか、彼女にもよく分からない。

「 ああー？」

一夜の複雑な乙女心も知らず、親父呼ばわりされれば二十歳の青年も眉のひとつも吊り上げて、柄悪く聞き返す。

こんな風に小競り合いばかりする一人であるのに、どうして夜になればあの甘い時間が自然と始まるのか。それもまた一夜には男と女の嗜みが不思議で異様なものに感じられる所以である。

シグナルなど、見えやしない。彼の若さに任せて一晩連続のことになるのか、数日お預けになるのか、今の朝の状況では分からぬ。分からぬのに、夜、彼は変化する。

目には見えないものなのに、確実に一人を繋ぐ、逃れられない何かが間に横たわっている。

夜の絡みつくような闇の空気も異常であるが、それを嘘のようにかき消すこの朝の爽やかな空気もおかしなものに思い、一夜は身をぶるりと震わせながら、やつぱり変なことを考えないよう仕事に行つた方がいいや、と慌てて家を飛び出した。

その2 マーキング。（前編）

仕事へ行けば、流石に朝から感じた妙な感情や夜中の甘い出来事も忘れられる忙しさが待っていた。

そうは言つても一夜もこの職場は五年目になり、仕事の流れも体に染み付いている。そんな彼女もそろそろ来年あたり異動になるだろうと予想されるが、一夜がこの児童館を担当する部署に長くいる理由は、彼女よりも長くこの職場に居た一人の女性が先に育児休業で抜けてしまつたからであつた。

よつて今一番この職場での経験が長い一夜が、皆に色々なことを尋ねられる。

「鎌田さん、おととしの代表者会議の資料つてどこにあるか分かります？ 京屋さん……じゃねえ、北條さんのファイルに入つてなかつたんで」

今質問してきたのは、その一夜よりも長く此処に居た女性と入れ替わりで配属された、和田といつ入社一年目の男性だ。背は源二と比べれば低いが、地毛だという茶色くさらさらの髪と人懐っこい笑顔で児童館に来る少女たちや母親たちの人気者となつている。

元々頭の良い彼は既にこの部署に役立つ存在となつていたが、やはり過去のことは教えられなければ分からぬのは当然だろう。

「ああ、それなら千菜の担当じゃなかつたからね。あつちの書庫にあるかもしね」

和田の前任は、一夜のよき友人であり同期の京屋千菜といつ女性であった。彼女は職場結婚をして今は北條といつ姓になつてゐる……その相手の男も、一夜には若干因縁があるのだがそれはさておき、

「北條さん、元気ですかねえ」

最初に覚えた結婚前の苗字をつい呼んでしまつといつ和田は、ゆつくりと千菜の新しい苗字を言い直した。

「今度の休みに会いに行くよ」

「そうですか。よろしく言つてください。あ、ついでに県に送る書類どう誤魔化してたか聞いておいてほしいんですけど」

「……分かつた」

一夜はその言葉に彼女らしい仕事ぶりを思い出して苦笑する。ちなみに千菜の結婚相手は、この部署の前室長の男であった。その室長も、昨年交代になつてはいる。故に上司も新任であるため、益々一夜が頼られているのであつた。その分彼女の仕事量は増えているが、そこは長年の経験で要領よくこなせる術を知つてはいるので、残業が増えるというようなことはなかつた。

結婚後、すぐに妊娠し休業することになつた千菜は、この状況を予測して一夜に何度も頭を下げてきたが、それは仕方のないことだろうと一夜も納得出来てはいる。職場の中には彼女達をよく言わないと単純な理由からであつた。というのも、一夜自身が異性を好きになつてしまえば止められない、男女のそれは仕方が無いといつことを体験してきたからこそ、そう思えるのであつた。

でなければ、高校生だった彼に手は出さなかつただろう……。友人のことを思い出していたはずが、妙な自己嫌悪に陥つてしまつた一夜。既に過去のことであるが、児童館にボランティアとしてやつてくる高校生などを見れば、自分は一年前、あの年齢の源一に、彼から誘つてきたとはいえ結ばれてしまつたのかと、つい罪悪感を蘇らせてしまうこともしばしばある。

こんなに苦しむほど真面目ぶるならば、彼を拒絶し続ければよかつたのだが、一夜の心もまた止められずそれは出来なかつた。彼が成人を迎えた今はもう、開き直るしかないのだが。

一夜がそんな過去の己の行いにため息をつきながら和田にファイルの位置を示してやつた時、ふと隣からの視線に気が付いた。彼女と十センチも変わらない視点から、和田が一夜の首元から胸元にかけてを何故かじいと見てているのであった。

「……何……？」

「いえ、別に」

彼は複雑な笑いをひとつ浮かべると、視線をファイルの方へと戻した。

「……？」

「まさか……！？」

嫌な予感が頭を過ぎり、一気に血の気が引いた一夜は、書庫に和田を残してさりげなくダッシュでトイレに駆け込み、洗面台の鏡の前で愕然とした。

確かに、深めのボートネックの襟の間から胸元に掛けて……見えないこともなかつた。

鎖骨の下の、赤い痣が。昨夜の、情事の跡が。

……つ、クソ源一……！

酷い言いようであるが、これは己の若い恋人の暴走によるものだ。社会人の一夜にこのように恥をかかせ、帰つたらあの若僧をどのように叱つてやろうかと、恥ずかしさから怒りを覚えた彼女だが、はつきりとこんな事実を言つのも気恥ずかしくどう言つてよいのかも分からぬ。

源一は基本的に「ういとつた「マナー」を守る男だと信じているが、昨夜に限つてどうしたのか。興奮からなのか悪戯心からそうしたのかは、分からぬ。それに確かに、そんなところは本来見えない筈の場所である。たまたま襟が緩み、比較的近い場所にいた和田に覗かれてしまつただけで……というよりも、和田も何故覗いたのかと

言つ話にもなり。

やつぱり、男なんて嫌だ……。

「こんなおばさんほつといってくれよ……」と朝は女性として年齢のことを気にしていた割に、今はそんな嘆きたい気持ちになりながら、一夜は手洗いから外に出た。

ちなみに「次の日」はいつも用を足す時に局部に違和感を覚え、その異物感にもまた嫌悪を感じてしまつ。個人差はあるだろうが、一夜には未だそんな感覚が残つてゐる。仕事中であつても、その場所は生理的な現象を正直に起こしているといつ事実。

理性と欲望。心と身体。
真面目に勤務する一社会人としての自分と、一個の女 雌である自分。

人として社会に生きるには、その本音と建前を常に両立させねばならない。それは毎日多くの人々が繰り返していることである。

一年経つた今、一夜もそれに大分慣れただが、その性分からかこんな風にショッちゅう乙女のように、赤くなつたり焦つてしまつたりするのであつた。

・・・・・

その日の夕方は残業も無かつたため、一夜は定時で仕事を上がつた。そして車で少々離れたデパートへと向かう。数日後の休みに千菜の家に持つていくための土産を買うためだつた。

子供が産まれてから初めて訪れるので、その贈り物を選んだ後、ついでに夕食の惣菜も買って帰る。

今日、源一はアルバイトで夜遅いので夕食はそれぞれで取ることになつてゐる。高校生までの時と違いもう成人となり、それこそ婚約者だから、「夕食は必ず家で食べること」という約束事

を強いる必要もなくなつた。居候の彼は節約にもなるからと高校卒業まで律儀にそのルールを守り、一夜が遅くなる日は夕食を作ってくれたものだ。今でも休日はそのようにしてくれるが、基本的に夕食は一緒にならないことの方が多いなつた。

ちなみに彼は今でも金がないからと、誘われない限りは付き合いに参加せず、ひたすら学費を稼ぐためにアルバイトをしている。

愛用の中古の原付はとうに寿命を迎えて、持つていればもつと身入りのよい仕事が出来るからと、アルバイト先の紹介で中古車を買つていた。維持費以上に稼げるのことなので、一夜は自分などよりもずっと先々のことを考えている源一の行動に何も文句は言わなかつた。

それだけしつかりした彼であるが、今日は一言言つてやらねばなるまい。

金を掛けた分いつもよりも美味しい夕食を口にしながら、一夜はそう決意して源一の帰りを待つ。

夕食後、風呂に入つて確認すると、やはり彼からの唇の痕はまだ残つていた。消えた箇所もあつたが、和田に見られたらしい胸元のものはまだしつかりと残つている。これは一夜の経験からすれば、明日も残つているだろうと思われる。思えば、これをつけられた時は、確かに結構痛かつたものだ。

一体明日は何を着ていけばよいのか。ノースリーブならばハイネックでも季節的におかしくないだろうか。一夜は今度は別のことで頭を悩ませ始める。

しかしそれでは既にこの醜態を知つてはいる和田からすれば、あからざまではないだろうか。子供たちの前では襟首を出来るだけ引き上げ、申し訳ないが身体を高い位置に起こしておき、視界には入らないようにしていればどうにかなるが。

そんなことを悶々と考える彼女が風呂から上がつた頃、源一が家

に帰つてきた。

その3 マーキング。（後編）

「……お帰り」

「…………おえず一夜はそつ言つてやる。怒鳴つてやるのは彼が風呂から出でるまで待つことにした。

ちなみにこの家では、後に風呂に入った方が風呂を洗い洗濯機のスイッチを入れることになつてゐる。一夜よりも帰りが遅くとも、彼は疲れたとも言わず毎日黙々と風呂洗いをしてくれる。

そんな優しい源一を風呂上りに怒るのは悪いと少々ためらいつつも、やはり言わねば今後の為によくないと、一夜は居間に戻つてきました彼に声を掛けた。

「あ、あのやー」

ソファの上に顎を乗せて腰をかけてきた一夜を、源一はむすりとした顔で見下ろした。

「えーと……」

今までに例があつたわけではないので、言つちり。源一は一夜の話を聞いてやるべく、言つてよどむ彼女の横に腰を下ろした。

「あ、あのね、」

一夜はそこで俯いた。冬以外はパジャマを着ない主義だ。就寝前なのでジャージの上にキャミソールを着て、カーディガンを羽織つてゐる。その胸元をじつて言葉を詰まらせると、やがてやはりこの若者に、はつきりと言つてやらねばならんと口を開いた。

「痕、が見えちやつて、た……」

しかし怒つてやるつもりが恥ずかしくて声が小さくなり、ただ恥じらつてこるだけのような勢いのないものとなつてしまつ。

「……」

源一の顔は見ていないが、眼を瞬かせてゐるのか無言のままであつた。一夜がまた何か続きを口にしようとする、

「どうの？」「

と彼は尋ねてきた。一応、自覚はあるらしい。

「……」「」「

一夜は少し間を置いた後、キャミソールの上から胸元を指差した。

「見せて」

その言葉に情けないながらも、三十路を迎える女はどきりと胸を波打たせた。

肌を見せたことがないどころか昨晚見せたばかりである。しかも数年来そうしてきてる。それでも改めて言われると妙に照れ臭いものだった。一夜は一瞬胸元の布地をきゅっとかき寄せた。

しかしことの原因はこの目の前の当人であるし、互いに照れる年齢でもない。そう思つた一夜は照れている自分が情けない気がしてきて、唇をへの字に曲げるとキャミソールの襟を引っ張つた。

そこを源一に覗き込まれる。洗いたての短い髪から石鹼の香りがし、湿つた毛先のくすぐりたい感触が、一夜の顎に僅かに伝わる。息遣いまで聞こえるようだ。

風呂上りなので、一夜は下着をつけていない。おそらくキャミソールの中では白い膨らみが、下手をすれば先端の影まで見えているだろう状況に、また恥ずかしい感覚を生み出す。

そう思い一夜の身体の一部がずくんと疼いた時、キャミソールをつまんでいた手を源一の大きな手にとられた。反射的に彼女は身を引こうとしたが手を服ごと引っ張られ、今一度覗かれてしまった。恥ずかしい！と咄嗟に思つた一夜は源一の手を完全に払つて、「もう、分かつただろ！」「こつちは仕事の時とかに見られると困るのー。だからもう、こんなことないよう」「気をつけて！」

そつ叫びながらキャミソールの上から身体を抱き締めて後退した。…と言つても小さなソファでのことなのだが。

一瞬、どう言おうか迷つた一夜だが、「もう絶対にしないで！」

とは彼のプライドや気持ちを考えて言えなかつた。そもそも源一は嫌いな女にわざわざこんなことをする男ではない。その逆だからしてくれたことくらいは分かる。それに一夜もその行為自体は嫌ではないので、こんなことで彼に嫌われたり溝を作つてしまつた事も嫌だと思っていた。

しかし自身の性癖を咎められた源一は、ふすりとした顔をしている。

「……悪かった」

その顔で不羨にぼそりと謝つてきた。

彼の機嫌が悪いのは叱られたからと云つては、若さゆえに興奮に任せ大切な彼女に恥をかかせてしまつた、そんな己の幼さと思慮の浅はかさが許せなかつたのだろうか。意外とプライドが高く負けず嫌いの源一なので、年下である劣等感からそんな己を恥じているところはありそつた。

しかしつまでも気にしてぐずぐずとする源一でもない。彼はそこで、ふと何かを思い出したように一夜を見た。

「つうか、なんでそんなとこ、見られてんだよ……」

今度は一夜が冷や汗をかく番だ。どうして、とは彼女が聞きたいくらいである。

今日のカットソーは実は昨年購入したもので、生地自体が古びて若干たるんでいたかもしれない。それにしても和田もそんなところに視線を走らせなくともいいのに、とは確かに思った。

「し、知らないよ」

一夜は違う意味で不機嫌になりつつある源一から眼を逸らした。

「……」

妙な間が出来る。一夜はおずおずと源一を見上げた。

「気に、いらない……？」

まさか、こんなおばさんにな、と思いながら尋ねたのだが、彼は

むすりとした視線を彼女に向けた。その視線に思わず胸が高鳴ってしまった一夜は、咄嗟にそれを否定するようなことを口走った。

「いいじゃん、もう氣にする年齢でもないんだし……」

確かに自分でも若くもないくせにこんなことで照れているのが情けないとと思うのであつた。しかしこの、一夜が源一に対しての劣等感から呴いた言葉が彼には益々氣に入らなかつたらしい。源一は更に不機嫌そうな表情になると、彼女の細い身体をソファの上にあつさりと押し倒してきたのであつた。

え！ え？ えええー！？

「ちょ、ちょっと待つて！ 昨日も、したのにつ！？」

この体勢に彼が持ち込めば、何をしたいのか流石に分かる。と言つても回数は重ねているのだし、毎日するからと言って身体に支障があるわけではないが、こんななし崩し的なことでよいのかと一夜は焦つてしまつ。

しかし彼女のキャミソールに再び手を掛けた源一は、その手に力を込めるながらこんな言葉を投げつけてきた。

「氣をつけるつて……じゃあ、何処にするなら、いいわけ？ 教えろよ」

「……」

睨みつけてくる視線の割にはやたらと甘いその台詞に、一夜は絶句した。

怒るつもりが、よく分からぬが怒られている。そして源一はもう「臨戦態勢」に入つてゐる。こうしていつも、朝には何の兆候も見せないので、彼は突然スイッチが入つてしまうのだ。

そしてきっと、自分はまた流される。彼の視線と施される指から、逃れられない。一夜はそう予感する。だらしない、毎日こんな乱れたことをして そう思つのに、やはり負けてしまつ。この若い男の情熱に。

睡眠欲、食欲と共に沸き起る三つ田の欲望を、未だ浅ましく口

々満たそうとしている。満たさなくても構わないものなのに。

……くつそり……。

そんなさかりのついた動物のよつに感じられる自分への情けなさ
やら悔しさやらから、一夜は照れ隠しにハツ当たりの悪態をついた。

「……この、変態おやじ……」

二十歳の青年は朝から一度田のその暴言に、一瞬がつくりと脱力
した が結局その手の力は緩められることなく、昨夜以上に一夜
の身体は甘く切ない攻めに翻弄されたとこう。

その4 「女」の事情（前編）

そして週が明けた月曜日。土日出勤のある一夜は本日は休みにあたり、午後から育児休暇中の友人、千菜の家へと遊びに行く予定になっている。

朝ゆっくりと起きられる幸せを噛み締めながら、のんびりと出かける支度をする。

約束の時間は午後一時。起きたり寝たりを繰り返す四ヶ月の赤ん坊の世話をしている千菜は、まだ子供の昼寝の時間が定まっていないので、いつ来てくれても構わないとのこと。昼食後ならば相手にも気を遣わせず、夕食の準備の邪魔にもならないだろうとその時間になった。

千菜の夫に当たる男 つまり一夜の元上司になる北條 早斗は、上司としても男としても信頼のおける人物であったが、一夜が源二と今の仲になる前に言い寄られたことがある、いわくつきの相手であつた。その頃、千菜もまだ前の彼氏と付き合っていたのだが。

一夜にその気は全くなく、寧ろ彼からのアクションがあつたからこそ源二を男として意識するようになつたわけで、その過去の件についてももう忘れようと思つていた。また今の北條夫妻の仲もよく心配するほどのことではないのだが、男性が元々苦手だった一夜としてはやはり北條本人が其処に居れば緊張してしまう。

よつて土日ではなく、千菜だけが一人で家にいる日を選んだわけである。それに夫の北條の方も、もしも彼の休日と被ればあえて用事を作つて友人同士一人きりにさせるようなそんな気を遣つてくれ るタイプではあつたが。

四月も終わりを迎えるカレンダーには、今日の約束のメモが書かれている。軽く化粧をしながら、一夜は確認の意味でカレンダーを

見た。

そしてふと考える。仕事関係の会議や行事の日程などをぼんやりと思い出し、日で追う。それから美容院の予定、次の飲み会の日取りなど個人的な用事にも思いを馳せていると　その次に思いついたのは、次の生理はいつだつたかな、ということだった。

いつもそれを気にしているわけではないが、一夜は決して軽いほうではないので会議や行事などの忙しい日や、飲み会などと一日日の重い日が重なるのは正直困るのであつた。衛生用品なども買い足さなくてはならないので、そろそろかと指を折つて計算をする。

おそらく、来るのは数日後。

だろうな、と一夜は思わず頷く。もうまもなくそれは訪れるである。

……でなければ、先週あんなにも、あの行為を彼としなかつたに違いない、と。

また考えは、恋愛関係にある同居人へと帰結する。一年と少し前まではこんなことで悩まなくてよかつたのだが、婚姻関係を前提にした上で共に暮らすということは、互いの生理的欲求を満たすという理由でも、相手とコミュニケーションを図るという理由でも、あの嘗みは特別なことではなく日常生活のひとつとして避けられないこととなつてている。

色々なメディアの話を聞けば、いわゆるセックレスになつている夫婦は少なくはない。体力やタイミングも必要なことであり、出産後の女性だけでなく意外と若い夫婦にも多いのだと一夜も聞いたことがある。それでもその夫婦が良好な関係で生活していければそれでよいのだから、することがよい、悪い、という答えは決して他人が一概には言えない。

当人同士がどうしたいか、どうありたいか、である。

そういう意味では、一夜はかなり求められるまゝに、受身で源

「の夜の相手をしているのかもしけなかつた。しかしそれを嫌だと思わないのだから、自分も源一のことは言えず相当変態なのだろうか……と淫らな自分が心配になつてしまつ。

男性優位と思われがちなその行為。そう認識されている原因についてはいくつも言えるが、少なくとも一夜ら一人については、誰のためでもなく、それぞれの意思でそれを楽しんでいると思つたがつた。彼女が受身になることが多いが、それでも彼が一人よがりになつてゐるわけではない。そういう関係でありたいと二人は考えていた。

一夜は己を大切にすることがモットーの女性であるため、相手の快樂のためだけに自分の身体を犠牲にして差し出したいとは思わない。

その一夜と長年過ごしてきた源一もまた、彼女の影響や彼本人の性格から、彼女が嫌々抱かれるようなことは許せないようだつた。

だからこそ源一は壊れ物を扱つよう、そして一夜の意思を常に確認しながら事を進めていくのだろう。口調は乱暴なもので多少強引なところがあつても、彼女の領域を侵さないでいることが一夜にも伝わつてくる。だから彼には安心して抱かれることが出来るし、その優しさを愛しくも思い、彼の望みも叶えてやりたいと思うのだ。先日のマーキングのような、悪戯心や軽い嗜虐心は源一にもあるようだが、それくらいなら一夜も許容範囲　寧ろ、たまにはそうした刺激も欲しいなどといやらしくも考えてしまうほどで。

年齢が離れている割には長く一緒に暮らしてきたからか、二人はそうした波長や相性が合つ方なのかもしけなかつた。

それでも世間のカップルや夫婦から比べて、この回数は多いのか少ないのか、自分は淫乱なのかそうでないのか、と性に対しても潔癖な一夜はつい気にしてしまう。

源一はきっと言つだらう。「人のことは関係ない。一夜がどうしたいかだろ」と。

やりたいならやればいい。やりたくないならやらなくていい。はつきりとした気性の彼は、いつだってそう言つ。そして一夜に彼女の自発的な意思を持たせようとする。やつひつて一夜の眼を真つ直ぐに見てくる。

そんな部分に彼女は惹かれ、いつだって引き寄せられている。それはもうきっと何年も前から。

だからこの間隔が自分たちにとつてベストなのだと開き直るしかないのだが、改めてカレンダーで回数を数えると、やつぱり多いのかな、と口紅を手に持ったまま一夜は固まってしまった。

それでももうすぐきっと生理が始まるとから、今週はほとんどしなくて済むはずだ。

この禁欲週間で差し引きゼロにして、と何と何との差し引きか分からぬが、一夜は自分自身を納得させようとしていた。

それに先週の頻度が高かつたのには理由がある。確かに職場で五年目を迎えたこともあり、今月は仕事もそれほど大変ではなかつた。仕事で疲れればそんな気分にはならないし、源一も気を遣つてくれる。彼もまた帰りが遅い日が続けば、誘つてくることはない。

四月は意外と帰りが早く、一人で夜過ごすことが多かつた。それがひとつ。ふたつめは。

一応、婚約者と言つても源一は学生。重荷のない状態で青春を楽しませてやりたいし、社会に送り出してやりたい。これは彼の元保護者として、今でも一夜が願うことであった。

とどのつまり、今は子供を作つてはならない、自分の身を自分で守り、体調を管理し必ず避妊しなくてはいけないと、一夜は考えていたのであった。それは彼女の身体を傷つけたくない、彼女が働く邪魔をしたくないと願う源一も同じである。だから一夜に生理が定期的に訪れている以上、少し考えればすぐにその予定が想定できるほど、彼女は己の体温や体の変化に常に気を配つていた。

言い換えれば、先々週は「危険日」を含み、先週は「安全日」の

圈内だつた。行為の頻度が高くなつたり低くなつたりするのは
そういう事情もある。

その5 「女」の事情（後編）

避妊具を必ず使う、精をみだりに中で吐き出さないなど、口には出さずとも毎回それらを理性と思いやりを持つて一夜に行使する源一には彼女も舌を巻く。

腰を動かしている最中は何も考えられないものではないかと思うが、それでも彼が一夜を想う証か、彼女の身体を組み敷き揺さぶりながらも、どうにか最後の大切なものを捨てないでいるようだつた。それを若い彼に耐えさせていることに、一夜も同情して流されそうになるが、本分を見失いたくはなく命そのものも大切に考えているので、互いに互いを律していた。

もっと深く触れ合いたい。でもまだ子供を作る時ではないので、生殖のために「して」いるのではない。

では何の為にこんなに頻繁に交わっているのかと聞かれても一夜は困るのだが、そんなことは誰も尋ねやしないので、互いが日々の生活を楽しめるならば、源一と自分の間ではこの回数でよいのだとやはりそう考えるしかなかつた。

子供か……。

生理から避妊のことに考えが移つた一夜は、やがて口紅を引きながら考える。

今日、これから会いに行く千葉は一夜と同じ年である。彼女と同様、自分が今年三十を迎えるということも一夜は自覚している。それでも、社会にまだ出ていない年の離れた若い男を選んだ。

そして彼女自身、両親の離婚から「親子関係」というものにトラウマがあり、それは両親を失つた源一も同じであった。それら全てのことから考えると、婚約をしたものの子供をどうするかについては今まで源一とあまり話をしてこなかつたが、漠然とした不安が彼女にはあるのだった。

・・・・・

そして午後、千菜の家にて。

「和田君は、元気でやつてる?」

「ああ、うん。かなり使えるようになつてきたよ」

リビングで布団代わりに使つてはいる、大きな座布団の上に寝転ぶ小さな赤ん坊。それをあやす千菜の間に、一夜は答えた。

千菜の後任の和田と言えば、先日の源一によるマーキング……もといキスマークを見られたことがまだ一夜の中ぐすぶつてはいる。父親の件は一夜に男女関係のトラウマを持たせ、「女」である自分をえて意識しないように生きてきた一夜。源一以外とは交際をしたことがなく、彼以外の男の前でそんな色めいた自分を見せたことがない。

だからただの後輩に「女」の自分を見せてしまつたことは、一夜にとつて不覚なことであった。そんな失態は千菜にも言えない。ただ和田もさすが女性慣れしているというか、あの後、一夜に対し何を言つこともなく、後輩として普通に接してくれることには安堵していた。

よつて一夜はそれについてはもう無かつたことじよつと首を振ると、和田が聞いてきてほしいと言つていた県の書類の誤魔化し方などを笑つて千菜と話した。

「大変だつたけど、あれはあれで面白かつたなあ」

書類を間に合わせるために夜中まで悪戦苦闘してはいたといつ過去を振り返りながら、千菜は眼を細めてそう笑う。それは産まれて間もない愛しい我が子に向ける笑みとは、また違つた笑顔であつた。

「育児休暇、……だよね」

ふと尋ねた一夜に、千菜はそのまま笑つて頷く。

「とりあえず、一年。それ以上はどうするかまだ悩んでる。今しか

ない時間だからこの子とも離れたくないし、でもまだあの職場でしたいこともいっぱいあつたし、若いうちにいっぱい働きたいしどうするのが一番いいのか、分からんだけだ」

子供を産むと同時に仕事を辞める女性は多く居る。それよりも前に妊娠と同時に、更には結婚と同時に辞める女性も多い。しかし一夜たちの勤務先は準公務員のような立場であるため、育児休暇などの体制も整つており、女性にも職が保障されている。ただし世の経済状況によってはどちらに風が吹くかは分からない立場ではあるが。それでも我が仮と言われようとも苦労して就職先を探した身としては、簡単に仕事を捨てたくもない。と言って女という身体に生まれた以上、一生に一度は子供を産むことも意識する。

女性とは片方を選ばなくてはいけない生き物なのか、それとも両方を追いかけてもよいものか、それを比べるだけナンセンスなのか、そもそもそれが当たり前の社会でないとおかしいのか。

一夜も長らく考えてはきたが、明確な答えは出でていない。千菜もきっと迷っているのだろうが、愛する人との子供を産むことも、同じ職場で引き続き働くことも夢に見ている。彼女らしく生きた自然な成り行きの結果であった。それはそれで貴いて欲しいと一夜も応援しており、彼女のそういう強さにも相変わらず憧れを感じる。

千菜は女と母の中間の笑顔になると、じたばたと手足を動かす息子を覗き込み、自身の指を握らせた。そんな千菜は綺麗だと一夜は月並みながら思い、そのふにゃふにゃした赤ん坊のこともとても可愛いと純粹に胸をときめかせる。一夜も一緒に赤ん坊を覗き込んで、触れてみた。

その命は、柔らかく、温かかった。

「可愛い」

一夜は思わず微笑む。その素直な笑顔を見て千菜も笑うと突然話をふつってきた。

「一夜は子供、作つたりしないの？」

「へ？」

「ほら、いつそ学生結婚とかさあ」

「はあ！？」

「一夜は思わず素つ頓狂な声を出した。その大声に赤ん坊が驚いたような顔をしたように見え、一瞬泣き出すのではないかと心配になつたが、先に子供の前で変なことを言い出したのは千菜の方である。

「源一くんなら、いいお父さんになると思うけどなあ」

高校時代から彼を知り、大絶賛していた千菜は息子に笑いかけつつ、ちらりと一夜を見つづ、例によつて一人で嬉しそうに頷いている。

「いや、待つて。でも、やっぱ、そりや、まだ……」

一夜が顔を赤くして「ごによごによ」と自分でもよく分からぬことを言つてゐると、

「まあ別に今すぐにじゃなくともいいけど、一夜も子供欲しかつたりするの？」

核心をさりくりと突かれ、唐突な問いかけに彼女は絶句してしまつたのであつた。

その6 家族計画？

あれから千菜の家から帰つてくる間も、帰つてきてからも一夜はぼうつと考えていた。

千菜の子供は本当に可愛かつたと思った。彼女に似ている気もしあし、一夜の元上司の北條に似ていたような気もした。新しい頼りない、しかし力強い命とはこんなにも可愛いものか。もちろんふにやふにやとしすぎて、恐いという印象も一夜は持つた。

身体だけでない。心も真っ白の状態だ。それを一人の立派な人間に育て上げるのは並大抵のことではない。そうは言つても、世の中では絶え間なく男女が結ばれ子供が産まれている。そう思えば深く考えなくともできることなのかもしれないが、一夜は性格上、自分なんかに子供など育てられないのではないかと身構えてしまつていた。

それでも子供は純粋に可愛いと思えたし、好きな男とただ二人で暮らすだけでなく、その彼と築く「家族」という新しい幸せに手を伸ばしてもよいのではないか……と、そうした安らぎと楽しさを見つけている千菜を見て、千物女だった一夜でも少々憧れを抱いたのであった。

遠い将来のことや年齢などを考えても、現実的に出産という選択肢がそろそろ視野に入つてくる。それに一夜だけでなく、「婚約」という形を選んだ源一にも、新しい家族の形を築きたいという気持ちはあると思つてもよいのかもしねい。

家に帰つてもまだ夕方になるかならないか。源一の今夜の予定は、学校の用事でアルバイトを入れてなく、夕食を家で食べるらしい。よつて一夜が夕食を作らねばならないのだが、まだ時間も早いので春の夕日が入る部屋の中、ソファでクッションを抱きながら引き続

あほんやつと考えている。

「……」

しばらく思い悩んでいたが、一夜はふと何の命も入っていない腹を摩つてみた。千菜がまだ身重の身体で働いていた頃、テレパシーでも送つていいのか、たまにそつしていいのを見たことがある。

一夜の下腹部には卵を作る子宮があるのみ。まだ、命は宿っていない。その基が中に放出されたことが未だないからだ。からっぽのこの器官や卵は、その役割を果たすことを夢に見ているだろうか。意思などなくただ正常に機能しているだけの部位なのに、一夜は不思議な気分になつてくる。

源一の子供か……。

具体的に考えてみた。先ほどまでは自分が母親になれるかどうかを考えていたが、今度はその相手が彼であることを。

腹に手をやつたまま、宙を見つめて考える。

すると想像力貧困な一夜の頭の中には、源一そつくりの無表情の男の赤ん坊や、女の赤ん坊が思い浮かび、彼女は苦笑してしまった。そして長い髪の頭をぼりぼりと搔く。

……でも、可愛いだろうなあ。

結局はそんな感情になり思わずにはやけてしまった自分に、誰も居ないのに恥ずかしくなり一夜はクッショングに顔を埋める。

他の男性相手ではこんな期待も夢も抱かないだろう。彼の身体の、遺伝子の一部分が自分の中に入り、新しい生命が息づきそれを産み出す。それは恐怖でもあつたが、一度経験してみたいようにも今の一晩なら感じてしまつ。

千菜の言つとおり、もしかしたら责任感の強い源一は怒りながらも、呑気な一夜と一緒に子供の面倒を看てくれるかもしれない。それはそれで楽しそうだと思った。しかしあくまで「おさらへ」であり、「絶対」とは言い切れなかつた。

それは彼を感じていないからではない。一夜にも見えない、彼の心に残っているかもしないひとつのかずの傷によるものだった。

婚約してから一夜の母親の墓参りは一緒に行くよになつたが、源一は自身の両親のことを殆ど語らず、墓参りをしているのかすら口にしない。一夜もそれを尋ねるのが悪いような気がしている。

一夜は遠縁で彼の親の葬式に出ているので、会つたことはないが名前くらいは知っているものの、その時の親戚たちの口さがない話では（それに腹が立つて、一夜は源一を連れて帰つてしまつたのだが）、彼の両親は事故ではなく心中ではないかななどと好き勝手囁かれていた。

結局警察は事故で処理したので、眞実は分からぬ。源一も事故として自身を納得させ、追及するつもりはないらしいが、そんな噂が耳に入れば誰だって「自分が捨てられた」という気持ちになるのではないだろうか。

彼は一夜の家に来てから両親の死については何も言わなかつたが、彼女と言えば密かにそんな心配をしていた。そのまま彼は真っ直ぐな青年に育つてくれたので、そのことは一夜からも尋ねずじまいである。忘れないことならば、無理に根掘り葉掘り聞くこともないだろ。

一夜も父親が家を出て行つた時は、確かに親に捨てられた気分になり、心の傷として残つてゐる。彼女の場合、その後しつかりとした母親に育てられ、父親にも源一と一緒に偶然再会したため、その気持ちを打ち明けて乗り越えることができたのだが。

そんな一人が、「親」になれるのだろうか。

その不安が以前から一夜にはあつた。互いにその孤独を埋めあいたいと思つたからこそ、婚約と言う形をとつたが、一夜自身の深層心理やまだ若い源一が今でもそれを引きずり、親子と言つものにトラウマなどを抱えている可能性はある。

しかしそうと以前……それこそ一年半前、一夜が父親と再会した時に、源二が「自分が親になつた時に、同じことを繰り返さなければいいだろ」と大人びた発言をしたことを思い出す。その時の彼の口ぶりでは、ふつきれているように一夜には感じた。

しかしいざれにせよ、本当のところは当人しか分からぬ。このまま結婚をすれば、いつかは確かめねばいけない日も来るだろ。それこそ彼が学生なので、まだ話題にはしていないのだが。

私自身は、どうしたいのかな。

一夜は少々薄暗くなつてきた部屋の中で、未だじつとして考えていた。

自分なんかが子供を守れるのか。父親のようになつてしまわないか。もちろんなりたくないが、いつか戸惑う日がくるかもしれない。憧れるような、恐いような。もつと幸せになれるなら、産みたいような。

しかしそれらのことから子供を裏切りたくないという気持ちは双方にあると思われるのでは、やはり自分だけでなく源二の気持ち次第だな、とこう結論に一夜は達した。

・・・・・

一夜が夕食を作つて待つていると、丁度出来上がる頃に源二が帰つてきた。

今夜は明日の夕食にも残るよつ、メニューをカレーにした。その分、サラダやデザートなど付け合わせはしっかりと作る。彼は相変わらず文句も言わずに何でも食べる男なので、メニューについてとやかく言わない。そういう意味でも、父親としてはよい見本になるだろうな、と今夜の一夜はそんな目で青年を見てします。

「何？」

食いつぶりのよい男を、また不穏な視線で見つめていると、案の定、今度は何だよとの予測不能な変わった女を源二は見返してき

た。腹が減つてゐるのか、そのがつがつと食べる手が止まる」とはないが。

「んー、今日千菜ん家に行つてきたー」

「ふーん」

「源一の半分ほどの速度で、一夜はカレーをゆっくりと口にする。

「……赤ちゃん、すうい、可愛かつた。ふにゃふにゃで、小さかつた」

「ふーん」と彼はまた頷いた。昔から無口な彼は一夜の話に相槌を打つだけのことが多い。

一夜は少々彼の反応が気になつたが、源一はせして気に留めなかつたようだ。今日一日の報告として、聞き流しているらしい。

「千菜に似てたけど、室長にも似てた」

それはさておき、今日会つた赤ん坊の父親である冷静で、少し厳しいところもあつた元上司。その姿を思い出すと、千菜の話ではあの厳しい北條も子供は優しくあやすと言つていたので、想像のつかない一夜は思わず笑つてしまつた。

しかし源一はその笑顔を違つ意味でとつた。もう昔の話であるが、千菜の夫であるその男は過去一夜に言い寄つていたので、源一にとつてはいけ好かない相手である。たとえ今は何の関係もなくともそのような瞳をされ、源一は「あつそ」と更につづけんどんな相槌を打つと、カレーをかき込み次の一杯を盛るために立つ。

そんな源一の心境も知らない一夜は、彼のこうした態度は既にいぢいち気にしていないので、その背中を見ながら別のことを考えていた。

「うーうー」とはあまり間を置かないで、何でもないように聞くに限る。一夜はそう思い口を開いてみた。

「前も聞いたけど……」

彼女のカレー皿の残りはあと少しなのに、スプーンを動かす手が止まる。三杯目のカレーをつた源一が振り向いた。独特の香ばし

い匂いを間に見つめ合つてしまつ。

「なんでも、ない……」

やはり学生に言つことではないな。一夜はそう思い、俯いてしまつた。

その一時間後。

いつものとおり食事の片付けも入浴も終わり、一人は居間でくつろいでいた。源一もレポートに追われない限り、高校生の頃のように部屋に籠ることもなく居間で新聞を読んだりなどしている。アルバイトや約束もなければ、彼とて暇らしい。

小さな缶で風呂上りのビールを煽り、つまらないバラエティ番組を一夜は見るともなしに見ている。特に会話は無いが、居心地の良い手持ち無沙汰な時間が過ぎていく。これだけでもきっと、幸せなことなのだろう。

しかし新聞を捲りながら、源一の方が今度は何でもないことのよう口にしてきた。

「……さつきの、前も聞いたことってさあ、」

先程言おうとしていた言葉を繰り返され、一夜の肩がぴくりと動く。驚いて相手の方を見ると、源一は新聞から顔を上げて一夜に視線を向けていた。彼はふつと顔を逸らし、それを置みながら言葉を発する。

「もしかして前にも聞いた、子供欲しいかどうかって、やつ?」

一年半も前にまだ高校生だった彼に聞いたことを、よくまだ覚えているな、と一夜は眼を丸くして彼を見た。そして言いたいことを悟られていたことにも驚き、更には改めて彼に言わると恥ずかしくなり、一夜は言葉を失つた。

確かに妙齢の彼女が同い年で母になつた千葉に会いに行き、更にはその赤ん坊の話をすれば、余程鈍感でない限りやはりその話だと

思つだらう。しかし普通、男ならそんなことを言われて引きそうなところを、眼を見てすばりと核心に触れてくる源一に一夜はこの話をやめた方がよいのか、続けてもよいのかと迷つ。

否定をしない一夜の様子から、源一も団星だと分かつたらしく新聞をテーブルの上に投げ捨てる、ソファの下から彼女を真つ直ぐに見上げた。

「欲しく、なつた？」

一夜の顔が思わず赤くなるような直接的な言葉を吐く彼は、ふて腐れたような顔をしているが、『冗談を言つていいわけでも、責めているわけでもないよ』うだつた。

嫌がつていても聞こえる言葉だが、それならば一夜の眼を見てこんな質問はできやしないだらう。その視線に彼は自分のことを心配しているのだということが彼女には理解できた。

『欲しこつて言つたら、どうするの？』

思わず少しの意地悪で、一夜はそんな質問をしそうになつたが、実際今すぐにはそうするつもりはなかつたので言わなかつた。代わりに静かに微笑む。

「源一は、優しいね」

この彼ならばもし今もなお心に傷が残つていたとしても、一夜が子供を産みたいと言えば、無理にでも親にならうとするのだろうか。もしもそうなならば、この青年が可哀想で愛しくてたまらなくなる。そう仮定するだけで、一夜の胸が苦しく締め付けられてくる。しかし一夜の感傷に対し、源一はその笑顔にむつとしたような顔をした。

「優しいとかそういう問題じやねえよ。話、逸らすな」

真面目な声に、引き戻される。一夜は笑顔を消すと、眼を瞬かせて源一を見下ろした。彼の言葉は続く。

「つうか、そういうつもりでそういう関係になつたんだろ。お前の年齢も、あるだろうし……」

一夜だけでなく、青年もまたこんなことを口にするのは恥ずかし

いらっしゃい。複雑な表情をすると、いつも癖で頭を掻いた。

嗚呼、やっぱり自分の年齢のことを気にしてくれているんだ、と一夜は悟った。

その優しさが彼の枷になつていて、また哀しいような気持ちにもなつたが、それを口にすれば、更に婚約関係を結んだ意味が無いと源一は怒つてくれるだろう。

彼はもう、大人なのだ。一夜に庇護された、あの日の十一歳の少年ではない。未成年でもない。全ては、源一なりに自身の未来を考えて出してきた結論なのだ。一夜の所為などには決してしない、強い意思を持つ男。それは分かつており、どうして、と思いつつも、一夜を想う「彼」を信じてやりたいとも思つていて。

それでも己が二十歳の自由に生きていた頃を思い出せば、一夜は源一に負い目のようなものも感じてしまう。愛しいような申し訳ないような気持ちで、一夜は膝を抱え直すと笑つた。

「……ありがとうございます。ちょっと、いいなあと思つたけど、でも今はいらないよ。源一は学生だし、子供てるにはお金もいることだから、私も仕事やめられない。だから今すぐに結論出したいとかじややないけど……でも私だけじゃなくて、源一がどうしたいかも、聞きたいなあ。その方が嬉しいし、それこそ子供もきっと、幸せになれるんじゃないかな」

一夜は彼の「親」というものに対するトラウマを刺激しないよう、言葉を探しながらゆっくりと話した。

いつかは聞かなければいけないこと。高校生の彼には聞けなかつたことでも、成人を迎えた彼となれば、少しずつ確かめていけるかもしれない。

重いと思われることは、いつも恐い。だが最初に想いを通わせた時に、彼に逃げるな、俺を信じると叱咤された。だから一夜も彼に恥じないよう、彼を信じる勇気を持たなくてはならないのだ。で

なければ、今まで何年も想いを重ねてきた意味がない。一夜は恐怖を隠して、静かに優しく尋ねた。

今まで徹底的に、一夜の意思と気持ちを最優先にしてきた源一。その言葉に、今度は彼が眼を瞬かせてきょとんと一夜を見る羽目にになった。

その7 一人の速度。（前編）

子供の頃、焼き付けられた残像。源一にとつて、それはもはや彼の一部分となつてしまつてゐる。それはそれくらい強烈で、時が経てば経つほど美化されてしまつた。

彼は今でもたまに、それを思い出す。こんな風に一夜に微笑まれた時になど。

一夜に「将来子供が欲しいのか、源一の意見が聞きたい」と言われ、源一はいつも困った時の癖で頭を搔いた。

今、彼女の笑顔が十二の頃、初めて会つた時のあの微笑みと重なる。それを見ると未だ遠く手が届かないような、それを心から笑わせてみたいと思うような、逆に滅茶苦茶に汚したいような不思議な気分にさせられる。それ以外に救いの手を差し伸べてくれる人間が居なかつたので、初対面であつても彼女は彼の全てとなつてしまつた。

しかし一夜は彼と同じく「ひとりぼっち」であつた。よつて「保護者」ではあるものの、出会つた時からある意味二人は対等な関係だつたのだ。だからこそ源一は、彼女も同じように自分でなれば駄目だと、自分に焦がれて欲しいと思うようになつていく。

それが恋愛感情かそうでないか、最早分からない。ただ成長と共に彼女に性的欲求を抱き、他の男と結婚することも許せなかつたので、この独占欲はそれに近いものだらうと思つていた。だから今でも、あの日のように微笑まれると源一はおかしな気持ちになる。

泣きたいような、征服したいような。

いざれにせよ心がざわめき、不安と衝動が起つる。

今はその念願が叶い彼女と心身共に結ばれ、彼女より大きくなつ

た身体で無我夢中に抱いている。その瞬間、一夜は源一を頼るしかなく、彼女は彼の思い通りになるからだ。

それなのに、一年経つてもまだ焦りを覚える。何かが足りないような不安がある。何故なら、まだ一夜がこんな風に笑うから。

自分は彼女の孤独を埋められているのだろうか。自分は彼女に本当に信頼しているのか。まだ立場は学生であり、年の差は永遠に埋まらない。

そんな不安があるものの、逃げ続けていた一夜がこんな問い合わせをしてきたことは、源一にとつて意外であった。彼女もあの日のままでなく、少しは強く変われたのだろうか。一夜の質問から、源一はそもそも思えた。そして自分も同じだろうか、と。

そう思い感慨深げな眼で一夜を見ている源一だが、とりあえず今の問題はそこではなく、年上の彼女に聞かれてしまったことである。妊娠、出産は女性にとって男には想像もつかないような、纖細な問題だ。生半可なことや不用意なことは言いたくない。そう思った彼は即答せずに押し黙つた。

一方、一夜は穏やかに源一を見下ろしている。その待つていてくれるような姿勢には、ほっとした。それは悔しいがやはり年上の彼女に甘えられる心地良さだった。

それでも問われたことについては、考えたことがないわけでもない。

源一が社会に出るまでもまだ時間がかかる。三十路を迎える一夜が、その間に子供を産みたいと思つたらどうするのか。それは不安になるのは当然であり、源一も仕方ないと思つていた。

それでも彼が高校生の時から、しっかりと大学を出て就職しようと一夜は励ましてくれていた。その点は甘えていたかもしれないが、時間をかけてまとまつた収入が得られる場所へと就職し、彼女と未来の家族を守りたいという目標も源一は持つている。

だから少なくとも、「家庭」を守るためにあと二年は結婚出来

ない。つまりは子供も作れない筈なのだ。

しかし子供を産むのは女性である一夜だ。彼女の気持ちや事情も考えてやりたい。源一は再び頭を搔くと、確認の意味で問いかけた。

「もう一度、聞くけど……今、子供が欲しいとかそういう意味じゃねえんだよな」

その答えに一夜はしっかりと頷いた。それには少し安堵する。やはり彼女には可哀想だが、先々のことを考えると今はその時期ではないと考えるのだ。つまり逆を返せば、

「だったら悪いけど、もう少し待つてもらえるんなら、俺が就職してから……にしょーぜ。特別なことしてねえけど、そのためにはいついう関係になつたんだから、そうするつもりは、俺もあるし」
その時期が来た時に、子供を作ればいいだけのこと。それは彼の中でこの関係を選んだ時に決断できていたことで、夢に見たことでもあつた。

はつきつと子供や婚約という単語を言つのが恥ずかしく、源一はぶすりとねう言つと、胡坐をかいだ膝の上に頬杖をつく。

すると尋ねたのは一夜の方なのに、また驚いたような顔をしているではないか。なんなんだ、子供欲しかつたんじゃねえのかよと源一も困ってしまう。

「なんだよ、悪いか

思わず喧嘩を売るような子供っぽい口調で聞き返す。

一夜はぶんぶんと首を大きく振つた。まだ湿つたままの黒い髪が揺れる。

「それで、本当に、いいの……？」

おずおず、と言つたように一夜はまだなお尋ねてきた。訳が分からんと思つた源一は少々乱暴に吐き捨てる。

「つて、何度も言つけど、だから婚約したんだろーが！ そりや結婚して子供作らねえ夫婦もいるだろーが、俺らの場合あのままでよ

かつたのを、わざわざやつしたわけなんだから、つまりは『そういうこと』、だろ？が！」

「の抜けた女にはそこまで言つてやらねば分からぬのかと、源一は恥ずかしいことを言わせられて腹が立つ。それでもこうして赤裸々に口にするのは、彼女を安心させてやるためにだつた。彼もまたそうできる勇気や優しさを、少年時代と比べ持つよにはなつた。

それを聞いた一夜は頬に手を当てた。複雑そつな口を歪めた表情をしていたが、色白の顔がほんのり赤く染まる。

「…………うん」

そして、やがて恥ずかしそうに頷いた。どうやら納得したらしく。そして表情からするに、望んでいた割には源一の答えが意外だつたようだ。

「なんだよ、信じてなかつたのかよ、俺のこと」「

源一は一夜から顔を逸らした。少し拗ねたようなその言い方に、彼女は慌ててソファの上から身を乗り出すと、座つたまま彼のTシャツを掴んだ。

「違う

」

一夜は彼が何処かへ消えてしまわないようこと、思わず手を伸ばす。そんな源一の表情が、彼女にも初めて出会つた時の彼を思い出させるため、一夜もまた秘めていた思いを口にした。

「違う……。そう言ってくれて、私も嬉しい。でも源一は、その、小さい頃『両親亡くして哀しい想いしているから、だから……、子供作るのも恐いんじゃないのかなって……。それに私も、私なんかがお母さんになれるのかつて本当はすごく恐いし、源一だつて私のこと、大丈夫かって心配なんじゃないのかなって思つたから」

源一は一夜を見上げた。二人の眼がまた合つ。

一夜の気持ちの全てではないにしろ、源一は彼女が心配していることを概ね理解した。心中の噂のある両親の件で、源一が親子関係

というものに嫌悪感を持っているのではないかと、彼女は昔から心配しているのだろう。

そして彼女自身も不安なのだろう。あの父親とのやりとりを見て、一夜も親というものに対し抵抗があるのは源一も知っている。それでも二人共両親の件では寂しい思いをしたからこそ、相手を求める、新しい家族を築きたいと願ったのではないか。

「大丈夫だろ。お互いもう、大人なんだから。あのまま誰にも救われなかつたら、どうなつたかわからんねえけど、上手いことそういう相手に出会えたんだし」

源一はそう言つと、少し笑つた。

その8 一人の速度。（後編）

今度は一夜が頭を搔く番であった。源一のTシャツを引っ張つたまま、反対の手で頭を搔く。それでも彼のTシャツは離さない。離してしまったら彼が消えてしまいそうな気がしたから。砂のようにな手から零れないよう、祈るように。

己の問いに対し、予想以上の答えが返ってきたことに一夜は驚いていた。

心配していたことは見当違いではなかつたものの、源一はどうにふつきれていくよつであつた。男性だからか一夜とは違ひ物事を現実的に考え、振り返つても仕方のないことはもう考えないのだろう。言われてみれば、確かに彼は昔からそういうところがあつた。それに嘘もつかない。滅多に笑わない彼の笑顔は、この言葉が眞実であることを示している。

「じゃあ源一は、それで、いいんだよね……？」

一夜はTシャツを更に引っ張ると、今度は近い距離で源一を見上げる。

「何度も聞くな」

彼はもう元の仮面に戻つていた。しかしそこで突つぱねることなく、もう一度一夜を見るところも言つた。

「不安なのは俺も同じだ。でもそればつか言つてたら、いつまでも進めねえだろ」

「……うん」

一夜は再び頷いた。きっと他の男では駄目だらう。彼女の場合、源一の一夜の速度に合わせた、彼にとつても等身大の答えが、心地好いと感じているのだ。

出会つた八年前は想像もつかなかつたが、源一とこうした関係を

築け、彼が誰よりも自分を信頼してくれることが一夜には嬉しかった。

不安もある。だがそれを見てくれる。それでも前に進もうとしている。やはり彼に話してよかつたな、と彼女は思った。しかし、「でも……」

まだ何かを言おうとする一夜に、源一は視線を送る。

それでも肉体的な不安は残る。だがこの男の子供を産みたければ、その順序で家庭を作るのが確かにベストなのだ。

「もう、その選択肢しかないんだけど、それって結局、私たちの都合じゃない。子供を犠牲にしてはいないよねえ」

源一はまた眼を瞬かせたが、今度は直ぐに彼の考えを口にした。

「その年齢で産んでる女だつていくらでもいるんだし、よかつたかどうかなんて結果論でしかわからんねえだろ。でも現実問題、金の掛かることだから、年齢気にして責任持つならもう入学しちまつた以上、普通に卒業した方がいいんだし。　お前が年行つてしんどくなるのは悪いと思う。でも絶対に大丈夫なんて保障は何歳で産んでもねえだろ?」、このまま考えたとおりにやつてくるのが、一番俺たちが心配しているようにならないと思つ

「子供に不自由をかけないよう、自分たちのよつて泣かせないようだ。

親の愛情を欲していた一人が願うのは、ただそれだけなのだ。

「とりあえず、子供泣かせたくないなら、俺らが後悔しねえことだろ。じつちが自信もつてないと、子供のほうが不安になるんじゃねえの?」

「

一夜はまじまじと源一を見た。一体誰が、彼をこんな風に育てたのだろうか。それとも彼の元々持つている魂の輝きだろうか。児童館に勤めて長い一夜でさえも、ここまでのこととは言えないのに。

そろそろTシャツを握っていた手が汗ばんできたので、彼と心を

通わせた安心感からそれを離すと一夜は感嘆のため息をついて言った。

「源一は、すゞいねえ……」

その言葉に源一は表情を変えずにいたが、彼女に子供扱いされたくない彼としては、そう言われて少々嬉しいようであった。

一夜も茶化したような言い方をしたもの、己を包み込むような彼の答えに、半袖Tシャツから伸びる逞しい腕や締まつた身体に、珍しく衝動的に縋りつきたい気分になつていた。

もうこういつた関係なのだから遠慮せずにそうすればよいのだが、逆に生活共同体として毎日一緒に居るからこそ「恋人」時代と違い、そうしづらいと思っていた。日常の淡々とした生活の様子とのギャップが、妙に照れ臭いのだ。

ちなみに、昨日は「して」いないが。

源一は一夜を見下ろした。その視線に思わず彼女は俯いた。

「どうする

沈黙の後、髪を掬われてあからさまに尋ねられる。一夜は首を竦めた。確認されてする時と、何も言われず行動に出られる時があるが、今日は前者らしい。そして彼は一夜の長い髪が好きだと言ったことがある。だからこうして撫でるらしい。

「確かに、今つて『大丈夫』な時なんだよな」

俯いている一夜はぶつぶつと言つ源一の表情は見えないが、彼の言葉の意味を悟り彼女は思わず眼を見開く。

「別に、将来そういうつもりなら」

ついさっきまで格好いいこと言つてたのに、何言つちゃつてんの！？と彼の言いたいことを更に察した一夜はこの男を張り倒したいような気分になつた。それでも下手に動けば、手足をとられるような気がして動けない。さらりと彼の手から髪が落ちる。

「……って、冗談だけど」

その言葉にほーっと身体中の力が抜けた。

確かに子供ができては困る。しかし源一の言つてゐることは、恥ずかしながら一夜も気になることだった。

「大丈夫な日なら」……それは、避妊具を使わないということだろうか。確かにそんな風に結ばれたら、どんな気持ちになるのだろうか。どんな感覚が生まれるのだろうか。そんな好奇心を、この一夜でも持つてしまつ。そんな誘惑には負けたくないと思うものの。

一夜の細い肩に手が掛かつた。「きた！」と例のシグナルを感じ取つた一夜は、慌てて口を開く。

「うう、ごめん！ 実は今夜 生理、きた」

実は密かに夕方頃から兆候を感じてはいたが、それが訪れたのはつい先ほど、風呂上りのこと。

「……あつそ」

それを聞きつづけんどんにそつと言つた源一だが、どこかがつかりしたような響きに聞こえるのは、一夜の氣のせいではないかもしない。なので思わず彼が可哀想になり、今夜の会話からなんとなく氣分が高まつた彼女は思わず口走る。

「じゃあ、て、手とか……？」

また彼女らしからぬことを言つ一夜を、源一は驚いて見た。その表情に一夜の方が照れてしまつ。

肉体的には抵抗があつても、精神的には珍しくそういう気分だからだ。しかし源一は彼女が自分に同情してそう言つただけだらうと思つたらしい。今度は彼が首を竦めて苦笑した。

「なんか昔、思い出すな」

一夜の顔が再び赤くなる。確かに昔は「それ」だけで終わつていたこともあつた。

それは源一の年齢から繋がることを恐れ、それでも我慢できずに互いの身体や性器に触れていた、彼がまだ高校生の頃のこと。青臭

く乳繰り合っていたことを罪悪感と共に思い出してしまう、一夜はまた恥ずかしくなる。

しかし相手を怒る気になれないのは、やはりわだかまっていたことが解けたからと、その頃のときめきを忘れないどころか今はその頃以上に互いを理解し、想つて いるからであった。

一夜はおずおずと源一を見上げた。

源一の顔は既に近くにあり、息が近づいてきた。

その顔が重なった。

その後、二人がどうしたかは、一人のみぞ知る……。

その9 疑惑！？

季節は過ぎて、春から夏へ。まだ激しい暑さではないものの、七月に入れば梅雨も終わりに近づき、強い日差しが降り注ぐようになる。

ビールの美味しいこの季節。まだ妊娠の予定のない一夜は話があれば飲みにも出かけ、流石にその場でへべれけにはなることはなくなってきたものの、逆に酒が弱くなり一日酔いになることが増えた気がしていた。それでも同居人が成人し車まで持っているというのは、そうした時には非常に心強い。

しかしその日の夜はいつもと違っていた。今夜は珍しく源一が大学の仲間との飲み会だと言つて出かけ、一夜が留守番をしていたのだ。

アルバイト三昧でサークル活動はしていない彼だが、スポーツの同好会のようなものには所属して相変わらず身体は動かしているらしい。そして体育会系だからか無愛想な割には付き合いは悪くなく、集まりにもよく顔を出しているようだった。

一夜はまだ、二十歳になつて数ヶ月の彼と飲みに出かけたことはないが、源一も決して酒が弱くはないように見える。一夜のように飲んで陽気になるわけでもなく、羽目を外すこともない。アルコールを口にして帰つてきてもいつもと変わらない様子の源一は、逆に飲んでも飲まなくても関係ないといった考え方か、勧められれば飲んでしまう一夜と違い、その日の気分やアルバイトの都合によつて飲む飲まないを決めるらしい。

だが、今夜は彼の車が駐車場にある。どうやら今日は酒類を飲むつもりで出かけたようだ。

一夜は簡単に作つた一人分のパスタをフォークに巻きながら、同居人の帰りを待つていた。そうは言つても一夜の学生時代を思い出

してもこうした日に大学生が早く帰つてくるとは思えない。さりとて彼が彼女のように、乱れて帰つてくることもないだろう。

よつて一夜は特に気に留めず、いつものように彼の帰りを待つていた。が、その日に限つて何か様子が違つた。

一先に風呂に入ると洗濯も済ませ、ビールを煽り、インターネットで通信販売のサイトを見て夏物を衝動買いしたりなどしていた一夜だが、いつの間にか時間は深夜零時となつた。

未だに彼は帰つてこない。そして連絡も一切ない。

「……」

一夜は少々不安になる。確かに今までにも源一が午前様に帰つてきたことは、アルバイトでも付き合いでも何回かあったことだ。彼女自身も飲み会の時には帰る時以外、連絡などしない。

しかし源一の保護者として、一夜も彼が高校生の頃までは午前零時までに帰つてきていた。それが習慣となり、また次の日仕事である時が多くつたりするので、今でも午前様となるようなことはほとんどない。

それを見てきたからか、源一も朝まで飲むといつことはほとんどなかつた。それに午前様になるほど遅くなる時は、彼女に鍵をかけて寝ろとか明日の日覚ましはセットしたかとか、口づるさいメールが届くほどだつた。

しかし今夜に限つて、この時間まで何の連絡もない。放つておけばよいのだが、一夜はふと心配になる。

もしかして、事故？ それとも……。

彼がトラブルや犯罪などに巻き込まれていなければそれでよい。確認しようかと、彼女は携帯電話を取り上げたが、それは出来ずその手を力なくソファに下ろした。

何でもなかつた場合、そんなことをすれば鬱陶しいだけであろう。彼はもう未成年ではないのだし。こんな風に心配してしまるのはやはり、「元保護者」だからかもしない。子供扱いをしているつも

りはないが、心配は心配だ。また一夜の場合、ある日急に母親が倒れてそのまま亡くなってしまったこともあります、様々なパターンを考えて不安に怯えてしまつのであった。

そういうたふろしいことでなければ、それでいい。だが、事故などでなければ、いつも源一なら連絡のひとつへりこよこすのではないか？

一夜はまた違和感を覚えた。事故やトラブル以外で、源一が連絡できない状況にあるということは……と女の勘が働く。

まさか！？ いや、まさか。

心に過ぎる、疑念の影。俺を信じじろと何度も叱ってくれる彼のことは信じたいものの、年の差にはいつだつて不安がある。一夜にはその経験はないものの、男女が入り混じつて飲んでいれば酔つた若者同士、何があるかなど分からぬ。

まさか、ね……。

源一に限つてそれはないだらう、と一夜は自分の失礼な考えを否定する。それでも信じじていても「そういうふたこと」が魔が差して起ころなどといふことは、世の中にいくらでも例がある。毎日同じ女と過ごし、同じ女を抱いていて、若い男が飽きないわけはないのではないか？

一夜の不安が徐々に膨らんできた。そして最初は何も想像などしていなかつたのに、一度「もしかしたら」と思つと、頭の中ではぽんつと源一が他の若い女子大生と、ベッドでいかがわしいことをしている図まで浮かんでしまい……それはいやだああああ！と一夜は手元のクッショוןを殴り始めた。

……やっぱり、電話しようかな……。

鬱陶しがられようとも、一応婚約者だ。少しくらい迷惑なことをしても、この関係がいきなり悪化するとは思えない。もちろん法律的な制約は結んでいないので、婚約解消など口で簡単にできる。し

かし先日もわだかまりが解けたように、少しずつ関係を深めてはいるので、つまらないことでのこの関係が終わることはないと思つてゐると思つた。

そこで一夜は、思い切つて彼に電話をしてみた。恋人なのに、一週間前にもセックスをしている仲なのに、妙に緊張する。

「ちょっと……出でよ……」

しかし源一は電話に出なかつた。冷たい機械音が、留守番電話サービスに接続することを告げる。

メールにしなかつたのは、やはり真実を確認したからだ。メールではいくらでも誤魔化しがちく。といつて、一夜はもう一度電話を掛ける勇氣も出なかつた。

これだから年上は、と鬱陶しく思われることも嫌であつたし

これは先日の家族計画の話で年上だからと氣を遣われたこともあるからだが、それに彼を疑つてゐるようで申し訳なかつたし、何より万に一つの一つでも「そう」であった場合、そんな彼とは話したくないと思つたからである。

「……つ、バカ源一……！」

一夜はひとつ悪態をつくり、明日も仕事があるので今日はもう不貞寝をすることにした。

こんなにイライラしたり不安になつたりするのは、最近は互いの仕事やアルバイトが忙しく珍しくセックスしないまま一週間以上が経過しようとしているからかもしかなかつた。乱れた関係ではないのかと不安に思ふくせに、その行為が定期的にあれば妙に安心してしまうといつ一夜自身にもよく分からぬ感情を抱いていたのであつた。

・・・・・

次の日の朝、一夜は携帯電話の音で眼を覚ました。アラーム……かと思つたがそれは違ひ、職場の後輩の和田からの、本日の仕事に

ついての確認メールであった。

それをぼうつと夢見心地で眺めていた一夜は、携帯電話に表示されている時間を見て、はつと目が覚めた。

「うそ！？」

時刻は七時五十分。いつもならば朝食を食べ終わり化粧などをしている時間だ。一夜は慌てて飛び起きる。といつことは今日は毎日毎日繰り返されてきた、源一からの朝の怒号がなかつたといつことだ。

あいつ、帰つてきんの！？

一応一夜も大人であるから、源一に頬らはずとも目覚まし時計のアラームなどをセットしているが、それらも無視して今まで寝ていたらしい。本当に朝の弱い自分を呪いながら、一夜は急いで出勤用のTシャツに袖を通すと、慌てて部屋のドアを開けた。そして彼女がドアを開いたのと、隣の部屋のドアが開いたのはほぼ同時であった。

「悪い、寝過ぎした」

隣の部屋の主は、一夜の姿を確認すると第一声に謝った。どうやら彼女の携帯電話の音か、ばたばたと騒ぐその音で起きたのだろう。しまつた、と言つた悔しそうな顔で頭を搔いているのは、昨夜剃らなかつたのだろう若干の無精髭を生やした姿の源一だった。

「一日酔い！？」

珍しい、と思いながら一夜はばたばたと洗面所に飛び込む。朝食と弁当はもう諦めようと思つた。

「違えよ」

どちらかと言えば完璧主義の彼は、寝坊をして一夜の朝の準備が出来なかつた自分の失態を悔しがつていてるようだつた。不機嫌そうな声が洗面所まで届く。

髪を梳かし、急いで化粧をした一夜は洗面所から出でると、同様にもう弁当を作つてやることを諦め、台所でTシャツにジャージ姿のまま自分のコーヒーを淹れ始めた源一の前に立つ。一夜もせめ

て牛乳の一杯でも飲んでいきたいところだ。

思わず彼と向かい合い、近い距離でその匂いを嗅いでしまう。シヤワーやくらいは浴びたのか、酒臭さが気になることはない。彼自身も髭が生えていたり、濡れた髪のまま寝たのが珍しく寝癖などもついてはいたが、一日酔いの時の一夜のようなどんよりとした顔はしていなかつた。

寝不足の疲れは見られるが、いつもの彼の表情だった。あまりにも深酒をしたわけではないらしいが、寝過ぎてほど遅く帰ってきたのは事実のようだ。

「何時に帰ってきたわけ……」

「一夜は源一を上目遣いで睨んだ。

「ごめん。一度、電話したけど」

彼は唇を噛んで一夜を見下ろす。その眼が逸らされないことに彼女も内心ほっとし、言われてみれば和田からのメールを確認した時に、「着信あり」の文字を目にしたよつなことを思い出す。その時は確認する余裕もなかつたが。

一夜が眠つたのは零時を過ぎていたので、彼が電話をしてきたのは更にその後、彼女が眠りについた後の今朝未明のことだろう。

彼が無事ならそれでよい。時間のない今、これ以上追及することはない。

一夜はそう思い、水を一口飲んで急いで勤め先へと行こうとした……が、そこで再び女の勘が働き、源一を見上げた。

女らしくなく朴訥としたところがあり面倒くさがりの一夜は、恋仲になる前はこんな風に口うるさく源一の行動を言わなかつたものだが、やはり彼に恋をして不安が募つたり、甘えが出たりしているのだろう。思わずこんなことを直感で口走つた。

「……まさか、女の子と、一緒にいたんじゃないよね……」

そして、源一は嘘のつけない実直な男であった。

なんとそう言われた源一は、「ぎくり」と言つた様子で閉口し、目つきの悪い眼を珍しく丸くして瞬かせると、いけないことを知られてしまつたような顔で一夜を見るではないか。

眞面目な彼のことだ。こんなことを疑われ違つていれば「違えよ！」と怒鳴り散らすほど機嫌が悪くなる筈だった。それがこんな顔をするところ「う」とは、

「そう、なんだ……」

今度は一夜の表情が明らかに不機嫌になる。そんな顔はここ最近、いやおそらく三年前の、源一の元彼女が現れた時以来、彼が見たことがないもので……。

「つておい、待てよ！ 確かにいたけど、お前が考えてるようなこと……」

彼は彼女の誤解に気付き、焦つて何かを言おうとしたのだが、

「源一の、ばか——つっ——！」

嫉妬心や昨日からの不安、そして怒りのままに、一夜は手元にあつた濡れ雑巾を思い切り源一の顔面に投げつけた。そして彼の顔など見もせず、仕事に間に合わないといつてもあり、そのまま足音荒く家を飛び出していくのであった……。

その10 水面の心（前編）

そして一夜は浮かない気持ちで仕事へと向かった。勤務先の児童館には午前中も小さな子供を連れた母親などがやつてくるので、来館者には笑顔で接しなくてはいけなかつたが、そちらはその日彼女の主担当ではなかつたため、なるべく奥でデスクワークの仕事をしていた。

それくらい朝の出来事に笑顔も引きつてしまいそうであつたのだ。急ぎでも年度末でもないのに倉庫に籠り、書類の整理などをしながら一夜は悶々と考える。

今朝、咄嗟に家を飛び出してきたが、源一の焦った顔が眼に焼きついている。

それでも本当に不貞行為などしていれば、言い訳などせずに潔く認めて謝る男だと彼女は思つており、何よりそんなことをする男じゃないと信じたいところだ。

源一はあの時、何か理由を話そうとしていた。彼の家族 恋人として、それは聞いてやるべきなのだろう。もしかしたら、心配するようなことではないかもしれないのだし。

何より「そう」であつたら困るし苦し過ぎる。彼が他の女性と…などという最悪の事態を考えると、鼻の奥がつんと痛くなつてくるほどだ。

それでも昨夜、あの真面目な源一が一夜以外の若い女性と居たのは事実なのだ。確かに一夜も仲間で飲みに出かけた時に、気が付けば男性と一人きりになつてしまつこともある。あやしい雰囲気にならぬよう無意識のうちに予防線は張つているが。

昨夜の源一もそういうやましいことのない状況だつたかもしれない。しかし信じようとしているのに、「自分よりも若くてぴちぴちした女の子と」と思つだけで、一夜は悔しいような寂しいような思

いに囚われるのであつた。

それは年下の青年と恋仲になる時から予想された心配であり、覚悟もしていたのに。

身体の関係になる前に、源一から告白されて恋人ごっこを始めたのが、三年前。その時、高校一年生だった彼は本当は一夜が好きだからと元彼女と別れ（彼曰く、身体の関係はなかつたらしい）、一夜を選んだ。

彼の気持ちを知る前、その少女に大人気なく嫉妬していたことを思い出す。一夜もそれをきっかけに自分の気持ちに気付いたところもあるのだ。

その時と同じような、嫉妬。

一人の学生時代は、決して重なることのない時間だ。一夜は源一とそれを絶対に共有することがない。

彼と同居する、婚約する」という誰にも侵せない関係を独占しているのに、そんなつまらないことに嫉妬をしてしまつ己の欲深さが情けなくなつてくる。

寧ろ、昔よりも独占欲が酷くなつてゐるかもしれない。一夜はそのことにぞつとする。婚約をして関係が確約されてきた安心感から、そうなつてしまつたのだろうか。それで彼の心まで独占したわけでも、してよいわけでもないのに。婚姻関係が成立した後でも、一夜の両親のように壊れることもあるのに。

だが婚約と言う約束をした分、源一に裏切られればショックが大きいのかもしれない。何か言い訳をしようとしていた彼を信じ、そうでないことを祈るばかりなのだが、不安にさせられた事実には変わらず、もやもやしたものは残つてしまいそうであつた。

十も年上なのだから、堂々として彼を受け入れてあげるべきなのに。

それこそこんな気持ちを源一に知られれば、鬱陶しく思われるの

ではないだろうか。源一とこんな関係になるまでは、一夜もあえて血の繋がりも薄い彼のことを、遠くから見守る姿勢で接してきた。そんな寛容な年上の己を好きになってくれたかも知れないのに、こんな感情になつてはいけない そう思つと、このもやもやも笑つて我慢しなくてはならないのではないかと思い直す。それでも、気持ちはすぐれない。だが源一の前でも仕事中も、落ち込んでいてはいけないということはわかる。

いつの間にか止まつていた手を一夜は動かした。最悪の事を考えないよう、仕事に忙殺されるほうが気が紛れると想い、やけくその様に重い「ヨミ」を次々に運び出す。

その時倉庫の電話が鳴り、『鎌田さん、外線です』と和田から一夜宛の電話が回ってきた。その電話で頭を仕事モードに切り替えることができ、彼女も徐々に冷静になつてくる。

そしてそこからは頬を一発ぱちんと叩くと、終業まで猛然と仕事に励んだのであった。

・・・・・

仕事に熱中し子供であろうと誰か人と話をすれば、嫌な気持ちもその時は頭から消えていた。それでもふとした瞬間に思い出してしまつのだが。

そして、午後六時。終業時刻となつた。

源一からは昼頃、いつものように帰宅時間についてのメールがあつた。朝のことを謝る言葉と、夜はアルバイトだが十時には必ず帰るといういつもより丁寧な連絡だつた。

彼も一夜を怒らせたことを心配しているのだろうか。その細やかな態度に心変わりがあつたとは思いたくないが、逆に後ろめたいことでもあるのかと穿つた見方もしてしまつ。

そつは言つても家には帰らなくてはいけない。 だが、帰りた

くない。

どういう顔をして何を話せばいいのか分からぬ。本当は今は、会いたくない。

仕事中はよかつたが帰宅が近づくにつれて、一夜はまたそんな子供染みたことを思い始めていた。

じついう時、同棲している婚約者、という関係は厄介なものである。親子など血が繋がっている間ならばそれこそ恋人や友人に頼ればよく、逆に別々に住んでいる恋人という形であれば、しばらく会わなければよい。

そう、今の関係では一夜たちは帰る家も住む場所も同じ、ひとつしかないのだ。しかもホテルに泊まれるだけの金銭的余裕はなく、そこまでのことではないとも思われ、と言つていい年こいて他人の家に転がり込むというのも常識としてどうかと思われる。

しかし彼も昨夜は外泊みたいなものだったのだが、しかも異性と一緒にいたのだしそう思つと、やはり一夜の怒りがぶり返してきた。

「元々源一はセックスが好きなのか、週に何度も迫られるとセクハラえろ親父などと照れ隠しに悪態をついていた一夜だが、やっぱり天性のエロリストだったのかと、意味不明な単語で源一を貶めていく。

「なんか今日、変ですねー」

残業もせず、帰ることもしないで机の上で頭を抱えている一夜の様子に、向かいの席で残業中の和田が思わず笑つて突っ込みを入れる。一夜は彼をちらりと見た。

その外見からも和田は女に手馴れているタイプというイメージがある。先日胸元を覗かれたのも、彼ならば有り得ることだと納得もいく。

出たな、タラシ大明神。

源一の一件から男性嫌いがここにきてまた頭をもたげ、和田に対してすら心の内で悪態をつく彼女だが、彼は肩を竦めて会話を��けてくる。

「彼氏と喧嘩でもしたんですか？」

「やっぱり鋭いぞ！ 大明神！」

一夜はかつと眼を見開き相手をまじまじと見た。電卓を叩く手を止め書類に目を落とし少し書き込んだ後、和田は再び彼女を上目遣いでちらりと見る。ああ当たりだな、と彼も思つたらしく、軽く微笑むとまた書類に視線を戻す。

源一が一夜の保護下にあつたこともあり、彼女は婚約者がいることや同棲している男がいることは誰にも話していない。

とりあえず扶養申請の際には以前から源一の名前が書き込まれている（これも成人した彼は本当は嫌がるのだが、仕方がない）、訳ありの弟か誰か家族がいるということを知っている人間は意外と多いが。その扶養に入っている青年が秘密の「彼氏」 それ以上の存在であることと、一夜が今日一日落ち込んでいたのは事実なので和田の言葉を否定できない。

幸いにも元々人数の少ない職場だ。残業も多いわけでもないので、今は和田と二人きりである。それにそもそも彼は、一夜が源一につけられたキスマークを叩撃している。一夜自身も家族や借金、仕事などのことで苦労している様子もないのに、落ち込みの原因は単純に導かれるだろう。

「飲みにでも行きましょうか？」

「……」

一夜は慰めようとあつさりと誘つてくる和田をじろりと無言で睨む。その視線に迫力があったのか、彼は彼女と眼を合わせるとまた肩を竦めた。

その11 水面の心（後編）

「つて、喧嘩中に不謹慎でしたかね。変な意味じゃないですけど」この職場には若い青年たちもいくらかおり、たまに合コンなども行なっているらしい。そこに和田も参加しているという話を他の女子職員から耳にしている。

だからきっと「そういうこと」とも軽く言える男なのだろうと、一夜は警戒心を強めた眼で彼を見た。もつとも六つも年上の一夜を彼が狙うとは思えないが。それに、

「和田つちは彼女がいるんじゃなかつたつけ？……それとも、男の人はそういう相手がいても、他の女の子と飲みに行けるものなの？」

彼氏がいるとばれているならば仕方ない、誰もいないし、と一夜は開き直つて彼とその会話を続けた。結局は千葉もいない今、誰かに話を聞いてほしかったのである。目の前の若い青年を愚痴に付き合わせることにした。

和田も忙しいほどではないのか、手を止めるときと同じように腕を組んで彼の場合を思い出している。

「うーん。男に限らずじゃないですか？　女人の人でもそういうことする人、いるでしょう。俺の彼女もそうしてゐるし」

職場全体ならまだしもこの事務所では、三十歳以下の職員は三人のみ。よつて、一夜にとつても和田にとつてもこの部署では互いが最も話しやすい。源一以外の男性と付き合つた経験のない一夜は、思わず目の前の和田を引き続き追及する。

「和田つちは、それを許しているの？」

訝しげな一夜の視線を感じた彼は、またわざとらしく眉間に皺を寄せて答えた。

「飲む、くらいはねー。それ以上のことは嫌だけど、いつも女の

子と二人で出かけるくらいはしますし。……中には自分の彼女が誰かと飲みにいくのすら許せないって言つヤツもいますけど」

確かに一夜も昔、北條と一人きりで食事に出掛けたことがある。その頃は北條とはもちろん、源一とも付き合つてもいなかつたが。

それが一夜が源一の元彼女にやきもちを焼きやけくそで別の男と出掛けた、丁度、三年前の今頃の話。そしてその後だ。源一の機嫌がすこぶる悪くなり、告白……とファーストキスを同時にされたのは、その頃の甘酸っぱい思い出を蘇らせる、一夜の胸が騒いでくる。

それはさておき、それ以降源一は彼女が男性と飲みに行つたり、一人で帰つてくるようなことがあれば不機嫌な様子をあらわにしてきた。彼女の方にそれ以上の目的などなく、何もなかつたとしてもだ。

それにもしても源一は自分が朝帰りをしておいて、一夜のことは怒るとはおかしな話ではないか？

「男は浮氣をする生き物だけれど、女の浮氣は許せない」などと勝手なことを言い切つていた、中年上司の例なども思い出す。源一もそのタイプなのだろうか。人のことは怒るくせに、自分は女の子と過ごして……。

そう思うとやはり一夜の怒りがぶり返される。確かに恋人に心配のひとつもされないのも、また虚しいものだが。

「男の人は、恋人がするのは許せないのに、自分はそういうことするの？」

その一夜の声に少々棘があつたので、和田も余計なことを言つてしまつたかと思つたらしい。

会話の流れから、この先輩の女がいつぞやのキスマーカの相手と何かそういったトラブルがあつたようだ、といふことは彼も理解し

ていた。

何処か浮世離れしたところや朴訥としたところがあるが、先日のあの痕の件といい一夜のことが「生身の女性」に見えてきた和田であるが、さりとて彼女とどうこうなりたいわけでもなく、先輩に失礼があつてもいけない。彼は言葉を探し、困ったように頭に手をやつた。

「そりや、そういう男もいるかもしれませんが、……」

そんな風に困ってしまった和田を見ていた一夜も、ふと我に返る。何の関係もない後輩をここで責めていても仕方がない。大切なのは源一がどうかということであつて、それ以外の人間が何をしていうと一夜たちには関係ないのだ。

ハつ当たりで彼に悪いことをしてしまったなと思い謝りつつ口を開いた時、静かな事務室に彼女の携帯電話がマナーモードのバイブ音を響かせた。

「ごめん」

会話の途中だが、一夜は携帯電話を開ける。　そのメールは、また源一からであった。

こんな風に一日に何回も送つてくるのは珍しいことだ。やはり余程後ろめたいのか、よい方に考えれば彼はそれだけ一夜を心配しているのか。

彼の気持ちがどちらなのか、分からぬ。信じようといつも思うのに、どうしてふとしたことで信じられなくなるのか。

内容は、先ほどの連絡よりも早く帰れることになったといつものだつた。もしかしたら、一夜がまた他の男と自棄酒など飲みに行かないよう、彼女の行動を読んで牽制してきたのかもしれない。しかし今日は、和田の誘いに応じる気はなかつた。一夜も自棄酒を煽りたい気分であつたものの、憂さ晴らしに自分、とも同じように他の男についていくのも、何か幼稚な気がしたのだ。

しかしそこで、和田のどこかほつとしたような笑い声が聞こえた。

「彼氏からですか？」

「……」

照れ臭いところはあるがそこは流石に婚約もして一年も経つているだけあり、一夜も無言で素直に頷く。

「いい人そうじゃないですか」

喧嘩しているのには、と彼は笑つてため息をつく。その言い方から、和田はきっと一夜と同じかそれ以上の年齢の大人の男を想像しているのだなと思われた。あんたよりも年下だよ、などとは恥ずかしくて言えない。

「行ってあげたらどうですか？」

そして彼は同棲しているという事実も知らない。だからそういう言い方をしたのだろうが、それは一夜にとつて「帰つてあげたら」と言われるのと同義であった。

ただの親切心だけとも少し違う、和田のからかうように見える笑みと携帯電話を見比べてそれを閉じた彼女は、「……そうだね」と諦めたように呟いた。

結局、帰るところも他なく、逃げることも出来ないのだ。万が一裏切られていたとしても、他の誰でもなく、彼がよいのだから。

そしてやはり人の例など関係なく、一夜と源一がどうありたいのかということが真実でしかないのだ。話し合つ以外に方法などない。それは共に暮らし生きていく、と決めた時から決まつっていたことだ。

帰る決意を固めたような一夜に安堵したのか、和田は再び冗談染みた言い方をした。

「それともそんなに嫌だつたら、やつぱり飲みに行きますか？」

「……遠慮、しとく」

彼女はまたため息をついてそう答えると、彼に戸締りを頼みロッカールームへと向かつた。

和田は一体何を考えているのか。「そなんですか、それは残念」

などときわどいことを一夜の背中に言い残し、またデスクに向かい始めた彼をちらりと振り返る。このように付きていた女がいるのに別の女を口説くようなことを言つ奴もいるし、男といつものほよくわからないものだと改めて思つのであった。

そしてそう考へるとやはり、常に誠実で律儀に真実を話してくれる源一の方が一夜には會ひし、やはり早く帰つて会いたい、安心したいと思つてしまつ。

しかしそうして彼しかいないと思つてしまえばしまうほど、独占欲が強くなるのだ。そんな重い存在であつてはいけないのに。一夜は朝から何度も分からぬため息をまたつぐと、重い足取りで帰宅した。

嫌われたくないと言つ思つがある。

しかし父親の件で一夜が悲しい思いをしていたことを知つていて、それでも浮氣をするような男ならば、悲しいが彼とは一緒に居られないとも思つ。

ただ、安心して一緒に居たい。それだけなのに。どうしてよこのかわからぬ。

ゆらゆらと、不安な思いに、ただ水面の上によつて揺れるだけ。

その12 嫉妬してもいいですか？

結局、帰る場所はひとつしかない。彼を選んだ以上、逃げることも出来ない。一夜は嫌な緊張感の中、同居人の帰りを待つ。そして今夜も彼女が風呂から上がるころ、源一は帰ってきた。

「お帰り……」

「ああ、」

「氣まずい空氣。源一は口を開いて何かを言おうとしたが、遅くなるし洗濯したいから、お風呂入ってきてよ」

一夜は彼の顔を見ずに、手元の新聞をわざとらしく捲くりながら言った。

「……分かった」

季節は夏であるし、彼もアルバイトの後で汗でもかいているのか素直にそれに従う。

……先延ばしにしたって、何もならないのにな……。

源一の顔を未だ見ることが出来ず、浴室の音を聴きながら一夜はため息をつく。そうは言つても覚悟を決めなければならない。

自室に籠るうかとも思ったが、部屋には冷房はないので暑いのも嫌だつた。彼女が頭を悩ませながらどうすることも出来ずにはいると、三十分後、源一は風呂から出て来た。風呂掃除など全ての用事を終わらせたのだろう。風呂上りの麦茶を一杯ぐいっと口にし、いつもどおりソファに座る一夜に向かつて迷いなく直行していく。

来た！ 一夜は首を竦めた。そしていざとなるとやはり恐くなる。

彼を信じなくてはいけないが、眞実が自分の最も怖れることであつた場合が。そして彼を追及し、この嫉妬を見せてることで彼にこれだから年上はと鬱陶しがられてしまつことが。

「あのや、」

一夜に近づきながら源一が口を開いた瞬間、彼女は思わず立ち上がりた。

「えっと、……うん、いいから。あの、おやすみ」

結局意味不明な言葉を口にし、ひきつった笑顔だけを浮かべると、わだかまりは残っているがいざとなるとびりしてよいかも分からなくなり、この話は無かつたことにして、一夜は逃げ出した。しかしその細い腕はあっさりと捕まれる。

「ちよつと待てよ。いつちは何もやまじことしてねえのに、なんで逃げられるんだよ」

怒ったような、焦ったような源一の声に、一夜は彼を振り向いて見上げる。

「逃げている」の言葉にどきりとした。確かに、逃げている。嫌われたくないから。本当は信じたいのに。

一夜は腕を捕まれたまま、ふいつと源一から顔を逸らした。
「だつて……もしそんなことがほんとについたら、すごく嫌だけど、でも、源一だつていちいち見張られているみたいで、嫌でしょ？
もつといつぱい遊びたい年頃なんだし……」

これ以上言うと三十路女の愚痴のようになりそうだと一夜は思い、口を噤んだ。「保護者」でいた時と同じように、最後まで彼の行動を信じて黙つて待つていていた。

しかしその態度は源一の心をざわつかせる。

婚約をして近づいたと思つていた筈なのに、一夜は「保護者」であつた時と同様に自分と距離を置き逃げていく、自分の腕からすり抜けていく 逆に源一には、自分の眼を見ない 一夜がそのように感じられた。

自分を求める！ と渴望していた十代の頃の苛立ちが、源一の胸にまざまざと蘇る。その感情が表れたのか、細い腕を握る手に力が込められた。

「痛、い……」

一夜が少し顔を顰めて困ったように源一を見たので、彼は我に返り手の力を緩める。それでも逃げられるのが嫌で離しはしない。怒られるのはこっちの方なのに、なんでもつと詰らないんだ、なんでこっちが苛立たしいんだ！ 源一はそう思いながら、吐き捨てた。

「なんで、お前は、いつまでもそうなんだよ」

一夜は源一の若干怒りを含んだ声に、弾かれたように再び顔を上げた。

「いい加減、何度も言わせんな。婚約してんだから別にお前が心配するのも、怒るのもおかしくない。つうか、何のために婚約したのか分からなくなるようなこと、もう詰つな……」

源一とて今は彼女の庇護下ではなく対等の立場、いや寧ろ彼女を守る立場になれたと想いたいのだ。だから子供染みた怒り方をしてはならないと、後半は彼にしては静かな声でそう呟けた。

しかし源一のその言葉は思いのほか一夜には効果的で、かつ彼女の欲しい言葉であつたらしい。そうした彼女の気持ちを汲んだ言葉をかけてくれるところは、流石に彼も大人になつたのだなあと想いながら一夜も恐る恐る尋ねた。

「鬱陶しく、ない？」

「別に」

「……嫉妬して、いいの？」

「……いよいよ」

そんなに心配して聞くことか？ と源一は思つた。しかし嫉妬されるほど自分が信じられないのかとも思つてしまつたが、嫉妬されないよりはましかと思い直す。

現に嫌なら、今朝、濡れ雑巾を顔面にぶつけられた時点で怒つている筈である。それは彼女の当然の怒りとして彼は受け止めていた。

「じゃあ、する」

一夜は頷くと素直にさつ答えた。

「なんだそりゃ」

相変わらずよく分からぬ女に源一は苦笑したが、それでも心を開かずにしてくれたことには安堵した。

「とりあえず、謝るくらいはさせてくれ」

源一は一夜の手を引くといつもの小さなソファに誘い、もう一度座らせた。狭い場所なので一人で座ると身体が近くに自然と寄せ合ひ、互いの体温が伝わる。

何か毒気を抜かれた一夜。怒つてよ」と言われると逆に気が抜ける。そつは言つても自分以外の女性と一緒に居たことは、考へるとやはりむかむかとしてしまう。責めちゃつてもいいのかな……。そう思いながら一夜が田の前にいる源一を改めて見た時、「朝は悪かった。でも何も変なことはしてねえ」

よつやく彼女が自分に謝らせてくれると思つた源一は、狭いソファの上で左膝は胡坐をかき、右足は床に付いた姿勢で、両手を膝に乗せると潔く頭を下げた。

その何処かの武士のように頭を下げる様に一夜は眼をぱちくりさせる。洗いたての黒い髪の中に、つむじが見えた。

その「彼」らしさに思わず可愛いなあと笑つてしまいそうになつたが、そんな呑気に構えている時ではない。一夜は緩みそうになつた頬を戻した。

第一、謝るといつ」とは後ろめたいことがあるからではないのか。謝つてもらつてもなお、そんな疑つた見方をしてしまう。

「でも、珍しいよね……。あの、源一『くん』が、夜遅くだか明け方まで女の子といたなんて。そんな仲いい子がいるんだ……」

私でさえも午前様になる時には急いで家に帰つてくるのだが、といつ言葉を裏に含ませ、一夜は昨夜からの怒りを思い出しながら嫌味を言つてみる。

「だからたまたま一緒に居た同じ学科のヤツがツブれちまつたから、家まで連れてつただけだ」

言い訳をするのは源一のポリシー違反するらしく渋々と口にしているが、眞実を話さねば一夜に誤解されたままであり、それもまた彼にとつては困ることであった。顔を上げるとふてくされたように彼女を見る。

「ふーん……」

一夜は咳くと源一に恨みがましそうな視線を送った。

「ひとりで連れてつたの？」

「あ？ ああ」

「ふ、ううう——ん……」

一度はわざとらしげ返事をする。また誤解されたーと思つた彼は、全てを正直に答えてしまつ「口の不器用さを呪いながらも補足した。

「途中まではそいつの友達の女も一緒にいたつうのー 家まで送るの手伝つてやって、介抱任せて俺が帰るうと思つたら、もう一人の方が先に帰りやがつたんだよー」

……源一の話によると、この顛末はいつもである。

その13 源一の男氣。

同じ学科のメンバーとその友達やらが集まって十人以上で飲んでいた（名前は合コンではないが、その目的の者もいただろう）。

たまにはと彼も珍しく遅い時間まで残っていた。そして席を立つたところ、同じ学科の女性が酔いつぶれてトイレの前でうずくまっているのを見つけたのである。その傍には彼女の友人の女性が困ったように彼女を介抱していた。

ここで困った人間を放つておけないのが、源一の性分だ。酔つてしまつたその彼女は、彼氏が迎えに来る様子もない独り者。そこそこに可愛らしい様子の女性があられもない姿になっているため、それに優しい声を掛けていく男も現れたが、その下心丸出しの視線に彼女の友人も警戒しているようだつた。

そこでその女性の友人は源一の人柄を見込み、彼女を送るのを手伝つて欲しいと彼を指名してきたのであつた。

深い付き合いはないと言つても、同じ学科に所属する仲間と言えば仲間だ。困つていれば助けてやるしかない。確かに彼女を立たせてやろうとする男たちの手つきは源一から見ても、いかにもあやしげなものに感じられた。しかし彼女が危険な目に遭つたとしても、それはその女の自己責任になるので放つておけばよいのだが、義理堅い彼としては学科内でのそうしたトラブルは避けたいとも思つてゐる。

彼女が望んでいるならば話は別だが、その友人の様子からすればそうでもないようである。

源一はへべれけな彼女の様子を見ながら、一夜も他の男の前でこんな無防備になつてんじやねえだろうな……と内心ではそんなことを考えつつ、目の前のクラスメイトに手を貸すことを決めた。

そして深夜になる頃、一人暮らしをしているという彼女のアパートへとその友人と共に彼女を送つていった。一夜に連絡しようとも思つたが、苦しげな彼女の様子にその暇もない。

どうにか足の立たない彼女を部屋に放り込み彼は帰らうと思つたのだが、気持ち悪いだの寒いだのとぐだぐだ言つ女の様子に、いつもの世話焼き本能が働いてしまう。ここで急性アルコール中毒で死なれたら目覚めが悪いと、思わず色々世話ををしてやつている内に、『じゃあ水倉くん、あとよろしく!』

と言つて、その友人はさつさと帰つてしまつではないか。呆気にとられている間に一人きりにさせられ、背後には苦しそうに呻く女……。

つて、おい! 僕じゃなかつたら、この女どうなると思つてんだ!? つうか、何考へてるんだ、あのダチも。

そこで源一はようやく恐ろしい仮定に気が付いた。

「ちょっと待つて……」

流石の恋愛に疎い一夜もここまで聞けば察したらしい。

「もしかしてその酔つた方の女の子つて、源一のことが、好きだつたんじや……」

源一は一夜の不穏な視線に、忌々しそうに頬をひきつらせた。

「そうなの!? それで、そのまま」

一夜は先走ると、ショックを受けた表情で源一に詰め寄る。

「だから、何もなかつたつづうの! 【冗談じやねえよ! 人のこと嵌めやがつて!】でも酔つてたのは事実だし死なれても困るから、一応落ち着いたの確認して鍵だけ見つけて、外から掛けて、新聞受けから放りこんで帰つてきた。その友達の女にも連絡しといたし、無事だつたつて朝そいつらから連絡あつた!」

きつとこうした生真面目で妙に面倒見のよい彼だからこそ、その彼女も好意を持つたのだろうと一夜は思つた。

彼女も最初から騙すつもりはなく本当につぶれてしまつて困つていたのかもしないが、実直な源一にとつてそのような卑怯なやり方は、どれだけ好意を持たれていても、どれだけ誘惑されても許せないようだつた。そんな人間には男でも女でも嫌悪感を抱くのだろう。

と言つても学科内の人間関係を無駄に乱す必要も無い。しかし自分に女がいることをわざわざアピールするのも、彼は恥ずかしい。よつて源一は、このままその二人の謀略には気付かないふりをすることにしたのであつた。

「……でも誘われたりしたんぢゃないの？」

そのお人好しさ加減や無防備ぶりには、最早怒りを通り越して呆れてしまつ。一夜は彼を横目でちらりと睨む。

「冗談じやねえ」

源一は本当に思い出したくないと言つよつて、苦々しく吐き出した。正直ベッドの上でその彼女が半分寝ながら『きてもいいよ』等の言葉を呴いていた氣もしたが、どれも聞きたくないようなものばかりであつたので、それらは一切無視をした。逆に彼女が本当に酔つてしまい身動きもとれなかつたのは、源一にとつて幸いだつた。

「若くて可愛い子に誘われたのに？ よかつたの？」

そうはされたくないが、それでも普通の男性ならばそういう状況に飛び付くのではないかと一夜は思い不思議そうに源一を覗き込む。「そうして、欲しかつたのかよ」

源一もわざとそのように言つ一夜を睨んだ。彼は自分の浅はかさを呪いながらも、やはり一夜のことを一番に考えているつもりなのだから。

彼女は首をぶんぶんと振つた。心中では安心していた。確かに彼の性格ならばその状況だつたら、まず先に騙されたことに腹を立てるだろ。源一が身体だけを目的としない男性で本当によかつた、

と。

「なら、いいだろ」

そう言いながらため息をつく源一も、あからさまに色香を漂わすような女性はそもそも苦手なため、あの一人には今後関わらないでおこづと内心で決めていた。

やはり一夜のような、正直で不器用で裏表もないくらいの女が、いい。嘘をつかず信じられて安心できる人間の方がよい。彼もまた同じように思っていたのである。

「でも、源一がお人好しすぎるのがいけないんじゃないかー。だからこんな風につけこまれるんだ」

一夜はそう言つと、青年の硬い頬を軽く抓つた。頭がよく、厳しい面もある男だが、そうやって女性に誤解されるのは確かに不安であつたし、それがなければ今回のよなことは起こらなかつたのだ。だから三年前、一夜が嫉妬した前の彼女も源一を諦め切れなかつたのだろう。態度は冷たくとも、何処かで彼の優しさが感じられるからだ。そんな彼が人に好かれるのは当然だと一夜も思う。だから彼女もこれだけ年が離れていても、頼つてしまつてはいるのだ。

この先もこんな風に嫉妬させられてしまうのだろうか。優しくない彼も嫌だが、誰にでも優しく面倒見のよい彼も不安になつてしまふではないか。

「……悪い、気をつける」

しかし源一も今回の件では痛い思いをしたらしい。抓られながらも素直に謝るあたり、やはり二十歳の若者だった。

「つて、お前も同じだけどな」

そしてその抓つていた手を軽くとられながら自分に矛先が回つてきたので、一夜はきょとんと彼を見る。

「お前も隙だらけで、つけこまれそうで、見ていて恐い」

源一も過去の様々なことを思い出しているのだろうか。一夜のこ

とを苦笑して軽く睨む。

「『』、『』めん……」

その表情にじきつとしてつい謝りてしまつ。

こんな三十路女に言に寄る男も、もう現れないだらうと思つてゐる。それなのに彼は一夜に嫉妬をすると言つて、彼女も彼に嫉妬していいと言つのだ。

不思議な氣がすると共に、未だに甘酸っぱい思いも広がる。

一夜は源一を見た。彼も彼女を見ていた。その思いと昨日からの苛々が解消された安堵、そして解放感から、今なら素直に聞ける気がした一夜は思わず呟いた。

「源一は、私のこと、今でもすきなの……？」

言いながらまた鬱陶しがられるかな、と心配にもなるが、今みたいな関係になつた後はかえつて確かめづらくなつた言葉であり、昨日から不安にさせられたこともあって、一夜も少しばがままを言つてみたくなつたのであつた。

今でも自分のことが好きなのか、と一夜に問われた源一は彼女をまじまじと見ながら頭を搔いた。

彼女に告白らしきものとした過去ならある。だから今こうじた関係になっているのだし、自分が動き出さなければ一生平行線だつたかもしれない。

しかし照れ臭かったので、愛の言葉を直接口にした覚えは確かにない。気持ちが分かるような別の表現を探して伝えた気がする。

それに彼女に性的欲求を抱き、他の男と付き合つたり結婚するようなことは許せなかつたので、この気持ちは恋愛感情が一番近いだろうと思つたものの、そんな簡単な「一文字」で言い表したくないと思つてゐるのだった。

第一想いが重なり安定した関係となつた今は、片想いの頃のように自分の気持ちを相手にどう伝えようかななどと悩むこともない。だからと言つて、一夜を嫌いになつたわけでもない。嫌いな相手といふな関係を築くわけなく、他に一緒に暮らしたい相手もいない。だつたら一夜の質問への答えはYES以外有り得ないのであるが、改めて問われると他の誰に聞かれているわけでもないのに、照れてしまう源一であった。

だから困つたように頭を搔くのだが、中々答えない彼に一夜の顔が徐々に不安に曇つてくる。

その表情を見て源一は思つ。素直にならずに、これ以上彼女を不安にさせるのもよくなないことだ。彼はいつものように怒つたような顔で嘘のない言葉を呴いた。

「……『そう』だから、今こうじてるんだる」

それは彼にしてみれば精一杯の譲歩と勇氣で想いを伝えたのだが、「ん……。『そう』だつたら嬉しい、んだけど、はつきり言つてほ

しい。年齢とかあって、なんか心配で……だから今回も疑ひかりつたんだし……」

一夜はそう言つと、珍しく甘えたよう^ヒ源一のTシャツの裾を引っ張つてきた。

自分が嫌われていの^ヒは、源一の性格や正直な態度をよく知つてゐる一夜にもどことなく伝わつてくる。それでも彼を疑つてしまつたのは、言つたとおり年の差に自信がないからであつた。いい年こいてこんなこと聞くなよ、と自分自身に呆れるが、確かめないと不安になつてしまつのも女心。だから彼が謝罪ついでに優しくしてくれることと、昨日からの不安が解消された勢いに任せて、思い切つて尋ねてみたのであつた。ずっと本当は確かめてみたかつたことを。

今夜を逃したら、きっとまた元のぶつきらぼうな源一に戻つてしまつだろ^ヒ。ある意味、今夜は失敗をした彼の弱みに付け込めるチャンスだつた。そんなずるい自分が彼女は嫌になりそうなもの、たまには彼の言葉で囁いてもらいたい。

いい年こいてこんなこと聞くのは恥ずかしいことなのかな。そんな迷いも残つてゐるが、今は一人きりで他には誰も居ない。こんな恥ずかしいことは、誰にも言わなければよいだけだ。

そして源一と言え^ヒば、性格上、いやいやと悩まず合理的な方法をとるタイプなのだが、照れからたつた一言を未だに言つてよどんでいる。

とりあえず「^ヒの言葉」は、女性には一夜以外には言つたことのない言葉であり、恋愛以外でもあまり使わないような彼にとつては希少な言葉だ。

しかし無言の彼に一夜が再び不安を募らせていく。

そんな顔などさせたくない。

十も年下だから自分に不安を感じるのか。源一は自分の力の足り

なさを感じ、悔しくなる。

忘れたことなど、ない。以前源一がアルバイト先から病院に運ばれそこから一夜に連絡が入った時、母親が亡くなつたことを思い出してしまつたと彼女が突然泣き出したことがあつた。

また一夜の父親は離婚して、ある日突然家を出て行つている。いくら婚姻関係を結んでもそういうこともありますり得るのだと、一夜が常に不安に思つてることも源一は知つていて。

一夜には未だにそんな子供のように壊れてしまいそうな脆い一面がある。しかしそんな自分にないものを持つ一夜を面倒だと思わず大事にしたと思うからこそ、源一は彼女が「好き」だと言えるのかもしれなかつた。

そこまで大切な相手ならば、さつさと一言言つてしまえばいいのに。源一はようやく仏頂面で吐き捨てた。

「だから、好き、だつて」

言つた後、ぶわっと身体中が熱くなり何処かに駆け出したいような恥ずかしさに襲われる。それは二十歳になつた今でも変わりなかつた。

それでも意地を張らずにこんなこつ恥ずかしい言葉を言えただけ、自分も進歩しただらうと源一は一夜に言いたいほどだつた。

しかしそんな甘い言葉でも怒つた顔で言つていては、台詞と表情が全く噛み合つていない。こんな表情になるのは決して一夜が憎いからではなく、彼自身が恥ずかしくてたまらないからだ。いつもの一夜なら、そこまで理解し嬉しそうに笑つてくれるはずだが、今日はどうしたことか、更に食い下がつてきた。

「そんな、恐い顔で言わなくても……」

ソファの上で膝を抱え、唇を尖らせる始末。狭いのでその足の裏は源一の腿の上に乗せられる。

つて、俺にいつたいどうしようと…！

苦労して言つたのにまだだめかと、頭の中が爆発しそうな氣すらし、源一は拳を作つてふるふると震えた。

一夜にも彼が照れていることくらいは分かるが、源一のその表情から、もしかしたら無理矢理言わせたのかな、などと心配になつてしまつ。それこそ小娘でもないのだしね。そう思つた一夜は足を源一の腿の上に置いたまま、ふいと顔を背けた。

「……そう、思つてないなら、べつに、いいし……。変なこと、聞いて、ごめん」

折角源一がはつきりと言葉にしてくれたにも関わらず、いつものようにはげてしまう。

逆に源一にしてみれば、そう思つているからこそ彼女に誠実に接し、更にはこんな愛の言葉までどうにか口にしたのに、これ以上どう優しくすればよいのかと困つてしまつ。

しかし今朝方の件で、本当に怒りたかったのも不安ののも、一夜の方なのだ。

彼にはもう、どうしてよいか分からぬ。どうしたらこれ以上気持ちを伝えることができるのか分からぬ。想いはもう通じ合つているはずなのに。

いつそ身体を合わせてそれで全てをチャラにするのが、短絡的すぎるが一番でつとり早い。不器用な源一には他に方法が思いつかなかつた。源一は上手い言葉が出てこない己に今一度ため息をつくと、同じソファに座つていた一夜をただ黙つて抱き締めた。悔しさもあり、いつもよりも、強く。

「……っ」

一夜もこの状況に慣れていないわけではない。何度も抱かれてきた男の身体だ。もう彼の汗の匂いまで知つている。

それでも源一の唐突な行動にどきりとした。一週間ぶりだからだ

ろうか。頻繁にセックスをしている関係だからこそ、七日以上の間隔があるだけでこんなにもときめいてしまうのか。それだけでなく小さな喧嘩をして和解した後で、彼が久々に恋心を語ってくれたからだらうか。

日々は当たり前のように過ぎていき、想いを日常の中でいちいち確かめ合つことはない。だから改めてこんな雰囲気になると、まるで恋人になる前のような微妙な空気を、少しだけ思い出す。

寂しさも感じていた一夜は、彼の広い胸にもたれてみた。曲げられていた膝は抱き締められた瞬間に床に下ろし、ひとりと彼に寄り添つてしまつている。

「……もう一回言えば、気が済むわけ？」

源一は納得いかなそうな一夜に向かつてため息混じりにそう尋ねた。じうしている方が肉体的に高まり多少興奮した状態になれるし、何より彼女の顔を見なくて済むからだ。

何度も抱き締めても、ほつとする。あの両手を伸ばしたものが、きちんと腕の中にあるとこ、う安堵は変わらない。解放感に任せて源一は尋ねた。

一夜もまた彼の胸の温かさにようやく少し落ち着き、そして胸の鼓動も高まってきた。だから思わずこんなことを甘えて言つてみてしまう。

「……一回いやだ。何回も言つて」

「……」

源一は一旦黙った。そしてもう一度ため息をつく。

馬鹿なことを言つてるなあと自分でも呆れる一夜だが、次の瞬間信じられないことが起こる。

「好き、だ」

少々やけくそのようだがきちんと言葉にされたそれに、一夜の日が見開かれた。聞き慣れない言葉に言わせた方が恥ずかしくなる。

「……満足？」

「もう一回……っ」

そんな風に聞かれると無理に言ひてるんじゃないとか、嘘じゃないかと思つてしまい、一夜は言葉の響きから相手の本心を探つと、その言葉を何度も源一に言わせ始めた。

どうせそういうことを滅多に言ひてくれない男だ。折角だから確かめよう。嫌がつたり怒るようななつそじでやめよう。そう思ついた。

しかし「その言葉」は源一の口から、信じられないほど繰り返されたのだ。何度も、何度も。

彼はしつかりと一夜を抱き締めているので彼女にその表情は見えない。怒つているのか、照れているのかもはつきりしない。

しかしその声の響きは低く、やけくそのようでありながらも暖かみのあるものに感じられた。それに彼はこういうことが演技でできる人間ではない。そして人の言いなりになつたり、自分に嘘をついてまで自分の意に添わないことをする人間でもなかつた。それは一夜も知つてゐる。

だからやつぱり、私なんかを好きだといつのは本心なのかもしない……？ でもなんで私なんかにここまでしてくれるんだろう。

そう思うと、一夜の胸がまたしてもきゅっと締め付けられる。その広い胸にしがみつく。

だいすきだ。

優しい彼が。

いい年こいともそつ思つた。

「も、いい……」

一夜は熱いため息をつくとせつめき、風呂上がりの彼の匂いを胸一杯に嗅ぐと顔を上げた。源一も今度はほつとしたようなため息をついていた。一夜が思わず彼の顔色を伺つよつに仰ぎ見ると、彼の方も彼女を見た。

しばし無言で見つめ合つていたが、やがて源一は一夜の身体を離すと立ち上がる。そして心を少々高ぶらせたまま、彼の行動の意味が分からずぽかんと見上げている一夜に向かつて、自分の部屋の方へと誘うよつに顎を軽くしゃくつた。

「向こう、行こうぜ」

それは自然な喰みだった。

その15 これもひとつの『ワードケーション』。

源二に誘われるままに、彼の部屋に入った一夜。

まだ真夏ではないものの、窓を開けているからどうにか過ごせるがクーラーの効いた部屋よりはずつと暑い。少しでも涼しくなるからか、青年の部屋の明かりは消えている。窓からの街灯や月の微かな光で、目が慣れれば相手の表情も少しばら見えてくる。

もう確約された関係なので、恋人未満の時のように相手の僅かな表情まで気にして感情を読み取る必要はない。それにどんな顔をしているかくらい暗くても大体分かるほど、相手のことは理解しているつもりだ。

それに先ほど、源一が照れを我慢して言いたくない愛の言葉を何度も囁いてくれたことで、一夜も彼への疑念が今は消えつつあった。だからと言つて自信は今でもない。それでもここまで言ってくれた彼を信じてあげないのは寧ろ失礼になるし、不憫なほどだ。

こうして寄り添つていれば、無言でも互いのことが分かるような気がする夜。

源二のベッドの上に一人は腰かけた。初めて結ばれてから夏を迎えるのは三度目になる。

暑い夏の間は一緒に眠りたいとは互いにあまり思わない。行為自体もクーラーの効いた居間でよくしていた。何より締め切らなくては声が漏れてしまう。前回も居間で絡み合つたし、それも一週間以上のこと。よつて一夜としては久々にこの部屋に入つた気がしていた。

信頼している相手であるうえに、今しがた好きだとまた再認識した相手 拒む理由はやはり、ない。

今夜はどうやって始まるのかな、と一夜はぼんやり思つていた。そうは言つても暗闇で窓も開いており、先ほどまでの状況を思えば、

何か緊張してしまつ。

源一の方から一夜をちらりと見た。彼は膝に頬杖をついている。

その眼に映る感情まではこの闇の中では分からぬ。

……まさか、窓を開けたままやるわけじゃないよね、と一夜はふと嫌な予感がした。

意外とそういう意地悪なところが彼にはあるのだ。一夜がそのようなことをされても怒らず、時にそうされることで妙に興奮してしまうことを見透かしているように、一応彼女が嫌悪感を示さないことを確かめながら無茶なことを要求してくる。

そんなことを考えつつ胸を高鳴らせながら、しかし自分から誘導するのが苦手な一夜は、相手の出方を身構えながら待つている。

そう、「待つて」はいるのだ。

そういうことをしたい気分にはなつてゐる。ここまできて「やっぱりやめた」と言われれば女としては悲しい気持ちになり、今宵は言葉だけでなく身体でも彼の気持ちを確かめたいと思つてゐた。こんな年齢の女に興奮してくれるのか、ということも含めて。

一夜の初体験が三年前でしかなかつたからか、何度もしてきた行為でもほんの少しいつもと違う出来事があるだけで、一夜の身体の「感じ方」が変わつてくる。女性でも感情抜きに身体だけの快感を楽しむ方法はあるかもしれないが、少なくとも一夜は感情に強く左右される受身のセックスしか知らない。

それはさておき、このような雰囲気になつていて「しない」という選択肢はないだろう。源一の大きな手が無言のまま一夜の肩に掛かつた。ああ「きた」な、と安堵と緊張の相反する心地に包まれながら、いつもの始まりのシグナルを知る。

時に台所や玄関で始まることもありそれも嫌ではないが、一夜としては身体も痛くなくそのまま眠つてしまえるベッドの方方が、落ち着けるので好きだつた。しかし暗闇での行為は実に久しぶりで、このシチュエーションは初めて彼に触れられた一年以上前の夜のこ

とを、今でもくすぐつたく思い出してしまつ。

「始まり方」は色々ある。先日のようにキスマークの痕を確認され、そのまま脱がされてしまつようなこともあれば、口付けから始まつて深く食つているうちに興奮していくこともある。

一緒に暮らしていくうちに、「いつてきますのちゅーー」、「おやすみのちゅーー」などとこうことを日常的にしないこの一人は、接吻など行為の際にくらいにしかしない。逆に行行為の最中にすらそれを一度もしないこともある。

浮氣でセックスはできるけど、キスはできない、とものたとえがあるように、一夜も行為で身体を気持ちよくされると、唇を重ねることは別物のようである気がする。

後者の方が、何か、照れ臭いのだ。

そう思つてこらへり、顔が近づいてきた。唇に軽く触れるだけのそれを、彼からされた。

ああ、柔らかい。

何度もしているのにそつと唇を重ねられて、一瞬で顔を離され顔を覗き込まれると、いつも以上に変な感じがした。

身体の奥がむずむずとしてくる。胸の奥がじんわりとする。くつそう。

なんなんだ、と一夜は悔しく思つ。優しく触れられただけのそれに、相手に抱きつきたくなつてしまつたではないか。逆にそれ以上の激しいことをしたくなつてしまつではないか。

こんな欲求は、望みはおかしいのだろうか。それとも人として自然なことなのだろうか。

早くして、もつとして。

一夜の中で心と頭がちぐはぐになつてゐる。そういうた欲求を込めた眼で源一を見上げてしまつてこる」ことが、自分でも分かる。口には出せない。恥ずかしい。

えつちなことを、したい、されたい。だがそんなこと言えるわけない。

源一はしたいのだろうか。したいからこうしているのだろうが。

見つめ合つてその表情のほほに顔から、一夜は彼の気持ちを探ろうとする。

Tシャツを握りうかどうしようか。どうじてわざと押し倒してくれないのか。やつにう夜もあるのに。

一夜が恨みがましそうな複雑な表情でそれでもなお、むうつと黙つて相手を見ていると、今度はいきなり吹き出したような笑い声が聞こえてきた。源一が笑うことはあまりない。珍しいなと一夜が思うと、彼はこんなことを尋ねた。

「どうして欲しいんだよ」

赤い顔など見えるわけないのに、一夜は思わず顔を逸らす。

「……そつちこそ」

余程物欲しそうな顔に見えたのだろうか。しかしいつもならがばつと襲いかかってくるではないか。どうして今日に限つて焦らすのか。一夜にどうして欲しいのか。

先ほどあんな風に甘えてせがんだので、その報復で今度は一夜に何かを言わせようとしているのか。それとも珍しく甘えてきた彼女に、もつと甘えさせようとしているのか。源一の真意は分からぬ。

だがどちらに転ぶか分からぬ男女の駆け引きが麻薬のように心地よい。その甘酸っぱい感覚に、早く気持ちよくなりたい、抱かれたいと思わされる。

再び一人は顔を見合わせた。身体が引き寄せ合つ様に近づく。もう、限界だつた。

一夜はくつそう、と思いながら彼女から源一に抱きついた。やはりこの胸の中が好きだと思う。この厚さや頼りがいなど慣れたもの、

全てが愛しい。

彼女は彼の頑丈な背中に手を回し、そのTシャツをしっかりと握り締めた。もう一度匂いを嗅ぐ。

愛されていると思つてもよいのだろうか。彼は私のものだと、人は所有物ではないが心の中なら叫んでもよいだろうか。

抱き返される。そして、ようやく望みどおり身体をまさぐられる。すっかり青年のそれとなつた大きな掌に。

甘い吐息と声が一夜の薄い唇から漏れた。

満たされていく。同時に、与えられる日々の刺激に強い痺れに囚われ、身体の奥からは彼女自身も驚くほどその証が溢れてくる。触つて欲しい、そう思った。

しかし窓が開いている。彼への想いが素直な反応に つまりは口をつく声に表れそうになるのに、それが自由にならない。今日はそういう気分なのに、出来ないのがもどかしい。

一夜は「窓、閉めて」と懇願するが、源一に「我慢してみれば」と返される。

悪いのは彼のほうだったのに、どうしてこちらが苛められなくてはならないのか。

彼女は不服に思うが、源一も自分が憎くて言つていいわけではないことは分かつていて、いつもどおり一夜の感じ方を確かめながら、そんなおかしな要求をしてくるのが伝わる。

つまり彼女が嫌がれば、それを撤回するだろう。逆に彼女が嫌がりながらも源一に従い、興奮すらしているような様子であれば、それは撤回しないだろう。

閉めて欲しいに決まっている。ゆっくりと楽しみたい。

なのに彼からは間髪入れずに、手で、唇で、露わにされていく肌に触れられてしまう。

このやうつ。

ここで一夜が源一に一発拳を入れれば行為は中断されるだらう。だが身体には、既に怒りではない火が点いている。

その手を止めて欲しくない、と頭の中とは別に身体が欲し、圧しかかる男の体重すら心地よく、逃れようとは思わない。

源一は踏み込んでしまえばなんとかなる、一夜が抵抗しないのはOKのサインと思ったのか、行為を続行してきた。好い場所に口を押し当てられ、思い切り鳴きたくなる。声が出ないよう手で口を押さえたり、彼の枕を噛んだりして必死で堪えてみるがもどかしくて、苦しい。

自分も彼に触れたいと、一夜は思った。そして気分が高じたことと声を殺すために一夜の方から唇を重ねると、互いに舌を絡め合つ。その間に一夜の下肢へと、青年の指は侵入する。

隣に寝転び唇を合わせたまま、何日かぶりに触れられれば、あつという間に狂いそうになる。しかしそれは叶わず少しの間、焦らされる。開いた窓が気になり無言のまま行為を進めたい一夜は、源一の手を導くことでその要求を示してしまった。

それでも焦らされる。一度手を放され、今度は彼が全てを脱ぎ、上半身から下半身まで触れさせられた。しかしそうしている間は一夜も何も言わなくて済み、今日は彼を誰にも譲りたくないと改めて思わされた日があるので、彼女は彼の次の要求を叶えた。硬く締まった肌に、首筋から胸、腹、その下へと舌を這わせていく。暗闇に源一の荒い息遣いが零れていく。

ワタシノモノ、ワタシノモノ、と呪文のように唱えながら。それを散々してやつた後に、彼女はようやく許された。爆ぜるよう、その身が浮く。だが、

「……つ、あつ！」

しまった、声が漏れた！！

その瞬間、一夜は咄嗟に源一の肩を噛んだ。彼も痛みに顔を顰めたが、その手の力は緩められることはない。なおも奥へと指が進め

られていく。

あんな言葉を彼に無理矢理言わせたからか。だからこんな辱めを受けるのか。

なのにどうして胸が震える。彼は自分を好きだと言つた。だからなのか。

だからこんな恥ずかしい自分などを見たいといつのか。

何度も繰り返してきた、動物的な行為。しかし何故今以上に興奮できる方法を探り続けるのか。何故相手を限定するのか。限定されるからこそ、色々な楽しみ方をしようと方法を考えるのか。

どうしてその相手とだと安心できるのか。そんなこと考えもしないでただ、繰り返してきた。きっと、この先も。もしかしたらただの動物の本能に従つて、つがいとしているだけかもしれない。

理性が奪われれば先ほどの優しい時間も相手の気持ちを確かめたことも、全て何處かへ追いやられていく。今はもう、より愉しくこの行為ができるばそれでいい。始まつた後はそんなことしか考えられない。

この相手しかいのだから。自分には。

それを何処まで愛せるか、いつまで愛せるか。

歳が離れていてもその肉体に満足し、求め合う。相手にも自分を求めて欲しいから、自分の身体の動かし方や所作のひとつひとつも、己も感じられ相手も悦ぶように考える。

他にもコミュニケーションの形はいくらでもあるが、この、他の人間とは成立してはならない関係、遊戯、気持ちの伝え方 即ち、性交。

しかも快楽を伴うからこそ何度も繰り返しても飽くことなく、この方法で肌を重ねて腰を動かし、相手の存在や想いと自己のそれを感

じょうとする。

そんな風に互いを想う一人は、一糸纏わぬ姿で抱き合つた。

身体が、熱い。

その16 はじめての……。

それから、三十分後……。

夏の夜の深夜。ベッドの中で足を絡ませ合い、激しい情事の後まどろみに横たわる男女がいた。蒸し暑い夜なので互いの熱を煩わしく感じ始めながら、そろそろ離れた方がいいかなと一人は思う。はあ、と女　　一夜はため息をついた。夏の暑さと彼女の内側からの熱気の籠つた、色すら見えそうな吐息。

彼女が足を動かせばその感触に、相手がまだ裸であることを嫌でも思い知らされる。今今までそれと接合していたことを思い出すと、また色のついたような吐息が溢れる。

今のようにかつたな、とでも言つよう。

そして、「何か」を恐れるよう。

一夜は今しがたの出来事を思い返す。

・・・・・

気持ちも体温も高まつた一夜と源一は、上半身のみならず脚の方まで絡ませ合い、全身を密着させていた。身体の中で最も熱い部分が触れ合つ。気分だけはどんどん興奮していくものの、しかしそれに任せて子供を作つてしまつわけにもいかない。だがまた今日は完全な日なのかななどといつことを、互いの頭の中でぐるぐると考えている。

しかし堪えきれなくなつたように「駄目?」と彼に囁かれた瞬間、一夜の奥からじわりと何かが溢れ出し、應えたくなつてしまつ。その間に硬直してしまつた身体を抱き締められるが、彼女が困つて

いることを知る彼はそれ以上は問ひ続ける。

一度何も着けずにしてしまえば癖になってしまふのではないか。

二人ともそれを恐れていた。

彼はその快感を得ることが怖かつた。

彼女は彼を悦ばせているという喜びと、これくらいなら大丈夫だろうという油断を覚えることが怖かつた。

歳は離れているが、血の繋がりなどほとんどなく男と女として長年暮らしてきたこの二人。二人とも一般的な性欲は持ち合わせているものの、彼らの作った聖域の外の者と、特に男女の関係を持つことを恐れ慎重になってきた。

孤独感から互いへの絶対的な依存や執着が強すぎ、それ以外の誰かを受け入れることや、その結果他人と「家族」を持つかもしれない可能性のあることがどうしても嫌だったのだろう。だから互い以外の者には触れようとは思わなかつた。

ようやくその唯一の理解者と触れ合え、愛し合える時が訪れた。それが幸せだった。

手の指と指を絡ませ合う。もう一度、口同士を重ねて屠り合う。まるで一匹の蛇が絡み合つように。ねどりと、ゆるりと。

彼にヤキモチを妬いた。
和解した。安堵した。
好きだと何度も囁かれた。

気分の高まる、誘惑の甘い夜。何かがぱりんと心の中で壊れた。

そして、気が付けば……何一つの物質も間に隔てていかない状態で、二人は、繋がつてしまっていた。

・・・・・

「大丈夫、かな……」

その情熱的な行為の後のみどろみで、一夜は裸の身を起こしながら思わず呟いた。「そうしたい」と誘つたのも、了承したのも彼女が決めたことだ。今更そんなことを言つても仕なく、それは禁句と言つてもよい。

精を吐き出された腹の辺りが、拭き取つてもなお、粘ついている気がする。また風呂にいかねばならないのが面倒くさい。そしてつまらないことを言つてしまつたな、と言つた後に彼女は思うが不安なのは事実。

一夜がその黒髪を源一の身体にはらりと落としながらため息をつくと、まだ寝転んでいた彼は彼女をじろりと見上げた。それは睨んでいるような表情であつたが、どこか照れや達成感のようなものが醸し出されていた。それを証拠に彼の声は、意外と優しげなものであつた。

「その時はその時で、なんとかする。 大丈夫だ」

一夜の仕事のことや生活費、源一の卒業、就職のこと。考えれば性欲に負けてはならなかつたこと。なのに熱い興奮に身を焦がしてしまつた、愚かな二人。

もちろん最後の瞬間は、源一も自制した。だから正直なところ、互いにいつもよりも楽しめなかつたとも言える。いつもと違う形の彼の絶頂の姿には、変に興奮してしまつたものの。

一夜は最奥を貫かれたかつた最後の一瞬の願いが叶わず、源一もいつも以上に快感を得ているのだが、彼女に気を遣いながら終わりを迎えていた。そこまで無心に快樂に溺れられない、真面目すぎる二人。

……やっぱりこんなことなら、えつちな気分に負けなきやよかつたかな。

それを相手に伝えるのはマナー違反だと思つので一夜は言わないと

ものの、こつそりと自分の淫乱さに恥ずかしくなる。

それでも好奇心は人並にあり、いつもと違うあの感覚は彼と溶け合えたよう嬉しかった。とても幸せだった。本当はもっとしたかった、かもしれない。この先も、何度もああしたいのかかもしれない。

複雑な思いで一夜は愛しい青年を見下ろす。

ふと、まだ高校生だった彼と我慢できず性交してしまった過去を思い出した。己の欲望を責める罪悪感と、それでも彼と結ばれたことを喜ぶ、矛盾した哀しい幸せを。あの冬の夜のことは最も幸せな思い出であり、少し思い出したくないことでもあった。

ちくん、と彼女の胸が痛む。

だが今はあの時と互いの立場も年齢も違う。婚約もしており、成人した彼が自分を守ると言つてくれているのだ。

汗をかき汚れてしまった身体を流しにいかねばならないが、一夜は切ない思いを振り払うように、裸のまま横たわる彼の上からまた縋りついた。

それを優しく抱き返された。大きな手。ほつとする。

今は、大丈夫なんだ。幸せを、噛み締めてよいのだ。

ただ相手と結ばれたいだけなのに、相手が学生である以上、まだ色々な制約が伴う。それは年齢の問題だろうか、それとも互いの性格の問題だろうか。

頭、固いのかなあ……。

源一の胸に耳を押し当て規則的な鼓動を聞きながら、一夜はぼんやりと考えていた。このまま眠りたくなるが、身体はやはり清めたい。

それに窓がまだ閉まっているので、暑い。まぐわっているうちに、気分が高じて堪えきれず声を出したくなり、結局窓を閉めたのだ。防音が効いているアパートではあるが、ラブホテルとは違う。窓を閉めても声を堪えることになりなかつたものの、それでも今夜は

ひとつの一線を超えたのだ。特別な夜に、狂ったように色々な体位を試した。

そう思つと誰も知らないそれぞれの淫靡な一面に、こんなことを愉しんでいる己を恥ずかしく思つ。だがそうしたことは普通は他人に話さないことであり、何事もなく社会生活を営めれば、それぞれの胸の内に秘めておいてよいものなのだ。

「……一夜？」

黙つたまま考え込んでいる彼女が眠つたのかと思つたか、源一が胸の上の一夜に向けて呼び掛けた。

その低い声が心地よい。一夜は思わず微笑み、そしてまた尋ねた。

「きもち、よかつた？」

たぶん、男性であればYESの返事をもらえるだろうと、照れて仏頂面の彼からのそれを待つ。そんなことで幸せを感じる自分はおかしいのか、それでよいのか分からぬが。

この身体が、命が、どんな形であれ彼を幸せにできるのであれば、それでよいのかもしぬなかつた。

そして、夏の夜が明ける 。

その17 日々是好日。

「おい、起きろ
「ん……」

二人別々に目覚めた、次の日の朝。いつもとおり、一夜はシーツを引っ張られその反動でベッドから転げ落ちて起こされる。

昨夜の避妊具を使わなかつた性行為により「その恐れ」がないことを祈つてゐるわけなのだが、万が一にもそうなるかもしれない女性の身体に對してなんと乱暴なことかと、一夜は不服そうな顔を上げる。

しかし源一は逆に、昨日までと同じように接しよつとしてくれるのだろう。朴念仁とした表情や仕草も、彼なりの優しさなのだ。そんな彼がきっと自分は愛しいのだ。一夜は眠い頭を徐々に覚ましたがら、そう思った。

「何?」

源一は訝しげな顔をする。一夜はぼりぼりと床の上で頭を搔きながら、そのようなことを考えじいーつと彼を見上げている。彼はいつもTシャツにジーンズといった軽装で、彼女はキャミソールにハーフパンツといったいで立ちで。

昨夜素っ裸で、何の纖維も隔てずに熱く抱き合ひ繋がつたことなど、彼の素つ氣無い態度からは嘘のよう。だが、昨日は長い一日だつた。嫉妬して怒鳴つたことから始まり、後輩に慰められたり、それが誤解と分かり源一に驚くほど甘く、優しくされた。

それが興奮剤となつたか、久々のセックスは馬鹿みたに燃えて、初めて何も使わずに接合してしまい。

そして今、それらが夢の中の出来事のよう、からりとした朝が訪れている。

そのギャップにいつも以上に首を傾げたくなり、その不思議さが

くすぐつたい。しかしそれが、いつまでも彼にときめかされる所以なのかもしない。

これはもう、恋なのか愛なのか。彼は一夜を「好き」と言つてくれたが、二人の間に横たわるこの気持ちは、一体何なのか。

婚姻関係を結んでいる以上、深く考える必要もないのだが、この狂おしく見えない気持ちはやはり不思議なものである。恋人になる前の関係ではないのに、相手に何処までも手を伸ばしたくなる。

あなたを想う、日々是好日。

源一の上半身から下半身までを見ては、昨夜舐つた裸体を思い出し、一夜の白い顔がほんのり赤く染まる。何を赤くなつていいのだろ。だが、あの一線を超えたことを思つとやはりどきどきとする。胸が、身体が疼いてしまう。

彼女は慌てて「なんでもない」と言つと、彼から田を逸らして黒髪をいじり始めた。

「そんじゃ、早くしろよ」

源一はつづけんどんにそう言い、一夜の部屋から出て行こうとした。

ああもうー、ゆうべはあんなに優しくて燃えてたのに、やつぱり可愛くないなあ、と彼がいつもおりにしてくれるのも思いやりだと言い聞かせつづも、女心としては複雑な気もしてしまつ。

その後ろ姿に舌でも出してやろうかとしたところ……急に源一がぐるりと振り返つた。そして床に座り込むネムリヒメの前に、勢いよくひざまずいたのだった。

「な、なに?」

更にはいきなり頬に大きな手で触れられ、予想もしなかつた行動に今度は彼女が驚いてしまう。しかし彼は表情を変えないまま、こう言つたのだった。

「何、照れてんの？」

「え……」

一夜が薄い唇をあんぐりと開けていると、更に一言。

「ゆうべは、よかつた」

「……」

更に一夜が彼の言葉に赤くなつて絶句すると、源一はこれまた珍しくふつと笑い、今度こそ部屋を出て行つた。

……つて。……なんだ、ありや――――――!

数秒後、一夜は力が抜けたようにばたんと床に転がつた。早く準備しないと遅刻してしまう時間だというのに、仕事に行く気などなくなりそうだ。何やらこちらの方が恥ずかしくなつてしまつたが、それでも、嬉しい。朝になつても優しさを見させてくれた、彼の態度が。

珍しいことをした源一が、一夜をパニックに陥れる。

まだ昨夜のことを悪いと思つてくれるのか、それとも逆に昨夜彼を苛めた自分への報復がまだ続いているのか、それともあんな風に繋がれて機嫌がいいのか、何かふつきたのか。一夜には、分からぬ。

それでも今の笑顔と台詞が、頭の中を回つている。仕事に行けば見目のよい後輩もいるのだが、他の男など眼中入らないほど毎日一緒に居る男のことが気になつて仕方ない。

何度でも何度でも彼に惹かれて、やまない。次に何をしでかすか、信頼しているのに予想もできない。

自分たちがこれからどう進化していくのかも、予想つかない。未だに恋をしていると思っていたが、これは既にそれを遙かに超えた何かではないだろうか。

「源一の、ばかたれ……」

ドキドキと胸が苦しい。真つ赤な顔で天井を見上げる一夜の口か

ら、弱々しい言葉が零れた。

そのドアの向こうでさつきの笑顔は何処へやら、しかめ面で少々赤い顔をした青年が、髪をぐしゃりとかき上げていることを彼女は知らない。

ちくしょー、もう一度と言わねえからな、とただ一夜を喜ばせたかった源一が、いつもと違つてもう一押し優しくしてみたその精一杯の背伸びを、彼女は知らない。

一夜の顔などもう見れず、源一はまだ早いが学校へと行くことにした。それでもやけに心が浮き足立つていた。

しかし昨夜のあの官能は忘れねばならない、と彼もまた思つている。

一夜の身体も立場も傷つけたはなかつたから。自分を立派に育てたいと頑張つてくれた、その思いを無駄にしたくなかったから。欲望に任せて、あんな危険なことを続けてはいけない。

それでもあの禁忌の、そして心密かに憧れていた快楽を経験し何処かすつきりしたからこそ、こんな風に彼女に優しく出来たのかもしれない。自分の身勝手さ、浅はかさを呪いながらも、この妙な愛しさを源一もまたどうにも出来ずにはいなかった。

いつもして何氣ない毎日をただ幸せに過ごしていく彼らに、今年も暑い夏が訪れる。

その18 青年よ、大志を抱け？

あの熱い夜から一週間。緊張して生理予定日を待っていた一夜であつたが、意外にあつさりと数日遅れでそれは訪れた。

トイレで赤い染みを見て、ほーっと深いため息をつく。こんなことならば性欲に負けるべきではなかつたと改めて思う。命を軽んじているわけでは決してない。寧ろその逆であるが、だつたら尚更軽率な行動をしてはならなかつた。

もうするつもりはないが、それなのに、いつかはまたこんな風に何も間に隔てない状態で繋がりたいとも思つてしまつし、この前は彼の「全て」を受け入れることはできなかつたが、そんなことも本当は、興味がある。そんなことを思った一夜は、家の個室でひとり赤くなつた。

さりとてこのことを源一に教えてやるべきか。身体を求められた時は生理の有無は彼に教えるが、そうでない限りそんなことをわざわざ話すのもおかしい。しかし、眞面目な彼もどうなつたかと心配しているだらうか……。

丁度、就寝前にそれは訪れた。一夜がトイレから出でてくると、源一はクーラーのきいた居間でまだ新聞を読んでいる。中年くさいようにも見えるが、就職を控えた学生としては必要なことだらうと彼女は思う。小さなテーブルの上に置かれた広告を目の端にとらえながら、一夜はその横に座つた。

「あのね……」

やはり、言づのは恥ずかしい。一夜は広告の束を見るともなしに漁り始めた。

「何？」

源一はちらりと一夜を見た。彼女はそのまま彼の顔を見ずに、広告を見てくる。

「んー……」

彼女は曖昧に返事をしたが、やがて広告を見ながら、ふと思いついたように口を開いた。

「なんか、どうか行きたいなあ」

話を逸らしたいような気持ちもあつたが、出不精な方だが夏という解放感からどこかへ出かけたいような気もしたのであつた。彼女が見ている広告は旅行会社のものだつた。

「海行つてー、美味しいもの食べてー」

言つているうちに、話を変えるつもりが彼女は楽しくなつてきた。それも面白いかもしれないと思い始める。

「誰と?」

しかし源一の問いに、一夜は彼を見た。彼は新聞から顔を上げて、ぶすりと一夜を見ている。

確かに、職場の仲間に誘われないこともない。彼らと話をまとめたつていい。しかし……。

「誰とつて……」

行きたい相手は一人なのに、どうしてそんなことを聞くのだろうか。自分とは行きたくないのだろうかと一夜は不安に思つてしまつ。現に婚約した後もまだ一人で旅行に行つたことがないのだ。無事に生理がきたという安心感からか淡白な一夜だが、急にそんなことを思いついた。

しかし彼女は源一の冷たい反応に頬を膨らませて俯き、「嫌なら、いいよ」と小さな声で言つ。いつも同じことを言つてゐるな、と思ひながら。

「行かねえとは言つてねえだろ」

だが新聞を畳む音と共に、ため息混じりにそんな声が聞こえてきたので彼女は再び顔を上げた。

「お前のことだ、俺とじやない奴らと酒飲んで羽目外したいつて意味で思つてゐるかと思つた」

源一は苦笑した。おそれくへれけになるまで飲み会に参加して、いた自分を揶揄したことだらう。なんだよ、それは！　と一夜は源一の胡坐をかいている足を拳で叩いた。

「源一はバイトとか、忙しくないの？」

彼の夏休みは、住み込みのアルバイトが毎年入っている。結局いつもそれが気になり誘つてこなかつたところもある。しかし即答が返つてきた。

「先のことなら、なんどでもなる。また予定見とくし

「……」

一夜は再び源一をまじまじと見た。

なんか少し、雰囲気が変わつたな、と思つた。どこがどう、とは言えず何がきつかけだとも言い切れないが、何処となく源一の雰囲気が柔らかくなつたような気がしたのだった。

その優しさが、くすぐつた。

「行きとえど、考え方よ」

源一はそう言つと立ち上がつた。眠るのだらうか。一夜はその背の高い姿をぼんやりと見送つたが、彼は立ち上がつた後にもう一度彼女を振り向いた。

「来たの？」

「へ？」

「……生理」

まっすぐに彼女を見て、唐突に直接的な言葉をぶつける彼に、一夜の方がまたしても恥ずかしくなつてしまつ。

変わつた、と言つても……確かに彼は昔から愚直とも言えるほど正直者であったが、こうもはつきりとものを言つようにならなくても。だが自分からは切り出せなかつたことであるし、彼が自分を心配してくれたことは嬉しい。そう想つた一夜は無言で何度も頷いた。

「ふーん」と彼は素つ氣無く頷く。その返事の裏で何を考えてい

るのかは分からぬ。しかし最後にこう言つた。

「来てないって、話かと思った」

また、少しばかり苦笑して。一夜はその大人びた表情にどきりとしたが、きっと彼ならば万が一そうであつたとしても受け入れてくれるのではないだろうか、という信頼感を今なら持つていた。

そしてまたその笑顔に毒氣を抜かれて、「おやすみ」という彼の広い背中をただぼうつと見送つたのであつた。

・・・・・

さて次の日、源一は大学の図書館でインターネットを閲覧していた。

家にデスクトップのパソコンもあり、授業用にも一台、小型のノートパソコンを持っていたが、今日はそれを持っておらず中途半端に時間が空いてしまつたため、テスト期間中というのもあり彼は図書館へと向かつたのだった。

彼が見ていたのはいくつかの企業のホームページ。いよいよ就職のことも考え始めねばならない時期にある。高校生の時からアルバイトをしており、仕事仲間の知り合いが多い源一は、配達業から接客業から水商売まで正社員にならないか、紹介してやるなどと皆に冗談交じりに言われている。

それには彼を気に入つた男たちの本気も交じつているらしく、自分を信用してもらっていることは、彼もありがたいと思つてゐる。しかし反面、彼らから多くのことを学び尊敬もしているが、色々将来のことを考えると大きな企業で働いてみたいといつ夢も抱いてしまつ。

源一がそう思つるのは一緒に生きていくあの女に苦労をかけたくない、彼女よりも経済的にも社会的にも優位に立つて守りたいという意地が第一にあつた。また幼い頃から彼自身が家庭のことで苦労し

たり、一夜にずっと面倒を看させてしまった負い目もあった。

そう思えば金銭面の問題からも、やはり先日のように避妊をおろそかにするような行動は慎まねばならないと改めて思った。たとえそれが、やけに甘美な思い出だったとしても。

それはさておき、源一は煩惱を振り払うように首を「ぽき」と鳴らし、現実に戻る。

彼女があの市内の施設に勤める以上、源一の就職する場所の条件も制限される。長年よい条件のところに勤めており、給料も上がっているのだろう。彼女に仕事を続けさせてやりたいものだ。

しかし彼がそう思うことで、一夜も結婚はしたいが彼の未来に制限を設けてしまうのが心苦しいと心配していた。だが源一としては彼女と共に生きてることは絶対条件であるため、苦しいだとか足枷であるだとかは、全く思わないのであった。だから何を彼女がこだわっているのかすら、彼には理解出来なかつた。

それに就職の条件は結婚だけではない。実家を継ぐことや家族の借金や病気のこと等で就職先を悩んでいる同級生や先輩も、源一は見てきている。そんなことを言い出したら、きりがないのだ。

源一は一夜の言つそいつた「制約」まで含めて、彼女を選んだ。そう決めた以上、あとはその範囲で自分のやりたい希望を叶える。それだけのことだと彼は思つている。

それは親がいなかつたという事実と少し似てゐる。現状をしのごの言つてももう仕方がない。そこで自分がどうするか、どう出来るか、それだけである。

一夜が気のことではないのに。

彼女の気遣いは分かるがもつと信用してくれないかとも、彼は少し思つ。年の差が不安なだけで源一自身のことは信じてると彼女は言つが、それこそどうにも出来ない部分を気にされても困つてしまつ。

そんなにも出来ないことは忘れ、「俺」だけを信じろ そ

う言つてやればいいのだが、源一にはそれも照れ臭い。しかし言わないままでは不安にさせたままで、最近は恥ずかしくとも彼女が満足するようにしてやれと、吹っ切れたように直接的な言葉も言うようにしてくる。それでもきっとまた同じことを繰り返すのかもしないが……。

だが一夜を安心させるためにも、早く働きたい。目に見えるそれが、一番彼女の信用を得るに早い。

社会人になれば信じてもらえるだろうか、対等になれたと自分自身も自信が持てるだろうか。

そんなことを考えた後、源一は再び企業研究に専念した。いくつかのサイトを見て回っていたが、そこでふと思い付き、ある施設を検索する。

それは一夜が現在勤めている交流学習センターだった。

その19 青年よ、嫉妬を抱く？

さほど大きくはない規模の財団法人の運営。市の委託を受けて設立したもので、一夜の話や勤務条件を見ても給料はさほどよくはないが、準公務員のような扱いと公立に近い施設である。

だからこそ一夜のような年若い女性でも職が保障され福利厚生や諸手当もよく、源二をどうにか養えたのだろうと、彼も前から思つていた。

今年度も、来年度も大学卒業程度の条件で若干名の職員募集をしている。

今の時代、この施設にも就職希望者が殺到するだろ？。一夜自身もこうした職場に滑り込めたのは幸運だつたと苦笑していた。

源二の親しい先輩にはまだ内定取り消しや就職後、急に切り捨てられるなどの目に遭つた学生はいないが、職が決まつても安定の保障はされていない。それは己の努力次第な部分あるが、いくら頑張つても報われず現代社会のうねりに飲み込まれることもある。

どういう企業を、どういった観点で選べばよいのか……。

源二はその一夜の勤める施設　彼の通つていた高校の隣にあつた懐かしい建物の概要を眺めながら、頬杖をついた。

入社した企業がどういうことになるかわからないならば、いつそ彼のアルバイト先の先輩である奥原などが薦めるように今働いていれる店の正社員になるという手もあり、そうしている仲間もいる。しかしそれは日雇いの体系と変わらない。

確かに企業に雇われるよりは、こちらは人情で繋がつていてる関係なので、突然仕事を辞めさせられるということは少なく、強い連帯意識もある。だからこの不況でも、全員で一丸となつて力を合わせどうにか日々の収入をかき集めているというわけだ。

奥原などはそういうた働き場所をいくつも掛け持ちしている。決まつた女もいるにはいるらしいが、その荒稼ぎの方法で年を取つてからどうするのか。それは彼の人生があるので源一も尋ねはしないし、関与する気もない。問題は、自分と一夜のことである。

『水倉は頭がいーからなあ。目指せるんなら、上いけよ』

これは源一のアルバイト先の仲間 いわば「じろつきたちが、「元締」と慕う初老の男性からの言葉だった。源一も高校時代からの男・西脇には世話になつており、息子のよつに叱られたこともあり、彼から学んだことは大きい。

選択肢を広げられる道を選ぶようこと、これは教師からも言われてきたことだ。きっと西脇の言いたいことも同じことだろう。大企業を目指し自身に投資してもらつてそこでしか得られないスキルを身につけることも、その先に何があつてもいいよう、未来への可能性をひとつ手に入れることになる。

一夜や家族を守るために、たくさん選択出来る手段を持つていられるよう、高みを目指す。それがきっと一番後悔しない近道だろう。

若いんだから私なんかやめておいたらと彼女も彼を求めているくせにそんなことを言うのだが、もう約束は交わしたのだ。彼女とこれから家庭を築いて生きていく、家族の傍に居る。それが決定事項ならば、それを守る方向をそれなりに考えたい。そして女性だからと言つて、一生懸命頑張ってきた仕事を簡単に辞めさせたくはない。今の年齢でそう思うのはおかしいと、誰かに言われても構わない。頑固な彼はそう思つていてる。

後悔はしない。きっと自分はあの春の日から、家族に死なれ孤独になつた日から、そんな儂く甘つたれた夢を見ているのだ。それを、ただ叶えたいだけなのだ。そんな恥ずかしいこと、誰にも言

えないが。

それはさておき、その時源一の中にふとした仮定が過ぎつた。
いつその施設に就職したらどうなるのか、と。

無表情の彼だが、心中で思わず苦笑する。

何処の誰が結婚を決めている女と同じ職場で働くものか。彼女の立場を悪くするかもしないのに。第一、あの職場に勤めれば、仕方ないにしろ、昔彼女に言い寄つていた男に使われるかもしないのだ。そうなればそれなりに上手く働くが、やはり御免被りたい。

そうは言つても、確かにかなり条件のよい職場ではある。画面を見ては青年はひとり頷く。

源一とて彼個人の夢や希望がないこともない。あえて言つなら、今学んでいることで興味のあることを仕事にしたい。前述のとおり給料や手当、保障に変動が少ないことが何よりよい職場だが、仕事も多岐に及んでいるので、一夜のようになに児童関連の仕事に回されることもあるだろうが、源一の得意とするような施設管理や経理の仕事などもある。

逆に市の委託を受けているので営業などの業務はほとんどないようだ。やれと言わればどんな仕事でもするつもりではいるが、源一にとっては苦手といえば苦手な分野。また市内にずっと勤めることができれば、一夜や未来の家族と離れ離れになることもない。

どうしたもんかな、と彼は頭を搔く。

とりあえず彼女が働き続けられることを前提に、県内で仕事を探すとなれば意外と会社も選べないかもしない。もしくは近県で仕事を探し、やはり一夜を離職させてしまうか、それとも……。

そこで彼は、更にぼんやりとあの施設に思いを馳せる。

あの施設には稀に配送のアルバイトが入ることがある。先日、再

びその施設へ荷物を届ける仕事があり、家の近くで地理をよく知っているからと言い、源一はあえてその業務を請けたのであった。

意識はしていないつもりだが、どこかでしつかり意識しているのだろう。毎日顔を突き合っている女であるのに。それは強い独占欲かもしけなかつた。どんな顔で仕事をしているのかとか、少しばかり気になつていた。

通つていた高校の隣に建つ施設。源一がそこへ久しぶりに向かつたのは、約一週間前のことだつた。今回は一夜の担当している部署に荷物を運ぶわけではない。彼女が勤めるのとはまた別の事務所へと頼まれた物を運んだ後に、わざと児童館の窓口の前を通つてみた。照れ臭いのもあり、一夜にはあえてこの場所へ来ることを言つていない。

源一がちらりと中を見ると、受付の窓ガラスの向こうで彼女は眞面目に働いていた。

何か用があつたのか呼び止められ、今の同僚らしい若い男の前で笑つてゐる。彼も彼女に親しげに話しかけている。

一夜がぐうたらなふりをしていても責任感や正義感は中々強く、仕事にそれなりに取り組む女であることを源一は知つてゐる。だから警戒心も同様に強くとも、同僚とある程度本音を言い合い信頼し合わねば仕事にならない。それは源一もアルバイトで経験している。だから協力し合い、修羅場を共に乗り越えるうちに親しくもなるだらうことも分かる。

それに彼女は綺麗と呼ばれる部類に入る女だ。男なら一緒に働いていて悪い気はしないだろう。一夜と話す男の表情を見て源一はそう思つた。

そこで彼は自分の胸の内がもやもやとしていることに気付く。

一夜は源一の前でだけはへりりと力なく笑つたり、拗ねたり照れたりなど、色々な表情をする。もちろん楽しそうな表情もしてくれる……はずだ。

しかし今、その青年の前で見せているような、明るい笑顔はあまり見たことがない ？

源一はふとそんな気がしてしまった。

それは仕事の時にだけ見せるのだろう、愛想笑いと充足感が足し合わさつた笑顔。誰でも当然持ちうる、「外」に見せる笑顔ながら、何故か気分が悪くなり、結局彼女に気付かれる前に彼はその施設を後にした。

その日、施設に配達に行つたことを、源一は一夜に言わなかつた。彼が出会う前から彼女はあの施設で働いており、図書館などに行つた折には今までああした「働く」顔を見てきた。ずっと、彼女を見てきた。

その頃はまだ子供で、大人とはそういうものだと何も思わなかつたが、ここにきてふと、そんな彼女の知らない表情に何か砂を噛むような思いを味わつたのであつた。

その20 バッティング！

源二のそんな小さな秘密も知らず。ある日曜日、二人はホームセンターへと買い物に出かけた。

所帯臭い話であるが、食料品や日用品など一週間分の買い出しは平日忙しい一人にとっては重要事項だ。源二との付き合い方に一夜が慣れ、彼も精神的に落ち着いてきた高校生くらいの頃から、荷物持ちとして源二が借り出されることも増えてきた。

それでも予定が合わなかつたことが多かつたが、彼が大学生になつた今は平日にも空き時間があり、車での移動も出来るため一夜も彼を誘いやすい。

何よりも二人は一応「婚約者」だ。そして彼は成人している。もう何も恐れることなく対等に頼ることもでき、こうした日常を満喫していくよいのだ。一夜は口には出さなかつたが、彼や世間に對して気を遣わなくなつてよくなつてきたことには内心では嬉しく思つていた。

そうは言つても、これだけ歳の離れた若い「彼氏」を人に見られることがもう弟だとか言い訳をしなくともよい分、一夜には照れ臭く、誰にも会いたくはないという抵抗が起ころ。

相変わらず年齢のことを気にしている一夜だが、それでも少しづつ変化もしてきている。それが先日の素直に甘える様子にも見られるだろう。だからと言つていきなり年甲斐もなく、べたべたと甘えるわけでもないのだが。

そうした考え方もあり、本日は知り合いに会わないよう少し離れた場所にある、さりとて無駄にガソリン代を使わないよう近隣の都市のホームセンターへ買い物に出かけた。

そもそも一夜がアウトドア派ではないこともあり、一人で遊びに

出掛けことはあまりない。いつこうじがデータの代わりとなつていて。それこそ想いが通じる前と変わらない状況だ。

「変わっているね」と一夜は千菜などにも言われたが、一夜自身がこうしている方が楽しく自分らしくいられるので仕方ない。源一にもこんな形でよいかと尋ねたことがあるが、「別に」と大して気に入した様子もなく言われたため、自分たちはこれでよいのか、と彼女は思うことにした。

それに。中学生の時の両親の離婚や、その前からも両親が共働きで忙しかった一夜にとって、子供染みているが、こうした日々の何気ないことを「家族」と一緒に過ごせることはとても楽しかったのであった。

それに彼とは嗜好などの価値観も合つ。だから結婚までしようと思つたわけであり、そんな彼と出かければ、所帯臭い買い物でも慣れない場所に出かけて気疲れするよりずっと楽しく感じじる。

そのことは源一には言わない一夜だが、いつもどおりにこうりともしない彼を連れ出した。源一の性格上本当に嫌なら断るはずなので、むつりしていふことは気にならない。

しかしこうした日常も幸せだが、そればかりでも味気ない。からりと晴れた夏の空や、友人の話やテレビの中で楽しそうに遊んでいる若者を見れば、こうら一夜でもうらやましく思えてくる。というわけで先日のとおり、今年の夏は恋人らしく彼を旅行へと誘つてみたのであった。

だが一夜は性格上、賑やかなところで大騒ぎするよりも、まつたりと土地の物産や雰囲気を味わえる場所に行きたいと考える。おばさん臭いなあと彼女自身も思うが、昔からそういうた趣味があつたし、源一の方も若いくせにそのように見受けられる。だからこそ気が合つのではないか。

今日の買い物の目的は収納棚をひとつ見繕いたいというのもあつたが、その一泊旅行に必要なものを買いたいということもあつた。

・・・・・

源一に彼の車を運転させながら、助手席で一夜は今度は先日の飲み会でのことを思い出す。一緒にいた女性職員たちと、今年の夏はどこかに行かないのかという話になつた。「一泊で温泉でも」と一夜が答えると、「海外でも行つてくれればいいのに」と皆に笑われた。ある女性は一週間ほどかけて彼氏と外国へ旅行に行くらしい。見聞を広めることは確かに必要であるが、日々のやりくりに追われ貯金をしたい今はそういう豪遊には使いたくないと一夜は思う。それにそういう贅沢や「はじめて」は、新婚旅行とやらにとつておけばいいなどと考へて、一夜は赤くなつてしまつた顔をアルコールの所為にしていた。

一夜が源一の小さな心の動きに気付かないように、そんな彼女の心境を彼もまた知る由もなかつたが、既に旅行の場所も、一夜の希望で海辺の温泉と決めてしまつた。

一応、「婚前旅行」とも言えるが、長年同居している一人に一人きりの夜が「特別」という感慨はない。それでも一人でこのように泊まりがけで出かけることは初めてであり、口には出さないがお互にこつそりと楽しみにもしているのだった。

そこでわくわくしながらあれもこれもと必要なものを物色する一夜と、それを渋々といった様子で追いかける源一であつたが

「あ……！」

そのホームセンターで、とある売り場を通りかかった時だった。

一夜が突然驚いたような声を上げた。

「あー、鎌田さん」

そんな彼女に声を掛ける一人の茶色い髪の青年。

先程のとおり、知り合いに会いたくないという理由から、同じように中途半端に近場へと出掛けようとする人々は他にもいるだ

るつ。よつて「じつじう」と「も予想の範疇であったが……」。

驚いた表情をしている一夜の斜め後ろにはもちろん源一が、一夜の田の前には……同僚の青年・和田が、和田の横には一人の女性が立っていた。女性の方は一夜も見たことがある、今春入社した若い女性であった。

しまつた……！ 会つちゃつた……。

一夜は表情を失つた。すーっと背中を冷たい汗が垂れていくような感覚がある。

万事休す、だ。何も言わなくとも、和田には分かつたのではない。隣の男が一夜にとつて特別な男であると。確かに数年後には結婚する予定なのだから、堂々としていればよい。法律的に悪いこともしていない。……ただ、恥ずかしいだけなのである。

しかし見られたのが和田でよかつた、とも一夜は思つた。彼ならいくらでも口止めでき、頭もよく空氣も読める。下手に年嵩の上司や噂好きの女性たちに見られるよりはずつと運がよかつた。

和田も一緒にいる女性が彼女か何かで一夜も同じように弱味を握ればよいのだが、彼は女友達が多そうで、誰が本命なのか噂も多い。だからこの女性もどうなのが分からぬ。

逆に一夜の場合、こんな若い男と一緒に居れば、彼女の日頃の様子から「他の」可能性は考えてもらえないだろう。昔使つていた「弟だ」という言い訳も、きっともう通じない。今の自分の安心しきつていてる表情に、女としてのそれが表れている。

「海、行くんですよ、来週、皆で。その買い出しです」

しかし固まつていてる一夜に、和田の方からいつものように話し掛けってきた。

彼の隣にいる女性も、一夜の顔は何処かで見たことがあると思つていたらしい。和田の態度から同じセンターの職員だと確信したらしく、ぺこりと頭を下してきた。和田よりも明るい色の髪がさらり

と揺れる。

「ふーん、どこなの？」

一夜もまたあえて後ろの源一を無視して、和田と話を続けた。源一は察しのよい男だ。気配がしないので、もう遅いかもしれないがあえて他人のふりをして、何処かへ去つて行ったのだろう。

しかし和田から職場の青年たちで来週行くという海岸の名前を聞いた途端、彼女は古典的にもひっくり返りそうになつた。

行くとこ、同じじゃないかー！！

折角の初めての婚前旅行がどうしてこんなことになるのか。彼女は内心泣きたくなる。

その21 彼の心中、彼女知らず。

一夜たちの出発も同じ来週だ。しかも予約にあたって早期割引を使っている。変なところで節約したいと思うので、日程も変えたくない。まあ広い海岸、会うことはないだろと彼女は思うことにし、自分が来週そこへ行くことは彼には黙つておいた。

「鎌田さんも、一緒に行きますか？」

それを知らない和田は愛想よく笑う。

「いいよ。若い人たちで楽しんできて」

今一緒にいたあの若い男が、和田も知つてのとおり一夜にキスマークをつけ、浮気されたのではないかと悩んでいた相手だと、きっとばれたよなあと思いつながらも、彼女はあえてそれに触れず彼の社交辞令の誘いに苦笑で答える。

しかし内心では、大きなため息をついたものだった。

そして一夜と、和田と連れの女性は別れた。一人の姿が完全に見えなくなつてから、一夜は源一の姿を探した。

まだ必要なものは買つていないので、もうお互い此処に居ると分かつてしまつた以上、これ以上彼らに会わないようにしつつも買い物を続けよう。彼女はそう決めた。本当にまだ相手が和田でよかつた、と前向きに考えるようにして。

ほどなく一夜はベンチで携帯電話をいじつている源一を見付けた。

「ごめん」

謝ることなどないが、つい謝つてしまつ。自慢の彼氏を堂々と紹介できない自分が情けないと思ったからだ。

「職場の人？」

座つたままの源一に上田遣いで尋ねられ、一夜は頷いた。そして更に問い合わせられる。

「仲良いの？」

「え？」

あまり他人 一夜のことすら詮索しない源一に立て続けに尋ねられ、彼女は驚いたように聞き返す。

「そう、見えた」

源一はそう言つと笑うことなく立ち上がつた。一夜は彼の様子がいつもと違つと感じたものの、彼が何を考へているのか全く理解できない。

それは源一が既に和田のことをセンターで見かけていたことを、一夜は知らないからであった。彼女はきょとんとしながらも、先を歩き出す源一を慌てて追いかける。

「だつて、和田つちは千菜の代わりにきた人だからさ。毎日一緒に仕事してゐるし、それなりに世話になつてゐるし、話さないわけにいかないよ。変なこと言つふらしたりはしないと思うじ つて、何か怒つてゐる？」 こつちこそ明日から気まずくて困つてんのにさあ

一夜は前を歩く源一に向けて、大声にならないよう話しかける。彼はそれを聞くと、足を止めて彼女が横に来るのを待つた。

困るつていうのは、自分が一夜の婚約者だと知られたら困るのか？

彼女がそんなことを考へるわけはないが、一瞬穿つた見方をしてしまつた源一は彼女をじろりと見下ろした。

しかし一夜は、少々機嫌の悪い源一をわけが分からないと言つた表情で見上げている。その不安げな表情に、彼は自分が考え過ぎているのかもしれない、少し安堵した。

だが一夜はそんな源一の複雑な気持ちを、未だ知らない。彼は絶対に顔には出さない男だからだ。

嫉妬されるのはいいが、自分がするのは見苦しい。

そんな見栄を張る源一だが、既に十分そつした部分を一夜に見せ

てきている。未成年であつた頃は社会的な力不足をもどかしく思い、一夜の元上司の北條やいつかの同級生の男に嫉妬をし、その苛々を彼女へぶつけてきた。それは年上の彼女への甘えとも言えた。

その結果、やけくそのように己の想いを押し付け、告白にしろ初体验にしろ、源一は大人であつた一夜に少々無理矢理にそれらを受け入れてもらつたと思つてゐる。

その事を思い出すと恥ずかしさや悔しさが彼には蘇り、自分はもう大人になつたのだという自負とも重なり、もう一度と一夜にこんな嫉妬のような気持ちは教えてやるものかと決めていた。先日、一夜の職場のガラス越しに見た時に、先程の和田とかいう男に抱いた言い知れない感情も絶対に言いたくないと思つてゐる。

今度こそもう一夜には甘えない。甘えさせ優しくしてやることはあつても、昔のように彼女に気持ちを押し付け、困らせたり無理に笑わせることはもうしたくない。そのように意地になる時点で、もしかしたら自分はまだ子供なのかもしれないが……。

そんなことを心の内で思つた源一は軽くため息をつくと、一夜に尋ねた。

「じゃあ、挨拶くれえした方がよかつたのかよ」

一夜はきょとんと彼を見た。「それ」を想像して、今度は彼女の方が照れてしまう。

しかしそれこそ大人としての常識かもしれない。そう出来ないと、いうことは、若い男にうつつを抜かしている自分を蔑まれたくないと思うからだろうか。

優しい源一は、一夜の気まずい気持ちも分かつてくれているだろう。しかしこそこそとしているのも、源一に失礼にあたるのではないか。誰よりも大切な相手なのに。

そうは言つても、

「い、今はまだ、ちょっと……」

一夜はぼそぼそと答えた。やはり自分の私生活をあえて職場に赤裸

々に言いふらすことは、しない方がよいだろう、と思つからだ。特
殊な関係なら尚更、職場の人々の好奇の目に晒されてしまいそうで、
それが恐いのだ。

結婚したら、いいのかもしないが……。その時は守るべき
家庭を持つのだし、もう怯えてもいられないのだし。

一夜はそれを上手く言えずに口にもると、自分の足の爪先を見た。
来週の旅行に履いていくために買ったばかりのサンダルは、思った
以上に履き心地がよく、そこから出ている指をもぞもぞと動かす。
一夜の方はこの年でも「彼氏」を紹介することが恥ずかしくてど
もつてしまいそうになるのに、「挨拶してもよかつた」と言つ源一
は毅然としていられるというのだろうか。一夜は相変わらず表情の
変わらない彼を見上げると呟いた。

「源一は、大人だねえ……」

今度は彼がきょとんとしたように一夜を見る。

一夜が思つてゐるほど、俺はそうでもねえぞ。

あの男の前で、さつきもまた一夜は笑つていた。やはり源一には
見せない「職場の顔」で。自分はそれ以外の表情をいくらでも見て
いるのに、家族に見せないものがあることも仕方ないのに、気に入
らないなんて。そんなことを考えている人間が？

一夜は時々彼にその台詞を言つ。確かに彼女には、ずっとそう認
めて欲しかつた。だからそう言われて源一も悪い気はしない。むし
ろ、嬉しい。

しかし彼はこの嫉妬のようなものを、一夜には絶対に言いたくな
いと思つてゐるのだ。一夜が自分を大人だと思つてくれているなら
ば、そう思つたままでいて欲しいなどと虚勢を張つてゐる。

彼のそれは、覚えた「大人」のずるさなのか、それともまだ「子
供」の意地なのか。

「どうだかな」

一夜の言葉に短くそう答えると、源一はその顔を見られないよう彼女の前をまた歩き出した。「どこ行くの?」と一夜が心配そうに追いかけてくるので、彼女が欲しい欲しいといっていた、収納棚のある売り場へと連れて行く。

どうせ自分がこれを持ち帰り、組み立てと片付けまでをさせられるんだろうな、と源一は思いながら、色々と注文をつける一夜のわがままを聞きつつ、彼自身が組み立てやすく収納効率がよいものを選んでみる。

そんな何気ない、しかし源一の方がほんのりと胸に小さな嫉妬…に似たもやもやする気持ちを抱えたまま休日を終え、次の週、初めての小旅行へと二人は向かったのであった。

その22 夏だ！海だ！オトナだって青春だ！？

「海だーー！」

晴れた空、そよぐ風。昭和時代の歌謡曲でも聞こえてきそうなどかな海岸へと、真夏の休日で一夜たちはやってきた。三十路だろうが、わくわくするものはするのである。

風は穏やかに波を起こし、耳に心地よい音を届ける。県内でも一人の生まれ育った地方から海沿いの地方までは遠く、こうして足を運ばない限り水平線や大海原を見ることはできないのだった。日頃建物の中で仕事をしている一夜は、この雄大な景色の中で潮の匂いを嗅ぐだけで癒されていく。

しかし隣の仏頂面の青年にそこまでの感慨はないようだった。毎年夏は海の家のような場所でアルバイトをしている源一にとって、海は見慣れたものらしい。

そんな源一といえば一夜の楽しそうな反応にほっとしているかどうかは分からぬが、歓声を上げながら駐車場から海を見下ろしている彼女の斜め後ろで、両手をポケットに突っ込み無表情で立っていた。

「早く海行こうよー」

一夜がぐるりと源一振り返り、はいはいと言つよつに彼は頷く。インドア派で面倒臭がりで、干物と形容されるほど世の中の多くの女性が興味を持つことに無頓着である一夜だが、時として中性的な子供のようにはしゃぐことがある。

そうした態度にも心理的な裏付けが考えられそうだが、大人の一夜に年下の源一が振り回されたり、世話を焼いているという関係に昔からなっていることは確かだった。

楽しみにしていた割には今朝も彼女は源一に起され、彼が用意

してくれた朝食を食べる事から一日が始まった。しかし出発を控え、途中にある道の駅や高速道路のサービスエリアなどで当地の物産を食すのも地方旅行の醍醐味だと一夜は言い切り、朝食の量もほどほどに留めておく。どこぞのおばさんの慰安旅行のようだな、と源一からぼそりと突つ込みを入れられ、テーブルの上のティッシュペーパーのボックスが宙を舞う。

行くと決めたからには、精一杯彼女流に楽しむつもりであった。ばばくさいと言われても、行くと合意した時点で源一にも想定出来たはず、と今日は一夜もこれ以上気にしないでおくつもりだった。朝が弱い彼女は今朝も源一より随分ゆっくりとした起床であったため、ばたばたと起きてから慌てて旅行の支度をする。そんな一夜を尻目に、既に昨夜のうちに荷物をまとめていた源一は、のんびりと朝のコーヒーを飲んでいた。

こうして彼を待たせ、あれがないこれがない等々の大騒ぎを終え、ようやく一人は源一の車で出発した。

道中も日々の暮らしど同様に、一夜は思い付くことをとりとめなく話し、源一がそれに言葉少なに相槌を打っている。それが途切れればしばらく無言になるが、また会話が始まつていく。カーステレオの音楽をバックにして。

世間は夏休み中で人の多いサービスエリアなどにも一夜の宣言どおり立ち寄ると、いつぞやの花火の屋台のようにふらふらと買い物に走る三十路女を源一が追いかける羽目になる。無駄金を使いすぎないよう、しまり屋の源一は一夜にちくりちくりと言つのだが、既に彼女は無駄な土産を買ってしまっている。

寄り道をたつぶりとした後、早速購入した地元の伝統工芸品とかいう木工のヘビのおもちゃで、これまた物産のハンパンを呑えた一夜は、助手席からマジックハンドのようなそれをカタカタと伸ばして源一を苛めてくる。「危ねえだろ！」と彼が彼女の悪戯に怒鳴りながらも、徐々に宿泊地へと近付いていく一人。

更に宿までの途中、折角だからと水族館など海ならではの施設にも寄り、ニシンの大きなぬいぐるみやサケの置き物などまたどうでもいいものを一夜は購入し、五時間近くの行程をかけて一人は午後三時過ぎ、目的の海岸へと辿り着いた。

そして冒頭の一人、となるわけである。

仕事をしているとこれだけの時間はとても長く感じられ、また普段は出不精でもあるのに、と今日の時間があつという間に過ぎたことを一夜は改めて不思議に思う。

友人の千菜が前の恋人と別れた時に、「よく長年一緒に暮らしていて、源二くんと会話がそれだけ続くね」と感心されたことがある。彼女も今の夫とはそんなことは思わないようだが。

一夜としてはただ、源二が子供だった頃からとにかく彼に非行に走つて欲しくない、寂しい想いをさせたくない一心で、馬鹿みたいにしゃべり続けてきた。元々一夜も口数が多い方ではなかつたが、そうせねばならないという気にさせられた。源二の性格から彼のことを無理に聞き出すことをせず、彼女の思つていることをただ全て口にしてきた。

上手い会話が思い付かなかつたので、友人との出来事や世の中に対する想うこと、時には仕事の愚痴など日常のことを話す。源二がそれを楽しいと思っていたかどうかは分からぬが、彼女が裏表のない、正直な女性であることは伝わつたようだつた。

結果的に人間不信になりかけていた彼が一夜を信用するようになつたのは、そうしたことからかもしれない。源二にはそれが居心地よかつたのだろう。

一夜にとつても黙つて話を聞きながらも、自分の意見は持つている源二はとても話しやすい相手だつた。だから会話が弾んでいるわけでもないが、自然体で話したいことを話せて、黙りたい時に黙つていられるという関係が一人の間で長年続いていた。

そうした理由で片道の五時間が早く感じられた一夜は、これならまた旅行に来てもいいかもしれないなどと既に思っていた。青い海を眺めてそんなことを考えていた彼女に、

「とりあえず、荷物置いてこようぜ」

自分が楽しむよりも、彼女の世話を焼いたり楽しそうな顔を見ることに喜びを覚え、合理的な方法を考えることが趣味だという源一は、朴訥とそう提案してきた。

「わかった」と機嫌よく一夜は振り返る。今日は左側でひとつにまとめている髪が、胸の上でたわみ、多めに取った右サイドの後れ毛が風に舞い上がる。白い麻のスカートもふわりと揺らした一夜は、相変わらずTシャツにジーンズという飾り気のない姿の源一に、とことことついていく。

じつした日常の取るに足らないことでも、源一の助言とおりにすればとりあえず大きな間違いはない。そういう相手と同居しているのは何かいいな、とは恋愛関係になる前から思っていた。

……だから十も年下でも彼を頼りにし、好きになってしまったのであり、逆に自分なんかのどこがよいのかと彼女は思うのであつたが。

・・・・・

そして二人は今夜泊まる旅館へチェックインした。これまた折角ということで適度に値段をかけた和室の畳の匂いが、フローリングの家に慣れた身に気持ちいい。そうした「非日常」もまた、一夜を童心に帰らせている。

「温泉も入りたいけど、まずは海行こう

彼女が無口な源一の都合を聞かず、多少強引に振り回すのも昔からだ。

恋仲になつたことだし、もう少し気を遣つたほうがよいのかと悩

んだこともあつたが、今までどおりの自然な姿であるべきだ、彼も自分もそんな関係を望んでいた——一夜はそう思うことにし、傍若無人ぶりを貫いている。無論、そんな態度は源一限定であるが。そして彼がそれに付き合ってくれるのも、この八年間ずっとしてきたことだった。それこそ、彼も自然体であると思いたい。

荷物を置いた後に、二人はもう一度海岸へと降りた。白い砂が午後の熱を反射しており、一夜が新しいサンダルでそれをさくりと踏むと、底を通して熱さが伝わってくる。

「暑いなあー」

そう言つて額に手をやる一夜。一応日焼け止めも塗つているが、更にUV対策のために薄いパークーを羽織つている。

「泳ぐんじゃねえの？」

彼女の服装を見た源一が意外そうに尋ねてきた。そういう彼もジーンズのまま、泳ぐつもりはないようだが、あまりにも彼女が海に行きたいと言つていたので、泳ぐつもりだろつと思つていたらしい。

「いいよ。もうそれだけの体力がない」

「一夜は苦笑して首を振る。

「なんだ、そりゃ」

彼女の言葉に、背後にいる源一も苦笑したようだった。

今回は元々泳ぐ気はなかつた。泳ぐこと以上に流行の水着を選ぶのも、周りからどう見られるのかとこの三十路の肉体を心配するのも一夜には煩わしかつた。

それに今日は同じ海岸の海水浴場の方に、和田を筆頭に一夜の職場の若者たちがいるらしい。ここまで来ておいてプライベートな時間のバッティングは、さすがに避けたいと思っている。

よつて二人が現在ぶらついているのは、海水浴場ではない場所だつた。しかし立ち入り禁止区域ではないので、人の姿もちらほらと

見える。

穏やかに打ち寄せる波打ち際に一夜は少しずつ近づいていき、源二がその後ろに続く。

「源二こそ泳がなくていいの?」と一夜は尋ねようとしたが、彼は一夜がしないからという理由でそうしないんだろうな、と察した。たとえ彼女が泳いでいたとしても、どっかりと座つて父親のように荷物番でもしていそうである。

話を聞けば彼は泳ぐのも嫌いではないらしいので（海の家のアルバイト先では時々泳いでいるらしい）、逆に一夜が望めば海水浴にも付き合ってくれただろう。

一夜は自分よりもずっと若いくせにいつも彼女に気を遣い、自分の意思を強く主張しない源二を心配し、彼自身の気持ちはどうながとこれまでも幾度も尋ねてきた。

確かに将来の話などもすれば、彼なりにやりたいこともあるらしく、意志は持っているようだ。だが何故一夜の希望ばかりを優先するのか。彼が「気にするな、そうしたいからしている」と言い切つてしまつため、こうした関係である以上、一夜は彼を信じるしかなくなつてしまつ。

多分自分がこうして楽しそうにしていることが、源二にとって嬉しいと感じてくれるのだろう。一夜はそう結論づける。自分ばかりが甘えていていいのかと心配になりながらも、幸せのぬるま湯に浸かつていい。

あーあ、若いくせになあ……。

優しい波の音の中、一夜はサンダル履きの足の甲に薄く海水が被つては引いていくのを見ながら、その冷たさを心地よく感じていた。心の中の咳きに反して、不思議と穏やかな気持ちになる。

そこで彼女は唐突に「えい」と水を蹴飛ばすと、仏頂面で大人ぶらうとする隣の青年にかけてやる。何すんだよ、という顔で源二

は一夜を睨む。一夜はにんまり笑うと、彼の服が濡れるのも気にせず彼に向かつて水を蹴り続けた。

気持ちがよかつた。舞い踊る水しぶきがキラキラと光る。

今度は片手で掬つて、更に源一に海水を飛ばしてやる。彼の髪から肩へと、一夜にかけられた水の滴が点々と落ちていく。そうされた源一は益々仏頂面になる。

と思うと、ざばり、と今度は一夜の頭から体全体に水を浴びせられた。源一がジーンズの裾を捲くりもしないでスニーカーのまま海に入ると、ポケットに手を入れたままの姿勢で水面を大きく蹴飛ばしたのであった。それは見事な水柱を上げ、彼女の方へとヒットした。

「このやうひ……っ

一夜は怒った口調でそう言ひ割には嬉しそうに笑つていた。源一も口の端を吊り上げて一緒に笑う。

それから彼はしばし彼女からの逆襲に遭うのだが、上手く身を引いてかけられる海水を交わしていく。わざわざ海に来たいと言つたのだから、水で遊ばねば意味がない。そう主張するかのように一人はしばらくの間、子供のように無邪気に笑つてじやれあつていた。

「あ……」

そこで一夜はふと何かに気が付いた。今まで水を掬つていた右手を心配そうに見る。

「何

短い髪にまとわりつく水滴を頭を振つて払いながら、源一が問い合わせる。

「なんでも、ない」

一夜はまた笑うと、今度は左手で水を掬つて彼にぱしゃりとかけてやつた。

三年前、初めて二人が一線を超えたクリスマスの夜に、源一が夜に贈つた銀の指輪が、今し方背中に隠した彼女の右手の薬指に、水面の光を反射してきらめいていた。

何をするでもなく、いい大人が一人、浜辺で戯れていた。互いに掛け合つた海水で髪も服も全部濡れ、夏の強い日差しに乾きかけているが、服の内側に残つた湿り気は肌に不快感を与えている。そのうえ乾いた手足も、塩が残り引きつたようになってしまつていて。一夜は自分の腕をペロリと舐めた。やはり、ショッパイ。髪を靡かせた風を吸い込めば、磯の香りに海に来ていることを改めて実感する。

二人の横を同じ浜辺で遊んでいた小学生たちが、笑い声を上げて走り抜けていく。子供たちは濡れた二人の大人を笑顔のまま何気なく振り返り、また前を向くと両親を追いかけていった。

恐ろしく平和な風景。今日はそれを満喫してよいのだ。

一夜は空に向かつて伸びをすると、濡れた黒髪をほどきながら源一を振り返つた。

「ちょっと気持ち悪いからさあ、まだ早いけどお風呂入りに行こうよー。折角奮発して温泉旅館にしたんだからさー」

それこそ家計に余裕もないため、温泉と料理と海をのんびり眺めることだけを目的にこの旅館を選んだのだ。これは源一が好きな宿をとれと言つたため、一夜がそう決めた次第である。

源一は短い髪に光る水滴をがしがしと搔いて払いのけながら、一夜の提案に「ん」と短く頷いた。

「夏だしさ、お風呂出てからまたどつか行けばいいじゃん」

一夜は歩き出しながらそう付け加える。今回の宿の近くには、有名な観光地や遊べる場所などない。海水浴場と温泉が売りの地方であり、あえて言えば地元で有名な神社がある程度だ。おそらく温泉街をぶらりと巡り、謂れもよく分からないご本尊に手を合わせて帰るくらいだが、海辺の街の夕涼みというのもまた乙だらうと一夜は

楽しみにしている。

若いくせに同じような趣味の二人はそうすることに決めると、濡れた足で砂を蹴りながら宿へと戻つていった。

・・・・・

苔の匂いがするような山の中の温泉もわくわくするが、眼下に海が広がる開放的な温泉もまた気持ちよいものだ。女性用の露天風呂で一夜は岩に両肘をつくと、息をふうっと吐き出して身体の力を抜いた。一人きりの広い湯船。浮力に身を任せれば、かけ流しの温かい湯が白い肌身を包み、心地よさにうつとりとする。

「あー……。極楽」

今年三十を迎える女は、それこそ蕩けたような笑顔を浮かべた。彼女にとっての幸せとは、まさにこうのことなのである。

自分が何かを得ることで、人に褒められたり満足したりしたい。一夜はそういう目的での投資を殆どしない。たとえば、服飾や趣味や自己啓発などだ。人付き合いに必要な最低限のことは補うもの、そういうた面倒臭がりなところが彼女が「乾いている」と言われる所以であろう。

逆に同じ貯金ならば、こうした刹那的な楽しみの方に費してしまう。……とは言つても今回の旅行は、源一と様々な思い出を作りたいと、結局は俗物的な目的があつてのことだが。

しかし今日一日の自分のはしゃぎ方からしても、源一はよくこんな女に付き合つよな、と一夜はまた不思議な気分になる。

だがおやじ臭いと彼を表現するように、人の多い賑やかな場所ではしゃいでいる源一も想像がつかない。そもそも彼をそういう風にしてしまったのは、もしかしたら思春期の頃から彼を育てていた自分の嗜好の所為なのか。そう思った一夜は、思わず裸の柔らかな

胸の前で腕を組み、湯船の中で胡坐をかく。うぬぬと悩むように唸りながら、遠くに霞む午後の大海上を上目遣いで睨んだ。

時間が早いためか、この露天風呂には先程まで熟年の女性が一人ほど入つてお喋りをしていたが、今は誰もいない。内湯でも一人ほど姿を見たものの、まだこちらに来る気配はない。後の予定もなく最も気を遣わない相手との一人旅なので、一夜はのんびりと入浴を続けていた。

こうした時間は何も考へないでぼうつとしていた方がリフレッシュになるのだが、浴場で一人きりになつたことから、暇になつた彼女も色々と思いを馳せてしまうのであつた。

温泉と言えば、と一夜は昔のことを思い出す。短大時代の同級生との会話で、彼氏とデートに行くなら何処がよいかという話になり、一夜が「温泉とか」と答えたところ、友人の女性たちに「若いのに」と笑われたことがある。そして更に友人の一人が言った。
『温泉なんて、彼氏と一緒に居られないからつまらないじゃん』
しかし一夜にしてみれば、一生一緒に居たい相手だからと言って、四六時中傍に居たいわけでもないのだ。

好きなことを一人で心行くまで体験した後に、一番信頼出来る相手の元に戻り、そこで感じたことを共有し合つのが楽しい　孤独を愛しながらも寂しがり屋である一夜は、そう思つてゐる。こんなおかしな女と一緒に居たがり、それを丸」と受け入れてくれる男にはそうそう出会えないだろう。だからこそ彼女にとつて、源一の傍は居心地がよいのだった。

しかし彼は元々そういう人間だったのか、それとも一緒に暮らすうちに無垢な少年を自分に都合のよいように洗脳してしまつたのか。そう考へると、彼の人生をも左右してしまつたようで一夜はやはり若干の罪悪感すら覚えるが、この出会いには素直に感謝したいとも思う。

源一はこういふの、嫌じやないのかな。

そんな考えも浮かんだが、やはり意思の強い彼は嫌なら大人しく従つたりしないだろう。そう考えた一夜は苦笑すると、再び松の向こうに広がる青い海へと視線を動かした。そしてそういえば、とその昔の会話の記憶からこんなことも思い出す。

デートをするなら温泉、と答えて呆れられていた一夜であつたが、別の誰かがこう言った。

『でもさ、温泉なら彼氏と一緒に風呂入ればいいじゃん』

女の子は得てしてそういう話題が好きである。まるで一夜が最初からそれを目的としていたかのように、彼女たちは、きやあ、と盛り上がる。

一夜は自分の発言が誤解を招き、おいおい、何考えてるんだ！と呆れるやうに焦るやらで、慌てて弁明した。本当は仲間も誤解と知つていて、生真面目な彼女をからかおうとしているところもあつたのだが。

それはもう十年も前の、源一と出会つよりも前の話であつたが、その時と一夜の考え方が変わつていないので、本当に恋人と温泉に来る日がやつてきた。そしてその時からかわれたこともまた、冗談ではなく現実味を匂わせている。

一夜は次に、つい先程の温泉に入る前、密室で源一と入浴の準備をしていた時の出来事を思い出す。

宿泊する部屋にも浴室はあつたがそれはユニットバスであり、温泉に入るためには大浴場まで行かねばならない。部屋のパンフレットで温泉の効能などを確認していった一夜は、温泉や旅館の説明を熟読し、思わず「へー」と呟いた。源一の視線が彼女へと送られる。

「この旅館、家族風呂とかもあるんだねー」

備え付けのパンフレットには、貸切に出来る小さな個室の温泉が

この旅館内にいくつがあると書かれていた。檜作りのものや釜の形の風呂桶など、同じ泉質でも室内の様子が変わればまた気分が変わり、何より個室なので他人に気を遣わなくてよいところが魅力だ。

食べ物と宿にしかお金を掛けてない旅行だけあり、それこそ温泉を楽しまねばと一夜がわくわくした様子で「後で入りたいかも」と言つと、不意に後ろからそのパンフレットを覗き込まれた。

振り返るとやや近いところに源一の顔があり、そして一言。

「一緒に、入る？」

……一夜が真っ赤になって声にならない悲鳴を上げながら後ずさり、辞退したのは言つまでもない。

そんな出来事を思い出し、彼女は湯船に頭から潜りたい気分になる。確かに温泉でデートと言えば友人の話ではないが、そういう楽しみ方もあるのかもしれない。

ちなみに一緒に暮らしていくも、源一と風呂に入ったことは殆どない。婚約を決めた夜、激しい性交の後にぐつたりとした身体を流してもらったことが一度あるきりだ。脱衣所で風呂の前や後に襲われたこともあつたが、入浴自体は一夜が湯船が狭いからと断つたため最近は誘われることもなくなつていた。

もちろん、理由は狭いからだけではない。それこそ友人の体験によれば、「そういう目的」だけでなく一緒に入るのは普通に楽しいよと教えられたが、そんなプライベートな時間まで相手と共にするというのは、一夜には恥ずかしいような煩わしいようなイメージがあり、そうしたい気持ちを理解出来なかつたのである。

そして冗談かもしれないが、誘ってきた源一もまたそういうことに興味がある一人の男のように感じられ、やけに照れ臭いような気もした。

……でも家のお風呂と違つて大きいし、温泉全部入りたいし、折

角一緒に来たんだし、源一もどうやってお風呂入ってるんだろうとか思わないでもないし、こういう場所なら……変なこともしてこないだろうし。

少しばかりの好奇心からそれもいいかも、と思わず想像した一夜は、何やらぼうっとのぼせてきてしまい、急いで湯から上がるにした。また明日までもう一度入浴するつもりだが、大きな海を名残惜しそうに振り返る。しかし無人の脱衣場で身体を拭きながら、またふと思う。

今夜つて、「する」のかな、と。

もう避妊をしないような行為は避けたいので、一夜が避妊具を管理することに抵抗がある以上、源一が必要なものをここまで持つてきたかどうかによるが。つまり源一にそのつもりがあるかは、まだ分からぬ。間隔だけは確かにまた一週間ほど開いている。

温泉の効果か、水気を取った肌を撫でればいつもよりもつるりとしているような気がし、ほんのりと硫黄の匂いがした。確かに今日ならば、三十路の身体でもまだましに思つてもらえるかもしけないが、この独特的の腐臭は舐めたら変な味がするんじゃないだろうか、などと一夜は心配になる。

そこで彼女ははつと我に返り、頭の中の煩惱を吹き飛ばすように、扇風機のツマミを「強」の位置に回した。

・・・・・

入浴後は一人して新しい服に着替えた。そしてまだ暑さの残る夕暮れの街に散策へと出掛けた。

他愛ないことで笑い合いながら、田頃の忙しさも忘れ、ゆっくりと時間が過ぎていく。まるで現実なのに嘘のようだ。こうした平穏と幸せを一人はずつと求めていたのだが、これでいいのかと一夜は

ふと恐くなる時がある。

そういうた時は相手を見上げて、見つめ返され、それでも不安ならばその手に触れて、ほつとする。そんなことを繰り返していた。そんなしんみりした感傷も、お待ちかねの夕食が出る頃にはすっかりと吹き飛んだ。高くつくが部屋出しの夕食を頼んだので、会席料理が次々とテーブルに並ぶ。

「まあ、一杯どうだい」

一夜はまるでオッサンのように、二十歳になつた婚約者に冷えた地酒の瓶を傾いた。

彼と飲むのはこれが初めてのことである。源一は表情を変えることなくそれを煽つた。

色とりどりの海の幸。一夜も源一もそこまで食につむきの方ではなく、黙々とそれらにがつつき堪能していたが、「こりつこりつ」ところで飲むと、お金掛かるよねえ」という一夜の提案から、今はほどほどにしておいて後で街か部屋で飲み直そうと言つ話をした。

実際に酒を飲んでいる源一を見にしたことがないので、今日は飲み比べでもしようかと彼女は内心ほくそ笑む。

まだ外が明るい六時過ぎであつたが、その時、ぱあん、と外で空砲の音がした。その音に反応して窓に視線をやつた一夜に、料理を運んできた仲居の女性が笑つて教えてくれた。

「今夜は地元の神社の納涼祭で、花火が上がるんですよ」

どうせ部屋に居てもする」とはない それこそ、身体を重ねるくらいしか。

今年はまだ花火を見ていないと、彼と花火に行くのも二年ぶりだということから一夜は食事の後に行こうと源一を誘い、彼もまたその誘いに無言で頷いた。

後で行かなければよかつたと後悔することになるとも知らず、夕食後、ほろ酔いの二人は夏の宵祭りへと連立つていったのだった。

その24 バッティングを切り抜ける方法。

海沿いの道を、二人はほろ酔い気分で神社へと向かつた。宿の浴衣には寝る時に着替えようと外出着のままで。

地元の人々の群れは同じ方向へとぞろぞろ向かっていく。都会の街の騒がしさとはまた違った慌しさに、一夜はわくわくしてくる。隣の源一を見上げて饒舌に話しかけるが、彼は酔つてもやはり態度が変わらずスタスターと歩く。

神社そのものは海沿いにはない。海が見えなくなつたところで、鳥居が現れ、大きな建物が見えてきた。

「神様自体は海の中にお社があつて、そこに祀られているんだって」宿で渡されたパンフレットを見ながら一夜が一人で解説している。国文学科に所属していた彼女は、実はこういった謂れの類を調べること好きな方だ。

源一以外の誰かとの旅行では、ぼうつとしているうちに人任せになつてしまつ一夜であつたが、源一と一緒に時は彼女の方がこうして現地の文化を調べたり、リードする形になつていて。これは彼女が無口な彼を引き取つてから、彼女のペースで生活が始めたこともあるだろう。

一人が神社に到着する頃には、既に花火が始まつていた。

三年前に一人で行つた、隣の市の花火大会はもっと大規模なもので混雑しており、何より会場全体が雑然としていた。今夜のそれも小さな規模ではないが、全体的に落ち着いた雰囲気を醸し出している。

業者や若者たちがパワフルに競り合うイメージの都会の花火大会とは違い、地元の人々が一体となつて盛り上げ、興味を持った観光客などがその空気につれ堪能している、そんな優しい祭り囃子が聞こえてきそうな夜だつた。

「わー、あがつたー」

子どものように一夜は大きなスター・マインを指差す。昼間あれだけはしゃいで満足しているのか、もしくはアルコールで足元が覚束ないのか、酔つた一夜の暴走を源一も覚悟していたが、意外にも彼女は大人しく花火を眺めていた。

人混みに押し流されそうなの混雑ではない。だから照れ屋の二人が手を繋ぐことはなかつた。しかし酔つた一夜の手がぴくりと期待するように動いては、花火の方を指差す。その隣でごつごつした手も迷うように動きかけては、ズボンのポケットに入れられる。

三年前はまだその想いすら言葉にしていなかつたため、手を繋ぐだけで胸が苦しかつた。逆に手を握ることくらいしか許されていなかつた。現在は身体の関係を結び、婚姻関係すら約束している。だからこそこうした些細なことや、人前で触れ合つことが恥ずかしく、まるで逆に意識し合い触れることが出来ずについた。

しかしそれが功を奏した。

花火の音。祭りのざわめき。それらに反応してきょろきょろと首を動かしては、「きれいだねえ」と隣の源一に話しかけている一夜であつたが、

「……あ！」

ふと数人の若い男女とすれ違つた。その先頭を歩いていた男と一夜の眼が、ぱちりと合つ。気が付けば、彼と一緒に歩いている若者たちも見覚えのある顔ばかりであった。

……わ……忘れてたー！！！

ほろ酔い気分も何処へやら、一夜は真つ青な顔になつて慌てた。先頭を歩いていたのは、同僚の和田。先日ホームセンターで会つた時に、同じ海岸に遊びに来ることは聞いていたが、まさかこ

んなところで会うとは……。

一夜としては海水浴場へは行かないつもりだったことと、彼らが泊まりがけで来て、しかもこのような地味な祭りに来るとは思つていなかつたため、すっかりと忘れていた。否、意識的に忘れるようになっていたのだ。

しかし他に遊ぶところもない田舎なので、和田たち一行は夜の暇つぶしに唯一のイベントへと足を運んだらじい。

初めての源一との旅行なごと、一夜の足元がショックでがらがらと崩れしていく。

流石にもう誤魔化すことも逃げ隠れも出来ない。一夜はここへ旅行で来ている 隣の若い男と一緒に。これは確かな事実であつた。とりあえず源一がそれほど童顔ではないことだけが救いだつた。十歳も年下の男子大学生とまでは見られないかも知れない。とは言つても年の差は明らか。結婚すれば知られるだろうが、それでもまだ詮索されるのは嫌だつた。

一夜が固まつて冷や汗すらかいでいる様子と、数度見たことのある和田の表情から、源一も彼女の心境を悟つたようだつた。

また驚いているのは一夜と眼を合わせている和田だけでなく、先日ホームセンターで和田と一緒に居た若い女性や一夜と仕事で面識があつた青年なども、「え?」という驚いた表情で一夜と源一を見ている。

非常に重苦しこの空氣に、一夜は自分が油断してしまつたことを呪い、消えてしまいたくなつた。

それでも彼らより年上になる者としては、ここで逃げ出すわけにもいかず、せめて会釈くらいしなくてはいけない。後でどんな噂を立てられようとも……。

一夜が泣きたい気持ちで、そうしようと思つた時だつた。

隣に居た源一が、ずい、と半歩、一夜の前に出た。

そして先頭で一夜と顔を合わせている つまりほこのグループ 旅行の中心となつてゐるであつ、茶髪の和田に向かつて一言。

「いつも、一夜がお世話になつてます

」

源一の突然の、しかし堂々とした行動に絶句して彼を見上げる一夜。

だが彼はいつもどおりの無表情で、頭は軽く下げてゐるもの、特に慌てる様子も媚びを売る様子もない。あくまで自然に、家族であり婚約者である同僚へと挨拶をしていた。

無愛想な源一がそんなことをすることは思わなかつた一夜。アルバイト先などでこゝした処世術を習つたのか。しかしこの気まずい空氣の中、若い彼にそんな口火を切らしたのも悪い と一夜が口をぱくぱくさせながら「いや、これはその……」と言いかけた時、

「あ、こちらこれ。お世話になつてますー。『この前』はどうもー」和田もにやりと笑つてそれに応じると、まるで旧知の仲のように源一に軽く頭を下げるではないか。

和田の方が年長になるのだが、彼にとつては源一は先輩の「彼氏」に当たるため、彼は対等な態度と遠慮した態度が混在した様子で首の後ろに手をやつた。

「同じ海岸に来るなら、言つてくれればよかつたじやないですか」和田は固まつてゐる一夜に向かつてそう笑いかけると、彼よりも高いところにある源一の顔とを交互に見た。そして更に質問を續けてくる。

「どこに泊まつてゐんだつけ?」

「国道沿いの、美船旅館つてところですけど

「ああ、俺らと逆方向だねー」

そのうえ一夜の驚愕もよそに、初対面同士である源一と和田でそのまま会話を進行するではないか。

愛想のない源一と、逆にやたら愛想のよい和田。性格も合わなさそうな二人が、何故この状況で知り合い同士のように話をしているのか。

「じゃあ、今夜一緒に飲むにもちょっと遠いかな……って、どうします？」

そして和田が悪戯っぽい表情を浮かべて、今一度二人を見比べてそう誘つてくると、

「どうする？」

と源一も一夜にしれつと聞いてくるので、恥ずかしく困惑している彼女は、ただ「いいいい、いやいや」と首を振ることしか出来なかつた。

「じゃ、今度一緒に飲みましょうねー。そちらの彼も」

和田はそう言い残すと、それこそ源一の肩のひとつでも叩いていきそうな勢いで、手をひらひらと振りながら一人の脇を通り過ぎていった。グループの中心の和田が動いたことで、後の職場の若者たちもぞろぞろと動き出す。

だがその彼らの表情からは、先程一夜と鉢合わせた時の気まずそうなものがいつしか殆ど消えていた。ある者は柔らかな表情で一夜に頭を下げ、ある者は花火など他の物事に興味を向け、とそれぞれに自然な様子で去つていった。

その25 噴出？

後にはぽかんとした一夜と、ぶすりとした源一が取り残される。

「……」

花火はまだ上がり続けているが、最早一人の団には映っていない。
「げ、源一……」

一夜がたどたどしく彼に話しかけると、

「行こうぜ」

と彼は宿へ戻る方向に足を踏み出した。

「え、えっと、ごめん……」

一夜はその背中を追いかけながら謝った。三年前の熱い思い出を
辿りたかったのに、今夜はもう手を繋いでもらえないのは仕方ない
ことだろう。

「何で謝るんだよ」

源一は一夜が追いつくのを待つと、ちらりと彼女を見下ろしてそ
う言った。

「だつて……」

一夜は言いよどんだ。彼より年上の一夜でさえこんなにも恥ずか
しかつたのだ。源一に照れはなかつたのか、恐くはなかつたのか。
そんな思いで彼を見上げる一夜に、源一はこう言った。

「別に、俺がお前の職場で働いてるわけじゃねえし、ギビる」とな
んてねえから」

確かに彼にしてみれば、今夜一度きり彼らに会つただけのこ
と、一夜の恥ずかしさの比ではないのかも知れない。

それでも年上の一夜が気まずさにいたたまれず、何も出来なかつ
たというのに、源一が一声を発してくれたことで場の空気が変わつ
た。あの口下手な彼が。その勇気には、何よりも感謝していた。

「あ、ありがと……」

もちろん、職場の皆さんにこんな若い恋人が居ることを知られてしまったのには変わりない。しかし結婚すれば、いつかは知られることである。だつたらいっそその相手を職場の人間に紹介し、「知り合い」にしてしまえばよいのではないか。

なんと言つても一夜よりも年の近い、若い青年同士なのだ。彼ら職場の面々と源一が、一夜を含めて仲間になつてしまつことが一番問題なく二人の関係を受け入れてもらえる近道だつた。

そこまで考えたのかは分からぬが、源一がきちんと挨拶をしてくれたこと、しかもその相手に和田を選んだことも正解であつただろう。

グループの中で一番影響力が強い者を押さえ友好的なムードになれば、心理的にあとの者は追従する。動物の本能としてそう判断したのか、源一はやはり体育会系の男だなど一夜は思つたものだつた。

そして一瞬の内に彼に合わせて応対した、和田も和田である。だから初対面である（先日のホームセンターでは言葉は交わしていかつたので）源一に対してもここまで愛想よく話しかけたに違ひなかつた。

元々友人も多く人にも積極的に話しかけている和田なので、ただ単に源一と話してみないと興味を抱いたのもかもしれない。

何にせよ、一人の機転と度胸のおかげで、臆病な一夜は結果的に守られてしまつたのであつた。それに対しての源一への礼であり、和田にも心の中で感謝していた。が、

「こんなことなら、この前ちゃんと挨拶しどきやよかつたな」
源一の不機嫌そうな声に、ほつとしていた一夜はまた不安げに顔を上げる。彼は一夜を真つ直ぐに見下ろしてこう言つた。

「ここにさつきの知り合い来るの、知つてたんだろ？」

一夜はしまつた、と思ひながら頷いた。

「言えよかつたじやねえか。どうして黙つてたんだよ」「だつて会うとは思わなかつたし、旅行中につまんないこと心配したことなくもさせたくもなかつたし」

一夜が黙つていたのは、初めての一人の旅行を楽しいものにしたく、こんな嫌な可能性は忘れていたかったから。この花火大会があるとも知らず、和田たちが宿泊すると思わず、まさかバッティングするとは思わなかつたからであつた。

神社の鳥居を抜け、徐々に人が少なくなつていく海沿いの道の上で、二人は小さめの声で言い争う。

「源二こそ、な、なんで怒つてるの？ わせられる羽目になつたの、怒つてんの？」

「違う」

旅館への帰り道、歩幅の広い源一に一夜は急いで追いつこうとしながら追及する。波の音ももうその耳には届かない。

しかし本当に挨拶することが嫌ならば、源一は今日もふいと何処かに居なくなつていただろう。ということは前後の言葉から、単純に一夜が和田たちが此処に来ることを彼に黙つていたことを怒つているのだろうか。

何やら妙な空氣になりつつある一人は、宿へと徐々に近づいていく。

「え？ え？ ジゃあなんで？ それで結局、この後どうすんの？」

一夜が戸惑いながらも、それでも源一の怒りもさほど酷くはなさそうに感じられたので先程話していた飲み直すか否かの件を尋ねると、「部屋でいいんじやねえの」とのぶつきらぼうな答えが返ってきた。

田舎い飲み屋も見付からぬいため、一人は宿の手前にあったコンビニエンスストアで地酒を買つと、まるで徒競走でもしているかのように足早に宿泊する部屋へと戻つたのであつた。

旅館の部屋の中に入れば、ある程度大きな声が出せる。

「だから、何怒つてんのさー」

一夜がそう言つうちに、地酒の入ったポリ袋を畳に置いた源一は、既に敷かれている布団の上でやおら服を脱ぎ始めた。『丁寧に二つ並んだ布団が「いかにも」という感じでやらしいよな、と何やらまた恥ずかしくなる彼女をよそに、裸の彼はさつと旅館の浴衣に着替えると、

「べつに、何も怒つてねえよ」

そう言つてじつかり胡坐をかき、二つの杯と地酒の瓶を並べて、未だ立ちぬくす一夜のこと挑戦的な瞳で見上げたのであった。

源一が、彼からの挨拶をそつなく切り返し、そのことで一夜が感謝している相手 つまりは和田のことで苛々しているのは言つまでもない。

しかし和田があの場で察してくれなければ、源一が恥をかき、一夜も更に気まずくなつてしまつという最悪の結果に終わつたかもしない。年上の青年に助けられたことは源一も認めざるを得ないし、和田も仕事上の仲間である彼女の性格を知つてゐるから、あのよくな態度をとつたのだろう。和田に見せていた一夜の笑顔がまざまざと蘇る。それはきっと、こんな風にフォローしてくれる相棒への安心感からきているのではないか。

同じ年下の男なのに。

同じ職場なのだ、仕方ない。しかし源一よりは年上になるあの男のことを、一夜は頼りにし、彼には見せない顔を見せている。

自分の独占欲に内心呆れながらも引っ込みがつかなくなつてしまつた源一は、旅の恥はかき捨てとばかりに、酔いも手伝つてこんな態度になつてしまつた。

一夜はそんな源一に混乱しながらもとりあえず話しあうと、彼の視界から隠れるように急いで浴衣に着替えた。そして彼の差し出す杯に応戦する準備を整えると、一組の布団の傍ら、源一の前へちよこんと座つたのであった。

その26 犬も食わないものです。

三十分後。二人の前には、この土地で買った地酒の瓶が四本ほど転がっていた。胡坐をかけて、むすりと杯を傾ける源一。少しは酔っているのかもしれないが、顔色も変わらず表情も変わらない。そしてアルコールが入っても饒舌になることなく、無口なままである。

「だからー、何怒つてんのって。源一って、いつもそうじやないか。なんか勝手に機嫌悪くなつて、黙つちゃつて、恐くなつて……」

対して一夜と言えば、例によつてアルコールの力でいつもよりもお喋りになつてゐる。恨みがましそうに彼を見てそう言つと、彼と自分の杯に酒を注ぎ、五本目のガラスの酒瓶を床に倒した。それは一つ並べられた布団の傍らを、ころころと転がつていった。

「言いたいことあるなら、言えばいいじゃないかー！」

一夜も酔つてゐるので強気だ。いつも源一に抱いている小さな不満を、少し舌足らずになつた喋り方で訴えた。そして彼女は頬を膨らませて浴衣の腕を彼の方に振り上げたのだが、その細い腕は難なく掴まれてしまった。

じろりと彼に睨まれる。

初めてキスした時も、セックスした時も、こんな表情で誰かに嫉妬しキレた彼が……というシチュエーションがあつたことを、一夜はふと思い出し、何やら背筋が軽くぞくりとした。

腕に入れてみるが大きな掌に握られ、びくともしない。それでも「婚約者」同士なので恐いことはなく一夜は少しだけ困つたよう「源一」を見た。

「な、何だよ……」

十も年下だというのに。射すくめられてしまつよつた力強い眼差しに一夜はたじろぐが、どうにか元保護者として負けるものかと言い

返す。

「自分で、考える。鈍感女」

しかし彼はそんな悪口を吐き捨てる。そのまま彼女から顔を逸らしが、掴んだ腕は離さない。

「つて、源一がいつもそつやつて何も言わないから、いけないんだろーー!? この前、大学の女の子と誤解されるようなことした時だつて……だから、言葉にしてつて言つたのに。あの時は言葉にしてくれたのにつ」

楽しい旅行なので喧嘩にはなりたくない、あまりつまらないことは言わないでおこうと思いつながらも酔つた勢いもあり、一夜はつい日頃の不安な想いまで口にしてしまう。

だがこれ以上は言わない方がよいだろう。そのまま黙つて俯いた。ここまで言つて分かつてくれないならば、哀しいがそれまでである、と相変わらず諦めたような臆病な姿勢で。

「……」

源一の方も先日の浮氣疑惑や、その後彼女に珍しく愛の言葉を口にしたこと思い出しているのだろうか。一夜の額のあたりを無言のまま見ていたが、やがて彼女の腕が持ち上げられたかと思うと、不意にその細い指が彼の口に含まれたのだった。

「 つ？ や！ なに……つ」

突然のことに驚いた一夜は、小さな悲鳴を上げると手を引こうとしたが、やはりびくともしない。そのうえ一本の指を強く吸われ、口に入れられたまま舌まで這わされてしまった。

思わず彼の方を見て硬直していると、源一は上目遣いで一夜に視線を送つた。そして黙つたまま、舌を動かす。砂糖菓子をつまみにしていたから、自分の指先は甘いのかな、と一夜はぱくぱくと鳴る心臓の音を聞きながら考えていた。

彼はやはり何も言わないが、それは言葉の代わりに態度で表して

いるとも言いたいのだろうか。何かを言いたげに一夜の眼を見据えている。そう思うとまだ想いを通わす前、源二の自分への想いを知らない頃にも、こんな眼差で見つめられたことがあったことを、一夜は今更ながら思い出していた。

くすぐったさの中で、指先がじんじんと痺れてくる。背筋が更にぞくぞくし、頭の中が熱くなってしまつ。口も半開きになりそうになる。

顔も赤くなつてしまつてゐるだろうが、今日の田焼けと今酔つている所為だと彼女は自分に言い聞かせた。それなのに視線は彼の瞳と、わざとらしく水音を立てて動くやけに淫猥な唇に奪われてしまつてゐる。

それでも、相手は抱かれ慣れてゐるはずの男だ。一夜は湧き出でいた唾を飲み込み、正氣に戻ろうとした。それでも細い指は口の中から離されない。

「い……つつも、さうやつて、いやらしさとして、誤魔化して、源二はするこつー！」

その叫びに源二の舌の動きが、ぴくりと止まつた。

そのことを内心では物足りなく思つてしまい、こんな行為を歓迎していた自分を源二には見透かされていたのだろうかと一夜は情けなくなるが、今はそれを棚に上げる。

「口にしてくれないと、不安、だから……オトナだつたら、本当は察しなきやいけないのかもしけないけれど、でもつ

一夜には夫婦の会話が殆どなく別れた両親のことがいつまでも心に引っかかっていた。あはなりたくない、というのが結婚にあつての一番の願いである。そう思つた一夜は恥ずかしさはあるが、最後まで何故自分が不安に思うのかを説明した。

「未だにこんなこと言つてて、しつこいって思われるかもしれないけれど、母さんと あの人は、最後の方ほとんど話なんかしてなかつた。ううん、私が子供の頃も仲は悪くなかつたけどさつと、お

互いの不安とか弱いところを口にしていなかつたんじゃないかな。
結婚する前はどうだつたかは知らないけれど、別れる直前は、特に

……

一夜の両親は互いにそれを「強さ」「強さ」だと思つていたつもりか。結局は全てを壊し、自分も人も 子供も傷つけ、弱い者を犠牲にして逃げ出すという最悪の結果を招いた。

源一は一夜の「元」父親と会つたことがあり、彼女の怯えとトラウマも理解している。だからこそこの前の浮気疑惑の折も、彼女の望みとおり恥ずかしい愛の言葉を散々口にしたのだ。

しかし今の自分の嫉妬を口にするのは、それとはまた違つた恥ずかしさが彼にはある。それでも一夜の切ない叫びを聞けば、彼女を信じて、守つてやりたいと思うのだ。

「

そこで源一はふてくされたような顔をすると、急に一夜の手と腕を解放し、ごろりと横になつた。そして一夜の方に向かつて身体を倒す。彼が横になつたのは、浴衣なので胡坐などかかずに横に重ねて折られていた一夜の膝の上だった。

「う、わっ

一夜が驚く声を上げる頃には、源一の頭は既に眼下にあり、短い髪の感触が薄い浴衣を通して伝わってきた。若い男の身体の熱も。少し肌蹴た浴衣から、太い鎖骨と日焼けした胸元が見える。全部脱ぐよりも色っぽいな、と一夜もおかしな感想を抱いてしまう。当の源一と言えば、仏頂面で額に手の甲を当て掌を天井に向けると、とても悔しそうに呟いたのだった。

「格好、悪いよな

「え？」

こんな甘えた姿勢を彼がするのは初めてであり、一夜はときめくやら氣恥ずかしいやらの思いで一杯であつた。しかしその殊勝で拗

ねたよつた言葉から、彼はひょつとして酔つてゐるのかな、と思いつた。この姿勢に照れて逃げ出していない一夜も同様に酔つてゐるのかもしれないが。

「どういう意味かと一夜は考えながら、彼を見下ろしていった。

「別に、何でもねえよ。 ムカついてた、だけだ」

「……」

一夜は源一の顔をまじまじと見るが、彼の目の上に開いた手があるため、その表情は読めない。何のことが分からずにいた一夜であつたが、源一の声はどこかやけくそのようなものだった。

「同じ……、年下なのに」

吐き捨てるような言葉から、一夜の脳裏にも先ほど会つた和田の顔が蘇つた。

「え？ わ、和田つちは彼女いそつだし、そつとう風に私なんかのこと見てないだろつし、」

嫉妬する必要などないのに、と一夜が更に驚いていた。源一はそつじやねえと言葉を続けた。

「仕方ねえつて、分かつてゐる。どーセ、奴とはそつきみみたいにきっと、職場でも上手いことやつてんだ。お前には仕事頑張つて欲しいと思つけど、職場でのお前はきっと……あいつの前で、家とは違つた楽しそうな顔、してんだろつて」

田を見せないまま、源一の脣が軽く噛まれた。 酔つた勢いで、何馬鹿なこと言つてるんだ、と後悔し、照れているよ。

しかし子供みたいな恥ずかしい主張でも、一夜が過去のトラウマを引きずり、それ故に今思つていることを正直に言えと囁つながら、彼には他に言つようもなかつたのだった。

一夜が自分には見せない顔を、「外」の社会に見せていることが、仕方ないけれど気に入らない、と。

一夜は源一からの意外な言葉に、ただきょとんとしていた。信頼し合わないとよい仕事が出来ない。だから和田とある程度仲良くするの仕方ないことだ。それは頭のよい源一も分かってくれると思っている。

だが、同じような気持ちに一夜もなったことがあった。それを思い出した彼女は思わず、くすりと笑う。源一の手は顔を隠したまだつたが、彼女は構わずに言った。

「源一も私と、同じだったんだ」

そんな彼のことを、一夜は少し可愛ないと思った。

もしかしたらこういうところは、一人とも出来つた少頃からあまり成長していないのかも知れない。ひとつ睞ざされた殻の中に居たからこそ。子供のような、この独占欲は。

そう、思つた。だから自分も素直になれるのだろうと。

「私も、源一と一緒にいられる和歌ちゃんとかこの前の介抱した女の子とか……高校や大学の子たちのこと、うらやましいなつて思つた。私は、『そこ』には行けないから」

数年前のことは少し懐かしさも込めて　　今でも悩んだり、不安になつたりすることではあるけれど　　、一夜はゆつくりと呟く。そして源一の顔に置かれていた大きな手を取つた。

こんな気持ちになつてしまふのは、きっと源一が彼の気持ちを話してくれたことが嬉しいからだろう。彼もまた旅行と言つ非日常的な空間で、心が解放されたのだろうか。

そして、彼が自分と同じようことで悩んでいたことにも安堵した。彼と本心を言い合つことで、またひとつの信頼関係が生まれる。一人で旅行に来て、楽しかった。色々あつたが、来てよかつたとやつぱり思えた。

あとは、きっと酔つているから。

だから……「旅の恥は、かき捨て」ってやつだ。

一夜は持ち上げた源一の手の先 日焼けした指を一本、好奇心も手伝い、そつと咥えてみた。

途端に彼と眼が合つて恥ずかしくなる。かあつと顔が熱くなつたのは酒の所為にしてほしかつた。

彼は驚いたように眼を見開いている。いい年こいたおばさんが何やつてるんだよと思われたくない そう思つた一夜は、誤魔化すよつここつ言つた。

「お酒の味、する」

源一の指に零れていたのだろうか。あとは汗のような酸っぱい味が混ざる。初めて口にするもの。抵抗も少ないので、思い切り舐めることはない。ためらいがちに、だが愛しげにそつと舌を這わすだけだ。

先ほど自分がぞくりとしたように、彼もぞくぞくしてくれるのだろうかと期待しながら、一夜は源一の感度を探るように彼の眼を見ていた。酔つていなければこんな風に観察する余裕もない。

源一はやや驚いたようにそんなことをする一夜をじっと凝視していたが、やがて反対の手で勢いよく身を起こすと、一夜の口内に入つている指を一本に増やすよう強引にねじ入れ、顔を近付けてきた。

「だから俺、今、すげえ格好悪いんだけどさ」

彼は非常に不本意だと言わんばかりに一夜を睨みつけ、自身の指を彼女の口の奥に押し込みながら、その小さな舌を指先で軽く挟んで甚振り始めた。

源一としては性的、肉体的な方法でしか形勢逆転を図れないことを情けなく思つてゐるのだが、その効果は観面で、体温が上がつて一夜に舌への攻めはすぐに気持ち好い刺激として伝わつた。異様な状況に胸は震え、身体の奥は敏感に反応する。

「どうすんだよ。結局、風呂行くの？ それとも、今

こつもは照れからか無言で「事」を進める源一が、いつしてあからさまに尋ねてくるのも、やはり酔っているからだろう。

そしてもつと感じていたかったような彼の指を口から音を立てて引き抜き、それに答える一夜もまた、同じよつに正常な思考を失っていた。

「せ、折角だし……、家族風呂……も、入つて、みる……？」

それは彼女にしてみればとても恥ずかしい申し出であったので、

一夜は直ぐに俯くと浴衣の裾をいじつた。

そしてその姿勢のまま、まだ時間大丈夫かな、それよりも酔つてお風呂入っちゃまずくないかなあ……などと言つても、甘い熱に浮かされた頭の中で考えていたのだった。

非常灯の薄暗い明かりが、旅館の曲がりくねつた狭い廊下をぼんやりと照らしている。その中を、一夜と源一の二人はぺたぺたとうスリッパの音を立てながら歩き、目的の場所へと辿り着いた。

一夜がパンフレットで確認したところ、家族風呂も深夜零時まで入れるようだ。防犯上、大丈夫なのかと彼女は心配にもなるが、古い風合いを残しながらもメンテナンスやリフォームなどはきちんとしているような心配りが感じられる旅館なので、どうにかなるだろうと開き直ることにした。

色々とあった一日で、遠くまで来たこともあり一夜は既に疲れていたが、これも思い出作りだと余力と好奇心を奮い立たせる。

十代の性欲盛んな時期でもなく、この先の人生の「伴侶」との風呂ひとつで騒ぐことでも興奮することもないと思うが、そういうことを今まで避けていたので、三十路の今でもいちいちこうしたイベントに驚かされている。

対する源一は「うと、アルバイトなどで未成年のうちから社会に出ていた割には、真面目な性格から肉体的な女性経験は一夜以外にないと彼女は聞いている。

健康な青年男子にしては変な奴だなあと、彼の必死の気遣いも知らず一夜は勝手なことを思つが、こうして一緒に家族風呂のドアを開けても源一は無表情のままなので、奴は本当にワクワクしているのか、と疑いたくなってしまう。

しかし一緒に風呂に入るかと誘つたのは彼の方なので、やはり一般的な二十歳の青年同様、こういういやらしいことは嫌いではないのだろうと、一夜は自分を納得させた。

そんなことを考えている一夜をさておき、源一は手際よく「使用

中」と書かれた看板を外に出し、中に入ると早々に木の鍵を掛けた。裸になる場所なので防犯カメラなどなく、こんな造りではいくらでも犯罪ができてしまうではないか、と職業柄、一夜は心配になつてくる。しかし源一が田の前で浴衣をばさりと脱ぎ始めたので、そんなことを考へている場合ではなくなつてしまつた。

「め、酩酊者の入浴は禁止しますって、書いてあるけど……」

一夜は妙な背徳感を覚え始めていた。確かに入浴を楽しむだけなら何も問題はないのだが、先ほどの指を舐め合つた出来事とも相まって、田の前の男から何やら不穏な空気を感じるのである。

一夜はここにきて往生際悪く、恥ずかしさから浴衣も脱げずにぐずぐずとしていた。すると、そんな彼女に源一が一言。

「そう思つんだつたら、水でも被つて酔い冷ませ」

「何それ、ひどいなあ……」

ぱんつ一枚の奴にそんな偉そうで冷たいことを言われる筋合はないぞと一夜は思うが、源一はこうして昔から彼女には容赦ないところがあつた。

しかしそうこうこうは他の女性の前では見せないようなので、捻くれた愛情表現、もとい自分に心を開いている証としたいような気も一夜にはしているが、それでも水を被ろうとは思わない。

とは言つても、一夜もまだ酔つている状態と言えばそうである。酔つていなければ、こんなことは恥ずかしくて出来ない。しかし逆にこの状況に緊張し、酔いも冷めそうな気分になつてくる。

そう思つと酔つたノリで、このまま突き進んだ方がいいのかもしれない。

そう考へた一夜だが、相変わらず引き締まつてゐる源一の日焼けした身体を横目で確認すると、三十路の身体をこうした場所で見せるのが嫌になつてしまい、更に襟をもじもじといじつていたが、

「脱がねえの？」

と横から声を掛けられる。

ああもう、この直球工口オヤジ――

支離滅裂な悪口を隣の青年に対して思う一夜であるが、自分の意思でついてきた以上、人のことばかりも言えない。

しかし三十路の肌が恥ずかしいなんてことも言いたくない。そういう目で源一に見られたくないからである。そうは言つても十歳の年の差は埋まることなく、これからも身体は老いていく一方。結婚するからにはそれは覚悟せねばならないのだが……。

泣き上戸な一面もあるのか、そう考えているうちに一夜が段々と落ち込んでくると、

「先行つてるぞ」

源一はそう言い残し下着も取り去ると、さつさと小さな浴場へ入つていつてしまつた。

え？ え？ えー？ 私が急に部屋戻つたらどうする気だよ
――

一夜は強引にでも手を引いてもらえなかつたことに、勝手と言われようとも少し残念な気持ちになる。と言いつつも部屋に戻るわけでもないのだが。

第一、裸の彼に甘い言葉をかけられて、浴衣を脱がされるなどというシチュエーションに耐えられるわけもない。一人で裸になつた後、連れ立つて歩くのも何か滑稽な気がした。

一夜はそこでようやく服を脱ぎ、手早く長い髪をアップにすると、細長いタオルで身体の前を隠す。

テレビの取材やパンフレットでは、もちろんのこと身体にバスタオルを巻いてリポーターやモデルが入浴しているが、公共の湯船にタオルを入れることは通常禁止されている。だからバスタオルなど浴槽には持ち込めず、身体を洗うフェイスタオル程度のものを一夜は身体の一部に当てる。それも浴槽に入る時には、取り扱わなくてはいけない。

それは源一も同様で……つてことは……つて、何を考えているん

だ！ 私はーつ！ と一夜は裸のまま壁に頭を打ち付けたい気持ちになりながら、源一が湯を被っている音を脱衣所で聞いていた。

こんなばかなこと考えるのって、やっぱ、酔ってるから……

だよね。

そう結論付けた一夜は、酔っ払いのにお風呂に入つて、倒れてしまわないように気をつけないと、と思いながら、旅の思い出作りのためと、彼と和解できた安心感に背中を押されて、狭い脱衣所と浴室を繋ぐ引き戸を開けたのであつた。

・・・・・

中にはあつたのは小さな洗い場と、檜の香りがほのかにする木の四角い浴槽だつた。ガラス窓から見える外の小さな庭は、夜の照明に緑の葉を黒々と光らせていた。

源一は既に風呂に入つているとばかり思つていた一夜だつたが、彼は持つてきたもう一本のタオルで身体を洗おうとしていたところだつた。

「汗かいてたから」

源一は一夜から目を逸らしてそう言つと、石鹼を泡立て始めた。木の腰掛けに座る彼をちらりと横目で見ながら、一夜もその隣に腰掛けを用意して座る。彼の腹の下にタオルが掛けあつたことに、彼女は少し安心した。しばらくは田のやり場に困ることはなさそうである。

彼女もまた身体の前のタオルを取れずにはいるものの、後ろが丸見えであることが何か矛盾している気もした。しかしあえて考えないよ、源一はこういう順序で身体を洗つていくのか、とのんきな感想を抱いていたが、ふと思いつきで口を開いた。

「体、……洗つてあげようか？」

触れられるのは恥ずかしいが、触れるのは嫌いではない。安心するからだ。それに内心、その逆を提案されたら困るので先手を打つ

た、とも言える。

「ハーリーとこうでは、そういう楽しみ方もあるのだと、一夜は女子だけの会話で聞いたことがある。だから彼女は洗いにぐい背中を流してやる、くらいの気持ちで提案したのだった。

ちなみに二年前、婚約が決まった夜、いつも以上に激しくなった行為が終わりぐつたりしてしまった一夜を、当時まだ高校生だった源一が風呂場に抱え入れ、シャワーで綺麗にしてくれたという思い出がある。

その時と違いこんな風に意思を持つて一緒に「入浴」するのは初めてなので、一夜は何をすればよいのか分からなくなるが、旅のいい思い出になることはしたく、ただ二人で湯船に浸かるだけではこの源二のこと、満足しないのではないかと思っていた。

一夜は源一からもう一枚の石鹼のついたタオルを渡される。湿ったタオルは彼女の身体に張り付き、最初は見せたくない部分を隠してくれていたが、手を動かして泡を立てていううちに、ペロリと剥がれてしまった。

彼の視界に氣になる三十路の裸体が飛び込んだかもしけず、これはいけないと一夜が慌てて手で隠すと源二に鼻で笑われる。それを拾い上げながら、彼女は「何だよ」と少し赤くなつて彼を睨む。

一夜は逆にそう突っ込みたいが、彼の言つことは本当にいつも「こもつとも」なことが多い。一体誰が彼をこんな風に育てたのかと思つてしまひ。

一夜は渋々観念した。とりあえず太腿には引っかかっているので最後の砦は守られており、源一の背中側に座つていれば見える」とはないからであつた。

タオルは中々泡立ちにくい。そして結構、滑りやすい。一夜はタオルを使つことをやめると、ぬるつく白らの手のひらを泡立て、直接、源一の広い背中や肩を洗つていた。

手入れもされていない、日光を浴びてゐる男性の肌は「ひつじたものであったが、それでも石鹼の膜が間に入り、そこを滑らかに摩ることができた。

身体を洗われると気持ちがいいと言つていたのは一夜の女友達の言だが、源一は気持ちよく感じてゐるのかと一夜は疑問に思つ。

「ねえ……きもち、いい？」

無言であるのも耐え切れず、一夜は思わず背中越しに尋ねた。勿論それは、彼女としては性的な意味ではなく、単純な快不快の意味合いで尋ねたことだ。

「……」

源一が何も答えないでの、やはりこんなことされても嬉しくはないんだろうか、と一夜はため息をつきそうになる。触つてゐる彼女としては中々楽しく、手触りと彼の体温の心地よさを感じ始めているものの。

しかしそこで彼はぐるりと一夜の方を振り向いた。そしてまたにこつともしない表情で、驚いてゐる一夜の腰に両手を沿え軽く持ち上げると、彼自身も腰掛けから降りると浴場の木の床に直接胡坐をかき、彼女の身体をその膝の上に乗せたのであつた。

一夜はいきなりのことに驚いて声も出なかつたが、

「ひつちも、洗つてやる」

彼女の手から石鹼のついたタオルをとり、見る間に手を真つ白にするとその白い肌に手を添えてきたのであつた。

「……つ！」

驚いた一夜が、あやしげなため息をつきながらも、こんなことを仕掛けてきたこの男に何か言つてやうつと口を開きかけた時、

「そつちも、続けるよ」

源一は命令口調でそつまつと、一夜の手を自分の下腹部に添えさせた。

動いたことによって彼の腹の下のタオルも床に落ちた。一夜は、源一の全てをつい視界に入れてしまい、無表情の彼も興奮していることを思い知らされる。

座りやれ密着してこる、肌同士が、浴場の蒸し暑さも手伝って、熱い。

それでも源一の手の悪戯は止まらず、一夜も仕方なく手を動かしているうちに、素直に官能的な心地よさも感じられるのであった。

ぬるぬるしてのつて……、結構、気持ちいいんだ。

といつことは、やはり源一も気持ちがいいんだろうか。そう思つた一夜は、自分を睨みながらも時々何かを身体の奥から逃がすように息を吐く源一の反応を観察し、同じよつて優しく全身を撫でてやる。

やはり酔つてこむからか、一夜も段々とこの状況に慣れ、触れることも恥ずかしくなくなってきた。

お風呂つて、意外と一緒に入るのもいいかもしないなあ……と、一夜はのぼせかけた頭でぼんやりと考えていた。

その28 家に帰るまでが旅行です。

旅先といつも非日常は、人の判断能力を狂わせると言つが、自分も例に漏れていないな……と熱く沸騰していく頭の中で一夜は思う。やめて、と時に軽く抵抗しながらも。まるで浴室の湯気が頭の中に入つてしまつたように一夜の思考に靄もやが掛かつていき、目の前もかすんで行く。そのまま源一に腕を引かれて檜造りの浴槽へと誘われ汗を流せたのか、余計にかいたのか分からぬ身体を沈める。それでも飽き足らず、お湯の浮力を利用して身体を寄せたり離したりと言葉少なにじやれ合つ一人。本当にもう、いい年こいて何やつているんだらうと一夜は自分でも笑えてくるのだが、

お湯の成分で、少しでも綺麗になれているかな。

そうだといいな、と逆に年齢が行き過ぎているからこそ、若い彼に釣り合いたいと密かに少女のようなことを願つてしまつ。

そんなことを思つ一夜が照れ隠しに相手にお湯をかければ、逆に源一から仮頂面ですといつと迫られてしまい、「もう、いいかげんにしろー！」と言いたくなるほどで。それでも楽しくないと言えば嘘になるのがやはり情けなくなる。そして額に額をぶつけられて、一言。

「嫌なのかよ」

「嫌……、じゃ、ない」

恥ずかしいけれど、結局そう答えた。

「気持ち悪い……」

そして三十分後。部屋の布団でぐつたりと横たわる一夜の横に、どん、とコップに入った水が置かれた。

一夜はうつ、と苦しげな声を上げ、透明なコップの後ろで胡坐をかく源一の浴衣の脚にすがりつきながら身を起こすと、水をどう

か飲む。ロマンティックに口移し などされても、今は一気に飲み干したいような気分であるし、これ以上の刺激は酸素不足になってしまいそうなので、流石に望まない。源一もそれを分かつているようで、一夜の身体を軽く支えて膝の上に上半身を凭れかけさせていた。

予測出来ない結果ではなかつたが、思った以上にぐつたりとしてしまつた。以前、シャワーで身体を洗つてもらつただけの時でも、疲れもあつて最後はふわふわとてしまつたのに、今日は酔つていた上に湯船にまで長時間浸かつていたのだから、当然の結果であろう。

「情けないな……」

甘い夜だと言つながらばいつそどこまでも甘く酔い痴れてしまえばいいのに、どこか決まらない。やはりこんな三十路など見限られやしないが、と一瞬不安になるものの、

「無理させて悪かったな」

先ほど膝枕をしてやつた彼に今度は一夜が膝枕をする形となり、ぼそりとそう言われて髪を撫でられれば、ま、いつか、などとも思つてしまつ。

だから「あんなとこ」まで「あんなもの」まで持つてきて「あんなこと」までして何やつてるんだろうと、後から人には言えないような恥ずかしく愚かなことをしていたとしても、一夜も「ううん」と嬉しそうに笑つて首を振つてしまつのであつた。

そして一泊二日の、旅の夜は更けていく。

・・・・・・・・

そして朝を迎えた。一夜が目覚めると爽やかな波の音が遠くに聞こえ、此処が旅先であることを寝ぼけた頭に思い出させる。しかし部屋の中は彼女一人で、隣の布団はもぬけの殻。日頃から

朝に強い源一は既に床にはいないようだつた。彼はこうして年寄りくさいところがあるので、寝汗もかいたからか、おそらく朝風呂にでも行つたのだろう。反対に昨夜遅くまで体力を消耗するようなことをしてしたうえに、年齢の問題だけではなく朝の弱い一夜は気力もなく、もう一度眠りにつこうとしていた。

流石にあれからは肌を重ねることはなかつた。浴衣姿で二つ並んだ布団の中で、眠つた。正確には源一の膝の上で眠つてしまつた一夜が、いつの間にか布団の中に入つていたようだ。

幼い頃を思い出す。

眠つているうちに布団へと運ばれている時の、無意識のうちに柔らかな幸福感を。

そんな自分を守つてくれる大きな暖かな手が、今はここにある。安心した気持ちで眠りにつけるほど幸福なことはない。一夜がにんまりと微笑みながらもう一度目を閉じた時、

「まだ寝てんのかよ。もうメシだぞ」

何故に、旅行先までも同じ光景が繰り返されるのだろうか。容赦なく掛け布団と敷布団を同時に引っ張り上げられ、一夜はごろんと畳の上に転がされた。

「……相つ変わらず強引だなー。いいかげん、もーちょっと優しく出来ないかなあ」

一応目は覚めていたのでのそりと起き上がりながら、むくれて抗議する。一夜はそのまま胡坐をかき源一を見上げるが、彼は彼女の訴えを全く無視するとまたあつさりと一夜の前で浴衣を脱ぎ出し、今しがた汗を流してきた締まつた裸体を着替えるために晒し出してきた。

無頓着なだけなのだろうし、確かにもう何度も見てている身体なのだが、昨夜は昨夜でまた新たな「楽しみ方」をひとつ覚えてしまい、旅行先まで来て何を開発されているのかと複雑な気持ちになつてしまつた。

まう。

一夜は若い男の身体から田を逸らした。浴衣一枚の彼女もまた、これから脱いで着替えなくてはいけないのだが、肝心なところを寄せて上げている「ような姿は見せたくないため何処で着替えようかとそわそわと視線を泳がせた。

誰よりも自然体でいられる相手だといつのに、誰よりも嫌われたくないから格好をつけたいという気持ちになつてしまつのが、何か矛盾しているなあと自分でも思いながら。

そしてどうにか朝食時間に間に合い、家の朝食と同様、朝から二人で気持ちいいほど膳を平らげてきた。その後一夜が朝風呂を浴びた後は、することもないのでとりあえずチェックアウトをする。帰り際、旅館の入り口にあるしなびた土産物屋でも、漬物や怪しげな物産品などを真剣に眺めてしまう一夜。そんなものを誰に贈るのか、ぶつぶつと独り言を言いながら悩んでいる彼女に、

「ま、ごゆつくり」

既に慣れている源一はため息をついてそつと、一人分の荷物を持つて玄関へと向かった。そうは言つても一夜も昨日から散財しているという自覚はある。それをきっかけに物産品は諦めて、「待つてよう」と源一の背中を追いかけた。

「ありがとうございました。またお待ちしております」

二人を見送る何人かの従業員と一緒に、昨日から部屋などの世話をしてくれた一夜よりも十ばかり年上と見られる仲居の女性が、笑顔でふかぶかと紫色の着物姿の頭を下げた。

「あ、ありがとうございました！」

既に頭を下げた源一に引き続き、一夜も長い髪を揺らして慌ててお辞儀をする。

そんな彼女を見て、仲居の女性はもう一度微笑んだ。そして思わず、と言つた風でこんな言葉を口にしたのだった。

「素敵な彼氏さんですね」

……それは源一に色目を使つてゐるとかそういうものではなく、おそらく昨日からの一人の様子を見て言つたのだろうということは、彼女の笑顔から一夜にも伝わってきた。

幸せが伝播したかのような、笑顔。源一くらいの年齢の子供でもいるのだろうか。彼女が一人の年齢差をどう見ているのか一夜には分からぬが、何か温かなものを見つけたかのように穏やかに笑みを浮かべていた。

それこそこの年齢差であるし、本来、客のプライバシーに触れるものでもないだろうが、思わず彼女は口についてしまつたようだ。それくらい、印象的だったのだろうか。そしてそう言われた一夜も、恥ずかしいが嫌な気持ちはしなかつた。

それはやはり、彼のことが、自慢だったから。

自分には足りないとこらばかりだが、源一のような男とあの日出会えたことは、本当に運が良かつたと一夜は思う。

他の女性に好かれれば心配にもなつてしまつが、大切な相手が誰かに認められるのは純粹に嬉しい。それはその人を選び、その人に選ばれた自分も肯定出来るから、そんな自己満足のためだけかもしれないが。それでも。

だから一夜は源一に聞こえていないことを横目で確認しながら、素直に笑顔で答えたのだった。

「はい！ ありがとうござこます」と。

帰りの予定は特に何も考えていなかつたが、「もう一度海を見たい」という一夜の要望で再び海岸へと降りた。しかし今日の二人は、無言で海を見ていた。源一にとつてはいつものことだが、一夜は疲

れもあつてか、黙つてぼーっと、潮風に髪を靡かせていた。

そのまま海沿いにあつた、適当な美術館のような建物に入りぶらぶらと歩くと、車に乗る。帰りは一夜もはしゃぐことなく、ぐつたりと助手席のシートに凭れていた。

「年せいかなー。つかれたー」

「……」

はー、とため息をつく彼女に対し、源一は無言だった。ここで同意をすれば、自分から言つた癖に隣から車の運転に支障があるほど攻撃を受けることは必定であつたし、彼にも昨夜彼女を疲れさせるようなことをした覚えがある以上、否定の言葉を言つわけにもいかなかつた。

一夜も答えを求めてはいなかつたよつて、シートに身をもたせかけたまま、無意識のうちに軽く右手を挙げていた。

車のウインドウ越しの夏の太陽にきらめく、銀の光。

一夜の大切な銀の指輪は、海ではしゃいでも温泉の時に外しても、失くすことはなくしつかりとその指にあつた。

恥ずかしさや仕事の際に気になるということもあり、何より失くすことが怖くて今までもそれをしてこなかつたのだ。隣の年下の彼から初めて貰つた、その贈り物を。だけど今日は少女趣味と言われようとも、彼と行く初めての旅行であつたから。

ほつとしたよつて一夜が手を軽く握り、膝に置いてそのまま眠ろうとした時、前を見て運転をしていた源一からぼそりと呟きが聞こえてきたのだつた。

「して来たんだな、それ」

「……」

途端に眠ろうとしていた一夜の目が見開かれ、見る間に顔が赤くなつていく。のは日焼けのせいだけではないだろつ。

「い、いつから……」

気付いていたのか、と彼女は一人で焦るが、特に隠していたわけ

でもなく、田代と源一が気付かないわけがない。一夜はそこでぐつと唇を噛むと、「知らない！ ばかっ」と相手に失礼な一言を吐き捨て、そのまま無理やり目を閉じて横を向いた。

源一は何も悪くないと一夜にも分かっている。だが、彼の顔が恥ずかしくて見られなかつた。彼がまだ高校生の時にくれたようなものをずっと大事にしていて、今日のこの日を特別だと楽しみにしていたからこそ、これを嵌めてきた。

そして源一もまたそんなことを言つたことは、彼も田頃から一夜が指輪をすることを待つていたとでも言つのだろうか。

そんなことを想像するだけで、車から飛び出したいほど恥ずかしい。こんな年齢なのにと思うが、逆にこんな年齢で十代のよつな恋愛をしてしていることが照れ臭いのだ。

ちくしょー、ちくしょーと、一夜は心の中で誰に対しかそう叫ぶと、源一と顔を合わせないためにも無理やり居眠りを決め込むことにした。

しかし実際、疲れた身体に車の振動は心地よく、いつの間にか本気で深い眠りに落ちていた。昨夜の膝枕や布団に運ばれた時と同様に、最も信頼出来る相手の隣で、安らかで幸せな眠りへと。

それこそ、三十路のネムリヒメだつたけれど。

それでもやはり、幸せだったのだ。

・・・・・

充足感に溢れた夏の一日が終われば、社会人である一夜には巷がまだ夏休み中であろうとも再び仕事の日々が待つている。

明けた月曜日、前の席の和田と会うのは非常に気まずかったが、源一があのよつて堂々してくれたことに応えたいと、一夜も覚悟を決めた。

落ち着かなさを必死に隠すと、先輩として余裕を持った態度でおはよう」といつもどおり彼に声を掛ける。

「おはよー、ひじこます」

和田もにっこりと笑い返してきた。あの日一緒にいた他の職員に会ひともあろうが、何を噂されてももう胸を張つて堂々としているよと一夜は腹を決めた。

過去の一人のことを知る者はいないのだ。確かに一人の関係を知られた時に、どうせ過去に淫行していただろうと蔑まることはあつても、今は源一が成人して全ての行動の責任を取れる以上、あのバッティングの時のように、彼の傍に居ることを誇りに思うしかなかつた。たとえ自分に自信がなかつたとしても、彼のことだけは信じていようと。

怯えつつもそう覚悟を決めた一夜と田を合わせた和田は、彼女のそんな気持ちを察しよく汲み取つたか一夜の横を通り様、肩を竦めて笑うとこう言つたのだった。

「マジで、今度彼氏さん交えて飲みに行きましょーよ。なんかすげえ、面白そだから」

先輩に対して失礼だとはあの場を和ませもらつた以上、文句は言わぬが、和田のそんな発言に一夜は田を見開き、改めて彼を見上げた。

和田は後輩なので、もちろんこんなプライベートな誘いは断ることが出来る。しかし「面白」、というのは、あの無口で年齢の割に落ち着きすぎている源一のことか、それとも一夜自身の変化か人に言いふらしたりするどころか、そんなことを言い出した和田の真意が彼女には相変わらず掴めず、首を捻るのであつた。

まるで焼き過ぎた肌の染みのよう、そんな跡をひとつ残して、暑い夏は終わつていく。

その29 事件は現場で起きています。

季節は流れ、夏から秋へ。厳しい残暑が続くため服装は夏服のままだが朝夕には涼しさを感じ、空の色も澄んだ青が高く何処までも広がっている。地面には秋を象徴する草花が色鮮やかに咲き始める。にぎやかな夏が終わり、爽やかな空氣の中、じっくりと物事に向き合える秋がやってきた。

相変わらずの日々是好日、変わらない日々を暮らす一人の様子はと言ふまると。

秋と言えば、一夜の職場にとつては一年の中で最も多忙な時期である。市民文化の向上などということをモットーに建てられた施設であるので、今年も日々の業務に加えて、文化の日に向けて複数のイベントを開催しなくてはいけないのだ。

それも施設職員の都合や夢で実施出来るわけではなく、企業や自治体からの要請を受けたり、国の補助金を当てにしなくては予算が足りないという台所事情からそれを担当にて、と雪だるま式にイベントの数も増えていく。

毎年行われている半日講演会などについては、一夜も同じ職場で五年目を迎えることもあり、彼女自身混乱は少なかつた。しかし室長が昨年交代したため しかも前任者ほど頭が切れるわけでもなく、トップが頼りにならないということは部下の負担が増えてしまうものだ。一夜も仕事をしたいのに、室長から行事の進め方を逐一尋ねられている始末である。

よつて遂に一夜にも、通常の児童館業務に加えて残業が上乗せされることになった。

更には世の情勢を受け外郭団体に何か言われたのか、施設の上層部が突然の改革路線に乗り出したいと、様々な提案を打ち出してき

た。当然その皺寄せは下つ端職員が食らう。そのための雑務がプラスされてしまうのだ。

それに改革と言つてたとえ将来的に事業の合理化に繋がつたとしても、逆に組織の合理化からリストラに発展する恐れもあるため、職員たちも乗り気になれず嫌々残業をしているのであつた。

しかもその改革路線による弊害が、一夜の担当する児童館にも出てしまつた。収入確保のための年度途中のおやつ代の増額、施設利用制限等々。施設の財政難を救う措置ではあるものの、突然のこと納得出来ないという父兄への説明に、現場の一夜たちが追われてしまつ というストレスの溜まる問題が、ここ最近の彼女の頭を悩ませていた。

その日も残業をする羽目になり、時刻は午後八時。
はー、とため息をつきながら一夜は受話器をデスクの上に置いた。終わらない事務仕事の後に、夜になつて件の苦情の対応をしていたのであつた。勤めから帰つてきてからの父兄と話をするため、このような時間の電話となる。

特に今終わつたばかりの電話は、かなり高圧的な強い口調で責められてしまつたので、とりあえずの決着はみたものの何処か後味が悪い。

「お疲れでしたー」

前の席では和田がパソコンに何か打ち込みながら、上目遣いで一夜に微笑みを送る。

必死で頭を下げている様子を誰かに見られているのは恥ずかしいので、時間外にこつそり電話をするのはかえつて気が楽だ。出来れば和田もいない方がよかつたのだが、彼も忙しいので仕方がない。

それに今の彼の表情からは同情の色も窺えるため、一夜も気持ちを共有出来る同僚の存在にほつと息をつく。一応の説明責任を無事終えた彼女は、もう一度ため息をつきながら椅子に凭れた。

「もー、やんなるね。上層部なんて利用者さんに直接説明するわけでもないのに、勝手を言いやがるよね。でも急な無茶で申し訳ないのに、ここに来る子の親御さんは、なんだかんだいい人が多くて有難いよ。私が来る前には、些細なことで裁判の一歩手前まで揉めたことがあつたって話も聞いたし」

一夜は珍しく愚痴を吐くと、先ほどから握り締めていたボールペンを机に放つた。

遅い時間に同僚と一人きりだからこそ、こんな話も出来る。頼りない室長を始め、臨時職員はもとより正規職員も今日は皆帰つてしまっている。命令外の残業代が貰えるほど余裕のある職場ではないからだ。和田にも彼女がいるらしいのだが、早く帰宅する日もあればこうして仕事をしている日もある。今夜は帰らなくともよいらしい。彼はそのあたりのメリハリをつけるのが上手いな、と一夜は思つていた。

「まったく。事件は会議室でナントカつていつアレですね」

一夜にやんわりとそれに同意すると、彼も仕事が一段落したのか手元の書類をそろえながら笑つている。

確かに、ストレスの溜まらなさそうな男だよなー。

一夜はそんな彼の姿に思わず眩いた。

「和田つちはすごいよね」

「何ですか？」

和田は手を止め、不思議そうに一夜を見た。

「いや、私が話している間に、そつちも苦情の電話受けてたじやないか。昨日も窓口で長々と説明していたし。でもいつも私よりずっと上手いこと相手に話しているよなーって」

「先輩が何言ってんですか。俺なんてまだまだですよ。正論言つてダメだと、あとは誤魔化しに入っちゃうし」

いつものように腕組みをして考え込む一夜に、和田は苦笑しながら手をひらひらと振る。

しかし一夜がこうして苦情の後にため息を漏らしたり、中には大人げなく逆切れをする職員もいる中、彼は謝る最中も淡々としており、終わつた後も飄々と仕事に戻つてゐる。こんな安月給の場所ではなく、企業の営業でもそれなりの成績を収められる男なのではないだろうか。

「……まあね、それは正直、皆同じだけどさ。でもそういう時のストレスとか困つてしまふのとか、和田つちは顔に出さないなあつて、一夜には和田のそういうた自分にはないとこらが、まだ入社二年目の後輩だが少しだけうらやましくも思うのだつた。

一夜は図書館司書の採用枠で、この施設に就職した。不況で採用数が減り、事務職員が足りなくなつて今の部署に異動させられたのだが、司書時代も書籍の案内だけしていればよいわけでもなかつた。現実は窓口で多様な要望や苦情に対応することとなり、社会とはこんなに他人と関わらねばならないものかと当時の二十代前半だった一夜はつづく実感したのだった。

それでも天涯孤独であり、思わず源一の保護者となつてしまつた彼女は、女性でも男性同様の給与を受け取れ、福利厚生もよいこの仕事を辞めることはなかつた。

一夜は性格上、人と合わせることに煩わしさを感じることがある。一人の方がずっと気楽であった。だから仕事と言えども、こうして他人を觀察し、他人の感情に合わせて言葉を捜し続けるのは、面倒に感じてしまふこともあるのだった。

だから常に冷静に、相手を傷つけないような返事を出来るうえに、かついつでも楽しそうな和田の態度は、後輩でありながら自分もそうなれたらな、と思うのであつた。

「つうか、むしろこりういうの面白いじゃないですか」

「面白い……？」

「こりといった、いつもの笑顔と共に返つてきた和田の答えに、

一夜は思わず聞き返した。

「ぶつちやけ、年度途中に無茶言つたんだし、悪いのは施設側です
よね。でも下々はお上の言つとおりにしなきゃいけないし、先方に
どうにか納得しても、もうじかなくて。だつたら眉吊り上げてくるオ
バサンに、最後に『じゃあ仕方ないわね』つてどうしたら言わせら
れるか。出来たら笑わせて帰すなんてことが出来たら、最高に面白
いじゃないですか。そういうの考えるの、俺、好きなんですね」

流石に人のいない時間帯だからこそ彼も、こんなことまで話せる
のだろう。利用料金が給与に反映されている以上、一夜ら職員は基
本的に「お客様のため」に平身低頭でなければならない。なので、
これは一般人には言えない職員としての本音だ。

少しばかり言葉は悪いが、和田の言い分は一夜が相手だからこそ
口にしたと思われ、そしてこれは彼の正直な気持ちであるのだろう。
しかし、仕事を進める上で決して不要なスキルでもなかつた。寧ろ、
常套であり上等な手段かもしだなかつた。

「なるほどね……そつか、好きなんだ」

そう思つた一夜は腕を前に伸ばすと、何もアクセサリーをしてい
ない指先を眺めながら彼の言葉を復唱した。和田は更に言葉を続け
る。

「相手が感情的になつていればいるほど、俺は面白いですね。なん
か燃えるつづうか。まあ刺されたりとかしたら困りますけど。所詮
俺みたいな平職員、いざつて時は責任とつてくれつて上にお願い出
来ますし。あの室長だって、それくらいはやってくれそудし」

一夜はその言葉に苦笑した。そういう考え方をする人間もいるの
だと。

後半の上司云々についても、彼は施設利用者だけでなく上司のこ
とも上手く説き伏せ、責任だけは取らせることに成功しているのを
先輩として知つていて。結局は要領がいい、の一言に尽くるだろう。
「まあ、面白くくらい思わないとやつてらんねえつてのが、一番の

理由ですか？」

和田は書類をファイルに閉じながらそつまつと、話はこれで終わり、と言つて机に向かってパソコンの電源も落とし始めた。

「有難う、参考になつた」

一夜も素直に領いた。まだ一件、明日も苦情の返事をしなくてはならないので心は重いが、少しでもそう思つてみようかと思つたのであつた。「いえいえ」と和田は言つた後、今度はにんまり、と言つた様子で笑うと立ち上がりながら、一夜の顔を覗き込むようにしてきた。

「つて鎌田さん、最近帰り遅いですけど彼氏くん、いいんですか？」
そう言われて一夜は、一ヶ月近く前に旅先で源一と一緒にこの間に和田と遭遇したことを今更ながら思い出し、目を丸くする。仕事の忙しさに忘れていたが、彼は覚えていたらしい。

後輩のくせに、冷やかしやがつて……と思わないでもないが、それだけ本音で話が出来る仲でもあり、他の誰もいないところで冷やかすくらいなら、許してやらないこともない。

「知らない。別にいいんじゃない」

それこそ面倒なので、一夜は投げやりにそつ答えた。実際帰りが遅くなつたところで婚約者として一緒に住んでいるのだし、それが理由で源一と別れてしまう可能性は少ないはずだ。そこまでは話したくないが、寧ろ言つてしまつた方が変に冷やかされないだろうかとも思つてしまつ。しかしそんな彼女に、

「まあ、この秋の忙しさがひと段落したら、飲みに行きましょう」と和田はやはり掴めない笑顔で言うのだった。

この時々しか誘わない、かつ少々強引な誘い方に、女はつい騙されるのだろうか……と、彼の話術のテクニックから、一夜はついついそんな感想も抱いてしまつたのだった。

その30 レスと話すはまだ早く。

一夜が家に帰ると、源一はまだ帰宅していなかつた。どうやら今夜もアルバイトで遅いらしい。最近あまり話をしていないなあ、と思いつながら、一夜は夏の残りの素麺を夕食にした。ちなみに時間のある日はきちんと品数の多い食事を作り、朝食と弁当は未だに源一が作ってくれているので、いつも粗食なわけではない。

食事を終えた一夜は入浴を済ませ、頭にタオルを乗せたまま居間のソファに倒れこむように座る。以前は湯上りのビールが至福の時であつたが、ここ数日は気分が乗らず古い酒になりそうなので省略している。

そのままテレビのスイッチを入れ、ブラウン管の中でキャスターが流暢にニュースを読み上げているのをぼーっと眺めているとやがて同居人が、帰宅した。

「おかえり……夕飯は？」

彼はいつも夕食を終えて帰つてくるが、一応確認する。これは「保護者」であつた時の名残もあるだろつ。源一はソファから彼を振り返る一夜をちらりと見ると、

「食つてきた

と短く答え、さつさと部屋に入つてしまつた。おそらく風呂に入るのだろう。学生ならば授業のない日は早く家を出なくともよいのだが、相変わらず早起きな源一は一夜を起こし朝食と弁当を作つているため、それほど夜更かしもしていない。

予想通り源一が浴室のドアを閉める音を聞きながら、やはり最近、毎日こんな調子で——一夜の方もこの時間に帰つてくることもあり、ほとんど会話もしないまま眠つてしまつてゐるな、と彼女はテレビの天気予報を視界に入れながら考えていた。朝に時間がありそうなものの一夜が寝坊をするため、これまた時間に追われて会話を楽しむ余裕などない。

『最近遅いですけど、彼氏さんいいんですか？』

和田の言葉が蘇る。一緒に住んでいてもやはり、すれ違うこともあるだろうか……一夜は両親の例を思い出すと、どきりとした。現にあの今の頼りない室長も、早く帰ってしまうのは家で家族サービスをしたいがためだという。

しかし男女の関係になる前から、そしてそうなつてからの一年間も、この時期の一夜の仕事は忙しかつたので、源一も事情を分かってくれているだろうと一夜は思つていた。今までの様々なことを通して、自信はなくとも彼が彼なりに自分を想つてくれている、それを信じようという勇気も出てきた。

だから気にしないでおこう、きっと源一もそう言つだらう。一夜は自分にそう言い聞かせる。だが和田の意味深な笑顔が表すように、いつものあの、身体を使ったコミュニケーションもしばらくとつていないので。　今度は一週間の間隔が開こうとしている。休日に、という手段もあつたのだが、週末も仕事であつたり、一夜が休みの平日には今度は源一がアルバイトや、彼も文化祭が近くサークルなど大学の用事で家にいないことが多かつた。

何よりもこうして忙しくなり気が重くなる問題が重なると、一夜の心にも余裕がなくなり、そんなことを楽しみたくないくなつてしまふのである。仕事が上手く出来ないくせに、淫猥なことで現実逃避している自分に嫌気が差してしまつたため、ストレス解消という具合には至らなかつた。

男性はどうか知らないが女性の一夜は、やはり身体の欲求よりも、「気持ち」で左右されるセックストとなつてしまつ。だから肉体的な疲れもあって今夜もそれをしてたくない。しかし彼を嫌いになつたわけではないので、ふと気になつた。　源一は大丈夫なのかな、と。

二十歳という年齢もあるからか、それとも元々そういうことが好きなのか、源一は冷たい態度の割には意外と頻繁に仕掛けてくる。

もちろん、年齢差を考えると「女」と見られていることに一夜も安心はするのだが。だが彼は一夜のことを常に優先に考えてくれるため、疲れたり悩んだりと乗り気でない時は何も言わずに一人でさつさと寝てしまうのだ。何かあったのか、と尋ねるだけはしてくれるものの。

相変わらず自分の欲望を殺している、十も年下とは思えない源一の気配りに感謝をしつつも、こんな性欲のないおばさんじやつまらなくなつて他の女の子に手を出すんじゃないか、などと邪推をしてしまう一夜。再三信じろと言つてくれた彼なので、流石にもうそれを口する事はないが、所詮三十路を迎えて体力が衰えているのは否めない。

しかも源一は保護者だったという事実や年齢差から、一夜にとつて未だに「子供」というイメージが残つてゐる。だから彼の「溜まり具合」を気にしつつも、児童館の職員がこんな若い子と何いちゃいちゃしているんだ、と余計な自己嫌悪に陥つてしまつのだ。

仕事とプライベートは切り離すべきで、源一もそう言つのだろうが、万が一保護者に源一との関係を知られれば、職種上いいことを言わなければならないのは必定。だからと言つて源一と別れるわけではないので、気にせず覚悟を決めているはずなのだが、仕事のことで頭が一杯になつたり、失敗して落ち込んだ時は、どうしてもそんな風に考えてしまい、淫らな行為などしたくなくなる。

その状態がずっと続いてるので、一夜は心配になつてきただつた。

そんなことを悩んでいるうちに、源一は風呂場から出てきた。そして台所で髪を乱雑に拭くと、そのまま居間でぼうつとしている一 夜の方に大股で近づいてくる。

「あのや、」

久々に話しかけられたような気がした。確かに和田はすごいと思うが口先と本心が違う男よりも、口数は少なくとも嘘がなく、長年

の付き合いから考へていることが分かる源一の方がいいな、と改めて思う。

心地よい響きの低い声に、一夜が源一の方を仰ぎ見ると、彼は何かを言いかけた唇を噤んでしまった。　もしかして、誘われる？　そう思つた一夜は軽く首を竦めたが、眞面目で少し困つたような源一の顔は、雄として雌を見る時のそれとはまた違うような気がし、一夜はそのまま首を傾げた。

「……いや、仕事忙しそうだし、また今度でいい。早く寝ろよ」しかし源一は気遣いの言葉を添えてやう言つと、彼の部屋へと入つていこうとした。

「え？　なに？？」

最近彼と会話をしていないうもあつてその続きが気にかかり、一夜は慌てて尋ねる。そして多分違うだろうと思つたが、それ以外に何を聞いてよいのか想像も出来なかつたので、思わずその背中に呼び掛けた。

「も、もしかして　　一緒に寝よう、とか……？」

「やりたいの？」とは恥ずかしくて聞けないため、一夜は質問の仕方を変えた。その言葉にぴくりと反応した源一は、ゆっくりと一夜を振り返る。

「つて、違えよ！　　つうか、お前はそうしてえのかよ」

このまま「突入」する気分じゃない　　そう思つた一夜は、藪蛇だつたかと急いで首を振つた。

「だつたら、変なこと聞くな」

源一はぶつきら棒にそつ言つと、再び部屋へと足を向けた。一夜はその態度にいつも以上に心配になつて問い合わせる。

「お、怒つてる？」

最近、やつてないから。

直接的には言えないが、そうこつた意味で。

「怒つてねえよ」

しかし源一はドアノブに手を掛けながら即答した。だが言い方がいつもどおりつんけんしているので、やはり怒っているのではないとかと、自分の所為でありながら一夜の不安は解消されない。旅行の時のようにゆっくりと一緒に過ぎさせれば、腹を割つて話し合つことが出来るのでこんな不安もなくなるのだが。

しかし、そこで源一は振り向いた。

「なんで俺が怒らなきゃいけねえんだよ」

やつぱり怒つてるじゃないか、と一夜は思ったが、彼のこんな態度は昔からなので臆することなく話を続けた。

「だ、だつて、最近

「……最近？」

続きを言いたくない。一夜が俯くと、頭の上のタオルが丁度彼女の顔を隠した。

だがきちんと話をしないと分かり合えないところのは、今までの生活で分かったことだ。一夜はその姿勢のまま、小さな声を搾り出した。

「……前みたいに、してないし」

そこで源一の小さな舌打ちが聞こえた気がして、一夜は恐る恐る顔を上げた。夜遅いからか彼は一步前に踏み出ると、静かにゆっくりと言葉を続けた。

「してえつて言つても、お前仕事忙しいし、そういう気分じゃねえんだろ」「やつぱり言葉にしなくても分かつてくれるんだなあ。

嬉しいような申し訳ないような気持ちで、一夜は仏頂面の源一に向かつて神妙な顔で数回頷いた。

「だつたら仕方ねえじゃねーか」

その言い方だと、やつぱり私とやりたいて思つてくれてるのかなあ……と、一夜はもぞもぞとした複雑な想いに包まれる。しかしやはり今日処理した苦情を思い出すと気分は盛り上がりなくなり、

明日も気の重い仕事が控えているのに、抱かれた後の浮ついた気持ちのまま出社したくなかった。

「「」、「めんね」

一夜は咳いた。別にただ寄り添つて眠るだけでも十分心満たされるのだが、それでは彼は収まらないのではないか。現に以前そうして、なし崩し的に襲われてしまつたこともあった。だから今は彼に甘えて、物理的に距離を置かせてもらうことにしたのだった。

「別に」

源二もそれを自覚しているのか、その提案はしてこなかつた。そして自分の欲求を素直に口走つてしまつたことが恥ずかしいのか、それ以上何も言わず、ふい、と背を向けて今度こそ部屋に入ろうとした。

「多分、来週には少し落ち着くと思うから」

実際仕事が一段落つくのを待てば、まだ一月以上かかる。なので和田を見習い、来週までに気持ちを切り替え少し早く仕事から帰つてみよう、私も家族サービスだ、と一夜は密かに心に決める。

そこで源二は一夜を横目で見た。彼もまた気を遣わせてしまつたことが恥ずかしいような、一夜の方からそう言つてくれたことが嬉しいような、複雑な視線であつた。

無表情のまま「ん」と短く頷いた彼は、「何か悩んでたら、何でも言えよ」ともう一度優しい言葉を残し、今度こそ部屋へと入つていつた。源二も今は一夜をゆっくり休ませてやろうと、少し距離を置くことにしたようだつた。

大切にされていることを実感して喜んだり、我慢を言つている自分を反省したり、と様々な想いが入り混じる中、一夜はテレビのスイッチを切りソファを立つ。壁一枚隔てただけの部屋で、互いに悶々としていることが不思議な気がした。

それでも一夜の仕事を応援してくれている源二に感謝し、和田の

助言も参考にして明日は仕事を頑張り、仕事にメリハリをつけて今週中に終わらせるものは終わらせよう、と面倒くさがりの一晩も背中を押されたのであった。

そして眠りにつくベッドの中、隣の部屋で源一は今、何を考えているのだろうと思いながら、ふと思い出す。

彼が最初に言いかけたことは、何だったのだろう、と。

その31 ガールズトークは……苦手です。（前編）

それから、十日あまり経つた秋も深まる十月の終わり。秋の日はつるべ落とし。残業をせずに退社をしても、既に辺りは闇に包まれている。本日は金曜日ということで、短大時代の仲間たちと数年ぶりに飲みに行く約束をした一夜。仕事は相変わらず落ち着かないが、こう毎日忙しければ、逆に仕事上の悩みばかりに心を砕いていることが嫌になつてくるものだ。

何より所属部署のメイン行事が終わつた、というのも気が軽くなつたひとつ的原因だつた。その分デスクワークは溜まつてゐるが、一日くらい早く帰つても変わりはしない。それに今夜は県外に就職した友人も用事のため久々に帰省してくるという。たまには古い友人との楽しい時間を大切にしたいと思つた一夜は、気分転換も兼ねて三人の同年の女性が待つ行きつけの居酒屋へと向かつたのだった。

隣の席とは壁で仕切られた、淡い照明が落ち着く創作料理店の一席。そんな夜の空間に女四人で密着して座れば、すぐに昔の感覚を取り戻して話は盛り上がる。

今宵集まつた仲間には一夜以外に、朝子、雪、朋美と三人の女性がいるが、結婚をしているのは朝子と雪、子供がいるのは朝子だけという状況だ。自分の意見をどの女性もはつきりと言うため、刺激にもなる仲間である。だが同時に他人の意見にも耳を傾けてくれ、一度は頷いた後にそれについての考えを話してくれるので、不快になるどころか話していく心地がよかつた。

そこで四人で若い頃のように仕事のことや趣味のこと、他愛の無い話題で笑い合つていたのだが、宴もたけなわになり、いよいよ話題が「あの方へ」と傾いてきた。

実はいわゆるガールズトーク、というものが一夜は苦手である。そういう話題になると昔から聞き役に回つていた。身体的な悩み

ならばまだしも、男性関係については話すことがなかつたところもある。三十路になつた今は、既におばちゃんの猥談とも言えそうだ。

よつて彼女の場合、集まるメンバーによつてはそういうた女性ならではの内緒話のような内容に全く触れないこともあつた。むしろそちらの方が多い。職場が一緒に仲がよかつた千菜ともそつた話はほとんどせず、源一と付き合つことについて相談した時はかえつて喜ばれたほどだ。

だが今日集まつたメンバーは、短大時代からそんな話をよくしていた。一夜以外のメンバーが、そういうた話が好きなので自然とうなるのだ。彼女たちは年齢が重なり、更に恥ずかしさを感じなくなつたように見受けられる。

「それにしてもさ、こちが子供のことで氣い揉んでいる時に、ダンナに誘われても困るのよ。向こうはしたくても、全つ然、氣乗りしないのにー そういう時に限つて子供泣いて起きてくるし」

そこで始まつたあからさまな話に、一夜は飲んでいた日本酒を吹き出しそうになつた。

言い出しつべの朝子は、昔から自身の性体験などを臆面なく語る女性だ。無論、誰にでも話しているわけでもないだろつし、これでストレスを発散しているのかもしれないのに三人とも止めはしない。しかしこの発言については、既婚かどうかは関係なく他の二人も相手の男性に言われたことがあるのか、うんうんと頷いているではないか。一夜も先日から仕事が忙しく、源一と触れ合えずにすることを思い出しては、酔いもあつて心拍数が上がつてくる。

結局あれから「家族サービス」をしようとしたのだが、嫌な予感はしたものの生理が始まつてしまい更に「おあづけ」をしてしまつてゐる状態である。それでも源一は今夜の外出は、自分も忙しいから、と文句も言わずに許してくれたのだが。

しかしその話題は他の一人も不満を持っていたのか、食いつきが良かつた。

「ああ、わかる。嫌だと言つとかえつて意地になつて、どうしてもしようとしてくるし」

独身の朋美も恋人のことを思い出しているのか、腕組みをしてそのままに頷き、

「でもさせないと、浮氣とかされたらやだなあつてつい考えちゃつて、結局、負ける……」

雪も両手でグラスを抱えながら、ぽつりと呟く。

「そりなんだよね。なんか、いつもこっちが折れちゃうよね。向こうがしたくない時は、こっちの気持ち関係なく物理的に『出来ない』のに、向こうのしたい時はがんばんなきやいけないってなつちやうのが、むかつくんだよね」

そう言い終わると、朝子は生ビールを威勢よく飲み干した。それは彼への怒りなのか、彼女自身の怒りなのか。一夜は頷き合つて三人の女性を目をぱちくりとさせて見比べる。

つて、みんな、そうなの??

一夜は愕然とした。みんなそんなに、「やらせてやつてる」のか……? 私は「がんばつた」となんてあんまりないぞ、と。

もちろん、このような時間に子供のいる妻に飲みに行くことを許可しているようなパートナーだ。とても優しく理解ある男性に愛されているのは三人とも同じようだが、どんな似合いのカップルによ人間同士、多少のずれや不満はあるらしい。

一夜も細長いガラスの器の底を覗き、透明な液体を揺らしながら、しばし自分を省みる。

源一への不満。そんなものは、あまり考えたことがなかつた。

汗臭いこととか? そんなのは生きていれば普通のことであるし、子供の頃から面倒を見ているので、生理的な現象も見慣れている。逆にこちらのそういうものに苛々されても困つてしまつので、お互い様だと一夜も思つてゐる。

「そのくせ二二二のこと[寝不足にして、自分は次の日さつと仕事行くか、休みなら遅くまで寝てるしさー。子供はおなかすいたつて早々に起きてくるのに、何もしてくれないし」

夫に直接言えばいいのだろうが、言つても無駄であつたから余計に苛々としているのか、一夜よりもアルコールに弱くビール一杯で酔つた朝子の愚痴はまだ続く。

「だんなさん、ご飯作つたりとかしないの？」

「くれるわけないじやん！ 子供と一緒によ！『腹減つた、飯まだか』って！ アタシはあなたの母親か！ って言いたくなるつ

「うちも……」

独身の朋美はそこまでは共感は出来ないのか、二人に尋ねると同時に大きく頷かれたのであつた。

普通、なんだ！？

一夜はその言葉を飲み込み、三人を順繰りに見た。
いや、前からおかしいとは思つていたが、やはりおかしいのだ。
源一にはまつとうに生きる力をつけさせたかったこと、一夜よりも器用で手際が良かつたため家事をさせてきてしまつてきた。それは新しい「家族」として彼の居場所を作つてきたのだが、「夫と妻」の図になつた時にそれは奇妙なことなのだろうか。妻は夫にかいがいしく料理を作り、家のことを全て行い、それが「普通」なのだろうか。

その32 ガールズトークは……苦手です。（後編）

源二が家に来たばかりの頃は「大人と子供」であったから、このルールは間違つていなかつたと、一夜は今でも思つてゐる。しかし今は対等な「男と女」。婚約者であり、夫婦予備軍。名前が変われば、関係も変わるべきか。しかし一夜は源二と、自分たちは自分たちであり変わる必要はない、定義などないはずだ、と話し合つた。だが……、自分のことは女として変わり者だと思っていたが、源二も相当変わつており、かつとんでもなくす「い奴ではないだらうか、と一夜は今更ながら自覚するのであつた。

ちなみに職場の友人、千菜は夫である一夜の元上司・北條のへの不満をほとんど口にしない。それ以前に付き合つていた男性については、よく愚痴を零していたものだ。しかしあのクールな上司は意外と家庭的らしく千菜自身、彼には満足しているようであつた。そう思えば、一夜だけが特別ではないのかもしれないが。

と言つても、実際夫婦など一人きりにならねば分からぬ。想像したくもないが、北條とて千菜に無理やり夫婦生活を迫る一面もあるのかも知れない。いや寧ろ逆の方がありそうか……と色々と失礼なことを想像してしまう。

それはさておき、確かに高校時代、同居している一夜に両想いになるまで手を出さず我慢していた源二を、千菜は「ありえない！」と力説していた。やはり彼は「ありえない」人物と言えそうである。両親が不幸な死を遂げたため過去のことは口にしない源二であるが、本当に一体、どのような親に育てられたのだろうか。

…… そうか。やっぱり、あいつってす「いんだ……つて、逆にあの若さでそれで、大丈夫なのか？ あと、私なんかでいいのか？

一夜が改めて源二の優しさを知り、嬉しい気持ちもあるが、それ

を通り越し不気味さすら感じていると、

「一夜はどうなの？ 今、彼氏とかいるんだっけ？」

突然、雪に話をふられ、手をびくびくと揺らし、中から大好きな日本酒が飛び出しそうになつた。

「えーと……」

短大時代、彼女たちに合コンなどに連れていかれれば、美人だからと一夜に言い寄つてくる男もいたが、好きでもない相手とは付き合いたいと思えず逃げてきた。どうしたら断れるか三人に相談したこともあり、そんな時はいつも一度くらい付き合つてみればいいのに、とすら言われたものであった。

結局、卒業するまで誰とも交際しなかつた一夜は、源一とこういつた関係になつてからは初めて彼女たちに会つたため、三人に恋の話をしたことは今までなかつたのだ。

それでもあれから十年。あの時よりも柔軟になつたからか、一夜も素直にそんな話を出来そうな気がしていた。どこかでずっと、彼女たちの側に加わりたかったのかもしれない。だが先ほどの皆の話とは正反対の自分たちであり、さりとて嘘を言つても仕方がない。一夜が困つて口ごもると、

「いるんだ？」

雪は勘がいい。にっこりと微笑まれて尋ねられ、最終的に一夜は頷いた。

「へえ、どんな人ー？」

朝子が身を乗り出し、朋美も横から肘で突いてくる。やはりそういう流れになつてしまつたが、それ以上を言う勇気はない。この状況で、就職してから十歳年下の子供を引き取り、大きくなつたから手を出して結婚の約束までした、などと言えば大騒ぎになるだろう。しかし数年後に結婚でもすれば、報告しなくてはいけないだろうが。

「えーと、……さ、でもね、」

困つた一夜は答える代わりに、先ほどから気になつていたことを口にした。

「ふ、夫婦になつてもせひやつて女として見てもらひたのつて、よ
くない……？」

彼女といえば、別の心配があつたのだ。三十代、四十代の男性で
もそういう欲求を示していくるといふことは、源一は二十歳にしては
性欲を殺している方ではないだろうか。

それは確かに、一夜のことを常に思つてそつしてくっているのだ
らう。少々強引に始められることはあつても、一夜の気持ちを無視
して無理強いをすることは絶対にない。

それを素直に受け止めればよいのだが、女にはわざわざ見えない
疑念を探し出してくるきらいがある。性欲を我慢出来るということ
は、源一はただ単に、三十路の女の身体に欲情してないのではない
か。子供を産んだ朝子が今でも求められているのは魅力的だからで
あつて、一夜など三十代で出産をすれば益々老けて、若い彼には放
つておかれかねしない。

しつこく求められても困るのだが、放置されるのも寂しい。

一夜はそんな乙女心に未だ揺れているのであつた。

「よくない！ 浮氣されるのもやだけど、こっちがどんなに言つて
も引き下がんないのも、腹立つよ！ てか諦めてくれる時は、いち
いち嫌味言つてくし！」

しかし友人はそう思はないようだつた。一夜に答えをはぐらかさ
れた形になるが、朝子の怒りの方が勝つた。彼女はその時の相手を
思い出したのか、眉が吊り上つてゐる。

「一夜の彼氏は、優しいんだ」

朋美もそのように察したらしい。彼女も付き合つてゐる男性のそ
ういった要求に振り回されたことがあるのだろうか、うらやましそ
うに隣から覗き込み言葉を続ける。

「一夜つてあれだけ、男なんて嫌だ、絶対に付き合わないつて言つ
てたのに、彼氏出来たつてことは、一夜のマイペースに合わせてくれ

れるか、一夜にすつゞく優しくしてくれる人か、とにかく理想の人
に出会つたんだね」

そのまま朋美に言い当てられたうえに、他の二人にも頷かれ、一夜
は居心地が悪くなる。

「なんか私つて、すごくわがままみたいじゃないか……」

ふてくされて言うと、残つた日本酒を一気に飲み干した。

もしかしたら他の三人は一夜よりも優しく、柔軟な女性のかも
しれない。一夜は「自分」を頑固に持つていて、それを崩そうとす
る他人を絶対に受け入れなかつたのだ。

「自分」の心を守るために、よほど信頼出来る相手でない限り心
をかき乱されるようなことはさせない。だから身体にも指一本触
れさせたくない、というほど臆病であつたのだ。

「そうじゃないよ」

しかし雪は、拗ねた一夜にメニュー表を渡しつつ笑つた。
「みんな彼氏が優しい人で、うらやましいって言つてるの。結婚、
するのかな？」式呼んでほしいな。幸せになつてね」

「そうだよ。紹介してよ！　てか携帯に写真とかないの？」

怒つていた筈の朝子も、いつの間にか笑顔になり身を乗り出して
くる。そのまま次の話題は一夜の眼鏡に適つたのはどんな男かとい
う話になつてしまい、「また、いつか、絶対、話すから」と彼女は
苦し紛れに酒をあおり、今日のところはどうにか勘弁してもらつて
いた。

源二のことはいい男だとよく褒められる一夜であったが、今宵の旧友たちとの話から、改めて「そういうた気遣い」をしてくれるところも彼の大切な長所であることを知った。一夜の身体にもう興味が無いだけかも知れない、と一抹の不安は残るもの。

だが反対に、自分には何か褒められるところはあるのかと、彼のことを褒められれば褒められるほど、一夜は不安になつてくる。源二に一般的な「妻」が行うことを子供の頃からやらせてきた。もちろん、先に帰つてきた日や休日などは、彼が好きなものを作るくらいのことは頑張つてするものの。

以前自分の何処が好きなのか源二に尋ねた気もするのだが、婚約者として安定した関係になつた今と昔とでは彼の感情も異なるかもしれない。

話しているうちに酔いも手伝はずーんと落ち込んできた一夜をよそに、子供のいるメンバーがいたこともあり、宴は解散となつた。飲んでいない雪に「送るうか？」と言われたものの、一夜は携帯電話を取り出しながら首を振つた。最近の飲み会の後は、源二に車で迎えに来てもらうのが定番だつた。

「ほんと、優しい彼だねー。一度、見てみたい。呼んでもらえればよかつたな」

朝子がにやにやと笑つて一夜の肩に腕を絡めてくるが、やはり夫に預けてきた子供が気になるらしく雪の車に乗つてさつさと帰つてしまつた。県外から帰省してきた朋美も週末は用があつて実家に泊まるとのことで、終電に間に合わせたいと走つて帰つていつた。

一人取り残された一夜だが、それこそこんな年齢であるうえ、金曜日の夜、居酒屋の周りにはまだ人影も多く賑やかだ。特に身の危険は感じない。何よりも若い恋人を見られるのは未だ恥ずかしいた

め、一夜は一人になつたことに安堵しながら源一に電話を掛けた。源一のことが恥ずかしいのではない。年齢も性格も、彼に似合わない自分自身を一夜は恥じているのだ。あまりそういうことを言うと選んでくれた彼に失礼になつてしまつので、もう本人に言わないようにはしているが。

「ホール音を聞きながら源一が出るのを待つていると、ほどなく彼は電話を取つた。こういう時、彼はいつもあまり人を待たせない。そんなところも、一夜は好きだなと思っていた。

「終わったよ」

『分かった』

低い不機嫌な声だが、きつとすぐに来てくれる。一夜は思わず口元に笑みを浮かべて携帯電話を閉じた。

「そつがあ。朝子たちと一緒に居たのつて、私が今の源一の歳の時なんだ」

帰りの車で、彼の横顔を見ながら今日のことを思い出していると、ふとそんなことに気付き一夜は感慨深げに呟いた。

「だから何だよ」

唐突に言われ源一も反応に困つたらしい。前を見て運転をしながら、短く聞き返す。

「ふーん。そつかあ……」

しかし一夜は曖昧な答えを返した。

先のことに不安になりながらも、何もかもが楽しかった短大時代。「キラキラとした」という言葉がふさわしいほど。そんなあの頃と今の源一は同じ年齢なのだ。しかし彼は三十代の一夜と対等な関係を築いている。それを望んだのは自分の意思だと彼は言つてくれるが、やはりそれでいいのかと一夜が何処か心配になるのには変わりない。

旧友と会い昔に戻つたことで再びそんな迷いを蘇らせ、一夜は家へと帰つた。その反面あんなことを皆と話したため、三週間近く触

れていない彼とどうすればいいか、彼はどうしたいのか、などともずつと考えていた。

今日は一夜の生理も最終日ではあるが、衛生用品はまだ必要なほどで、物理的に性行為は不可能ではないが抵抗はある。源一も気持ち悪く思うのではないか。

それに比較的速いペースでアルコール度数の高い酒を飲んだため、生理日なのもあり一夜の頭はぼうつとしていた。それも手伝って玄関で若干ヒールのある靴を脱ぐ時にようけてしまい、源一の腕に捕まえられる。

「おっと、ありがとー」

たくましい腕に抱えられ一夜がへらりと笑つて彼を見上げると、玄関先の照明の下で、彼は笑いもせずにじいっと一夜を見ていた。

うげ！ このシグナルはっ！！

来る！ と一夜は思った。しかも今週は家族サービスをする、と宣言してある。それなのに今夜は女性とあるが飲みに出でてしまい（これが男性相手であつたら彼の怒りは相当であつたかもしないが）、機会を作れないまでいた。

二十歳の青年の身体は、今か今かと待つてゐるのだろうか。そうなるとやはり、先ほどの朝子たちの話と同様に「やらせてあげ」ないといけないだろうか。

一夜は困つた。しかし一夜は嫌々「やらせてあげてる」わけでもないよな、とも思った。彼とただ、ミニユニークーションを取りたいだけなのだ。そんな呑気なことを言つていられるのは、源一の方が自分の欲望を優先せず、一夜を気遣つてくれるからだろう。だから一夜は彼のそれを叶える方法で、より親密になりたいと思うのだ。

そうなると会話を合わせると同様に自分の気持ちばかりではなく、相手の気持ちに合わせることももつと必要だろうか。そうでないと、魅力以前の問題で嫌われてしまうかもしない。

でも今夜したとしても、源一も手とか……とかが、私のあれで汚れたら、嫌だろうし……。

はっきりと断るのも悪い気がし、一夜は源一から顔を逸らした。しかし源一は彼女の腰に手を置くと引き寄せ、頸に反対の手を置き彼の方へと向けてきた。こんな所作も、今は手慣れたものである。幼い頃や高校時代を知る保護者としては妙にどぎまぎとしてしまつ。それはさておき、それだけ長く一緒に居た一人だ。この距離で顔を覗き込まれれば、迷つていることなどすぐに知られてしまうだろう。一夜は更に視線を泳がせた。しかし源一は、逆にその仕草で彼女の気持ちを察したようだつた。

それでもその手は離れない。それこそ世の男性たちのように、強引に攻めればもしかしたらいけるかもしないという打算を、彼も人間だ、考えているのかもしれないなかつた。

「あの、ね、するつもり……だつたんだよ。でも「めん、あの、生理、まだ終わつてなくて」

逃げられない、と悟つた一夜は観念して正直な気持ちを話すこととした。一年前まで生理のことなど男性に話すことは決してなかつたのに、こう頻繁に話題にしていて彼は嫌だと思わないだろうか。しかし彼のことが嫌だからしたくないわけでないことを、一夜としては伝えたいのだ。

前も同じ理由で断つてしまつたことがあるが、自分が悪いのだろうか、と一夜は申し訳なく思いながら俯く。しかしそれを聞いた源一は、淡々とした表情で呟いたのだった。

「別に気にしねえつつたら……どうする?」

「へー?」

瞬間、かあつと顔が熱くなつた一夜は、「何考えてんだ!」と咄嗟に源一の足を踏もうとしたが、彼は苦笑しながら彼女から離れた。「いいよ。お前が嫌なら、まで」

そしてすぐに笑顔は消えいつもの表情に戻ると、彼は一夜に背を向けて部屋の中へと入ろうとした。

あつさりと引き下がる彼に、やはり申し訳ないことをしているような、そして先ほど「誘われれば女と見られていいのうで嬉しくないか？」と言つたように、勝手なもので少しばかり物足りないような気になつてしまつ。それこそ十年前の自分にはなかつた心境の変化に、一夜は驚く。

それでも実際、強引に襲われればきっと嫌な気持ちになるのではないだろうか。セックスに限らずしたくないことを強要されるは、何であれいい気持ちはない。

しかし逆に、一夜が彼の気持ちを優先してやらなくてはいけないことだつてないだろうか。

前の生理の時みたいに繋がりずっと、処理だけするとか？ いやそれならば、いっそ。

自分が大事にされていることに少々反省し、あることを決めた一夜は、とん、と踏み出すと後ろから源一の広い背中に抱き付いていった。どうか自分の老いてきた身体を嫌がられませんように、と祈りながら。その手は振り払われることなく、源一の足はその場で止まつた。

酔つた一夜は感情が高ぶることが多い。そして積極的になることが多い。源一に告白されて気まずくなつた後に一夜から連絡したことも、初めて結ばれた夜も、全て酔つた勢いであつたことを思い出し、彼女は源一の背中で苦笑する。男性が酔つた勢いで迫つてくるのは嫌なのに、自分がしている。

ただ単に、三十路のネムリヒメはわがままなだけと言えるだらうか？

これじゃやつぱり、嫌われるかな。どうすればもっと好きになつてもらえるんだろうか。

性生活だけでなく、彼のために朝食も作らない時点で「妻」「候補失格」と思われているかも知れないが、彼のために自分は何が出来るのか。それでも不満があれば何年も一緒にいることはないかも知れない、源一ならば黙つて裏切る前に、不愉快に思つたことや間違つたことを指摘してくれると信じている。

答えは今日も出ないまま、一夜は源一を後ろから抱き締めた。嫌われないために、せめて素直にその気持ちを伝えようと。

「源一は、優しそうだ

「……」

「明日には生理、終わるから。だから、明日は休みだし、どうせなら明日、……しよ。いっぽい。がんばるから」

今宵繫がらないで処理だけしてやるよりも、明日、体調がよくなつた時に思い切り、そして色々と積極的にやつてやろうと一夜の方から誘つているのだ。これまで以上に生々しいことを言つてている自分に恥ずかしくなつてきた一夜の声は、徐々に小さくなつっていく。

そして言い終わると彼女は逃げるよつに彼から離れ、自分の部屋へ着替えを取りに行つた。その背中にぽつりと独り言のよつな低い声が掛けられる。

「つて、何をがんばるんだよ」

「……！ し、知らない！」

一夜は源一の顔を見ないまま部屋へと逃げ込んだ。本当に具体的に「何」を頑張るのか、何をすれば彼は喜ぶのか。考えると恥ずかしくて叫び出しちたくなるが、宣言してしまつた以上、一夜は明日の夜は未来の妻として、未来の夫となる彼を満足させようと覚悟を決めるのであつた。

「着替えを持つて部屋を出てもまだ源一は居間に座つていた。一夜は彼の顔を見ないよう浴室へと急ぐ。しかし彼の声はまだ彼女を追いかけてくる。

「そういや、明日つて時間あるんだよな。 毎間

それを聞き、最初は「昼間つからするのか…？」と驚く一夜だったが、そうではなく久々に一人で出掛けようという約束を数日前にしたな、と言つことを思い出し、馬鹿なことを考へた自分に顔を火照らせて額きながら、浴室へと向かつた。

服を脱ぎ、三十路の身体を見下ろせば、流石に色白の一夜でもくすみなどが出来てあり、瘦せているため益々貧弱に見え、若い女性のはち切れんばかりの胸や尻や太股を思い出すと哀しくなつてくる。これで明日何を「がんばれる」のだろうか。

嫌われたくないなあ。

一生、傍に居たいから。

子供の事情や周囲の手前、簡単に別れられないといつ事情もあるかもしれないが、パートナーに対し気が乗らなくても身体を開く友人たちも今の自分と同じ気持ちかもしれないと一夜は思つた。

そして源一に確認をされたため、明日は寝坊しないでおかねば、と浴室で酔い覚ましのお湯を被りながら彼女は心に決める。最近一人の休みが合わなかつた。性の相手だけでなく、それこそ大切な家族サービスである。二日酔いにならぬよう、ちゃんと起きよう、と。

ちなみにその約束は、先日彼が言おうとしていたことと関係しているのだが、ほどよく体温の上がつた一夜はそれを思い出すことなく深い眠りについてしまつた。

久々に一人揃つた休日だった。和食派の一人だが、休日の朝食は以前から洋食である。源二の淹れるコーヒーは、休日の疲れの溜まつた朝に丁度良い。一夜にとつては至福の時だ。

今朝も一日酔いとまではいかないが、若干けだるい身体を起こした彼女がのんびりと居間へと赴くと、平和な休みを象徴する温かな音と香ばしい匂いが漂ってきた。

「私もー」

部屋着のパークーの裾から手を入れ腹を搔きながらそう言つ一夜の姿には、相変わらず色氣も何もないが、源二は何も言わず、いつも週末どおり一夜にコーヒーをすい、と差し出す。

ちなみに休日の朝食は据え膳ではない。早起きの源二が既にパンを焼いて食べてしまつてるので、彼の朝食時間に合わせて焼いておくと一夜が起きる頃には冷めてしまつからだ。それに仕事に行くわけでもないので余裕もある。一夜は台所へと行くと、食べたい分だけパンを取り出して焼いた。時間を気にして朝食を食べなくてよいことも、休日の醍醐味である。

ゆつくりと口を動かしながら何気なく時計を見れば、午前九時。一夜としては早く起きたつもりだが、整頓されている部屋を見れば源二がそれ以上に早く起きて掃除までしたことが嫌でも分かる。

「源二は働き者だなあ」

台所のテーブルに頬杖をつくと、そう言つて美味しいブラックコーヒーを啜る。彼らしい苦味が心地よい。

こんなのんびりとした休日は久しぶりで、一夜としてはこのまつたりとした幸福感が嬉しかつた。外は晴れている。今日はきっと楽しく過ごせることだろう。

その後、着替えたり化粧をしたり 今日はいつもより丁寧に眉

毛の手入れをしたりと、のんびり支度をする一夜だが、源二は早くしろということもなく黙つて彼女のペースに付き合つていた。

彼の車で出掛け、ひとまず恒例の一週間分の買い出しに行く。しかし今日は珍しく源二の方から、「こっちでいいな」といつもと違う

ショッピングモールで買い物をした。一夜もそこの広告を見ていたので行つてみたく、いい機会なので冬物の日常着も買うことにした。昔から源二の洋服の選び方は、考えるのが面倒だからと一夜の買つてくるものを黙つて着ることもある。一夜としては雑誌などで見て買つてきて着ることもあるようだ。一夜としては雑誌などで見て彼が着たら似合うな、と想像してみたもので似たものを、こういう機会に安物になるが彼に買つてやるのもまた楽しいものなのだ。

いつかのホームセンターのように、痒いところに手の届く物が簡単に得られる場所を巡るのは気楽で楽しい。本屋など好みのの売り場を一人で自由に回つて、後で待ち合わせするのも楽しい。日常の匂いがする空間に安心感があるからだろう。休日の雑踏の中、二人は久々にそんな時間を過ごしたのであった。

昼食を食べるまで全くいつもと変わらない休日だった。一夜はそこで源二が何故、今日時間があるか聞いたのか不思議に思い、手ごろな力フェで食事をしながら問い合わせた。

「用の方は、いいの？」

テーブル越しに一夜が首を傾げて尋ねると、身体の大きい彼は狭い背もたれに遠慮がちに凭れながら腕組みをして頷いた。

「ここの後、行こうぜ」

時間はまだ正午過ぎ。午後も何も予定のない日であったので、一夜は素直に「わかった」と頷いた。

今日、二人のいるこの場所はとても懐かしい土地だった。二人が住んでいるところと同じ市内であるが、市の端と端同士になる。懐かしいというのは一人の出会った、はじまりの場所であるから

だった。

だから一夜にも予感があった。源一に今日この土地に誘われた時、もしかしたらそうかもしない、と。再び車に乗ると、思ったとおり一夜の予想する場所へと近付いていく。しかし源一の住んでいたアパートがあつた。今は取り壊されて公園となつている。場所へと向かう小道は入つていかず、そのまま国道を進んでいく。着いた所は、一軒の寺だつた。デートというには渋すぎる場所だが、逆に彼の意図が容易に察せられた。

「……お墓参り？」

一夜は車から降りながらそう言い、無表情で頷く源一を確認した。彼女も彼の両親の葬式の時に、一度だけそこに訪れたことがある。彼岸でもないのが不思議だが、不服は全くない。「それ」をするのは、普通「家族」同士だからだ。

婚約する前も二人は一応、「家族」であつた。だが彼は今まで一緒に行こうと言つたこともなければ、此処に行つて来たという話すら聞いたことがない。

一夜は大好きだつた母親が一人で眠る墓は、一夜しか面倒を見ることが出来ないので、大切に管理している。婚約してからは、源一についてきてもらつたこともある。

しかし源一には、墓参りをしているのか、管理はどうしているのか、などとあえて尋ねなかつた。彼が彼の両親に対し、今どのような感情を抱いているか分からないからだ。

なので一夜も、彼を産んでくれ、このような男に成長する礎を築いた彼の両親に感謝しており、手を合わせたいと思っていたが、彼の心に十足で踏み入るようで恐かつた。だからこの場所に黙つて来ることも気が引けていた。

だがどういう風の吹き回しか分からぬが、一年前に「婚約」しこれまでと違う「家族」の形になつて、彼は初めて一夜をこの場所

に連れてきたのだった。

一夜は自分と母親との関係を彼に押し付けたつもりはない。だが今日一夜を此処に連れてきたということは、源一がこの形のない想いと抗えない過去を受け入れるに際して、彼女を選んだという証ではないだろうか。一夜がそうであつたように。

死者の眠る場所で両手を挙げて喜ぶような不謹慎なことはしないが、源一からのこの場所への誘いが一夜にとつて嬉しくないことは決してなかつた。

「こんなことなら、お花くらい買つたのに」

「……そうだな」

残念そうに言う一夜に、さつさと歩き出した源一は短く答えた。彼女は「待つてよう」と言いながら、慌てて水を汲む。彼の背中に従つて、いくつも並んだ墓石の合間を歩いていく。苗字など滅多に呼ぶ機会はないが「水倉」と書かれた墓に辿りつくのに時間は掛からなかつた。

一夜の母方の遠い親戚らしいので、彼女にも薄い血の繋がりがある一人が眠る場所。何も言わずに跪こうとする彼の横から身体をねじ入れて、小さな墓の周りに水を掛ける。

そして一夜は八年ぶりに一人に向かつてそつと手を合わせながら、あの日の出来事を回想した。

・・・・・

あの日、何故か一夜の母に源一の両親の葬式の連絡が来た。

高校生の時に亡くなつた母方の祖母の親戚から。相手は一夜の母親や祖母でさえも他界していることを知らなかつたようだが、妙に固く事務的な案内の声に、若い一夜は出席せねばならないような威圧感を与えられ、何も考えずに式場へとやつてきた。今思えば運命に導かれていたのかもしれない。

葬儀 자체の規模は大きく、人が溢れかえつっていた。一夜は何故か

親族席に座られた。飾られた大きな花に書かれている名前からして、この「本家」とやらは大病院でも経営しているのだろうか、とぼんやり考えながら、よく分からぬまま式に出席していた。

この後の法要はしないつもりなのか、その日のうちに墓へ納骨し、流れで一人が住んでいたというアパートに他の親族と共にやつてくれる。全てが終わる頃には、どうやらこの家を継ぐ予定であった二人のため小さな式に出来なかつたらしいが、亡くなつた一人と親族との間には大きな溝があつたらしい、という空氣は伝わってきた。

一夜が初めて会つた「親戚」たちの文句から、亡くなつた一人が駆け落ちして家を出たこと、このような古く小さなアパートから分かるようにいい暮らしをしておらず、車での不自然な事故死であつたらしい事情も分かつてきた。

式の規模の割には先ほど行つた墓は「一人だけの小さなものだつた。親族がお金を出して建てたようだが、「本家」の墓に入れるることは許しがたかつたのだろう。

一夜はそれ以上のことは理解しようと思わない。興味すらなかつた。だが其処にいる小学生の息子　源一のことはどうするのだろうか、と心配になつて少年の彼を横目で見ていた。不自然なほど、誰も彼に声を掛けない。

『施設に預けるか』

そんな声まで聞こえてきた。どうやら血の繋がつた親戚だと言うのに、彼を養育する気はないらしい。そこまで彼らは源一の両親を疎ましく思つていたのだろうか。異常なほどのぎすぎすした嫌な空氣に、一夜まで息苦しくなりそうになる。

どうして、親を失つた子供の前でそんなことが言えるのか。今一番、考えてやらねばいけないのはこの子のことではないのか。

一夜は呆気にとられたうえに、こんな冷たい彼らと血の繋がりがあるらしいことにぞつとした。そしてひどい怒りすら感じた。誰も源一は居ないもののように扱つていい。

跡継ぎと駆け落ちをした相手の女性 源一の母親のこともその子供である源一のことも、親戚たちは厄介者のように感じているのだろう。更に話によれば彼の両親の死に様もよいものではなかつたらし。

『 無理心中だろ、どうせ』

『 借金までしやがつてたしな。事故扱いで保険金降りてチャラか。掛け金も安いもんだから、全くと言つていいほど残らねえし。ま、こつちに借金押し付けてこなかつたうえに、墓代と葬式代くらいは出したんだから、まだマシか』

『 でも今日の式やお寺とのやり取り、アパートの引き払い……、亡くなつた後の手続きは全部私たちが尻拭いしなきやいけないじゃない。余りのお金を手数料として貰つたとしても、面倒臭いつたらありやしない』

それが事実であったとしても、このような会話を今一番助けなければいけない子供の源一の前で平氣でしているのは異様なものだ。ちらりと息子の方を見れば、十一歳の少年の何も映さない黒いガラス玉のような眼が一夜の視界に飛び込んだ。

このままじゃ、「やばい」。

本能的に危険を察知した一夜は、その場で直感で動いた。一夜も天涯孤独で、誰に相談する必要もないのも幸いだつた。同じ「ひとりぼっち」の彼に迷わず手を差し伸べた。この少年をあの場から救い出したことは、今でも決して間違つていたとは思はない。

その後源一連れ帰り、様々な手続きの後、一緒に暮らし始めた。当初彼の精神状態は多少危ないものを感じたが、徐々に心を落ち着けていき、年齢にしてはこだわりを持たない懐の広さに、彼の両親は優しい人だつたのではないかと一夜は想像した。

しかし源一は両親のことも話したがらなかつたので、一夜はそれ以来、彼の過去のこともあの家のことも忘れるようにしていった。

『二人とも親、兄弟共に居ませんし、一人で暮らします。今後、そちらの家と私たちは関係がないということでお願いします』

二十一歳の一夜がそう主張し、誓約書まで作られた結果、あつさりと水倉の家とは決別出来た。寧ろ本家側は、厄介者払いが出来て大喜びだつたらしい。既に新しい跡継ぎも決まつており、その子供や兄弟などもたくさんおり、変な相続争いに巻き込まれるよりも身を引いた方が源二のことを守れると一夜は確信した。それに本家自体は離れた県境の都市にあつたため、連絡さえ取らなければあの親戚たちに会うことはなかつたのである。

完全な決別のためには戸籍上も一夜の「子供」にしてしまうことがよかつたのかもしれないが、流石に突然会つた十しか年上でない若い女を相手にそれは源二も抵抗があるようで、未成年後見人の関係となり苗字はそのままにしておいた。

これで源二には一度と本家から連絡はこないだろうし、彼も連絡を取つて欲しくないだろうと一夜は判断した。それも間違つていなかつたと思っている。先方も興信所でも使わない限り、源二の居場所は知らないだろう。男女の関係になつてしまつた後は、事情を知る者に余分なことを言われないことにほつとしていた。

あの日から始まる、二人の精神的にも物理的にも閉鎖された聖域はこうしたいきさつで作られたのだった。

一夜は墓石の前で、その下に眠る源一の両親に手を合わせる。後にこれだけ幸せにしてもらつていて、土の下の一人にも感謝の思いをそつと抱ぐ。そして八年前の運命の日 源一にしてみれば、思い出したくないほど辛かつただらう田 をこうして回想していた。

その後身を起こし、前を向いたまま跪いている源一の横顔を見るともなしに眺める。

供養とは本来、先祖代々の命の繋がりに感謝することかもしれない。しかしこの一人のようにその繋がりが伝えられないこともある。一夜も源一と同じように、先祖のことは何も知らない。一夜の祖母あたりがあの水倉の家を出てそのまま親戚付き合いをしなくなつた。そのうえ父親が離婚したことで、それまで親しくなつた父親側の親戚とは完全に会わなくなり、最終的に母親だけの小さな墓を建てることになった。それでも一夜は「母親」に時折会いに行つていた。

この世に産まれ出てから自分を育ててくれた相手との、温かな思い出が一片でもあるならばその存在を忘れることは出来なかつた。無下にすることも、叢の中に放置しておくことも。

源一は何も語ろうとしない両親の墓を、今までどのような想いで訪れていたのだろうか。さほど汚れていない様子から、ずっと放つていたわけでもないだろう。

小さな墓の前で二人の身体は自然と寄り添う形になる。十月も終わりに近いが、よく晴れた昼下がり。服越しに伝わる源一のぬくもり。

いつだって安心するのだ。愛する人と死によつて別たれたことを思い出すと。あたたかい、かれは、生きている。その事実に。

今、彼は同じことを思つてゐるのだろうか、と源一を見ていた。夜は思つた。彼は手を合わせない。じつと墓石を見ていた。睨むようではなく、何處か空ろに、言い換えれば突き放すようだ。それでも今、此処にいた。

「帰ろうぜ」

そして何もしないまま、彼は立ち上がつた。

「どうして今日來たの？」

一夜は遅れて立ち上ると、源一を見上げる。

「別に。気まぐれだ。彼岸でもよかつたけど、行きそびれたし」「そこで桶を持ち替えた一夜の手と源一の骨ばつた手が、偶然触れ、「一人は自然に手を繋いだ。理由などなく、あえて言えば相手を心配するように、相手に縋るように」。

命日でもないのにこんなことをしたところとは、今日のような秋の日に源一は何か両親との思い出でもあつたのだろうか、と一夜は思つた。が、否、と思い直す。

もしかしたら、逆に何も思い出のない何氣ない日だからこそ、私と来ることが出来たのかな。

何氣ない日の幸せ。失つて初めて気付く、もう一度と戻らない幸せ。それが、最大の幸せ。

いつが一番幸せな日であつたか、と聞かれても一夜は答えられない。

よく覚えている日は、大きな転機が訪れた日だ。たとえば一夜にとつては父親が家を出ていった日や、源一にとつては一夜と出会った日など。

だがそういう時は衝撃は強いが、「幸せ」であつたか、温かくわくわくするような気持ちであつたか、と問われれば首を横に振ってしまうことが多い。その日に戻りたいか、思い出したいか、と言

わればそれだけは勘弁して欲しいということもある。

だから源一も「今日」自分を連れて来たのかな、と彼女は予想する。

思い出したくもない辛い日には、来たくもないだろう。逆に樂しい思い出があつた日であれば、余計に辛くなることもあるだろう。だったら「幸せな日」ではなく、「何もないただの日」だからこそ、過去に立ち返っても心が壊れないでいられると思つたのだろうか。

「私のこと、報告してくれた？」

源一の過去に触れるかもしれない時、一夜は最大限の氣を遣う。だから「今の」彼の心境を少し冗談っぽく尋ねた。

「ああ。んなの、とつぐに」

しかし意外とあつさり答えられ、一夜の顔は赤くなる。こんな場所なのに嬉しくなる。繋いだ手が、気持ちいいほど温かい。思わず源一の手をぎゅっと握れば、握り返された。彼は黙つて青く高い秋空を見上げている。

だがそれ以上は、恐くて聞けない。一夜が父親のことを人に言われて苦しかったように、何気ない一言がどれだけ彼の心を傷つけるか分からぬ。

それでも一夜には強く優しい母親が傍にいた。どんな時でも彼女の味方で居てくれ、弱音を一切吐かずはずと慈しんでくれていた。だから強く生きてこられた。

源一も同じように、両親には愛されていたのではないだろうか。今の優しく心の真つ直ぐな彼を見ていれば、それが分かる。

おそらく借金をするほど生活は苦しくとも、あの日までは両親に愛されていたのだろう。だからこそ「心中ではないか」という言葉に、「自分は両親に捨てられたのではないか」という疑念が源一の中に湧き、答えをくれる大人もおらず、あのような暗い眼をしてい

たのではないか。

それを彼がどう乗り越えたかは分からぬが、こうして此処に来ているということは、そのぬくもりを忘れてはいなかつたのだ。忘れないでいよう、と思いつたのだろう。

自分とのことを報告してくれた。

それは彼にとつて一夜の存在が、過去を受け入れるのに必要だつたと認めてくれた証ではないだらうか。

源一も一般的な男性と同様、「こちやんこちやん」と考えず、直感的に動くことを一夜は知つてゐる。だから「理由」を問うても彼は答えなど返さないだらうが、きっと一緒に此処に来る相手としては「一夜」でなくては駄目であつたと思つた。

他人の死から、彼が自分を誰よりも特別に見てくれていると証明するのはその人物への冒流であるが、それでも一夜は源一がこうしてくれたことを、嬉しく思つてしまつた。結婚すれば私の「両親」になるんだから、と、一夜は彼らのこの墓を、彼が許してくれるならばこれから大切にしたいと思つのであつた。彼女の気持ちとして。

愛の言葉とはまた違つた、一夜への信頼を源一が示してゐる。何気ない日の、秋の午後に。

一夜は源一と繋いでいる手をぶらぶらと揺すつた。そして墓地から出ながら、ぽつりと呟く。

「私が、居るからね」

その手を強く握り。

「分かつてゐる」

源一は素直に頷いた。

あの日、引いた手と比べれば随分と大きくなつたものだ。だけど彼のこんな仕草は、出会つた頃、一夜が家族としての色々なルールを作つた時に、子供の源一が素直に頷いていた時と何も変わらない。

源一は源一で、父親に捨てられたから、と男性を恐がる一夜に何処までも優しく、慎重に接している。

互いが互いの心を壊した過去に気を遣い、守りたいと思うことは一緒であった。だから一人はお互がいのだろう。その優しさと弱さが心地よかつた。どちらかだけが一方的に庇護していっては、恋愛関係にはなれなかつただろう。

源一は無言であったが、今の一夜の言葉は彼も嬉しかつた。彼女が自信を持つてそう言つてくれたことが。

互いに小さな幸せを手にした秋の午後。きっと今日の日のことば、一人の中で一生忘れる事はないだろう。

いや、あまりに「特別な」日でないため、忘れてしまうかもしれない。それでもこの安心感は、しっかりと心に根付きこれから生きていく中で、またひとつ自己肯定に繋がるのだろう。それは彼らにとつては大切なことだつた。

そして源一の両親に別れを告げ車に乗りながら、一夜は改めて思つた。

だつたらやつぱり、そういう意味でも源一に家族を増やしてやりたい。私なんかが大丈夫のかつて恐いことはたくさんあるし、私の方が先に年はとるけれど、子供はどうにか養うから。だから赤ちゃん、やっぱり欲しい……かな。それに命の繋がりつてどういうものなのか、私も知りたいし。

既に肉体は滅び骨となり、残された想いは眼に見えず誰からも語られない源一の両親。しかし彼の中に、遺伝子に、彼の仕草や生き方、面影に、彼らは「生きて」いる。

だからこそ彼の両親に感謝するのだ。だからこそ、繋がつていく命が見たいのだ。それに伴いたくさんの困難や悲しみ、苦しみがつても、自分たちが生きていることがどうこうことであるか。

しんみりとした空気になつた一人だが、車に乗つた源一は一夜の考えが分かつたかのようになつた。彼女を見た。

「前話したみたいに……、就職するまでは作れねえんだけど」

それが「子供」の話であることは一夜にも伝わり、少々照れてしまう。

「今夜『がんばる』って、何してくれるわけ？」

しかし次の彼の言葉には、がくん、と力が抜けた。と同時に、一夜の身体中が熱くなる。冗談なのかどうなのか、無表情の彼からは分からぬ。

『どうせなら明日、……しよ。いっぱい がんばるから』

酔つた勢いで昨夜こんなことを口走つてしまつたことを思い出す。だが繋がれていた手からぬくもりが溶け合つたように、彼の気持ちが分かつた。これから未来に生まれる命 「子供」を欲しがつているのは源一も同じだろうと。

子供、かあ……。となると、その時には、中に……？

その瞬間、何考へてんだ、私！ といくら子供が欲しいからと言つて、このよつな場所でそのよつなことを考へた自分が情けなくなつてくる一夜。

しかしそんなことを此處で言つ源一も源一だ。無表情の裏側で、一体一夜に何を期待しているのだろうか。

「……まだ、考へて、ない」

一夜は赤い顔で呴くと、彼の視線から逃れるように車の窓から外を見る。

何気ない日の午後、過去に立ち返りまた現実をゆつくりと歩き出した二人は、秋晴れのどこまでも澄み切つた空の下、一人の住む暖かな家を目指したのであつた。

その36 今更ながら、目覚めました。

そしてそれから、一夜明けた明け方のこと。

涼しさと窮屈な寝苦しさに一夜が身を捩ると、何か抵抗を感じて目を覚ました。

何か、当たった。それに、少し、寒い。そりやそうだらう…
…裸なんだから 裸！？

そこで一夜は自分の状況に気が付く。涼しいながらも肌に当たるぬくもりがある。太い腕の上に自分の頭があり、背中側が暖かい。そろりと振り向けば、あの顔があつた。彼もまた無防備に寝ていた。

ああ、そういえば……。

「ゆうべはがんばりすぎた」ということを一夜は思い出し、身を縮めるほど恥ずかしくなるのであった。

そもそも後悔するならばそういうことをしなければよいのだが、遂に源一が喜ぶならそのようなことも厭わなくなつた自分が存在することが、一夜自身も不思議であった。

一夜は相手に気に入られるために意に沿わないことまでしようとは、決して思わない。源一に嫌われたくない、年上の自分に満足して欲しいという焦りや不安はあるものの。

そう考えれば、昨夜の「がんばり」は一夜が能動的に行つたといふことである。つまりは昔は嫌悪していた愛の営みも、もつ嫌ではないといふことだ。

しかも忙しく触れていなかつた期間が長かつた。身体に火が付いた、とはあのような感じを言つのだろう。気持ちと身体が高ぶつた奇妙な感覚を思い出すと 再び顔が熱くなつてくる。

それはあの時の源一も同様だったようで、彼の動きや息遣い、口

調などもまた常よりも荒々しいものだった。

それらを蘇らせた一夜は、誰も見ていないのに再び彼に背を向けると源一の布団で顔を隠した。

源一にもつと近づけて幸せになれるのならば、身体を重ねてみてもいいかな という覚悟から始まり、実際にしてみれば意外と嵌つてしまつたことは、一夜だけでなく、源一も驚いていたことである。もつとも彼にとつては大歓迎のことだが。

だがそれは源一のおかげである。彼がどこまでも一夜を大切にしてきたことが、彼女にその行為を嫌いさせなかつた。そして いわゆる身体の相性がよかつた、と言つてしまえばそれまでだらうか。しかし源一を喜ばせるなら、別に何もその行為に限らなくてよい。なのに如何せん一夜は女性らしいことが得意ではない。食事も裁縫も最低限のことはするが、趣味でも得意でもない。干物だ干物だと豪語していたように、趣味すらろくなものがない。

惚れた男を喜ばせるためには、身体しかないのかと突つ込まれれば情けなくなる。これは大切なゴミゴミケーションなんだ、と言い張るしか自分を正当化出来ない。

うーん。でも「これ」以外に源一が喜ぶことつて、何があるんだろうか。

もちろん、一夜は彼と普通の会話をしていることだけでも楽しい。食事を一緒に作つて食べることも、買い物に行くことも、ゴミの出し方ひとつで源一に世話を焼かれることも、一夜にとつては彼と出会つてから毎日の全てのことが楽しい。先日の墓参りに連れて行ってくれたことも、とても嬉しかつた。

源一はどうなのだろうか。彼にとつて嬉しい」とはなんだろうか。

不思議に思い、そして涼しいのもあって一夜が再び身を捩ると、「ん……、」と低いうめき声が聞こえた。寝返りを打ち完全に源一

の方に身体を向けると、薄田を開けた彼と田が合つ。源一もまた起きたらしい。

思わず下腹部を確認すると、彼の方は下着は身につけていた。思わずほつとしてしまう。対する一夜は不覚にもそのまま眠ってしまい、何も身に付けていない。

覚えたての頃ではないんだから、疲れ果てるほど何をしたんだ、と年齢を思えば恥ずかしさを通り越して呆れてくる。一夜は身体を見せたくないのもあり、そして涼しいのもあり、源一の方へとあえて身を寄せた。

彼はまだ寝ぼけているのか、それとも一夜が「がんばった」時の熱が残っているのか、黙つてむつりとした顔のまま一夜の身体を抱き締めてきた。

彼の腕を枕にしていた状態だったので、一夜は簡単に彼の腕の中に収まる。ぬるい体温が心地よい。

女性の一夜は朝から性欲旺盛と言つわけではない。そもそも朝に弱いのだ。だから裸の源一に抱き締められたところで、肌と肌の感触が気持ちいいと言つことはあっても、欲情まではしない。このあたりは流石に「慣れ」も少しあるだろう。

寧ろ、ひとりと寄り添つてくる寝起きの彼に子供らしさすら感じる。

高校生になつてからはめつきり大人びてしまい、可愛げのある時も少なくなつてしまつた。対等になり守つてくれるところには安心感を抱くし、男性としてときめきもするが、こうこうこうはまだ可愛いなあと思はれる。一夜はふふつと微笑んだ。

「何?」

そんな彼女に重低音で源一がぼそりと問い合わせる。まだ少し眠そうなのが益々可愛らしく、一夜はまた笑つた。

「なんか、子供みたい」

心もほぐれていたのだろう。思わず正直にそつと、相手はあ

からさまにむつとした顔をして強い力で一夜を抱き締めてきた。

「なに、ちょっと、苦しい」

寝転んでいるので一夜の顔は源一の肩の上にあり、彼の頬と彼女の頬が摺り合つ。ばたばたと裸の手足をばたつかせるが、彼の脚に挟まれれば簡単に封じられる。腕も同様だ。

頬にはざり、とした伸びかけた髭の感触。腹の下にも固い感触。子供などとんでもない。十分、エロオヤジ予備軍だー！ と一夜は思い直した。

「ハタチでガキ扱いってなあ」

ぶすりとした声に、彼にとつてまだこれは禁句だったのかと一夜は首を竦める。しかしそう言つてやるとむきになるところは、昔から変わらないのでつい時々からかつてしまつのだ。

男性はいくつになつても子供のままだと、千菜を始め恋人のいる女性は大概そう言つ。

そして年上に間違えられて喜ぶうちは、若い。年下に間違えられて喜ぶのは年を取つた証拠だ、これもよく笑つて話していたことだ。

そう言つ意味では今もまだ、一夜の方が歳を取つていて、源一の方は若いといふことなのだろうか。

そんな世代間の違いも感じさせられるが、

「いいじゃん、たまには」

一夜はそう言つと彼に抱きつき返した。これも欲情といふよりは、弟のような家族の彼に対して。

しかし背中に回つていた源一の手が、徐々に腰へと下りてきて妖しげな動きを見せ始めれば、身体がぞくぞくと反応してくる。

「こらこらこら」

まだ「年上」のつもりで、一夜はおつとりと源一を嗜めた。今日は日曜日で、久々に一日連續出勤しなくてよいといふ心の余裕もあるだろう。寝起きのけだるさもあるだろう。

昨日の昼の墓参りと夜の情事をきつかけ、また少し心の深いところに接し合えた気がすることもあるだらう。

だが源一の手が調子に乗つて一夜の身体の色々な場所を這いすり出しその身体が上に押し掛かり、

「……ゆづべの、もつかい、出来る?」

などと眼を覗き込まれて言われれば、一夜の余裕の残高も無くなり始める。

「ああああああなあ! 朝から何ゆづてんだ!」

至近距離で目が合わせ、こつんと額をぶつけられる。一夜は頬を膨らませた。

「ゆ、ゆづべのこと、は、言わない」

年甲斐もなく「がんばった」積極的に様々な行為を仕掛けた

」とは、もう思い出したくない。

「……でもすげえ、よかつたし」

「またそういうことを言つ!」

「あ? 僕に思つてること正直に言えつつたのはお前の方だろ」

「時と場合によるつ!」

「面倒だな。知るかよ」

胸の谷間を指でなぞられる。源一の要望に素直に応え、昨夜そこをつけて一夜が何かをしたことを、彼は思い出しているのだろう。朝からあれをもう一度しろと言われどうすればいいのか。

「今から、なんて、ダメ、だから」

「どうして」

「どうしても!」

「今日休みだろ」

「今日はがんばる日じゃないつ!」

寧ろ昨夜はがんばりすぎたか。喜んでおひるねのは嬉しいが、期待されるようになつても困る。

しかし上田遣いで源一を見れば、女の子に好かれるのも分かる端

正な顔で、不服そうに一夜を睨んでいる。

やつぱり子供じゃないかあああ。

やう思ひのに、求められて嬉しいのは事実。こんな年齢のいった女を。

そう思ひとこりとは、相手を「子供」などとは思っていない証拠ではないだらうか。

好きでもない相手ならば気持ち悪いだけのやりとりも、彼なら全て許せるのがやはり不思議だ。一夜の性欲が向上したことはやはり、精神的な影響が大きいようだつた。

そういひしてこるひちに、源一の手が両方動き出す。一夜は背を向けてうつ伏せにならうとするが、後ろから難なく抱きかかえられる。

「あー、もー、じりあー……」

彼は縋るように、背後から再び抱き締めてくる。

そう言えど、「保護者」だった時は、彼の望むままに生きて欲しいと願つたものだ。だからやはり、彼の望むようさせたくなる。親バカというのか姉バカというのか分からぬが、根本的に源一に甘い一夜であつた。

つても、源一も私には相当甘いよな……。

結局、今でも夢の中、聖域の中にはいる子供のままの一人なのだろうか。一夜はぼつと蕩けてきた頭で考えていた。

……その一時間後、源一はすつきりとした顔で起きてアルバイトへと出掛けていき、一夜は「朝から、なんてことさせんだよー！ 源一のばかー、どへんたいーー！」と泣きたい気分で彼のベッドで一度寝を始めるのである。

その37 答えの出ないしあわせ。

一夜が再び目覚めたのは、正午を少し過ぎる頃であった。外はこんなにも明るいのにまだ裸で居ることが、誰も居ないのに恥ずかしい。朝からもう一度情事をした、先ほどのことも恥ずかしい。

一夜はのろのろと身を起し、床に散らばったパジャマを拾い上げ、自分の部屋へと行き洋服に着替える。

しかし乱れた関係であろうとも、朝もう一度、と思つほど源一が喜んでもくれたのならば、頑張った甲斐もあった……といつものだろうか。

結局、何をすることが源一の喜びになるのか分からぬので、昨夜の一夜は彼の望むままに色々なことをしたものだ。過去にも経験のある、互いに互いの……といつものだけでなく、源一から要求のあつた胸を使って……といつものや、一夜が上になり、そして彼女が自発的に……といつものまで。

それがどうやら、彼にとつては嬉しかつたらしい。

こんな三流アダルト番組のようなことを源一が求めていたのは驚きであったが、彼もまた一般的な男性であつたのだろう。それでも初めて結ばれてからここまで約三年も待つてくれ、一夜の意思も確認してくれたうえでの行為だ。

ジーンズを穿いた一夜は、上半身は下着姿のまま部屋を出た。そして再び源一の部屋に戻ると、彼のネルシャツ一枚拝借した。ボタンを留めて袖を折る。何やらそういう気分であつたからだ。

台所に行き、仕方なく一人でコーヒーを淹れる。彼の淹れてくれたものの方が美味しく一緒に飲みたいが、今日は仕方ない。

しかし現金なもので、一夜もあれだけ頑張ったことで、彼のことがより一層愛しくなつたような気がしててきた。源一でなければ、あんにも頑張りはしなかつただろう。それともそう思つことで、

あの淫らな自分を正当化しようとしないのだろうか。一夜は苦笑いを浮かべる。

大胆なこと、したなあ。

居間でお菓子をつまみつつコーヒーを啜れば、そんなことをしみじみと思い、ほんのりと頬を染める。叫び出したいような恥ずかしさから、この年齢でよくやつたよな、と寧ろ自分自身に呆れるような、感心するような気持ちにすらなってきた。

だがたかが性行為と言えども、昨夜は一夜自身、能動的に動いたことで発見もあった。

自分で積極的に気持ちを盛り上げたり、神経を集中させたり、身体の角度を変えたりすることで、より気持ちいいと思つことが出来るのだ。好きな場所も連続的に刺激出来る。

これは経験を重ねたからこそその発見であり、セックスに対しても主体的になることに抵抗がなくなってきたからだ。昨夜蕩けるような時間を過ごせたのも、いうつ理由である。だから一夜にとつても、「頑張った」とことは懶い思い出ではないのだ。

この年で、こんなことが好きになるなんて思わなかつたなあ

……。

一夜の場合、最も性欲が盛んなはずの十代後半は精神的に不安定で、男性不信に陥っていた。高校時代の一夜は、男性とほとんど口をきいていない。

性欲とは年齢が高めば衰えるものと思っていたが、そうではないのだろうか。性欲旺盛な時期の源一をがつかりさせたくない一夜にとつては、今の状態は悪くないのだろうが。

しかしあれだけ気分が盛り上がつても、避妊を失敗しない源一は凄いものだと、一夜は改めて思う。彼自身、常に気を遣つてくれているので、三年経つても不信感はない。危険な日には絶対しない、それ以外の日でも何かを装着していても中では……など、理性の手綱を放さないでいるのだ。

健気な彼に同情しそうになる。子供を作りたくないのなら、それが当たり前のことであるのだが。

しかし同情以前の問題で、今的方法だけではそれでも避妊に失敗することもあるかもしれない。

ピル飲んでるよ。

彼女に飲ませてるよ。

ということを聞いたのはいつの飲み会の席であつたか。職場の若者が酔つた勢いで話していた。

一夜はそのままふらふらとパソコンの前に座る。

源一のシャツは、大きい。何処か彼の匂いがして彼に抱かれているような安心感があり、昔から愛用している。袖を少し捲ると指先だけでキーボードを叩く。

本当は医者などに聞くのがいいのだが、その避妊にも効果のある薬の効用や利用方法、副作用を思わず調べて始めてしまった。

……数十分後、一夜は何もメモすることもなくそのページを閉じた。パソコンから離れると、コーヒーを置いてきた居間のソファへと再び戻る。

飲まないと、いけないのかなあ。

それは最も確実な避妊方法であるようだ。しかも避妊以外にも効果が思いのほかたくさんあつた。年齢を考えれば、子宮のことはもつと考えなければいけない。医者に相談して正しい知識を得れば安心も出来るだろう。そう自分自身に言い聞かせるものの、何やら一夜は踏み出せないでいた。

でも「失敗」するかもしれないんだよな……。

この先、二人が子供を産める、と思える状況になるまでまだ三年も掛かる。それに一夜の方がずっと年上なのだ。彼と長く一緒に居たいならば、避妊だけでなく健康のことも気遣わなくてはいけない。だったらすぐにでも手を出せばいいのだが、一夜には説明もつかない

い抵抗感があるのだつた。

元々、彼女は薬と言つものあまり飲まない」ともあるだひつ（一日酔いの後の胃薬だけは別だが）。健康な身体の働きを外界から力で調節することが、何やら「恐い」といつ、ただの感情的な理由なのだ。

もう、三十なのに、情けないなあ。

源一も思つところはあるだらうが、決して一夜に性欲だけでひつしるとは言わない。そして先ほどのように、彼自身が自制を続け、いざという時の覚悟も持つてくれているらしい。それは流石ですし、そういうつた強い心を持つところが、一夜が彼に惚れている所以の一いつであるのだが。

だからゆうべも、「それ」以外のことで頑張ったんだし……。本当に結婚が決まるまで。あともう少しの間、身体や心に負担のない範囲で、彼との行為を楽しみたいと今の一夜は思う。だからまだ今は、このまま、いいだらうか。何が正しいことなのか、一夜には分からぬ。分からぬが、彼に守られているのは心地よい。このシャツの中にいるようなものだ。

それに心のどこかで、思い切つて彼との子供を授かりたいと思つてゐるのだらうか。

もちろんまだ学生の彼に負担を掛けたくない。それでも将来的に子供が欲しいことは既に確認し合つてゐるし、以前、たつた一度だけ間に何も隔てずに時にも、「もしもの時も、大丈夫だ」と言つてくれたが。

ソファに凭れて考えていた一夜であつたが、やがてうとうとしきてきたので完全に眼を閉じた。昨夜から激しい動きをたくさんして、疲れた、と思う自分はやはり年寄りなのだらうか。

秋の午後の日差しが、部屋の中に暖かく降り注いでいた。

夕方。田の陰つた部屋に帰つてきた源一が田にしたものは、ソファの上で彼のシャツを着たままくー「べー」と眠る一夜の姿であった。

洗濯物も入れ忘れ、今日一日何もしないで眠つていたらしいネムリヒメ。日頃の仕事の疲れや昨夜遅くまで、そして今朝も早くから「運動」していた疲れもあるかもしれないが、呑気なものである。源一はその寝顔をいつもの無表情で見下ろした。涎でも落ちてきそうな半開きの口で、妙に幸せそうである。

人の気も知らねえで。

そう思うのは昔と全く変わらない。もしかしたら彼女は、聖域の中で何も成長していないのかもしれない。

それでも彼はフリース地の大判の膝掛けを彼女に掛けてやり、洗濯物も黙つて取り込みに行く。

仕方ねえなあ。

「Jの「してやっている」と思える居場所があることが、この八年間、孤独だった源一にとつての「幸せ」なのだと、彼も本当は知っている。だから彼女とずっと一緒に生きてていきたいと思つたのだから。

昔と変わらない自分に気付いた源一は、自分もまた一夜の言つとおり子供のままなのだろうか、とふと思つた。

だけど、それがいいんだろうな。

洗濯物を手に持つた所帯臭い格好で、彼は間抜けな顔で眠る一夜を振り返ると、息を吐き出して苦笑した。

・・・・・

そして秋が終わり、寒い冬がやつてくる。

十二月の始めの、一夜の勤める部署の忘年会のことだ。

一夜は酔つた勢いで「ある約束」をして帰つてしまつた。年

齡と共に落ち着いてはきたが、酒が入ると饒舌になり調子がよくなるのは、相変わらずのようだ。

折角だからと隣の大きな市で行われた忘年会は、一夜も三次会まで楽しんだ。そして酔った勢いで午前零時頃、源一に「電車ないし、タクシーも高いから、迎えに来てー」と電話をかけてきたのであった。

そこで大人しく迎えに来る源一も源一だ。

更には帰りの車の中で、気持ち悪いと言いつつ、一夜はこう言うではないか。

「ねえねえ、年明けに和田っちが源一と私と二人で一緒に飲みに行こうって。金曜日とか空いてる?」

「はああ!?

酔っ払った一夜からの唐突な提案に、源一が眼を剥いたのは言つまでもない。

その38 冬の闇と、ストイックな聖夜？

和田といつ人物が、一夜の職場で見かけたあの若い男のことだと
いうことは、源一も嫌でも知っている。一夜が何度も親しげにその
名を呼ぶので、覚えてしまった。

今年の夏に一人で買い物をしている時に出くわし、更には旅行先
でバッティングまでしてしまい、その男がそつなくフオローしてき
たことも源一の記憶にまざまざとある。

独占欲の強い源一にとって、和田は「いけすかない奴」リストの
中に既に放り込まれている。確かに頭は切れそうな男なので、一夜
を助け、それで彼女が仕事をしやすくなるならば、気に食わないが
許してやらないこともない。

しかし一夜のことを「仕事で助けてやれる」ということは、源一
には絶対に手を出せない部分で彼女の力になっているということだ。
彼女が同僚に慕われるのはよいことであり、仕方ないと分かってい
るが、つまらない対抗意識を抱いてしまう。一夜の前では口にしな
いが、いざ、その男と同席しろと言われると、何で俺が、とあまり
面白い気持ちはしない。

だがそれを知らない一夜は後輩と言えども、彼に世話をなつてい
るからか、その提案に応じたいらしい。彼女に甘い源一は、最終的
には大人しく従ってしまうのであった。

本当は、誰であつても一夜の傍で、自分以外の者が彼女を助け、
救うなどということを、源一は昔から許せない。

確かに一人だけの「聖域」の外で、互いが成長するのは大切なこ
とだろう。しかし源一は、一夜が聖域を必要としなくなる日がくる
など考えたくもなかつた。それは彼女に誰とも結婚して欲しくない
と願つた、中学高校の頃と変わらない。

やはり互いに互いしかいないと、最後には自分の元に戻

つて来て欲しい。自分だけしか居ないのだと縋つて欲しい。

歪んでいるかもしだれないが、源一は本気でそう思つてはいたのだった。

全てが壊れた彼の世界に一夜が現れた。だから彼もまた、一夜にも同じように思つて欲しかつた。

両親を一度に失つた過去からそこまで思いつめるようになつた源一だが、何か黒い闇が己の心に潜んでいるのは彼自身以前から感じていた。

しかし悪循環。その黒い影から己を救い出せるのもまた一夜だけだと、彼は思いこんでいた。

逆に一夜を傍に置くためには、彼女よりも強くならねばならない、彼女を守ることで、彼女に必要とされなくてはいけない。だから、その闇に負けるわけにはいかない。その感情と一緒に一夜を抱き締めて、そのうえで自力で立つてなければいけない。

幸いにも一夜に依存しながらも、源一はそれだけの強さを持ち合わせていた。だから無表情を作つて、その感情に易々と飲み込まれないようにしてゐるのだ。

そして一夜に心配掛けないよう、彼女の真似をして日々を穏やかに過ごしているうちに、いつの間にか彼の望む状況へと全てはゆっくりと向かつていき、その負の感情も滅多に表れなくなつた。

そうしたことから一夜に和田と一緒に飲もうと言われたことは、源一にとつては少々複雑な感情を起こさせることでもあつたのだった。

しかし今は忘年会シーズン。これからクリスマスも訪れる。源一ですら、大学の方で様々なイベントに誘われている。一夜曰く交友範囲の広い和田はこの時期忙しいらしく、三人で飲むのは年明けにしようという話だ。

よつて源一も、しばらくあの腹の立つ男のことは忘れることにし

た。

・・・・・

そして数週間が過ぎ、大学も冬休みに入らんとする頃。クリスマスイブの夕方、今年最後の授業を終えた源一は、聖夜にも関わらず、いつもどおりアルバイトに勤しんでいた。

高校生の時から勤め、もう三年になるこの配達業。大学生なので深夜のシフトも入れられるようになり、元々時給もよい仕事であるので稼ぎも飛躍的に増えた。

経験年数から年上の新人 同じ大学生から四十代の男性までを源一が教育することもある。しかし彼は如何せん口下手だ。部活で後輩に教えていたサッカーと同様、遣り方を見せて覚えさせたいところだが、親子ほど年上の男性にそのような失礼は出来ずに、気を遣つて言葉を選ぶ。

やはり気の合つた仲間とのペアの方が、楽しく仕事が出来るというものだ。今日のシフトは、未だにフリーター生活を続ける、三つ年上の青年、奥原と一緒であった。

彼とは高校一年の時からの付き合いで、正反対のタイプであるのに何故か気が合い、長く世話になつてゐる。ただし奥原の場合、人の性生活のことにまで突つ込みを入れてくるような余計なお節介を焼いてくるので、そこが玉に傷であるが。

「つて、水倉くんよー。今夜はクリスマスイブだぜー。早く帰らなくていいのー?」

周りに人の居ない冷える倉庫で荷物を仕分けている最中、奥原が早速声を掛けてきた。時刻は午後七時半になるところ。

「これが終われば、帰りますから」

源一の仕事はこの山を片付ければ最後だったので、淡々と答えると作業を続けた。今日の時給はいつもより高い。深夜勤にはフレ

ゼントとしていつもの倍近く出してもいいぞ、と専務は笑っていたが、流石に聖夜だ。家で待つて一夜が居るので、深夜まで居るつもりはない。

と言つても、生活費や貯金のために少しでも稼ぎたい。一夜にいつまでも養われたくないという意地もある。よつてわざわざ自給のよいクリスマスイブに、仕事を入れたのであつた。

それに一夜は、メディアで取り上げられるような、「恋人同士のクリスマス」を男どもうしても一緒に過ごしたいようなタイプでもない。人混みも嫌だし何より、踊らされていることが恥ずかしい、家でのんびり食事でもしたい。こんな主張は源一も何度か聞かされたし、彼も同感である。

そのうえ一夜は面倒くさがりで、甲斐甲斐しくケーキなどを作つて待つているようなタイプでもない。ただし昔からイベント好きなものあり、子供らしくない源一を喜ばせようと、彼女が食べるための豪華なケーキを買つたり、サンタ帽を被つたり彼らされたり、プレゼント交換などはしてきていた。

しかし互いに大人になり、必要なものもそれぞれ好きな時に買つている。別に欲しいものもないし、とそれこそ干物女だ、無欲な一夜は一緒に過ごすこと以外、特に何も望んでいないだろう。ストイックな源一はそう捉えているのであつた。

だから急いで帰宅はするが、気を遣つたクリスマスデーントなどは計画していない。

「カノジョ、怒つちまわないので？ どうか連れてつてやれよー」

そんな源一に、一応仕事の手を動かしながら奥原がせつづいてくる。彼は源一の想いを以前から知つていて、一夜が「カノジョ」であることも、気が付けば断定形となつていた。

「何年付き合つても、いくつになつても、そんなことないよーに見えて、普通、女はそういうモンだぞー。俺だつてこれから出かけるもん」

今は決まった女がいるのか、見掛ける時はいつも違う女を連れている気がする奥原は、クリスマスイブを一人で過ごすなど考えられないらしい。彼もまた相当の寂しがり屋なのかもしれないな、と源二は大人びた感想を抱く。

「大丈夫です、……多分」

トラック運転手が入ってきて、こんな話題を聞かれるのも嫌だ。源二は早々に話を切り上げようと、奥原に真面目に答えた。

「ホントかよー」と彼は言うと黙つて仕事を再開したので、この話は終わったのか、と源二はほつとした。しかし、

「ところでお前らって、ケツコンしねえの？ あのねーちゃん、もう

「いい年だろー」

その短い金髪を星のように倉庫の光にきらめかせる奥原の唐突な質問に、源二も古典的にずさわざーっと前のめりに荷物を倒してしまった。

「……痛くない？」

「大丈夫です……」

一応心配する奥原の方を見もせず、源一は崩してしまった荷物をもう一度積み直した。割れ物でなくて運が良かつた。寒さで手足が冷えているので打ち身をすれば痛さ倍増になりそうなものだが、働き者でスポーツマンの源一だ、痛みはさほど感じない。

それ以上に動搖していた。

じついう時、どう説明してよいか分からなくなる。源一自身が他人の事に興味がないため、近しい友人も彼の女性関係など詐索してこない。先日のように好きでもない同級生の女性が擦り寄つてくるような飲み会では、男連中にも「どうよ?」と話を振られるが、源一の方がどこまでも素つ気ないため、そこで話が終了する。

しかし彼は嘘がつけないし、つくことも好きではない。和田と一夜の仕事上の信頼関係が気に入らなかつたこともあり、こそそするのも性に合わないと、先日のバッティングでも和田に堂々と挨拶した。

だが、結婚する関係であるといつとこりまで言つかどつかは、別問題だ。詐索されて嫌なのは一夜の方なのだから。

この場合、どうするか。奥原と一夜に接点はない。あれこれ冷やかされて面倒なのは源一の方だ。だから無視しようかとも思つた。だけど俺がコソコソしていたら、また一夜は年上だからどうのこうのと面倒臭いことを言つだらうか。

それに呆れるところも正直あるが、やめるとか、嫌だとは思わない。一夜が自分と一緒に居たいと思っているからこそ悩んでいるのだ。孤独を経験した源一には、彼女に「勝手にして」と見放されることが余程苦しく、腹立たしく、嫌だと思うことなのだ。

しかしここで奥原に對して事實を告げても、別に一夜が見ているわけでもなく、彼女の耳に入るわけでもない。が、源二の中の意地として、誇示することに意味はなくとも、「俺はこれだけお前のことを想つてんだ」と田に見えないとひうりでも証明してやりたいような気になつていた。

彼女に届くわけでもないが、これもひとつクリスマスプレゼントだ。こんな夜だし、気分に任せて言つてみてもいいだらうかと珍しく殊勝なことを源二は思つたのであつた。

彼は奥原の方を見ずに、作業を続けたままぼそりと呟いた。

「 しますよ、……そのうち」

奥原はきょとんとした顔で源二を見た。彼は無表情で先ほど倒した荷物の状態を確かめ、トラックに放り込んでいる。その心臓が妙にぱくぱくと鳴つていることは、奥原には聞こえていないはずだ。よく分からぬ高揚感が此処にある。真冬の夜の倉庫だというのに、内側から熱い。

「ふーん……そりや、おめでと」

しかし奥原の反応は意外とあつさりしたものであった。少し笑つてそう呟くと、荷物に頬杖をついて源二の働く様子を眺めている。源二は奥原に、高校生の頃から度々一夜のことについて冷やかされてきた。実際、彼女に勢いで告白してしまつた後、家に居られなくなり一時期、彼のアパートに転がり込んでいたこともある。家族の居る同級生には迷惑掛けられないと、何度も世話になつたものだつた。

その時にも、はやし立てられたことを思えば、今回も「いやあ源二くんよかつたねえ、若妻ならぬ若夫？」遂に青い春が「云々」くらいは言われるかと思つたが、意外にも一言で終わつた。拍子抜けしたが、からかわれることは嫌だったので安堵もしている。二十三歳にもなり、彼も少しは落ち着いてきたのだろうか。

「できちゃつたり、とかしたの？」

しかしその質問には、源一も閉口した。確かに若くして結婚すればそう思われて当然だらう。しかしこれについては一夜のことを思つて、きちんと計画し、我慢を重ねている部分もあるので 正直、最近は子供が居ればより一夜との関係が確かになり、二人の血を分けた「家族」がいる生活も楽しいかもしないと思うようなこともあるのだが 、誤解されるのは何やら悔しい。

しかし人に何を言われようとも、彼女を大切にしていると言つながらば、自分の判断に胸を張つていればいいだけの話だ。

「まだですよ」

源一は再びつづけんどんに答えると、奥原が体重を預けている以外の荷物に手を伸ばした。

自分の言葉に奥原が眼を丸くしたことに、彼は気付いていない。

その言い方からすれば、いつかは欲しいと思っているんだ、といふ源一の本心が奥原に伝わったからだ。

「水倉も、成長したねえ……」

しみじみと呟かれるその声は、後輩の成長を喜んでいるのか、それとも孤独から逃れられた源一への羨望から、逆に馬鹿にしたものも混じっているのか。源一には両方に聞こえたが、ただ「ありがとうございます」と言葉を返した。

「おやつさんとか俺とかケツコンシキ呼んでくれんの？ 俺、意外とケツコンシキつて行つたことないんだよね。なんかみんな籍だけ入れて終わりだつたりするから。子供できたからとか、金なかつたりとかして。だからどういうもんか見てみてえんだけど」

「一体人の人生を何だと思つていいのか分からぬが、彼なりに楽しみにはしているらしい。

「……どうですかね。まだ先のことだし」

「そーなんだ」

源一はにやにやしている奥原の顔を見ずに頷いた。やはりいつも
の彼らしくなってきた。徐々に冷やかしの色が濃くなり、源一の恥
ずかしさもそれに比例してそちらを見られない。

「皆は知ってるの?」「

皆、とは高校時代から世話になつて、アルバイト仲間のこと
を指している。「元締」「おやつさん」と呼ばれる西脇という初老
の男や、彼の元に集つて、若じごろつき連中のことだ。彼らの
間は固い協定のよつなもので結ばれ、割のよいアルバイトの話が回
つてきたり、西脇が保有する海の家やスキー場の飲食店などのア
ルバイトもそのメンバーで行つてこる。

男性の家族が居ない源一にとっては父や兄とも言える青年たちの
顔が浮かぶが、彼は首を横に振つた。

「今、初めて話します」

「へええええ。嬉しいねえ。まあ、まだいつするか決まつたわけじ
やねえから、そつか」

そういうセレモニーは嫌いそうだが、源一は世話になつた人間
には、必要に応じて自分から礼儀として話をするタイプだらう。奥
原はそう思つたので、

「じゃ、まだ皆には言わないほうがいいの?」

と珍しく気遣いを見せてきた。源一は驚いたよつに顔を上げた。ど
うせ言いふらされて、更に茶化されるだらうと思つたからだ。

「いつか、自分から言つつもりですが、……どちらでも、いいです
よ」

だが、思わずそう答えた。冷やかされるのは面倒だが、別に悪い
ことをしているわけでもないのだ。嘘をつく必要はない。

「あー、そなんだ。じゃあ言つちやおうかな。なんかもう、あの
水倉くんがねえ、長年の片想いが実つてねえ。すごい年上の人とね
え。もう、みんなびっくりよ。こんな楽し……いや、めでたいネタ
……いや美味しい酒のジマミはないつてよ

しかし最初の素つ氣なさは何処へやら、奥原の頬が徐々に彼らしく、にやけてきた。口がうずうずうずうずとしてたまらないようだ。

やつぱり、『ういう男^{ヤツ}だつたか……！

やはり余分なことを言つたのかと源一は頭が痛くなる。言ふらされる前に、最も世話になつてゐる西脇にだけは自分の口から言つべきかと思つたが、まだ式を擧げる、籍を入れるなどという具体的な話は決まっていないので、早々に言つのもためらわれた。

「だから、具体的になつたら、俺からちゃんと言いますつて」

そうは言つたが、一度はOKと言つてしまつた。先に奥原の口から自然に聞こえていつてしまつような氣もした。「あ、そうなの？」と奥原はにやにやしながら、源一の要求を一応呑んでくれたが。次に会つた時の皆の反応が怖えなあと仏頂面をする源一に対し、奥原の方は今度こそ満面の笑みでこう言つた。

「でも、めでたいことだからさあ」

彼にも思うところがあつたのかもしれないが　　今のこの表情に、嘘はないだろう。

「おめでとう」。隠し通してきた自分たちの関係を初めて人からそう言われ、源一の心がじわりと温まつた。

これまで、人から祝福されるという経験はなかつた。しかも長年培つてきた想いの果てを。

祝福されると、こんな気持ちになるのか、と源一は思つた。

「……ありがとうございます」

今はまだ、はにかみ笑いすら出来ないが、源一は頭を搔きながら先程とは異なる思いでそつちくと、奥原に軽く頭を下げた。

その40 まつたりと、幸せな聖夜。

午後八時三十分。源一がアルバイト先から帰宅すると、「おかえりい。待つてたあ、おなかすいたあ」ドアを開けると同時に、居間の炬燵に潜っていた一夜が、そう言いながら玄関の彼を振り返った。

「食つてりやよかつたのに」

今夜は台所ではなく居間の方からいい匂いがする。源一は話しながら自室へ入ると着替えを取り、洗面所へと向かう。そしてアルバイト用の作業着を洗濯機へと放り込むと、風呂には入らず一旦着替える。先に夕食を済ませたいほど、腹が減っているからだ。

炬燵に根を生やしたままの一夜は、源一が着替えたことを確認するど、台に顎を乗せて言った。

「えええ。折角のクリスマスだぞう? 『はんいつもより豪華にしたのに、一人で食えつてそんな冷たいことがよくゆえるなあ』

台所から源一が炬燵の上を見れば、確かに食事には手をつけられていらないようだつた。しかし、机の上には既に開けられた赤ワインと、破れたチーズのパッケージとスルメ数本と、何故か塩が置かれている。

どうやら待ちきれずに晩酌していたのだろう。腹が膨れない程度のつまみで。呂律がやや回つていらない様子からも、一夜がそうしていたことは想像つく。ワインボトル三分の一程度ならば、まだまだもな会話も出来るだらう。

源一は一夜ほど酒が好きというわけではないので（体质的に弱くもないが）、先に一杯やつていたからと言つて文句はない。寧ろ酔いも回るというのに、腹の減った状態のまま待たせていたことが、まるで子供か子犬を待たせていたように憐れになる。

「メシ、よそつてくるけど、お前は」

彼なりに氣を遣つて尋ねた。クリスマスディナーを意識した食卓

だが、今はとにかく腹が減っている。白米は最高に腹にたまるのだ。しかし源一の問いに一夜は「いらないー」と言つので、彼は自分で茶碗にご飯を盛り炬燵へと戻つてきた。

いつもならば台所のテーブルで食事をするが、今日の一夜の気持ちとしては酒を片手に長い時間食事を楽しみたいらしい。正月と同様、料理は炬燵の天板の上に広げられている。

骨つきチキンを炙つたものに、ビーフシチュー風に牛肉を煮たもの、星型クルトンのサラダに……何故か、ふろふき大根。それがこの家のクリスマスディナー、らしい。

大根は源一も嫌いではないが、恋人関係になつてから、何故かクリスマスに毎年大根料理が現れるようになつた。一夜曰く、冬場は安く身体も温まり、ボリュームもあるからと、確かに家には大根が常備されている。

しかしげざわざクリスマスを狙うのは、「この如何にも」な空気に照れる彼女のささやかな反抗ではないか、と源一も薄々感じるようになつてきた。

だが一夜の煮る大根も嫌いではない。白米にも合つので、黙つて食べる。一夜の仕事はこの時期は忙しくないらしく、クリスマスの料理は彼女が作ることが多い。特に源一が子供だった頃は、彼を楽しませようと気合を入れていたようだ。

それに一夜自身もイベント事は苦手でも祭りの空気は好きだというので、この時期だけの美味しそうな食材を見ればわくわくしてくるのだろう。日頃質素な生活をしているので、今日くらい豪華なものを食べようという自論みもあるようだ。

淡白な味の大根を口にする。牛肉はこつてりと塩辛く、ジャガイモは不揃いな切り方になつていて。しかし長年食べ続けてきたので、この味にも源一は慣れた。寧ろ、これが当たり前であり、美味しいと感じる。外食では何か物足りない。

「待たせて悪かった」と言いそびれた源一だが、予告した時間通

りに帰ってきた。だから料理の温度も丁度よい。酔いが回り饒舌になつた一夜の話に傾きながら、黙々と今年も彼女の作ってくれた料理を食べ続けていた。

ふと気が付くと、ワインボトルを自分で傾ける一夜の指に、今宵もまた源一の送った銀の指輪が光っていた。「それでさあ、あんの日和見室長がさ……」と居酒屋で杯酒でも飲んでいるようなノリで職場の愚痴を零す一夜であるが、ちゃつかりとそういうことは「押さえて」といるらしい。

彼女は源一の視線には気付かないようだ。指摘してやると絶対に照れて怒るんだろうな、と思いながら彼は一杯目のご飯をかき込んだ。食事が終わったら自分もアルコールを一杯飲もうと思いながら。その指輪は夏の旅行の時にも一夜が身につけていたものだ。

ただの保護者と少年から恋人関係になつた三年前のクリスマスに、源一が一夜に贈つたものである。日頃アクセサリーをしない一夜だが、何か思い入れのある口にはこうして何処からか出してくるらしい。

あの頃はまだ高校生の源一だったが、一夜がようやく自分を認めてくれたことが嬉しくて、恥ずかしいのを我慢して買ったものだ。そして当時はまだ一夜と肌を重ねておらず、結局、そのクリスマスの日に勢いで途中までしてしまつたのだが、そういうふた衝動も含めてあの頃は若かった……などと思わず回想する。

彼女に事前に話せるわけもなく、恥ずかしかつたが店員の勧めで銀のリングを買った。サイズを最後まで気にされたが、高価過ぎないものでフリーのサイズで、と注文し、後は一夜の指を思い出しながら運を天に任せて購入したものだ。気に入ってくれたのか、こうして何年も着けてもらえているのは正直、嬉しい。

一夜はそんな源一の懐古など知る由もなく、ワインと大根と肉の組み合わせを楽しみ、腹が膨れた後はスルメを齧り、塩をちろちろと舐めていた。

とは言え、今でもそういうものを買うのは恥ずかしい。あれはあの頃の、彼女に振り向いて欲しいという勢いと何も知らない無鉄砲さがあつたからである とまだ二十歳だと呟うのに、年寄り臭いことを考える源一は、三杯目のご飯をよそいに行く。

そして「だらだら飲むモード」に突入し、あまり食事の手を動かしていない酔いどれの一夜の前に、台所から持つてきた一つの包みを置いた。

「なあに、これ。……まさか、プレゼント?」

それにしてはリボンも掛かっていない殺風景な白い包装紙のため、一夜もあまり期待していないように尋ねた。

「そうなよくな、そうでないよくな」

源一はむすりとそう言つと、三杯目のご飯を食べ始めた。

「なにかなあ。あ、今年のケーキは生チョコだからねえ」などと言いながら、わくわくと包みを破つた一夜は、中の細長い木箱を開けた瞬間、

「おおう

と、色気とは無縁の歓声を上げた。

「……高かつた?」

「こいついう時、じゃねえと買わんからな」

「これで私に作れ、と」

「俺も使うし。どうせ俺が研いで、手入れすることになるだろ?」 黙々と箸を動かすして答える源一。彼女の手の中にある箱に入っていたものは、蛍光灯にきらりと光る 高級銘柄の包丁、であった。

一夜への、こいつよりは、この家へのクリスマスプレゼント……のつもりだろうか。新品の包丁と無表情の彼を見比べながら、一夜は笑い出した。

「でも確かに今使つてるの、切れないし

「安物だしな」

「まったくだ」

「……それに、プレゼントとか、何やつていいかよく分かんねえし」「いいよ。」「めんね、私なんて何も用意してないよ。それに、こういうずっと使えるいいもの、嬉しい」

これは、源一なりの気持ちのつもりだった。クリスマスプレゼントに毎年貴金属を渡しても、アクセサリーを身につけない一夜の負担になるような気がしてた。だからと言って彼女が興味を持つて集めているものは地方の地酒以外、源一は知らない。枠だのスルメだのお猪口だの胃薬だの、飲酒関連グッズばかり贈るのもどうかと思う。

だが流石の源一も、あれだけ街が装飾され周囲が浮き足立つていれば、何かせねばいけないような気にもさせられる。飄々とした、その年代らしからぬ価値観と解脱したものを持った彼でも、世情といつものが多くは気になる。

というわけで、今年は「使える」ものにしたのであつた。こういうところに金を掛けるあたり、「大人」になったような気もしてしまう。

嬉しい、と笑う一夜が本当にそうなのか、疑つつもりもない。きっと彼女もこうこう価値観を持ち合わせているだらうと、確信していたからだ。

「これで美味しい」はん、作ってね

「……ああ

美味しいかどうかは知らないが、自分がこれを使うのは事実だらう、と思つた源一は頷いた。

「つて、そつちも使えよ

「うーん、使うには使うけど、美味しくなるのかな……包丁変わる」と変わるかな

「変わるだろ

それはアルバイトで調理場に立つた経験で思つ。源一は断言した。「分かつた。いい包丁だから、長持ちするといいな。源二、手入れしてね」

「分かつてる」

「長く使わないと勿体ないね」

「上手く使えば、一生モンだろ」

「うん……」

「」馳走とワインと、高級包丁を皿の前に、一人はそんな会話をしていた。

だけど一夜の中で、徐々に幸せがこみ上げてきたことを源一は知らない。

一人で使うものなので、プレゼントとは意味合いが少し違うが、「一人で」「日常に」使えるものなのだ。しかも「一生」使えそうだ。

一応既に婚約している身だ。これ以上の関係はないものの、まだ戸籍上、社会的には結ばれていない。だからこうして少しずつ「そこ」に近付いている証明を「えられる」とは、一夜にとつては下手な物を贈られるよりもずっと嬉しいことなのであった。

そんな一夜の女心を、流石にそこまで細かく理解していない源二であるが、そう言えば先ほどのプレゼント……？ 奥原に「一夜と結婚する」と打ち明けたことを彼女に言つてこないな、と思つ出した。

しかしそれは「事実」を口にしただけなので、あえて言つ必要もないが、と源一は思い直した。口にするのが恥ずかしいというのもある。わざわざ、当たり前のことを。

そう思つた彼はひとつ頷くと、食べ終えた茶碗と新品の包丁をさつさと台所に片付け、炬燼の上のワインに手を伸ばした。

「飲むの？」

「ああ」

珍しい、と一夜は思つたが、源一と飲めるのは嬉しいことなので、ぼうっと眺めていた。彼はそれをボトルに直接口をつけて煽ると、驚く一夜の髪を軽く引き、その唇に唇を重ねた。三年前の、夜と同様に。

うわあ、と思う間もなく、生ぬるくなつた液体が、彼の舌と共に彼女の口内に流し込まれる。唇から溢れた赤い雫が、ぽと、とその首筋に一滴垂れた。

初めて肌を重ねたクリスマスの夜もこんなことがあつたな、と一夜も思い出しながら、既に酔っていた彼女は大人しく源一に身を任せた。

まだ、ケーキ食べてない……けど、おなかもいっぱいだし「運動」してから、明日ゆっくり食べようかな。

一夜はそう思いながら炬燵という色氣のない場所で、唇と舌をワインの味で重ねていた。そして柔らかな炬燵布団の上に、二人はその身を横たえた。

その41 包丁の切れ味と年末の光景。

クリスマスイブが終われば、一十五日は木曜日。一日仕事に出ればその後が土日である」とから、一夜の仕事は一十七日から一週間の正月休みに入った。

十一月二十七日。楽しい年始年末の休暇が始まった土曜日の夜、アルバイトに出かけた源一を待ちながら、一夜は夕食を作っていた。

「おお」

思った以上に軽やかな包丁の切れ味に、彼女の可愛いとも黄色いとも言いがたい歓声が上がる。

楽しくなつてきて、いくつもいくつも野菜を切る。休日で時間もあるので茶碗蒸しに具沢山の味噌汁、もうすぐおせち料理ばかりになるし、と作った洋風ハンバーグには、みじん切りの玉ねぎ。

料理が美味しくなつたかどうか、味に鈍感な一夜は実はあまり分かつていない。しかし一昨日のクリスマスに、源一が早速その包丁を使って夕食を作り、「切り口が違うと、味の染み込み方も違うだろ」と作った食事を前に珍しく得意げに語っていた。

直にこの切れ味にも慣れるだろうが、苦手な料理でも美味しいくなつているかもしれないという期待と、切る時の手に抵抗を感じさせない快適さから、日々の炊事が少しは楽しくなりそうだった。

第一、源一が一夜との今後の生活を見据えてこれを買ってきていたとが嬉しい。流石の一夜も頬がにやけてくる。

やばいやばい、これではただの変な人だ。

一夜は愛しい包丁を置くと、切り過ぎて山盛りとなつた野菜を調理することにした。

こんなに楽しけじはん作つてんだから、早く帰つてくれればいいのになあ。

これまで「作るの面倒だから、夕飯食べててくれないかな」と思つた時もあつたというのに、現金なものである。

源一の方は大学が冬休みに入ったと言つもの、あまり家には居ない。日頃、夜にアルバイトをしているので、そのシフトが変わったのだから何日でも泊まつて稼いでくればいいものの、彼は長くとも一泊ほどで必ず戻つてくる。

明日は一日家に居て、これまで少しづつ行つていた大掃除の仕上げと日持ちする食材の買い出し。二十九日からはまた一泊スキー場へと働きに出掛け、大晦日の朝に戻つて一日かけてお節料理を作り、年越しへ家で過ごすと言つていた。年が明ければ、近場でまた別のアルバイトをするらしい。いつもより時給が高いと言つ理由で。

それらの年末の家事を一夜の手伝い、ではなく一夜が手伝う立場で、源一が自主的に行つてゐる、というあたりが二十歳の男子大学生とは思えない。

しかし長く外泊しないのは、本当は自分を気遣つてのことではないかと一夜は感じていた。

笑顔で「行きたければ行つていい」と彼女は言つが、心中では「このまま源一が帰つてこなかつたらどうしよう」という不安をどうしても抱えてしまつ。「行つてきます」と言つた母が帰つてこなかつた、父も居なくなつた、未だ続く一夜のその恐怖が、同じ経験をした源一にも分かるのだろう。

だが一夜にしてみれば、こんな年齢だというのにその優しさに依存し、二十歳の青年の行動を制限していることが気に掛かる。今、早く帰つてきて欲しいと思つてゐることも罪深いような気がしてた。

野菜を火にかけ肉を捏ねながら、一夜はため息をついた。この状況を幸せと思つていいのか、改めるべきなのか、源一はいつも他人

のことは気にせず、一人で一番いいと思つ答えを出せばいいと言つが、未だに分からぬでいる。

体力的にもきつくガソリン代も掛かるといつのに。彼が帰つてくるのは果たして気遣いといか、それとも彼の意思でしていることか。

ちなみに源一がアルバイトを切り上げてでも家に帰つてきて行く、年末大掃除とおせち料理作り。一夜も一応手伝つもの、途中でもういいじゃん、疲れた、と根を上げてしまはばど、彼は納得いくまで作業する。

源一が子供の頃は、彼にそういう行事を味あわせてやろうと手伝わせていたはずなのに、器用な彼がそういう技術を習得してからは、年々手際がよくなり、そして彼の方が手を掛けるようになつてきた。

繰り返すが、源一は自分の意思に反することはしない頑固者だ。ここまでくればもう気遣いといではなく、もしかしたら使命感のようになつてしまつたのかも知れない。やはり彼は自分の意思で、そうしたいから帰つてくるのかも知れない。

一夜はそう思い、婚約もしている今、その恩恵、もとい親切をありがたく受け、正月休みを満喫することにした。愛されているといえるのかも知れないが、源一のそういう使命感も、もしかしたら彼側の依存のひとつかも知れない。

それでも、新年を家族で楽しく迎えられたら、それでいいんだ。

一夜は頷くと、氣を取り直してハンバーグを焼き始めた。

そして、ちらりと居間の炬燵を見つめ、ふつと思いつく。この包丁が家にやってきた、クリスマスイブの夜を。

— 昨日のクリスマス。一夜は朝から疲れていた。胃はむかむかと気持ち悪く、頭痛も伴つほど日覚め。夜には残したケーキを食べられるほど回復したもの、折角の包丁も使う気力がなかつた。

ぐつたりした表情で出勤すれば、和田には「一日酔いですか？」と笑われ、それに力なく頷いておいた。一日酔いとなってしまったのは、イブの晩、酔っ払った上に「運動」し過ぎたから、変にアルコールが回ったのだろうと一夜は自覚していた。もちろん、和田にも誰にも言えないことだが。

酔いにまかせて「私、何も用意していないし、プレゼントのお礼」と、再び色々と「がんばって」しまったのだ。

年も年なんだし。酔つた時は気をつけないと……。
それを思い起こす彼女の背後から、あの手触りのよい炬燵布団がこちらを見ている。あの上で一人で寝転び、何度も何度も唇を重ねているうちに、気分が嵩じた。そのうえ服の下をまさぐられれば身体中が熱くなり、彼の囁きのままに、思わず自分から全てを脱いでしまい、その上に跨り……。

あああもう、年甲斐もなく、何やつてんだよおっ！－！

こんな性欲旺盛なオバサンは嫌われてしまわないかと、その遊戯の愉しさに目覚めてしまつた一夜は新たな不安を抱きながら、味噌を鍋の外に撒き散らしながら高速で溶く。

包丁事件で嬉しかつたから興奮したなどと、あまりに単純すぎる。しかし本当にここ最近は己の身体を知ってきたというか、慣れてきたというか……確かにそういうことが前ほど嫌ではなくなつた。一夜もその感覚を素直に受け入れ、自分がもつと「好く」なれるよう、能動的に相手に仕掛けることすらある。

あんな恥ずかしいことをして、一日余えずに、忙しい中わざわざ彼が帰つてきてくれて、買つてもらつた包丁に幸せを感じて。そんなことを考えていると、毎日顔をつき合わせていくのに、源一の顔を早く見たいような、何処か照れ臭いような、未だにそんな気分で同居人の彼を迎えてしまう、一夜なのであった。

そして（源一だけ）慌しい年末を無事に終え、迎える初春。

「あけましておめでとー」

「ん、」

一月一日の朝。いつもの炬燵の上に、源一の作った豪華なおせち料理に（一夜も少しば手伝つたが）、お屠蘇と熱燗。年越しの夜には初詣も行つてきた。

「今年も健康で、幸せでありますように」

ちん、と熱燗を入れた猪口を合わせて、二人の新しい年は幕を開けた。

その42 自堕落な正月休みと三角形の頂点

さて。一夜にとつて正月休みといふものは極楽であるが、源一、三年ほどは自堕落すぎるのではないかと、頭を悩ませることしばしばある。源一の作ったおせち料理で酒を飲みながら、一日中炬燼に潜つて駅伝を見る。これはもう何年も繰り返してきた恒例のぐうたらぶりであるが、婚約者になつてからは少々話が変わってきた。確かに少しばかり身体を動かそうと、初売りに出かけることもある。おせちに飽きて甘いものやこつてりとしたものを食べたくて出かけることもある。源一は正月だから給料が割増だと、せつせとアルバイトに出かけてしまう。

のだが。

一夜の正月休みは三日まで。その間源一は泊りがけのアルバイトは入れていないらしく、次の仕事に行くまでの空き時間には一旦家に戻つてきている。なのでその数時間を利用して、一人で時間を過ごし、外出などもした。

しかし、時間の有効利用はそれだけに終わらなかつたのである。

一月三日の昼下がり。早朝の仕事を終え、午後からのアルバイトに出掛けた源一。一人ぼっちになつた居間で、一夜はため息をつきながら散らばつた服を身に着けていた。虚しく流れるテレビでは、爽やかな汗を流す若者たちによつて駅伝がクライマックスを迎えている。

少し身体が冷えたようだ。一夜は炬燼にもぐり込む。

正月早々、昼間つから、連日、何やつてんだか……。

……というわけである。一人での外出から帰つて来た後、もしくは彼がアルバイトから一度帰つてきて休憩している時間、確かに三十分あれば「事」は足りてしまうのだ。

ほろ酔い気分で炬燼に潜つていると、隣に座つた青年にあつさりと襲われてしまう、という次第であった。年末は慌しく家に居なか

つたため、その分も、といふこともあるのだろうか。

最近、炬燵で、が多いな。

すつかりと「元通り」になつた一夜は、眼を細めて天板の上に顎を乗せる。のうのうと蜜柑に手を伸ばし、少し乾いてきた皮に指を入れた。

ほんの十五分前まで漂つっていた甘い空氣も、明るい部屋に響いた一夜の喘ぎも、源一の荒い息遣いも真剣な眼差も、全て幻のように消えている。朝の霜や冬に吐く息に似ている。空氣に溶けて、何も残らない。

その時間は、確かにあつたというのに、文字通り三大欲求のひとつとして自然に行われ、そして何気ない顔で日常の生活に戻る。源一も「すつきり」したことなど悟らせもしないで、これから仕事にかかるのだろう。

もちろん他の欲求と違い、心が満たされ、相手を感じられる行為だ。それはとても必要なことで幸せなことだと思うから、一夜も楽しんでいるのだが。

それにして、炬燵というあまりに色氣のない場所で行つのが、彼女には逆に後ろめたい。

これ、ふつかふかで気持ちいいもんなあ……でも、たまには干さなきゃなあ。

モダンな色使いの、格子柄の炬燵布団。汚れてはいないようだが、気に掛かる。潰れ具合も、湿り気も。そんなことを思い、一夜は蜜柑を咽ながら、再び黒い台に頭を打ち付けた。

食べて、飲んで、して、寝て……本当に墮落した人間になりそつな、ここ数年の正月三が日である。幸福でないと言えば嘘になるが、こんなことで明日からの年始め、きりつとした顔で仕事が出来るのか、と軽く苦惱してしまつ一夜であった。

・・・・・

夢のような正月休みが終わり、季節は一年で最も寒い時期を迎える。一夜は年度末に向けて仕事を再開し、源一は一年生最後の授業を受けていた。そして一月も半分を過ぎた、旧正月となる頃。

白い息を暗い夜空に向かつて吐きながら、二人は並んで歩いていた。源一はいつに増して口数が少ない。一夜も少し前までは話していたが、今は話題も尽きた。今夜これからのことと思い、彼は不機嫌になつてているのか、それとも緊張……などはする男ではないだろ？

一夜はそう思いながら、黒いフリースの上着に同じくフリース地のマフラーを巻いた源一を見上げる。視線に気付いた彼は目に見える空気の塊を夜空に残して、一夜を見下ろした。

「何？」

「付き合わせて、『めんねー』

「別に」

今日、何度も繰り返したやり取りをする。白いコートの上にストールをマフラーのようにぐるぐる巻きにしていた一夜は、源一のフリースの裾を摘んだ。

人通りの少ない夜道。すると唐突にその手を繋がれ、ポケットの中に入れられた。一夜は少し驚いたが、怒つていないので、とほつとした。今夜は無理矢理付き合わせたようなものなので、源一に申し訳ないと思っているのだ。

駅に到着すれば離される手ではあるが、温かくて頑丈で、一夜の大好きなもの。この頃になると十代だった彼と初めて結ばれた夜を思い出し、何処か切なくなつていたが、もう源一は大人なんだな、と嬉しく、頼もしく思う。精神的にも、年齢的にも、社会的にも。だから今日のように、一緒に飲みにも行けるのだ。

そう言えば、こんな風にわざわざ飲みに行くの初めてなのに、三人で飲むことになるなんてなあ。

それに気付いた一夜はまた心配そうに源一を見た。彼の性格

上、そこまでこだわりはないと思うものの。

そう。今宵、二人は街の居酒屋へと向かっていた。しかも一人だけ飲むのではない。

いよいよ例の「約束」を果たす時が来たのである。

「へー、工学部でも土木の方なんだ。俺、経済学部だつたんだけど、工学は統計とか情報工学の先生の話、聞いたかなー」

居酒屋にて。和田は機嫌よさそうにそう言うと、生ビールの入ったジョッキを口にした。

一夜を挟む形で源一と、今日一人と飲むことを希望した、彼女の後輩の和田が座る形になつていて。最初居心地の悪かつた一夜は、出された枝豆の硬さやゆで方についてぶつぶつと言つてみたり、更には豆の栽培方法についてなど、妙にどうでもいい話を饒舌にしながら、やけくそのように生ビールをあおつていた。しかし同じ大ジョッキを冷静に傾ける源一と、特に気負う様子もなく源一に話しかける和田は、いつしか自然に話を始めていた。

通つていてる時期が重なることはなかつたが、話を聞けば二人は実は同じ大学に入学したらしい。無口な源一だったが、気の合わなさそうな和田と会話が成立していく一夜は驚いていた。

ただ大学関連の話題はもちろん、最新の端末情報から始まって電子機器業界の話や、一夜の勤める施設の建築上の問題点について、果ては日本の道路工事についてなどの話になつてくると、一夜には関心のない分野なので聞いていてもよく分からぬ。最初の大ジョッキが空になり、彼女は身を縮めてちびちびと日本酒を啜つていた。和田が気を利かせて、源一と話しながら一夜にも話題を振り、甲斐甲斐しく酌をする。

しかし一夜は自分が黙つていてる分にはよかつた。こうした気まずい状況で、源一が黙り込んでしまつたり、三人で無言になつてしまふ方が痛々しい。

それよりも、源一の態度に驚いていた。愛想のない彼だが、和田

の質問には的確に答え、彼の意思も添えて話していたので、源一も大人になつたんだな、男性相手だとこういう話し方をするんだな、と一夜は新たな発見をしながら彼らの話を聞いていた。そして大学受験の相談はされたものの、源一が今、何を勉強しているのかいまいち理解していなかつたため、彼がそういうことに興味を持つていたのかと一夜は改めて知つた。

「鎌田さん、彼氏さんの前ではそんなに喋らないんですか？」

そこで和田が一本目となる熱燗を一夜の猪口に注ぎながら笑顔を向けるので、彼女はいきなり変な話を振るなー！と首を竦めた。和田の視線が源一に向かつたので、一夜も一緒に源一を見上げると、「職場じゃそんなに喋るんですね」

彼はぼそりとそう言つて、和田の猪口に熱い酒を注ぎ足した。それから新しい徳利を注文する。

冬の夜の和風居酒屋。和紙に包まれた柔らかい灯りのテーブルで、いつしか三人で熱燗を傾け合つていた。無表情の源一の横顔を一夜は眼を瞬かせて見ているが、彼の感情は読めない。

「そうだねー。仕事中はあんまり無駄口しないけど、飲むとそりやもう、面白いよ」

「へえ

猪口の縁を赤い舌で舐めた和田の言葉に、源一も横顔で一夜を見た。それは一瞬で、彼は自身の杯を空にする。一夜はやや震える手で、置かれた源一のそれに酒を注いだ。

「そ、そんなこと、ないよ」

よくわかんないけど、なんかやっぱ、恐いしー！　帰りたい

よーー！

それなりに見田のよー、しかし何やら妙な空気を間に漂わせる男性一人に囲まれて、一夜は机の下よりも低くなつてしまいそうなほど、身の縮まる思いになつてきた。その居心地の悪さから逃れるよう、夜、彼女は猪口の中の酒を一気にぐびりと飲み干した。喉と頭の

奥があつと熱くなり、この氣まずさを感じられる気がする。

「鎌田さん、ペース速いですよ?」

和田が苦笑しながらも、一応空いた猪口に酒を注ぎ、火に油も注いでくる。

「また、潰れたらどうするんですかー?」

「また?」

和田の言葉に、源一が再びじろりと睨んでくる。

和田たちの前で潰れたことなんてないじゃないかー! 多分……。

源一は一夜を信じてくれると思うものの、先ほどよりも空気が若干ぴりぴりしてきたような気がする。それこそ冬の夜の、肌を刺す空気のようだ。

和田も一夜には興味などないだらう、全く悪趣味な男である。これでも先輩として慕つてくれているようなので、失礼だと強気に出られないお人よしな一夜にも、問題があるのかもしねないが。

なんで、私がこんな思いしなきゃいけないんだよーーー!

誘つた和田に、渋々応じた源一。このセッティングをしてしまつたのは、一夜。断らなかつた己の弱さを恨みながら、一夜は源一の「おい」という静止も聞かず、現実逃避のように勢いよく酒をあおつた。

「そーなんだよ。だからね、そりゃ外部に言われたのは分かるけど、つつかれたからってじゃあわかりました、はいすぐに、つて年度途中にいきなり利用料をね、引き上げますって館の利用者さんに私が説明するわけだ。それは上の命令だからするけれど、納得いかない人たちの気持ちも分かるわけよ。市役所とか行くと私も腹立つことあるもん」

さて。いよいよ一夜は酔つてきた。田舎の回らない口調で、仕事の愚痴が始まる。

もう十年ほど前のことになるが、ある時を境に酔えば空気の悪さを忘れられる、と少々人見知りの氣がある一夜は気が付いた。それから酒に弱くない体质を利用して、そもそもその味が好きなこともあり、酒の席では積極的に飲んで神経を麻痺させ、誰とでも話すよう努めてきた。

今日同席している一人は、最も気心の知れた恋人と仲の悪くない同僚。だからこそ逆にこの微妙な三角形の空気に耐え切れず、一夜も思わず杯を重ねてしまった。

べらべらと喋りながら、源一に猪口を突きつける一夜。注げ、というしるしだ。「もうやめとけ」と源一がいつの間に注文したのか熱いほうじ茶を彼女の前に置けば、「まあまあ」と和田が一人の猪口にそれぞれ酒を注いでくる。三人の前には徳利が「ころころと転がり、時折それを「失礼します。食器、お下げしまーす」と居酒屋の若い女性店員が回収していく。

一夜は熱いほうじ茶と熱燗を交互に飲んだ。自分などに飲食を施してくれることがありがたいと、彼女は受けた杯を無駄にすることが出来ない。しかし源一のこうしたさりげない気遣いも嬉しい。お茶の苦味が全身に染み渡る。

酔つ払った一夜の嗜好は、最早意味不明のものとなってきた。酒

のつまみにお茶を飲む。頭の中がふわふわとし、訳が分からなくなつていて。熱燗から焼酎に切り替えた和田はそんな一夜の状態を見越してか、冷たいグラスを一口傾けると、にやりと笑つて問い掛けた。

「で、お一人の馴れ初めとかって、そろそろ聞いてもいいですか？」

突然の質問に、途端に一夜の全身が沸騰したように熱くなる。その顔は湯気でも出そうなほど赤くなつた。

「いや、何、その」

「水倉くんの出身高校つて、うちの職場の隣の学校だよね。つてことは、まさかボランティアとかで来てくれた時に？ それとも児童館に通つてた頃から知つてるとか」

酔つた和田も気が大きくなつたのか、いよいよ核心に踏み込んできたが、

「やややややそんなことあるわけが！」

「おめえは黙つてろ」

激しく動搖する一夜の頭に、源一の鉄拳が無情にも振り落とされた。その衝撃で、一夜はテーブルに沈む。

「あ、ごめん。聞いちやいけないようならやめとくけど」

流石に拳まで出してくれば、和田もまずいことを尋ねたかと焦つてしまつ。二人の乱暴な関係は長年の「家族」たる所以のものだが、和田は恋人とそこまでの関係に至つていないので少々驚かされた。逆に、「姉弟みてえだな」と彼の姉との関係を重ねた。ただしそれは十も年が離れている二人に失礼な感想であるかもしれないと、言わざにいたが。

源一はちらりと一夜を見た。酔つてしまつた彼女はそのまま眠ろうとしているのか、突つ伏したままだ。しかしどんな状況になろうと、大事な判断まで出来なくなる女性ではないと彼は知つていて。どうしても言われるのが嫌ならば、怒るだろう そう思つた源一

は、彼もいくらか酔いに任せて、ぶすりと言つた。

「親戚ですよ。血縁関係は遠いけど」

それを聞いた瞬間、和田はきよとんとした顔をし、一夜はがばつと飛び起きた。源一と彼女の視線が結ばれる。彼は仏頂面で、「どうする？」と言つように一夜を見ていた。

酔つて熱に浮かされた頭だが、奥底に残つてゐる冷たい場所で一夜は考える。この先、源一と結婚するという未来が本当に訪れれば、どのように出会つたのか尋ねられることは増えるだろう。結婚するということとは「社会」の中あえて自分たちの関係を置き、「法律」というきまりでその関係に名前をつけ、保障されることになるのだ。

一夜たち一人は、この現実の世界で生きていこうと決めた。互いだけが居ればいいと思う反面、互いのことを想うからこそ堂々と生きていたい、多くの人々に助けられ、出来ることなら時に誰かを助けながら、楽しく暮らしていきたいと望んだ。

そのために、一人揃つて聖域の外に出ることにした。それが婚姻といふ手段であった。年齢が離れているからこそ、その決断を早めにしたのだ。

だが和田が今一瞬のぞかせた、この驚いた表情。外界からすれば、二人の関係は時にこのように見られることがある。

色々な年齢差の、色々な出会い方をした恋人同士がいる。二人だけが特殊なわけでもないが、一夜は源一との閉鎖的な関係を「自分たちはこうだ」と他人に説明することが恐かつた。彼と結ばれたばかりの頃は特に、たくさんの迷いに苦しんだものだ。

だが社会生活では婚姻ひとつ結ぶにも、就業していれば届けを出さねばならず、子供が産まれれば尚更、大勢の人の世話になる。家族が増えればそれだけ接する「世界」の数も増えていく。

周りから様々な波が押し寄せてくることを覚悟して、これから一歩ずつ進んでいかねばならないのだ。

酔つた一夜には上手い言葉が出てこない。本当は源一を守らねばいけないのだが、精神的にも、アルコールにも強いこの青年にましても守られる形となる。一夜は押し黙り、一人の邪魔にならないよう縮こまつた。

一夜が始めてこなかつたため、源一は話を続ける。

「俺、親居ないから、一夜に世話になつて」

「そつか……」

軽く聞いた一言から重い過去が返つてきてしまい、和田はそう言うと静かに眼を伏せた。それでも気まずそうな表情をなるべく見せないようにしているあたりが、彼らしいな、と一夜はのぼせた頭で思つていた。

「軽々しく聞いて、ごめんね」

敬語でない言い方は、源一に向けてのものだらう。グラスを持った手を額に当てると、和田は源一を見て苦笑した。

「いえ、事実ですし」

源一の声を聞きながら、和田の反応は十分いい方だらう、と一夜も思つ。この世の中には十人十色の思いが存在する。育ててきた子供をそういう対象に見たのか、と一夜を軽蔑する者も居るだらう。それでも自分と自分のパートナーを信じる、搖るぎない心を持たなくてはいけない。

今の源一は大人として外界に出る、その予行練習を行つていうふに一夜は見えた。

ただいつも堂々としている彼は、一夜よりもずっとそれに近い場所に立つており、とつ々に大人になつてゐるよつにも見えた。過去に源一が、同級生の女子と付き合つていたことを思い出す。彼は一夜を諦めようと、一度は聖域の外に出ようとしたのだ。

酔いもあつて、人形のように身動きもせず話を聞いていた一夜だつたが、

「で、結婚もします」

源一のその一言に、空になつた徳利が倒れるほどの勢いで、再び机に額をぶつけた。

「なんだ、おめでとー」

一夜の愕然とした様子と、無表情な源一の様子の落差に、和田は手を叩いて笑い出した。

「そうだったんですね。鎌田さんも、おめでとひざいます。まあ、仕事中にあれだけ気にしていたようだから、相当仲よくて結婚も近いのかなって思つてましたけど」

いくら予行練習だからって、そこまで言わなくともいいじゃないかー！

一夜の身体がふるふると震え出す。確かにあと、一、二年後にはそうなるので、皆に話すことにはなるのだが。

「じめん、私、トイレ……」

一夜は遂に耐え切れなくなり、ふらふらと席を立つた。

「大丈夫かよ」の源一の声に、力なく笑みを送つて頷く。本来は一人揃つて「挨拶」するべきことだが、今日飲み会の席でこんなことになるとは予想もしておらず、へべれけになつた状態で込み入つた話など全くもつて無理なことである。後日改められるなら、そうしたいものだ。

それに源一があれだけ真つ直ぐな視線で和田に受け答えしていることも、また照れ臭かつた。真剣に愛され守られている女としての自分を、和田に見られることが恥ずかしくて居たたまれない。

「愛されている」と人前で主張されることにも、もつと慣れなければいけないのかな、それに慣れることは傲慢ではないのかな、と用を足しながら新たな疑問を持つ一夜。くらくらと眩暈がし、淡い白色光が揺れる。彼女は回る天井を見上げながら、でもそれはとても幸せな悩みなんだろうな、という思いも噛み締め始めていた。

「色々言われて、大変じゃない？」

先輩である一夜が居なくなつたため、和田は源一の猪口に酒を足

しながらしみじみと呟く。代わりに源一が焼酎のボトルを手に、和田の飲み物を作っている。

「今まであまり、人に話したことないですね」

マドラーを搔き回す源一の言葉に、和田はなるほど、と苦笑した。

「だから鎌田さんも、逃げちゃったわけだ」

そして源一に礼を言いながらグラスを受け取る。新しい氷がカラ

ンと涼やかな音を立てる。

「別に何も悪いことをしているつもりはないし、恥ずかしいこともあります」

これまでの時間、和田の質問に答えるだけであつた無口な源一が語り始めたので、和田は眼を瞬かせて目の前の年下の男を見た。

「俺の年の所為で、もしかしたら彼女が嫌な思いするかもしねいけれど、そんなのは言わせておくしかないの」

「まあ、そうだね」

和田は残り少なくなつた食事に手を伸ばすと、冷たい焼酎を味わつた。

「多分、これからも世話になると思いますが、よろしくお願ひします」

軽く頭を下げる生真面目な源一の言葉に、和田はまた声を上げて笑つた。

「そういうのは鎌田さんが結婚する時に、その上司とかに言いなよ
鎌田さん、中々教育が出来てるなあ、と和田は感心するものの、驚くほどお堅い二十歳の青年と、少女のようになつたえる三十路女性とのギャップにはやはり笑えてきてしまう。

「ま、鎌田さんなら大丈夫だらうけど、これから一人でがんばつて。
俺もあの人には世話になつたしさ」

微笑を浮かべる和田に対し、源一はあくまで真顔で頷いた。

「つうか、君さあ、俺のこと、疑つてたでしょ」

そこで互いの距離が縮まつたと思ったのか、和田が身を乗り出し探るように源一の顔を見てきた。源一はびくりと反応すると、牽制

するよつに和田を見返した。無礼を働くつもりはないが、軽く睨む
よつな目つきになつてしまつ。

その言葉は間違つていなかつだ。

「……まあ、少し

嘘をつく必要はない。源一はそう言つと猪口の酒を一気に煽り、机の上に置く。そして今一度和田の眼を見た。対する和田は悪びれずに笑うとこう返した。

「やっぱり。でも、そのつもりはないから」

「そうだとも思つてました」

しかし次に返つて来た源一の冷静な答えにに、和田は「あ、そうなの」と拍子抜けした顔をする。

何故自分がこの場に来なくてはいけないのか、何故この男に興味を持たれたのか。それは今でも源一には分からない。そして一夜が信頼を置く様子からしても、彼も一夜のことは嫌いではないのだろう。その点から、和田のことは確かに少しばかり疑っていた。

だが源一にもそういう一面があるように、特に同性同士の場合、誰かを誘う際に深く考えないことはよくあることだ。友達の友達は……のようなんだ。よつて和田も何も考えず、ただ一夜と仕事以外の時間に話をしたいが、あらぬ誤解をされないために恋人の源一も誘つた可能性はある。

それに和田のような女性慣れした男が、一夜のようなわけの分からぬ朴訥とした女を好きになるようには思えなかつた。逆に一夜も、和田のような吹けば飛ぶような雰囲気の男に好意を持つとは思えない。百歩譲つて、余程あの真面目そうな北條の方が、一夜の相手としては合点がいく。

源一なりにこれまでに彼が知る人間関係とも照らし合わせ、結論的に和田の態度からはそのつもりはないだろうと今夜確信を強めた。何より一夜を信じていると言えば陳腐に聞こえるが、婚姻関係を結びたい相手なのだ。つまらない疑いで互いに気分を害したくな
い。

ただどれだけ信じっていても、日頃自分に見せない顔を一夜が他の男に見せてはいるのは面白くない。だから嫉妬もしていた。だからこそ、このいけ好かない和田に弱味は見せたくなかつた。

無礼を働く気はないが、必要以上にへりくだるつもりもない。結婚宣言ましたのは和田への牽制もあるが、「一夜が遊びで大学生に手を出したのではなく、自分を真剣に想つてくれているんだ」ということを主張したかつたというのもある。

黙り込んでしまつた源一を見て、和田は更に笑い出した。とりなすように酒を注ぐ。

「まあ、心配しないで。大丈夫だから。確かに鎌田さんタイプかと言われると、ちょっと違つし」

源一は上目遣いで和田を睨む。その視線の動きに気付いた和田は、焼酎を一口飲むと言葉を続けた。

「でもほんと、鎌田さんいい人だよ。俺も新人の頃からお世話になつてゐるし、どつか皆と違つて面白い人だなあつて思つてたからさ。しつかりしているのに抜けていて、面倒臭がりなのに真面目で。つつけんどんどんだつたり、すぐに焦つたり落ち込んだりするくせに、お人よしだし妙にのんびりで穏やかだし。顔はけつこう綺麗なのに、行動や考え方が何か変で、すごく頑なに『自分』を持つてゐる感じ。だから付き合うのは面倒臭うただけど、でも彼氏さんとはすごく仲良さそうだったから、この人の彼氏になる男つてどんな人なんだろうつて思つた。それだけ」

「……」

それだけ彼女に興味を持つて理解していく、それでも恋愛対象ではないと言うのか。源一は不審そうに眉を寄せると、真意を探るべく和田の眼を見据え、彼を観察し続けた。

「姉貴に似てるわけでもないんだけどなー」

和田も不思議そうに首を捻る。彼がこれまでどんな生き方を送り、出会いと別れを繰り返して、どのような考え方には至つたのか源一に

分かるわけもない。ただ和田もまた彼のこれまでの人生を過ごした結果、他人に強く興味を持つようになつたんだな、ということだけは分かつた。

もしかしたら一夜のことは、同僚として互いによく知りすぎて、興味がなくなつたのかもしれない。相手を「知る」間のワクワクする心境を、恋愛感情と呼ぶ人間も居る。和田はそういう考え方かもしれない。

ただ男と女のことだ。何処でどう転ぶか分からぬ。 そう言う意味では、まだまだ信頼は出来ない、と源一は和田を睨み続けた。しかしそこで和田は冗談染みた言い方をしながらも、年下の源一にペコリと頭を下げてきたのだつた。

「いらっしゃい、鎌田さんが異動になるまで いや、なつても、よろしくお願ひします」

その言葉を聞き、源一はもうひとつ、気付いたことがあつた。

こんな人間も外の世界には居るのだ、と。

外部の人間は決して自分たちに悪意を持つてゐるわけでなく、しかしいつでも理解してくれるほど優しいわけでもなく、ただ互いに係わりを持ちながら、其処に、共に在り続ける。それでも自分たち次第で、外界は自分たち一人を思つた以上に自然に受け入れてくれるのだろう。

源一もまた一夜と同様、熱いアルコールに溶かされた頭でそう考えていた。

そんな話をしている内に、一夜がふらふらと戻ってきた。椅子に座る時にスカートにつまづき、床に崩れ落ちる。

「大丈夫ですか？」
「何やつてんだよ」

心配そうな和田の声と、呆れ返つた源一の声。源一の手を借りて一夜は力なく身を起こすと、「大丈夫ー」と力なく答え、首を振つ

た。そのまま彼と眼を合わせるが、顔は真っ赤で焦点も合っていない。

源一はやれやれとため息をつくと、笑つて一人を見ている和田に顔を向けた。そして一人揃つて頷く。口火を切つたのは和田であった。

「そろそろ、お開きにしますか」

「えー。まだ、のむー」

「阿呆か」

源一の拳が一夜を見舞い、彼女はそのまま椅子に倒れ込んだ。今度の拳骨はかなり優しいものであったが。

一夜は年長者だから自分が払うと言いどうにかコートを着た後、会計へとよろめきつつ歩いていく。ふらつく足取りで今にも絡みついてきそうな様子に、若い男性の店員に無愛想に応対されながらも、サービスの飴玉を握り締めて戻ってきた。

和田は一夜に渡すと話がややしくなると思ったか、「これくらいだと思うから、受け取つておいて」と源一に何枚かの札を渡し、先に外へと出ていった。酔つた一夜の腕を掴み「しつかりしろ」のやうう」と言いながら、源一も外に出た。

そんな一人を見た和田はダウンジャケットのファーにその笑顔を埋めつつ、白い息を小刻みに吐き出しながら挨拶した。

「鎌田さん、今夜はありがとうございました。じゃ、俺はこれで

また月曜日に。水倉くんも付き合つてくれてありがと。就活、がんばつてね」

全くもつて不思議な時間であったが、それを希望した張本人があつさりと消えたことで、一人の冬の一大行事は終わつた。これでまた元通り、聖域の時間の流れに戻れるのである。

一人共に、大きな安堵のため息をついたことは言つまでもない。

そして結局、帰り道では。

「「」めんねー……」

「知らん」

「怒つてるーー?」

「呆れてる」

「ごめんねーー」

「もう飲むな」

「いやだーー」

「年考えろ」

「いやだーー」

「じゃあもう知らん」

帰宅する電車に揺られているうちに、一夜の酔いは益々酷くなってしまった。家の最寄り駅でタクシーに乗ればよかつたものの捨いそびれ、結局源一が一夜を背負い、アパートまでの夜道を帰つていくところであった。

これはかなり情けない姿勢だ。酔つた一夜だが、流石に恥ずかしく思う。だが、足腰が立たない。そして気持ちが悪い。背負われても、不安定な姿勢で揺れるので、やはり気持ちが悪い。

それでも、幸せだった。冬の凍れる深い深い夜空の下、この背中が温かくて、思いのほか広くて。疾うに失った父親以上に、確かに頼れるものなのだ。それがこんなに目の前にあり、いつでも触れる距離にある。

源一にはいつも守られてばかりだ。「ごめんね」最早謝ることしか出来ない。日常の生活で食事や性生活を頑張つたり、相談があれば乗つてやつたり、そうしてあげることしかもう出来ない。

酔いも手伝つて徐々に悲しくなつてきた一夜は、

「じゃあ、もう、飲まない。歩く……」

とし�ょげた声を背中で漏らした。

「はあ? 一人で歩くなんて無理だろ」

「でも、」

「もう飲まないのも無理だろ」

「……んー」

「だったら、いいんだよ。頼つてね」

「……」

「俺は、その方がいい」

ぶつきらぼうな声であり、後ろからでは彼の表情は見えないが、源一ははつきりとそう言い切つた。一夜の目が見開かれ、違う意味で鼻がつんと痛くなる。

本当だろうか。本当に、本当だろうか。

彼の年齢を考えると、これが本当に現実なのか夢の中の出来事なのかすら分からなくなる。年末に躍起になつたように家事を頑張つたことも、源一自身の意思であつた。ようやく。彼にとつては彼が、そして一夜が好きなように生き、困れば互いの手を頼りにする。今までと全く同じ単純なその繰り返しが、孤独であつた源一の幸せであり、望みなのだろうか。

分からぬ。けれど、本当は分かつてゐる。本当は、ずっと……もしかしたら出会つた時から。

それで、いいの？

いけない。嬉しくて涙が滲んでくる。一夜はそれを見せないようにな、後ろから源一にぎゅっと抱き付いた。

「私、おばさんなのに、情けないー」

「……そーでも、ない」

叱られても構わなかつたのに、その温かい響きに一夜は再び源一の背中に顔を押し付ける。

「源一は、優しすぎる」

「そうでも、ない」

首絞めるな、と彼が言つたので、一夜は腕を緩めると改めて問い合わせた。

「……これで、いいのかな？」

「これで、いいんだろ」

「これ」の意味は源一には全て分かつていなかつたが、多分、何

処となく認識していくことで十分だろうと判断した。彼は一夜を支え一歩一歩進み、彼女の重みと温度を彼女が生きている証としながら、力強く頷いた。

そんな風にされてしまえば、そのまま勢いでこう言つしかないのではないか。こう言いたくなるではないか。

「私……おばさんだけど、源一のこと、大好きだあ

「おう

「私なんかで、本当にいいの？」

「うるせえ。何度も言った。もう寝ろ」

「ん……」

キラキラとした小さな針のような空気が、ちくちくと一人を刺す冬の夜。頼れるものはこのぬくもりだけ。

これまでも、今も、そしてこの先も。ずっとずっと、お互いがお互い。

だけどこうして日々世界と関わり、受け入れられ、時に傷つくこともありますながら、楽しい思い出も与えられながら。もう「大人」となった一人であるが、これからも年を取る中でまだまだ成長して

その先も、一人で生きていくのだろう。

ほんの刹那の時間であるが、一夜は源一の背中で、ひとつひとつと平穀な眠りにつこうとしていた。

さて幸福に満ちた夜を過じた一夜であつたが、次の日の一転した地獄は思い出したくもない。仕事が休みでよかつたと心から思う。頭痛に吐き気……酷い一日酔いに一夜はアルバイトに行ってしまった源二の居ない家で、一口中苦しみに悶えていた。夜、彼の帰つて来る頃にはどうにか回復したものの、今まで眠つていて食事を作れなかつたことを謝る彼女に、源一は呆れながらも消化のよいものを作つてやつた。

優しくしてくれつつも、相変わらずむつりとしている源一。しかし酔つていたかもしれないが、昨夜の訥々とした言葉たちはきっと本心からのものだらう。彼が嘘を言つ理由が思いつかないので、そこは信じることにする。それにしてもこの醜態を晒してどうして好きで居てくれるのか、一夜にはさつぱり分からぬが、とりあえず今回も深く反省した。

「やっぱ、お酒、もう少なめにする……」

食後のお茶を啜りながら、一夜はしみじみとそう呟いた。

「なんだそりや。まあ、好きにすれば」

つつけんどんな言い方で席を立つ源一だが、その言い方からすれば、酒をやめるならやめるのもよし、やめなかつたとしてもまたこうして世話を焼いてくれるつもりかな、と一夜はようやく彼の想いを理解出来るようになつた。

もちろんこんな年齢だ。介護のようだ世話をされていてもいけない。それこそもう甘えないよう、いつも醜態を晒さないよう、二十歳の若い彼を支えられるよう一夜も努力しなくてはいけない。しかし立ち上がつた彼の手から、一夜の空になつた湯飲みにもう一杯お茶が注がれる。

何処までも気の利く……。

その温かい緑色を見ながら、一夜はこの幸せが、結婚することであ

これから毎日繰り返されることに対し、喜びと……寧ろそれ通り越し、恐ろしさすら感じ始めていた。

そして風呂へと行き、けだるい身体を湯に沈めながら、一夜はぼんやりと考える。

和田と三人で過ごした不思議な一夜を通り抜け、また源一との関係を改めて認識した。これからの練習として、外界に初めて一人の関係を晒して。

色の違う世界の中で、同じ色をした彼の手を握り締めた。二人は違う人間だと分かっている。だが臆病で少々閉鎖的な一夜の感覚を、源一は好ましくすら思つてくれているようで、それが嬉しい。しかしこれでは、この先外界に出ても源一から卒業出来ない。酷い依存に笑えてくるが、源一もそれでいいらしいのだ。

一夜はとぶん、と顎まで湯に浸かると、狭い浴室のオレンジ色の光に掛かる靄を見上げた。千菜にプレゼントされた薔薇の香りの入浴剤が、じんわりとけだるい身体を温めてくれる。次に彼がこの湯に入り、同じ匂いを身に纏うのだろう。

流石に毎日では嫌がられるので、甘い香りの入浴剤を入れることは疲れた日の楽しみにしているが、そうした日に抱かれると、日頃汗臭い源一から、いかにも女性的な匂いがふわりと漂つてくるのが、滑稽やら愛しいやら。そんな風に思うことも、当たり前になつてきた。

そこまでの関係に達したことが、少し恐くなつてくる。ここまで幸せの絶頂に上りつめれば、後は転落するだけではないか。これ以上にない関係になつてしまふと、いつかそれを続けるのに息切れする日が来るのではないか。一夜の両親や、心中したかもしれない源一の両親のように。

いや、自然体で居られるから。それが互いの必要条件のはずだつた。ありのままの状態だからこそ幸せに感じるのだし、息切れも有り得ない、そう思いたい。

そう思つと、結婚は「ホールだと叫つのはそういう意味かもしさない。これ以上ない関係に達したから、結婚する。その先は……誰にも、分からぬ。

でも。

一夜はふつと微笑むと、浴槽から出てタオルに身体を包んだ。正直、昨夜は楽しかつた。緊張もしたが、外界と自分たちが共存出来るということを知つた。これから家族になつて子供が出来れば、もつともつとたくさんさんの世界の中で、怯えながらも歩んでいくことになる。

子供だつた源一と出会い、告白されてから、彼を男性として見ていいのかどうか、身体の関係になつてしまつていいのかどうか、三年前はそんなことに毎日心を悩ませていた。

悩んだ末に思い切つて婚約してからは、自身の年齢と性や性生活のあり方について悩んだ。そして大人になりゆく源一に惚れ直しながら、十歳年下の彼と結婚するということについて若い彼を信じてよいのか、今の依存的な関係についても迷いがあつた。

今はセックストを心から楽しめるようになり、源一もこの関係でいいと思つてることを知り、結婚を楽しみに、二人で社会に出ようとしている。

少しずつ変わつていく関係。世界は何も変わつていなくとも、自分が変わることで、世界の色も少しずつ変わつていく、予感。

早く、子供、欲しいなあ。

裸の下腹部を白い手で、つ、と撫でる。

こんな年齢だが、今は心からそう思つ。関係のマンネリ化が恐いからではない。もつともつと、色々なことが起つて、恐いながらも楽しげな予感がするからだ。そう思つのは、彼が必ず傍に居てくれると信じてゐるからだろう。

これから、どんな関係になるのか。どんな人生になるのか。

面白くなつてきたところで、一夜は情けないことに気が付く。

「やば。着替え、ない」

三十路の身体を晒すのも微妙なものだ。仕方がないのでタオル一枚を身体に巻き、どうにか肝心な部分が見えないようにし、もう一枚のタオルを濡れた頭にくるくると巻くと、一夜は脱衣所のドアを開けた。

折り悪く、丁度居間から立ち上がりつぱらに身体を向けていた源一が、ぎょっとしたように彼女を見た。

「……何て格好してんだ」

「うるせーーー！」

下着で歩くのは昔から恥ずかしくないが、裸で歩くのは日本人として恥じらいがある。源一の呆れた視線の中、一夜はこんなおばさん裸で「めんなさい」と、ぶつぶつ呟きながら、逃げるよう自らの部屋へと入つていった。その後ろ姿を見ていた源一が、一旦は居間のソファに座つたものの、やがて一夜の消えた部屋に入つていつた、というのは余談である。

・・・・・

そして明けた月曜日の職場で。他の職員の手前、一夜と和田が顔を合わせても先日の話をすることはなかつた。一度だけ、「この前はありがとうございました」とすれ違い様、軽く声を掛けたもの。

彼とその件について話をしたのは、昼休み、職員の数が減つてからだつた。一夜が事務所の奥にある書類棚にファイルを片付けていると、昼食を終えた和田が姿を現し、話し掛けてきた。

「この前は、どうもありがとうございました」

「うん。うちこそありがとうございましたね」

「あの後、大変だったでしょ？」

「う……」

「うん」と言うのも恥ずかしく、一夜は途中で言葉を詰まらせた。

「一日酔い、酷かったです？」

壁際のパイプ椅子に座った和田は、腕組みをして背もたれに体を預け、歯を見せる。あれだけの醜態を晒せば言い逃れようもない日で、一夜は唇を噛んで頷いた。和田は茶色の髪に眉下がりの緩い日差しを反射させ、ははっと笑った。

「まあ、彼氏さんと一緒にだから安心でしたけどね。だから余計に、気が抜けたのでしょうか？」

流石は一夜曰く、「タラシ大明神」。その言葉は見事に、女心を見抜いていた。

「こちらこそ、すみませんでした」

しかしそこで和田が腕を解くと、苦笑しながら謝つてくるので、一夜は驚いて彼を見た。だがそれ以上の言い訳はなかつた。それは好奇心で先輩のプライベートを覗いたことへの謝罪か、源一の過去を聞いてしまつたことへの謝罪か、一夜には分からぬ。

和田は窓枠に肘を掛けると、窓の外で冷たい風に揺れる木々を見ながら話し始めた。

「水倉くんつて、面白い人ですね」

無愛想であつた源一のことをそう言われ、一夜は眼を丸くした。

一夜の方は変わつていると言われるが、源一はそつがなく完璧かもしくは生真面目で面白味のない人間に思われていそつだと勝手に思つていたのだ。

「お一人、お似合いですよ。幸せになつてくださいね」

にっこりと笑つてそう言われば、幸せを願つてくれる言葉である以上、照れ臭さを理由に撥ねつけることなど出来ない。一夜は恥ずかしさに唇を尖らせながらも、「うん……、ありがと」と呟いた。

「でも、どうして源一と飲みたいつて思つたの？」

そこで彼女は素朴な疑問を投げ掛けた。彼の名前を人前で呼ぶのは恥ずかしかつたが、「私の彼」や「婚約者」と称するのも恥ずか

しぐ、普段どおりの名前で呼んでしまった。それも恥ずかしいが、和田にはもう源一との昔からの関係を知られているため、そこは開き直る。

和田は一夜の顔を見て少し考えた後、再び木枯らしの吹く外に眼を向けた。閉じた窓の向こうで、茶色の地肌も寂しい音を鳴らしているようだ。しかしその下には、春を待つ息吹が眠っている。

「んー、なんか、鎌田さんとその彼氏さんに興味があつたんですね。……もしかしたら、俺も、そういう風になりたいかもしだせん」

「え？ 何に？」

「鎌田さんたち、みたいに、かなあ」

一夜が驚いて和田を見ると、振り向いた彼はもう一度、にっこりと笑った。

一夜の眼が見開かれる。ずっと倫理上「よくない」関係だと思つていた自分たち二人が、そのように言われる日がくるなど やはり、想像もしなかったから。

「ほんと、おめでとうございます。お幸せに」
千菜にも「源一くん、いいなあ」と言われたことがあつたが、「人にうらやましがれたり、認められる幸せ」の形が一夜には想像出来なかつた。誰に優越感を持つことではないのだが、自分たちの「存在」を認められたようで、心が何やら温かく、沸き立つよう嬉しくなる。それは醜いことだろうか。

しかしそれだけの幸福を何気ない日常の中で守り続ける恐さもありながら、感謝のひとつでもしたい気持ちになるのだった。

・・・・・

「いやだー、行きたくないー」

「俺だつて、お前に誘われた時は行きたくなかった。どうしても嫌なら、やめとくか」

「今更だろー。源一の顔に泥ぬれない
「じゃあ、」しきやしきや言つな
「はあーー」

再び白い息を吐く、一ヶ月後の冬の夜 だが夜空の星座は少しずつ天頂から移動し、春のそれも見えてくるようになった頃。

『つべこべ言うな。この前の仕返しだ』

源一にむすりとそう言われ、一夜は夜の街に連れ出された。どうやら源一と一夜の結婚を知った彼のアルバイト仲間の中で、彼女を連れてこいと言つ話になつたらしい。今夜はその飲み会の席に招待されていた。先日、和田に気を遣つて源一を無理矢理連れて行つた以上、一夜も文句は言えない。

こんなおばさん連れていつて恥ずかしくないの？ と不安になる。もちろん、その場の全員に気に入られよつとは一夜も思つていない。価値観、好みはそれぞれだ。だが、源一はそれでも紹介しようという気になつたのだ。彼も馬鹿ではない。それでも堂々と一夜の手を引いているのだ。

だつたらもう、彼の判断と自信を信じるしかないではないか。

「せいぜい、自慢してやる」

ぶすりとそう言い切つた横顔に、今宵もまた惚れ直してしまったことは、内緒だった。

あの夜が一人に小さな革命を起こした。彼に年のことをあまり言うのも、しつこくていけないことだろう。せめて年相応の格好をして、姿勢よくしていよう。そしてあまり飲まないで行儀よくしていよう。

後者の決意は結局、緊張と開き直りにより、一夜がその飲みっぷりを披露して逆に青年たちに気に入られ、源一がその間に怒りながら入つて という羽目になるのだが、この時の一夜はそう真面目に決めていた。

その46 春は名のみ、む。（前書き）

最終話として「その46」と「終」の2話連続でやっています。
「注意ください。」

その46 春は名のみ、も。

田も少しづつ長くなり明るい春のそれへと変わり、木の芽も早いものは膨らみ始めた三月初めのことだった。年度末の決算期を前に、一夜も担当業務の予算書と会計簿を穴が開くほど見つめ、決算書の帳尻合わせや会計監査に提出する必要書類の作成、外部団体との調整などに奔走していた。更にはもしかしたら四月付けて異動もあるかもしれないと考え、滞りなく引継が出来るよう来年度の計画をしつかり立てるとともに出来るところから準備も始めてくる。

だが流石に何年も同じ職場に居るだけあって、忙しさの中でもふと手の空く時がある。そんな折だった。

「あれ？ 北條さん」

まだその苗字を聞くと元上司の方を思い出す が、和田の声に一夜が顔を上げると、幼い子の手を引き事務所の窓口越しで、にこにこと笑っている千菜の姿が田に映った。

「す、いー！ 歩いてるー」

昨年の春に見た、まだ寝返りも打てなかつたふにやふにやの赤ん坊は、フリルのついたスカートを温かいスペツの上に穿き、おむつで大きくなつている尻を振りながら、懸命によちよち歩きをしていた。思わず一夜も感動して手を叩く。

千菜の娘は彼女に似ているのか物怖じすることなく、初めて訪れるセンター内の休憩スペースを歩き回っていた。此処はセンターでも端にあるため、利用者がやつて來ることも少なくゆつくり話が出来る。

「忙しい時にこめんね。今、大丈夫だつた？」

申し訳なさそうに言つ千菜に、一夜は笑つて答えた。

「うん。今は決算に必要な書類の決裁待ちだから、丁度よかつた」

それに今日の夕方は児童館のシフトからも外れており、昼食後の

今は事務所も落ち着いている時間帯だつた。和田も「ここは大丈夫ですから」と一夜が居ない間のフオローを請け負つてくれたため、久しぶりに会う千菜と少しばかり話をすることにした。

「今日はどうしたの？」

「うん……あのーね、」

最近千菜とは連絡を取り合つていなかつたが一夜には、もしかしたら、と思うことがあつた。それはあまりいい予感ではない。

一歳を超えた娘を連れてきて、かつ職場復帰もしていないということは……。しかしこちらから指摘するのは無粋な気がし、千菜が口を開くのを待つた。

「……もう一人、赤ちゃんできたから、育児休業の延長してきたの」下腹部を撫でて微笑む千菜に、一夜は眼を瞬かせた。その決断も考えられないことではなかつたが、一夜はてっきり、千菜が育児のため仕事を辞めると言つのかと思つていたのだ。

誰よりも仲がよかつた同期の退職を覚悟していた一夜にとつて、それは安堵する言葉だつた。しかし千菜は笑つてはいるものの、何処か物憂げな表情を浮かべている。一夜はどうしたんだろう、と思ひながらも、

「そりなんだ！　おめでとうー！」

まずは心から祝福した。愛し合つ夫婦の間に新しい命が授かることは、とても喜ばしいことだ。

「予定日はいつなの？」

「九月」

「そうかー。見た感じじゃ、全然分からなかつたよ。体調はどう？」

「うん、ありがと。つわりも一人目の時より軽かつたし、今は元気だよ」

今日はその申請に来たのだ、と千菜は言つた。

「ほら、私たちの職場つて、財団で公務員と似てゐる立場だからかな。最近、一応育休、三年取つていいことになつたじゃない？　こ

の子、冬が誕生日だつたから、元々一歳になつてすぐ復帰じゃなくて、凶切りのいい四月に復帰しようつて、延長すること自体は前から決めてたんだ。でも子供もう一人欲しくて、自分や彼の年齢も気になつてたから、自然に任せてしまつたら……」

つまりは上の子供の育児休業が明ける前に、下の子供を妊娠した、そのため三年ある育児休業の制度を利用して、その間に一人目の子供を出産しようと考えた、ということだつた。

一夜にはどういう言葉を掛ければいいのか分からぬ。しかし子供の数が少ない時代だ、育てられる環境ならば命が授かることは喜ばしいことではないか、とも単純に考えてしまつ。千菜のお腹の中では、既にもう命の鼓動が刻まれているのだ。

それに北條も千菜も、よく話し合つたうえで子供を作つたのだろう。だつたら友人の思つままに頑張つて欲しいと一夜は応援したくなつた。少なくとも千菜の後任には和田という頭の切れる職員がきちんと配置され、部署の仕事は問題なく進んでいるのだ。

「でもさ、育休延長するのもどんなもんかつて、すぐ悩んだんだ」「しかし千菜の浮かない顔は変わらない。不安げに語られる話を、一夜はただ黙つて聞いていた。

「そもそも三年もらえたつて、取る人なんてほとんどいないじゃない。職場にも迷惑掛けちゃうし、復帰したところでブランク出来て大変なだけだし、特に私なんて……早斗さん、こここの管理職なのに。そんなことして彼が悪く言われないかなつて」

あの厳しく優しかつた上司の顔が、一夜の脳裏を過ぎる。

「だから早斗さんに迷惑掛けないよう、いつそ仕事辞めよつかとも思つたんだけ……早斗さんが、『それは違つ』つて。『育児休業者が出ればその予定も含めて、今の人事は採用計画からしていい。』そういつた予定が入れば新しい職員を育てるし、休業中はそこに誰かが入り、休業後は退職者の後にお前が据えられるだろう。誰にも迷惑は掛けていない』つて。でも実際、採用して一から育てるのだと

つて大変なことじやない？ お金だつて掛けたるんだし。でもそれはそういう仕事だからつて……。多分彼も私に気を遣つてるだろうけれど、この職場もそういう場所になるべきだつて……。もちろん、そもそも職場内恋愛しちやつたのは自分たちが悪いんだし、私自身がブランク出来ることや、育児で前のように仕事が出来なくなつて、文句言われることや自分が悔しい思いすることに耐えられるなら、とは言われたけれど」

北條が厳しい口調で淡々と、だが優しい言葉を千菜に掛けただらうことがよく分かる。感情豊かな千菜の眼がやや潤んでくる。

「あの『室長』なら、きっと誰にでもそうやって言つてあげるんだろうつて思つけど、ここの中が皆そう考えているわけじゃないから、だから私のすることで、彼を苦しめたくはない」

「だから、ひとまずの、延長……」

北條の考えには頷けるところがあるが、二人に介在する想いに上手く口を挟むことが出来ない。それでも何か言つた方がいいかと頭を巡らせた結果、一夜はその仮定に行き当たつた。それは当たつていたようで、千菜は頷いた。

「正直、結論出でていないんだ。誰に何言われても私の人生じやんつて思つちやうところもあるし、どんな仕事でもいいから、いつそ転職しちやおつかなつて思つところもある。でも書類出した以上、今のところ復帰するつもりだと一年、子供の傍にいようと思う。それまでにもう一度考える。下の子は一歳になつていなければ、それ以上休むのは流石に恐いかなあ」

そう言つて千菜は苦笑いした後に、「その頃にはもつと子供にもつと手が掛かつて、離れられないかもしだいし、先のことは分からぬけど」と呟いた。そして大人同士の話に飽き、ふらふらと遠くへ歩いていく子供を止めるのに、千菜は妊娠中にも関わらず一夜以上に素早く動き、その小さな手を捕まえる。

「と、いうわけ！ 仕事中に、『めんね。書類出すまでは、覚悟つ

かなかつたんだ。だから一夜にも相談出来なかつた。でも話せてよ
かつた。元氣出た！」

千菜は子供の手を引いて一夜を振り返つた。まだまだ話したいことは互いにあるが、今日は時間切れだ。一夜は「また話そうね。電話でもメールでもいいよ」と千菜に伝え、千菜も「うん、絶対。またうちに遊びに来てね」と誘つてきた。

もしもいつか同じ職場で働けなくなることがあつても、「いやつやつて悩みつつも自分で決めた道を歩いていく千菜とはばづつと付き合つていけたらいいな、と一夜は思つていた。

「で、一夜は？ どうなの？」

子供に手を引かれながら、千菜は最後にやりと笑つて一夜を見た。

「え？」

相変わらずの笑顔に、何のこと？ と聞くのも愚問だらう。それこそ時間も無い。一夜ははつきりと答えることにした。

どうやらそれにも、大分慣れてきたようだ。しかも相手は信用できる友人だ。自分たちを悪く言つはずもない。

「うん。やつが大学卒業したら……ね。その時にはもういい年だけど、私も結婚できたら子供、欲しいな」

千菜を真つ直ぐに見てそう言つた一夜に、大きな眼を益々大きく丸くさせた千菜は、次の瞬間、相好を思い切り崩すと、一夜の背中をばんばんと叩いた。

「そうなの！ いや、一夜もそういう気持ちになつてくれて、なんか嬉しい！」

千菜はそこで抱っこをせがむ子供を、嬉しそうに抱き上げた。

「なんか、私まで嬉しくなつてきた。ありがとう！ 頑張ろううつと

！ 一夜も仕事も、まだちょっと早いけど結婚の準備もがんばつてねー！」

千菜の状況は何も変わつてはいないのだが、彼女は先ほどよりも朗らかに笑つっていた。母親がそういう表情になつたからか、彼女の

子供も愛くるしい笑顔を見せた。

自分たちが幸せであることをこれだけ喜んで力にしてくれる人が居る、それが一夜にはとても不思議であったが、やはり有り難いなことなんだな、と自分のひとつひとつとの出会いに感謝するのであった。

そして三人でセンターの出口の方へ連れ立つて歩いていくと、廊下の向こうから一人の男がやつてきた。

「あ」

それは千菜の夫で、一夜の元上司、北條早斗、その人であった。二人揃つて口をぽかんと開け、自分を見る元部下たちに、「相変わらず、女子学生みたいな一人だな」と北條は珍しく軽口を叩いて苦笑した。

「で、では、私はこれでー」と、流石に職場結婚した以上、ここで話をするのは憚られるのか、千菜は父親を見つけて走つていこうとした娘をさつと抱き上げると、本当に妊婦かという素早さで、その場を立ち去つていった。

「おい！ 何やつてる！ ゆっくり歩け！」

北條も思わず大きな声を出し、一夜は千菜が心配ながらも、笑つてしまいそうになつた。 そして妻と子供を見送つた後、軽くため息をついた北條は、

「元気か」

一時の恋情から上司と部下の垣根を越えてしまい、以降やや話しづらくなつてしまつた一夜に、久しぶりに声を掛けた。

「はい」

一夜も北條に酷いことをされたわけでもなく、彼の自分への気遣いと千菜への愛情は十分伝わっているため、過去は過去のものとして洗い流し、笑つてそれに答えた。

「二人目のお子様、おめでとうございます」

そして彼に対しても心から祝福した。「ありがとうございます」と北條は礼

を言った後、

「もう一つ、俺から礼を言わねばならぬことがあるな」と付け加えた。彼は何のことかと首を傾げる一夜を見下ろすと、千菜と娘の消えていった方向を、再び眼を細めて見やつた。

「久しぶりに、あいつのああいう明るい顔を見た気がする」

「ありがとう」ともう一度言われてしまつた一夜は、驚いて眼を瞬かせた。千菜に続き北條にまで言われると照れてしまい、困ったように頭に手をやる。

「そつちも、これから色々あるだろうが 仕事、辞めるなよ」

それから一夜の眼を北條は真っ直ぐに見た。二年前まで毎日見ていた、背筋の伸びるような視線に一夜は姿勢を正した。

彼に源二との関係がどうなつたかは話していないが、きっと婚約の件は千菜から伝わつていることだらう。そのうえで、結婚を暗示する言葉を掛けてきたのだと一夜は察した。そしてそう言つたのは、きっと千菜のように一夜も悩む口が来ることを予測してのことだろう。職場恋愛の悩みとはまた別の悩みであるにせよ。

「はい！」

彼からの心配もまた嬉しく思つた一夜は、部下であつた頃のようになりきな声で返事をした。

「幸せにな

北條は持つていた書類でぽん、と一夜の頭を叩くと彼女の返事を聞くことなく、そのまま廊下を曲がつて行つてしまつた。

軽く叩かれた頭を撫でながら、結婚が決まつたら「元上司」の彼に報告に行こうかな と一夜はこの時心に決めた。外を飛ぶ風はまだ冷たくとも、やはり春の匂いを運んできたようだつた。

その46 春は名のみ、む。（後書き）

Hプローグの「終」そして、また朝が来る～」に続きます。そこで最終回となりますので、どうか併せて「ご覧くださいませ。

終りそして、また朝が来る

その夜。布団の中で、一夜は今日の出来事を源一に話した。既に二人とも服を着た後の、寝物語に。

二人にはまだ子供はいない。結婚すらしていない。若い源一には重い話と分かっていたが、千菜の働きたい気持ちも、それがわがままなのかどうなのかと悩む気持ちも分かり、一夜まで少々落ち込んできてしまったのだ。大学生相手に育児休業の話題など「年上の彼女」としてはしない方がいいことかもしれなかつたが、これまでのことから彼を信じて重い心をぽつりぽつりと漏らした。

源一が夕食を済ませて帰つて来たため、多少遅い時間となつたが眠る前に彼の部屋へと一夜は寝巻き姿で入りそのままなりゆきで、だが二人には必要な前段へと突入し、その後眠る前に一つのベッドの中で、今日千菜が訪ねて来て、彼女がそのようなことを悩んでいた、ということを話したのだった。

しかし春に彼女の子供を見に行つたことを話したといふ、一夜に「子供が欲しいのか」と察しよく尋ねた源一だ。今日の話で一夜が何を不安に思つているのかも分かつたらしい。

「……でも、育児休業つて男も取れるんだろ」

寝転んで自分を見上げる源一にそんな言葉を返され、一夜は逆に面食らつてしまつた。話題になつてゐる北條は元より、そんな源一など想像つかない。一夜は座つていた膝の間に手をつくと、首をぶんぶんと横に振り長い髪を乱した。

「ま、まあ、それはそうだけどさー」

「俺はどっちでもいいよ」

「育児休業とるのー?」

「そっちじゃなくて……まあ、お前にそうしろと言われれば、こつちも一旦は考へざるを得ないよな。受け入れられるかどうかは別と

して。どっちでもいいといったのは、そうじゃなくて、仕事を続けるでも、辞めるでも、大変なのはお前なんだから。一夜が後悔しないように、決めればいいと思う。俺が産むわけでも、身体壊すわけでもないんだし、職場の人にはか言われるのも、再就職先を探すのに苦労するのもお前なんだし。仕事しないで子供育てたいつづらんなら、それはそれで俺が頑張るし」

本当に大学生かと思うほど源一は淡々と将来計画を話し、最終的には一夜の気持ちに任せようとしてくれている。

一夜は驚いた表情を浮かべて、思わず源一のTシャツを握り締めた。何だよ、と彼に睨まれてしまふが今度は首を軽く振り、落ち着いて話をする。

「……ありがとうございます。そう言ってくれて、嬉しい。確かに自分の年齢を考えると、育休取つてそのあと復帰するのも、再就職も厳しいけれど、うち貯金なんてほとんどないから働かなきやいけないし」

そう言った後、また源一が「悪かつたな」と彼自身を責めるように言つるので、一夜はこれまで以上に大きく首を振る。

「ううん！ それはいいんだ、源一の所為じゃない。私が年くつてのものもう仕方ない。この年齢で初産も大変だつて分かるけど、そうしている人もいっぱいいるし、それでもこつしよつて二人で決めたんだからさ。……何より子供に寂しい思いさせたくないから。もしその子の傍に居た方がいいつて思うなら、源一がどんな会社に入れるかだけど、その時には私が一度仕事を辞めて、どんなところでもいいから後から働けるところ探すし。」

そう。生活費を稼ぐため忙しいからと言つて、自分の父親や母親のように離れていきたくはない。生まれる子供に、自分たちのよくなきをさせたくない。一夜はそれだけは心に決めて源一を見た。その眼を見返してくる彼に、自分の気持ちは伝わつていると信じたい。

「先のことはどうなるのか、分からぬ。それでも、源一の大学卒

業後にそうしようつて決めたから

一夜の年齢から、家庭を持つのは少しでも早い方がいいに違いない。しかし年が嵩むことにリスクと制限が増えたとしても、それでも互いが納得する生き方を考えた。その結果、暗い夜が訪れることがあれば、その時に一人で一番いい方法を考えればいい。

だからその時その時で、一緒に話し合つて考えていこうよ

笑顔でそう言つた前向きな一夜の言葉に、

「分かった」

と源一は真面目な顔で頷いた。そして、一言。

「一夜は、強いな」

源一は、顔の上に落ちた長い髪を指で掬つて一夜をじっと見上げる。一夜は「へ？」と不思議そうな顔をして否定した。

「そんなことないよ！」

昔から臆病で數え切れないほど悩み、長い間自分の気持ちや現実から逃げて、十も年下の源一に何度も叱咤してもらつて優しさを貰つた。そしてよみやく、彼に手を握つてもらつた状態で強くなろうとしているのに。こんなのは見せかけだけの空元氣だ。

「いや。だから、俺も 頑張る」

そう言つと彼はむすりとした顔をして、髪を指から抜き、掌を額に当ててその表情が見えないようにした。

最初に源一の手を引いたのは、一夜。彼はその背中を追いかけて、追い抜こうと足掻き、そして此処まで走つてきた。今は一人で手を繋ぎ隣を歩いているようだが、それでも一夜が先を行き彼が焦つて追いかけたり、源一が先を行つてしまい彼女が焦つたりを繰り返すのだろう。

そして自分たちが、生まれてくる子供が幸せになるように、時に歩みを一緒にして、時にその世界を共有して生きていく。

それが毎日の生活として存続する など、何と幸せなことだろうか。また朝が来て、隣に居る彼が彼女を起こす。巡り巡る、その

単調な日々をただ守りたい。

それは何よりも簡単なことで、何よりも難しいことかもしれないが、この尊い想いが自然に持続する限りは、きっと大丈夫だろう。そして一夜は、源一の胸にぽすんと凭れて眼を閉じる。不安が溶けていき、早春の夜、今日も安らかな眠りにつくとする。

日々是好日　「これからも毎日毎日が、平穀無事なよい日であることを、願つて。

だからひとまず、此れは是にして　　めでたしめでたし。

～END～

終～そして、また朝が来る～（後書き）

2008年12月のシリーズ第1話から足掛け2年半、この続編第2弾は2008年11月から1年半と文字数の割には長い連載になってしまったが、ここまでお付き合いくださった皆様、最後まで読んでくださいり、本当に本当にありがとうございました！！

どれほどお礼を言つても言い足りません。お読みくださったこと、ありがたい応援コメントやお気に入り登録、拍手ぽちりをくださったことなど、様々な方法で励ましてくださった多くの方に改めて感謝申し上げます。

前から申し上げましたように、2人の人生はこれからも続いていきますが、これはこれでひとつの一「作品」となるよう、だらだら続けず一旦区切りをつけたいと思います。ですが拙作にも関わらずこちらの続編を望んでくださるリクエストを、既にたくさんありがとうございました！

いつも申し上げますように、私も拙くとも一人のモノカキとしてこれからたくさんのことに対戦したいため、すぐには続編を連載できないことを大変申し訳なく思いますが、この2人は自分の中でもしっかりと生きており、これからもこんな日常生活でよろしければ、物語のネタはいくらでも浮かぶと思います。（皆様の中でも既に2人が息づいているというお声を聞かせていただき、作者冥利に尽きる気持ちでいっぱいです！）

よろしければ皆様の中でもこれから彼らを想像していただき、お礼になるか分かりませんが、いつかまた私からも元気な2人の姿をお届けできたら、と考えております！時期未定で申し訳ありません。たくさんお待たせするかもしれません、いつかまた、このシリーズでお会いいたしましょう！

本当にありがとうございました！！

t a k a o

この作品にもしものもしもでコメントいただけます場合は、拍手メッセ（非公開／ブログでお返事）、または作品最終ページの感想欄（公開／感想欄でお返事／コーナー登録なしでも書けるようにになりました）をご利用くださいませ。

なお、他の甘甘うらぶな連載作品も日々書き続けております。興味持つてくださった方は、作者ページや作品ページなどから個人サイト「碧落の砂時計」へとお越しくださいませー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5017f/>

ネムリヒメ。の日々是好日

2011年5月6日00時40分発行